
白蒼月種想譚～二つ月の望む世界（種シリーズ?）

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白蒼月種想譚〜二つ月の望む世界（種シリーズ？）

【Nコード】

N6671P

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

剣と魔法と素養の世界。二つ月の浮かぶシル・メシア町の薬屋さんとして穏やかで平凡な日々を満喫していたマシロ。しかし、突然の訪問者によってその平穏は簡単に破られる。時をほぼ同じくして王宮では、昔から行われてきた闇の儀式的なことが行われる。

中立な立場であるはずのマシロが、どうすることも出来ず王宮に身を寄せることになり事態はより複雑に……。

ただ、平凡に平穏に暮らしていたらというのは最大級の贅沢だ

った。

今回も、どたばたラブコメ、だけど真面目にやるときはやっちゃうのっ！ シリアス風味。ちょっぴり切なく甘い異世界物語です。ほろりもきつとあるよの第三弾。

てんでこ舞いなオセロコンビを是非見守ってください。

若干残酷描写も含まれるかもしれませんが。絶対駄目なのっ！ という方はご注意ください。

登場人物紹介的なもの。（前書き）

特に特出しているわけではないので、残酷描写あり表示は控えましたが、多少あります。微塵でも苦手な方はご遠慮ください

登場人物紹介的なもの。

登場人物紹介のような感じのもの

【マシロ】

町の薬屋さんを営む、異世界（シル・メシアから見て）出身の主人公。

マリル教会の信仰対象。白い月の少女としてシル・マリルと呼ばれることもある。

喜怒哀楽が割りと激しいが、割とすぐにその波は引く。基本的に受け姿勢。順応力は極めて高い。

他メンバーからいわせると、迷い込み体質。面倒ごとがあるとりあえず突っ込んでみないと気がすまない。でも自分じゃ結局何も出来ない。壁があればとりあえず壊すけど、直すのは他人任せ。

【ブラック（本名：ルインシル＝ミア）】

シル・メシア唯一の種屋の主人。黒耳尻尾つきの獣族。

蒼月教団の生き神様ルイン・イシル。

彼に出来ないことはないが、基本的に面倒臭がりなので、事が起こった上、どうしようもなくなると動かない。

裏家業として暗殺業的なことをしているが、別に隠してない。それすら、面倒臭い。なので、基本人の恨みを買いやすい。でも、気にしない。

大好きなマシロがいればそれだけで良い。あとは全部消えても良いと思っっている。寧ろ消えてくれ。実行しないのはマシロが怒りそうだから。

【エミル（エミリオ）】

第四龍姫を母にもつ第十三番目の王子。

現在、シル・メシア王位継承権第二位の絵に描いたような完璧な王子様。

変な薬を作るのが大好きなのに、今は王宮住まいにてそれもままならず日々鬱々としている。

そのせいではないが、ことあるごとにマシロの店に逃げ出していく。

マシロが大好きで今も思いを寄せているものの、現在の関係が壊れるのも嫌。でも別にそれを隠しているわけでもない。

基本誰にでも優しくして面倒見が良く愛されるタイプ。味方にすればかなり力強いが敵にまわすと絶対に危険だと、本人以外みんな気がついていない。

【カナイ】

王宮勤めではない！ を強調する天才魔術師。 Emil の側近。

Emil やアルファに比べて見た目地味に思えるが、実はメンバー1女性に人気がある。そのせいで、実は女性と絡むのが苦手。

本の虫といわれるほどの読書家。探究心が強くいつもなにかその知識欲を満たすものがないと、何をしてもかすか分からない。その危険性を理解し、一応、自粛している。でも、むずむず。

大抵、いつも（Emil によって）酷い目にあっているものの、その曇った眼差しでは気が付くことが出来ない。貧乏くじ担当。

【アルファ（アルファアルファ）】

天賦の才と天使の容貌を持つ騎士。

王宮騎士団所属。 Emil 王子の側近。あまり触れられることはないが、王宮に戻り Emil の位置が変わると同時に階級が上がりが年若くして師団長となる。

面倒ごとが嫌いなので隊長など辞退したいけれど、 Emil の傍を離れるのは嫌でしぶしぶ引き受けた。

魔法に対して素養は持たないが、魔力態勢は強い。（カナイとの

関係上、免疫が出来たと思われがちだが、騎士素養の一部)

天真爛漫で気分屋。直情型で、あまり難しく物事を考えられない
(そんな人が率いる師団って……ちよつと怖い)

雨の日が大嫌い。

雨が続きたり、大雨だったりすると人格形成にも影響を及ぼすほど……冷徹無比な鬼神と化す。

【シゼ(シルゼハイト)】

最年少卒業記録を塗り替えた薬師。エミル専属に就くため王宮に入る。

メンバーの中で今のところ最年少であるため、幼く見られないように日々努力している。結果的に大人びた子どもという印象を受ける。

自分を陽だまりの園に迎えに来てくれたエミルが大好き。大好き過ぎて、マシロを若干敵視していて「僕は貴方のような人は嫌いです」が口癖。でもともと素直で良い子なのでエミル様の指示だからと色々助けてくれる。分かりづらい人。

【ラウ＝ウィル】

現王陛下の執政官息子。多彩な才能を持ち、若くして王子王女 of 家庭教師に就くが長くは続かず、当時とても風当たりの強かったエミルを連れて王宮を出る。

戻った今は、次の段階を楽しむために父の元に就き次代王に尽くすための勉強に励んでいる(はず)

退屈を極端に嫌い、そうでないのなら起きる事件が悪事だろうと善事だろうと全く気にしない。本人曰く、エミル王子を大変気に入っているらしい。斜めくらいから……。

【ハスミ】

第三ターリの嫡男。威厳と風格のある英雄然とした好漢。現在王

位継承順位第一位。

エミルのことは可愛い弟として見れるものの、キサキは苦手。女性性は華であるべきだというキサキに言わせると前時代的な考えも持っている。

王宮以外に、強大な戦力を持つことを良しとせず。蒼月教団を目の敵にしている。

【キサキ】

第四ターリの娘。某塚の男役を演じさせれば一躍トップスターだろうと連想させる容貌と雰囲気。

現在は騎士塔他軍の総括を仕切っている。

王位継承順位第三位。

そのせいもあり、剣と魔法の世界にありながらも魔法に対して否定的。必然的に天才魔術師なんて称されるカナイが嫌い。

【ジルライン・ドール・アラニオン】

現在シルメシア国王。

【レニ】

マリル教会の司祭。

多大なるルール違反を犯し現在王宮の管理下にある。

【ハクア】

白銀狼の頭首。

人狼：満月には関係なく自分の意志にて人形を得られる。寿命も長く生命力も強い。現在国の聖獣指定を受けている。本人たちに特に関係ない。

主をマシロにもち中立なる立場としてマリル教会のレニ司祭の監視につく。

【レムミラス】

蒼月財団の団長。

冷徹眼鏡で皮肉屋。学校の教師に一人は居そうで絶対嫌われてる

！ とはマシロ談。

実はマシロを特別に嫌っているわけではないのだが、皮肉はデフォ。デレはオプションなので発揮されることはまずない。

登場人物紹介的なもの。（後書き）

……とりあえず、こんな面々でお送りします……
一部、個人的な出番が殆どないけど出張っている人も居ます。

第一話：私の平凡なる毎日

白い月青い月二つ月

流れの止まった水は次第に淀み水底も窺えなくなる。

泥水に映る月は淀んでいて本来の色も分らない……

しかし人々の求めるものは唯一つ

……美しいとき……

という名の幻想

貴方の目に映る世界は一体どんな色をしていますか？

……カタン。

今日もいつもの時間に扉に掛かった札をオープンと表示させる。

あまり直射日光を好まない代物が多いので、カーテンを全開には出来ないから室内には時間に関係なく魔法灯の暖かな明かりが店内を照らしている。

私は、店内の確認を簡単に済ませてカウンターに戻ると、今日の予定を確認した。午前中に薬の配達が一件入っているだけだ。正直繁盛しているとはいえない店だけど、私はそれなりに満足している。

私が剣と魔法と素養の世界シル・メシアで生活するようになって何度か季節が巡った。

午後は暇だし、たまには図書館にでも顔を出そうかなとか思ってみる。

図書館は私の母校だ。他に大聖堂と王宮と呼ばれるところがここ王都にある三大学園だ。それぞれの学園は知力・魔力・武力を中心として専門的なことを教えている。持って生まれた素養を認められ

それなりに裕福な生徒が主だけれど私のように例外的に入学するものもたまには居る。

そこには実質二年くらいは真面目に通った。残り一年は通いと有能な家庭教師のお陰で上級階位卒業程度の学力と資格を手に入れることが出来た。そこで得たのが薬師の免許で今こうして薬屋を営んでいるのもその流れからだ。

私は今日配達をしなくちゃいけない薬を紙袋に入れて準備し、開店にしたばかりの店を再び閉める。どうせお客さんが来ることもないだろうからそんなに心配はして居ないけど一応『直ぐ戻ります』も表示しておく。

シル・メシア王都の朝は清々しく爽やかだ。

もう直やってくるだろう、雨季の時期を除けば雨が降ることも稀だし、殆ど毎日晴天だ。

街道はレンガで舗装され車道では車ではなくて馬車が普通に走っている。表通りに背を向けて住宅街を目指す。王宮の奥から町中に張り巡らされている水路の所々に設けられている小さな水車が朝陽を反射してキラキラと輝き私の気分は上昇する。

そうだ。帰ったらクッキーを焼いてシゼに差し入れをしてあげよう。

私の作るお菓子を美味しいといって食べてくれるのは、図書館最上級階位生徒のシゼことシルゼハイトだけだ。性格は相変わらず捻くれていて素直ではないけどその扱いにも慣れて今では弟みたいなものだ。

放っておくとラウ先生から受けついた研究室に何日でも平気で籠

っている。天才を通り越してただの変人だ。

「ああ、マシロちゃん。わざわざ悪いね」

「ううん。気にしなくて良いよ。それでおじいちゃんの調子はどう？　少しは動けるようになったかな？」

住宅街といっても王都を囲む外壁に近い寂れた集落だ。どうしても付いてしまう貧富の差からこういう場所も出来てしまう。

私はドアを開けてくれたおばあさんに促されておじいさんの様子を見る。ベッドに寝たきりになっているおじいさんは肺が良くない。私が持つてきたのは気管を少し開いて呼吸を楽にする薬だ。根本的な解決にはならない。私なんかよりもずっと専門的な医者に診せるべきなのだけど……この家では医者を呼ぶような余裕は無いだろう。

私は一通りの様子を見てから小さな家をあとにした。

受け取った薬代は材料費にもならない程度だけど、少しでもと払ってくれる気持ちが嬉しいので、私は遠慮なくそれを受け取る。

店に戻り、一階にあるミニキッチンでクッキーを焼く。

準備を始めて、焼き上がる頃にはお昼を過ぎていたので、私はそれを摘んでお昼を済ませた。私は美味しいと思うのだけど、あまり評判が良いとはいえない。

まあ、実際ブラックが作ってくれたほうが何倍も美味しいから仕方ない。私の恋人は料理上手だ。料理に限ったことではなく、出来ないことはないという馬鹿げた人物だ。一番馬鹿げているのは頭にある猫耳とどうしても目がいつてしまう尻尾なのだけだ。

因みにいつものことだけれど、ここまでお客さんはゼロだ。我ながら情けない。

……カランカラン

そしてようやく来客を知らせるウエルカムベルに喜色を浮かべると、王子様だった。外見だけではなくて真正正銘王子様だ。シル・メシア王家第十三番目の王子で、現在、王位継承順位第二位のエミルことエミリオだ。

「いらつしゃい」

「こんにちは。……何か甘い臭いがするね？」

「クッキー焼いたところだったんだけど、食べる？」

エミルは優しいので、はっきりいらないとはいわない。にっこりと女の子も羨む綺麗な笑顔で「あとで貰うね」と答えてカウンターまで歩み寄ってくれる。

「それならお茶くらい淹れるよ。適当に座ってて」

そう伝えると、笑顔のままありがとうと頷いてくれる。私はその笑顔を見てから奥に引っ込みお茶の準備を整える。

店に戻るとエミルは窓際に置いてある小さなテーブルセットに腰掛けて、外を歩いている人たちを見ているのかぼんやりと歩道を眺めていた。どうぞ、と紅茶を用意すると、ふと顔を上げて微笑んでくれる。

一応お茶菓子程度に持ってきたのはブラックが作ってくれていたマカロンだ。私のために作ってくれたものだから何かが盛ってあるという心配はない。

私はカウンターに戻って休憩用の椅子に腰掛けた。

「ここは静かだね」

うん。閑古鳥が鳴いてるからね？ カナイとかがいったなら確実に嫌味だからそう答えるけど、エミルは多分そういうのではなくて、ただ本当にそう思ったただけだろう。棘も別な意味合いも何もない。だから私は「うん、そうだね」と頷くだけにした。

「抜け出してきたの？」

「え？ あー……抜け出したってわけではないけど、んー、休憩？ どうせ、カナイもアルファも僕がここに居ることくらい直ぐに分かるだろうから、そのうち来るよ」

穏やかに答えてそつとカップに口をつける。

「あれ？ マカロン？ もしかして、ブラックが作ったの？」

「うん、美味しいよ。大丈夫だよ、ちゃんと見てたから」

にこにここと答えた私にエミルはそうだねと笑って口にした。うん、美味しい、と頷きつつ本当に彼は何でも出来るねと感心する。大抵何にもやらないけどね？ と皮肉を零すとエミルはくすくすと笑って頷いてくれた。

第二話：店では閑古鳥を飼っている

「……………それにしても、マシロ……………」

「うん？」

「えーっと、お店の経営状態ってどうなの？」

確かに頻繁にここに遊びに来ているのに、お客さんに会うことが殆ど皆無だったら……………心配にもなるよね？ 私は苦笑しつつ大丈夫だよ。と、頷いた。

「お客さんは少ないかもだけど、昔の好^{おし}みでテラとテトからギルドに来たレアな薬関係の依頼も回してもらってるし、高値取引されるような薬も作ってるからそんなに経営状態は悪くないんだよ？」

「え、でも、そうなると材料入手はどうするの？」

「それはもちろん、ブラックが何かのついでに取ってきてくれるんだよ。私が自分で行くっていつでも行かせてもらえないし……………業者から入手すると売りに上げに影響するでしょう？」

にこにこ説明した私に、エミルはなるほど、と笑って頷いてくれた。本当は駄目なんだけど、ね？ 採取が制限されているものもあるし、国の管理下に在るようなものだってあるから正規のルートで生成する義務があるのだけど……………うん、まあ、ブラックに限り、治外法権？

「そういえば、マシロ知ってた？」

こくんつと、紅茶を喉の奥に流し込んでからエミルは一息吐くと話を変えた。私は何？ と首を傾げつつ話の続きを促す。

「シゼの話だけど、そろそろ卒業らしいよ」

「えっ?! そうなのっ! 全然聞いてないよ……時々顔覗かせてるのに水臭いなー」

ぶすつとそう零した私にエミルはくすくすと笑顔を零すと、シゼらしいねと付け加える。

「きつと照れ臭いんだよ。卒業してから、しなつと『知らなかったんですか?』とかいいたいのかも……、あ……僕が漏洩させちゃったね?」

悪戯つ子っぽくそういつて笑ったエミルに、ホントだと笑い返す。エミルってこんなに親しみやすいのに王子様なんだよね。巷では今一番王位に近いとまで噂されているのに、全くそんな風に見えないというか、良い意味で偉そうぶらないからだと思うけど。そこも民衆から愛されるところだ。

それと対になるように第一王子はハスミ様は威厳と風格に満ちた英雄然とした方だ。私はちらりとしかその姿を拝見したことはないけれど、噂は聞くしブラックも同じようなことをいつていた。

まあ、ブラックは極論しかいわないから

『第一王子を消してその種を飲ませたらエミルが確実に王位に就きますけど、どうします?』

とか聞いてくる。どうしますって、私に聞いてどうするんだらう。私はそのときのことを思い出すとほんの少し苦い思いが込み上げてくる。

それから暫らくのんびりと過ごしていると、ちょっと静かだなと

思えばエミルは転寝をしていた。

王子様はお疲れだ。

王位継承順位がここの、二年で急に上がってしまったせいもあり、帝王学など多くのことを叩き込まれている最中なのだ。

私はカウンターの裏に掛けておいたブランケットを片手に、そっと傍に寄りそっと肩に掛けてティーカップを下げる。きつと王城に戻ればまた何かしらの業務があるのだろうから、ここに居る間くらいゆっくりさせてあげたい。

そう思っていたのにその静寂は長くは続かなかった。

……カランカラン

「エミルがさぼってないか？」

何の気負いもなくドアを普通に開けて入ってきた背の高い男は、天才魔術師と誉れ高い(らしい)術師で、カナイ。エミルの護衛兼傍仕えだ。私は慌てて人差し指を口元に当て「しーっ！」と口にして窓際にちらりと視線を送る。カナイはその仕草に釣られて窓のほうを見ると納得したのか足音が出ないように私の傍まで歩み寄ってきた。

「つか、居眠りしてる場合じゃないんだけどな」

「……そんなに急ぎなの？」

「急ぎというか、なんというか……まあ、本人にやらせないといけない仕事……で、いつから寝てるんだ？」

「さつきだよ」

私の重ねた答えにカナイは嘆息し、じゃあ、もう少しだけと声を掛けるのを止めてくれた。王家云々よりカナイはエミル個人が好き

なので、なんだかんだいっても甘い。

私はその甘さに微笑んで「お茶でも淹れてあげる」と再び奥に入った。それにしても、店主の私がいづのもなんだけど本当に客の来ない店だ。

同じことを思ったのか、お茶を用意して戻った私に相変わらず人気がないなとカナイは皮肉る。

「薬屋は繁盛しないほうが良いでしょ。みんな元気で何よりよ」

負けじと答えた私にカナイはなるほどなと苦笑する。

「それで、そのカナイの手のものは何？」

聞いたのは私じゃない。私じゃないということは当然

「エミル……寝てたんじゃないのか？」

「寝てたけど、話し声が聞こえたから……」

んーつと背伸びをして肩から落ちたブランケットを拾い上げ畳みながら、もしかして仕事？ と続けたエミルにカナイは頷いた。

「ここでやらせてもらえよ」

上良いだろ？ とカナイに続けられて私は別に拒否する理由もないから良いよと答える。ありがとう、と歩み寄ってきたエミルがブランケットを差し出してくれたのを受け取る。エミルはちらりと見て内容が分かったのか、エミルにしては珍しくうんざりというような表情を作った。

「難しい仕事なの？」

最初においてあったときと同じようにカウンターの裏にブランケットを掛けて問い掛けるとカナイが大したことじゃないと答えた。

「もう、誰でも良いよ。適当に返事をしておけば良いじゃないか」「それで良いわけないだろ？ あのなら、お前は今王位継承順い…」

「分かってるよ。分かってる。ほら、貸してっ！」

エミルにしては本当に珍しく、語気を荒げてカナイから書類らしき束を奪い取る。そして、私にはにっこり微笑んで「二階借りるね」と店の奥へと消えていった。

私はその後姿が見えなくなっただけからカナイにどうしたの？ と振るとカナイは、はー、と重たい溜息を吐いて冷えてしまったお茶をぐいっと呷る。そしてかちゃんつとソーサーにカップを戻すと「お前のせいだぞ」と悪態を吐く。

私が一体何をしたというんだらう？ 極力王宮とは関わらないようにしてきているし今だつて特に用事がない限り王城に上がったりしない。首を傾げる私にカナイは溜息を重ね。カップを持ってさっきまでエミルが転寝していたところへどかっとならうと座る。

「王子様はお年頃なの。第二ターリんとこの王子ほど盛んにならなくても良いけどさ、一人や二人抱えてもらわないと色々と拙いんだよ……陛下も、そろそろ退位とか考えちゃってるって噂も城内では出てるしな……」

カナイが深く溜息を吐く。それを私のせいにされてもどうかと思うのだけだ。

「まあ、城内では王子は白月の姫に心を奪われてるって専らの噂だから、良いけどな……でも、だから余計に他もご決断をつけてさ……
いう奴とかが多いんだ」

「じゃあ、さっきの束って」

「エミルの嫁さん候補」

ああ……だからあんな風だったのか。私は妙に得心した。アセアエミルの異母兄妹。本人の意図と関係なく血を繋がされた。病弱で今は床に伏せりきり。のことがあるし、エミルはそういうのを形式的に決めるのに物凄く抵抗が在るのだと思う。

それを周りが押し立てるのはちよつと可哀想だ。

少し様子を見てきてあげようとカナイに店番を頼むと、「どうせ誰も来ないだろ」と意地悪をいい、それでも「任せる」と続けてしつし、と、私に手を振ったのでカナイなりにエミルのことを心配しているのだろうと思った。

第三話：秘伝のアンチエイジング

大抵はキッチンと繋ぎであるリビングにみんなは集まるけど、あの様子なら多分書斎だろうと当たりをつけて私は書斎をノックする。私の予想は外れることなく中からエミルの返事が聞こえ、そつとドアを開くと、私は　普段書き物とかも全部店のカウンターで済ませてしまうから　使うことのない机に腰掛けていたエミルに「家主がノックなんてしなくても」と笑われてしまった。

それもそうだと笑いつつ、エミルの隣に立ち手元を見たけど、受け取った束は開かれた様子はない。

開いている窓から吹き込んでくる優しい風が、ペン立てに刺さっている羽ペンを揺らしペーパーウェイトで押さえられている紙の隅っこをぱたぱたとはためかせていた。

「はかどつてなさそうだね？　お茶でも淹れようか？」

「良いよ、ここに居て」

ぎつと背もたれに背中を預けて少し傾けるとエミルはこつこつと肘掛の端を弾いて溜息を吐いた。

「カナイから何か聞いた？」

ぼつりとそう訪ねられ一瞬言葉に詰まったが、私は嘘がかなり上手くない。だから素直にうんと頷いた。

「少し見ても良い？」

失礼かな？　とも思ったけど私とエミルはその程度の気を遣うほ

ど短い付き合いでもないと思う。エミルも、別に考える風もなくどうぞ。と、私のほうへと寄せてくれた。

ばらばらと捲ると絵姿と略歴のようなものが書かれているものようだ。なんというか……殆ど商品だ。エミルが嫌がるのに深く納得する。

「カナイがさ、断るなら断るでちゃんと自分で詫び状書けって……適当な文句が浮かばなくて、逃げてただけどまさかここまでそのことで追いかけてくるとは思わなかったよ」

はあとまたまた溜息を零して今度は机に寄り両方の肘を突いて頭を抱えてしまった。

「……あ」

「んー……？　どうかした？」

思わず私が漏らした声にエミルは頭を抱えていた腕を片方解いて顔をこちらに向けてくれた。

「ルイが居るなと思って」

「ああ……キリアの一押し of 彼女だね」

ちらりと私の手元を覗いてそう口にしたエミルは「マシロは今も彼女に会うことがあるの？」と続けた。私は少しだけ考えて軽く頷く。

「そんなに頻繁にというわけじゃないけど、時々店に来るの。あ、もちろん友達としてだよ？　エミルの話もしなくもないけど、そんな根掘り葉掘りじゃなくて元気かなーとか、何やってるかなーとか

……お、女の子が話題にすることだから、そんな、うん、大したもののじゃ」

別に全く持つて後ろめたいわけじゃないのに、なんだか動揺してしまつた私に、エミルはくすくすと楽しそうに笑つた。その様子にからかい半分だつたことに気がついて「……もう」と不貞腐れるとごめんごめんと謝つてくれるけど心が籠つてないぞ。

「本当に時々顔を見せるだけだよ。私が暇つぶしにやってる調香が気に入つたらしくて」

「へえ、マシロ、調香もやるんだ？」

そういつて笑みを作ると、少しだけ私のほうへ寄つて、すんつと鼻を鳴らし、じゃあ、この香りもマシロが作つたの？ と聞かれて私は首を振る。

「私のは教えてくれるときにブラックが作つたんだよ」

「……ああ、本当に何でもやるね。あの猫は」

素直に不貞腐れたようにそういつたエミルが妙に子どもっぽくて面白かつた。普段見せない表情だと思う。だから私はつい笑つてしまつた。

「でも、凄いな。マシロは薬師だけじゃないんだ。料理の腕も上がつてきてるみたいだし」

「そりゃ、回数を重ねればある程度出来るようになるよ」

心底感心したという風なエミルに私は肩を竦めた。でもそんな私にエミルは首を振る。

「違うよ。僕らはある以上のことなんて出来ない。上は常に見えているんだ。マシロは特別だよ……」

しんみりとそういつてそつと私の手を取る。そして薬指に嵌められている指輪を軽く擦って、ふうと溜息。

暫らくエミルの次の言葉を待っていると、ねえと切り出されうんと答える。

「僕と結婚しない？」

「はい？」

「マシロが結婚してくれるなら他に誰も傍に置かないと誓うよ。この際、猫を飼ってても我慢する」

いやいやいや……猫っていつでもデカイからね？ それに我慢って、そういう問題じゃなくて。

「ご、ごめんね、私店も有るし」

「いえ、そこはブラックしか愛せないからと答えるべきです」

どこから湧いて出てきたのか、いつものことだけれどじつじつとき目は目ざとく出てくるブラックが、すつと私の左手をとって指輪に口付けてにっこり。う……この笑顔には弱いのです。

「すみません」

反射的に謝罪の言葉が出てしまった。

エミルは「残念」と零して椅子を傾けるとぼんやりと窓の外を見た。

「王子がここで油を売っていて良いのですか？ 陛下はまた床につ

いていましたよ?」

「ジルライン陛下って調子悪いの?」

机上の絵姿をばらばらと見ながらそういったブラックを咎めることもなくエミルは私の疑問に「そうだね」と頷く。

「ええ、もう結構な年ですからね弱っているんですよ」

「年って六十歳とかじゃないの?」

「……八十六だよ」

ぼそつと答えたエミルに「え!」と声を上げる。

「ちよちよちよ、ちよつと待って! 八十六って、もう直ぐ米寿……初めて謁見させてもらったときに既に八十前後って、いや、どう見ても、そんな年齢には見えない……どんなアンチエイジング法があるんだろう?」

私も一応は薬剤店を営む薬師だ。そんな薬とかあるならちよつと気になる。

「マシロの着眼点ってちよつと面白いよね?」

くすくすとエミルに笑われてしまったけど、そんなことはないと思っただけだな?

「そろそろ本格的に退位を考えていらっしやると専らの噂になってますよ?」

「種屋は噂になんて踊らされない。真実ってことだよね」

ぼんやりとそう口にしたまま外を見るエミルに少しだけ不安にな

る。大丈夫なのか、と問い掛ければ「平気だよ」といつも通りの笑顔が向けられる。でもやっぱり辛そうだ。そんな風に感じることは出来ても、私は見ているだけという協定も結んでいるしただの傍観者に過ぎない。だから中枢のことに口出しをするのはタブーだ。

そのあとエミルとブラックが私には理解不能そうな話を始めたので、お茶を淹れるために私はその場を離れた。

……あ、下でカナイに店番させているの忘れてた。

私が図書館を出たときは、入学したときと同じように時期がずれていた。式典とかそういうのに縁はなかったが、やはり図書館は学校。卒業式シーズンにはその手の式典があるらしい。

今年の式典には若干十七歳にして最上級階位を卒業したシゼが参加するということもあって、私も参加したいなーと零したらあっさり了承を得られた。学校側の来賓席を用意しようという話まで頂いたんだけどそれは丁重にお断りして私は会場の隅っこで見守る。

エミルはシゼの身元引受人でもあるし、今回王宮からの代表として式に参加していた。エミルは正装していなくてももちろん王子様なのだけど、正装すると益々王子様で何度目にしても慣れない私はエミルがとても遠い人に思える。いや、偉い人で遠い人なんだけどね。

それにしても図書館にこんな講堂があったことも知らなかった。

その中で行われた式典もエミルの祝辞と、シゼの卒業生代表の答辞が終了すると私はそつと会場を抜け出した。式が終わってわいわいと人で賑わう前に私はシゼの研究室へと向かう。

シゼのことだからきつと他で長居したりしないで真っ直ぐこの場所に戻ってくると思ったのだ。

「お邪魔しまーす」

特に約束をしていたわけではないからこそりと入室する。

そつと後ろ手に扉を閉めて、鍵も掛けてないなんてシゼにしては無用心だな？ と思いつつ、いつも通りの研究室の机の上に、ティーセットとお菓子が置いてあるのが目に付いた。歩み寄れば、小さなメモが添えてある。

『マシロさんへ』

それだけだけど、私がここへ来ることはシゼにはお見通しだったようだ。

第四話：弟分の卒業式

私は遠慮なくお茶を淹れて一息吐くことにした。

シゼとは最初色々あったけど、今はそれなりに打ち解けていると私は思っている。時々辛辣な言葉を投げられたりはするけれど、私が本当に傷付くようなことは口にしないし、何度も助けられた。

私が暇を持て余す時間もなく、シゼは研究室に戻ってきた。

エミルは学長たちに掴まれたらしくて暫らくは解放されそうにないとシゼが肩を竦めた。

「卒業おめでとう。お祝い持ってきたんだよ」

特に嬉しそうな素振りもせずシゼはありがとうございます。と、口にして私が差し出した箱を受け取る。シゼのポーカーフェイスってブラツク以上だと思う。嬉しくない？ と問えば「嬉しいですよ」と返ってくるのに真意は分からない。

私はそれもシゼらしさだろうと納得して、開けて開けてと促すとシゼは彼の髪と同じ薄紫色のリボンをするりと解く。すっと静かに箱の蓋を開くとシゼは小さく首を傾げた。

「懐中時計……と、これは？」

「栞だよ。し・お・りっ！」

えらく不恰好な……といったそうなシゼに眉を寄せる。

「私が作ったの。ミア工房で懐中時計の彫りをやってもらっている間に、暇だったからティンに教えてもらって金属板に透かしを入れただよ」

私の言葉にシゼは、はあと頷きながら確かにちよつと不恰好な板を光に翳した。

「僕の名前……は、読めますね。あと、は……」
「ユリだよっ！ リリー。ちゃんと見えるでしょう？」

沢山作った中ではこれが一番マシだったのに。私はぶつぶついいながらジャンプしてシゼの手の中から朶を奪い取る。あ、と声を漏らしたものの、シゼはアルファほど反射神経が良くないから簡単に私は取り返して後ろに隠した。

「マシロさん！ 何するんですか」

「いらないでしょ。もう、恥ずかしいからなかったことにしてっ。
懐中時計は大丈夫だよ、ティンが自信满满だったし。一生物だって豪語してたから」

「……そうですね。確かに流石職人技といったところですが……、ありがとっございます」

蓋に丁寧な彫りのされた懐中時計を手にとってそつと撫でたあと何度か開けたり閉めたりしたシゼの横顔は嬉しそうだ。そして、何度目かにぱちんつと蓋をしたあと空いた手をこちらに向ける。

「はい、早くそれも出してください」

「良いよ。無理しなくても、私が使っから」

「僕の名前が入ってるのに？」

うつと息を詰めた私にシゼは勝ち誇った笑みを浮かべる。可愛くない。シゼは全然可愛くない。私は不貞腐れたままシゼに朶もどきを渡した。

「大切にします」

こんなもの、とかいいそうだったのにシゼは丁寧に受け取って、そつとひと撫でするとそついつて胸ポケットに仕舞いこんだ。

その一連をきよとんと見てしまった自分に、はたつと気がついて私はどういっわけか慌てたように「そついえば」と大きな声を出してしまった。

私の突然の声にシゼはちよつぱり肩を強張らせたが、いつものことだと思つたのか「なんですか？」と小難しそうな顔をして私を見る。

「卒業したつてことは、シゼは王宮に入るんだよね？」

確か、シゼはエミル専属の薬師になるために勉強していたはずだ。そう思つて頷いた私にシゼはそうですよ、と答える。

「いつごろ入るの？ そろそろ薬のこともあるし……」

シゼは手の中で転がしていた懐中時計のチェーンをポケットの隅に止めて仕舞うと、自分でティーポットに残つていた紅茶をカップに注いだ。

直視してはいけない量の砂糖がカップに投入される。あれは、少しぬるくなってしまつているこれにちゃんと溶けきるのだろうか？ 私は小さな疑問に答えを出すことなくそつと視線を逸らして自分の分の残りに口をつけた。

「そつ、か。そろそろですね。王宮に入つたら暫らくばたばたとするだろうから……その前に仕上げておきたいですね。明日の朝とか

大丈夫なら、マシロさんのお店のほうで作って夕方城に入ります」

「なんか急いでるの?」

「そういうわけではないですけど……早くエミル様の下で働きたいんです」

そうだった、シゼはエミル大好きっ子だった。その証拠のようにそういったシゼは滅多に見ることの出来ないだろう柔らかい笑みを浮かべていた。

「本当にシゼってエミルが好きだよね」

他意を込めることなくそういった私、にシゼは僅かに頬を染めて放って置いてくださいっ！ とそっぽを向いてしまった。

翌朝一番にシゼは私の店へ出向いた。

それより早く到着していたのは白銀狼であるハクアだ。調剤室で道具を準備していた私とその足元で丸くなって眠っていたハクアを見てシゼは「遅くなりましたか?」と問いながら支度を整える。

少し伸びた髪を後ろでひつつめて縛り、白衣を着れば立派なお医者様に見える。

ぶかぶかな白衣の袖を折って、ラウ先生の手伝いをしていた頃とは全然違う。因みにシゼは最上級階位を出ているので医療関係のこととは全てこなすことが許されている。

「ぼさつとしていないで、早くハクアの血液を採取する準備を整えてください。生成するのにも時間が掛かるんですよ」

いいながら取り出して時間を確認したのは、昨日プレゼントしたばかりの懐中時計だ。気に入ってくれているようで嬉しい。

私は、ほわりと心に暖かいものを感じながら「ハクア」と足元で丸くなっていた白銀狼を起こす。ハクアは聖獣指定を受けている白銀狼で、その白銀狼の主が縁あって私だ。

私の声にはハクアはゆったりと身体を起こし、立ち上がるときには人の姿を取って私が用意しておいた椅子に腰掛けてくれた。

ハクアは袖をまくり筋肉質な腕を傍の台に載せる。もう、幾度となくやってきた作業だけれど……少しだけ私の心は痛む。ずっと何か代替品が作れないものかと考えているのだけどこればかりは無理だ。

「主、気に病む必要はない」

平気だと重ねて見つめてくる金銀妖瞳テロクロミアに映る自分の姿は情けない。私はごめんね、と小さく詫びる。

上腕部をゴムで止めてから、針を構える。ハクアの血管は太いので採血しやすい。じわりと血管が浮き上がった皮膚に針を刺すと、くっつき軽く力を入れて血管まで通し、きちんと針が通ったのを確認してからチューブに差し替えた。

ゆっくりと血液が管の中を通るのを見送って、私は上腕部のゴムを解き「少しじっとしていてね」と針をテープで固定した。

因みにこの機材は私の特注品だ。

元の世界では見慣れているものだけれどこちらでは、点滴とかの考えがないからこういう道具はありそうでなかった。だからこうやって少し大目の量の血液などを採取する際、手首などの血管を深く

傷つけていたのだから吃驚だ。

そして、これはシゼに受け入れられ図書館でも使われるようになったから、王宮にも広まる。王宮でメジャーになれば一般的なものとして認識が深まってくれるだろう。

白銀狼の回復力は高いから直ぐに傷も癒えるのは分かっているし、この程度のことを辛いと思うタイプでないことも分かっている。それでもやっぱり少し心が痛む。

一度で四百ccから五百cc採るから、暫らくは安静にしておいて欲しいものだが、ハクアは今日午後からは用事があるからと直ぐに出た。私はそれを見送ったあと、シゼの手伝いを少ししていたものの、あまり私が役に立つとは思えず「店のほう見ていて構いませんかよ？」というシゼの言葉に甘えて、店に戻った。

薬の精製には時間が掛かる。六時間くらいは付きっ切りで煮詰めてたりしないといけないから、途中で変わってあげようと思いつながら壁際にある薬棚の整理を始めた。

第五話：白猫の来店

因みに今日も閑古鳥は鳴いていますけどね？

評判の店なんてところには、なりたいとは思わないものの、暇をしないくらいにはお客さんが居ても良いと思わなくもない。

はあ……と私が嘆息したところで、カランカランと聞きなれたウエルカムベルが音を立てる。

「いらっしやいませ」

私は笑顔で訪問客を迎えようと振り返ると、扉を潜ってきたのは見たことのない獣族の少年だった。真っ白な猫耳と尻尾。そして少年らしくない端正な顔立ちには好戦的な笑みが張り付いていた。

「何か、ご入用ですか？」

雰囲気だけで私は後退しそうだったが何とか踏みとどまって、問い掛けた。

「ねえ、あんたが白月の姫？」

「……え？」

お客。というわけではないようだ。

私は、じりつと後退しつつ警戒色を深めて「そう、呼ぶ人も居ます」と頷いた。そして、頷いた顔を元の位置に戻すより早く、訳の分からない衝撃が身体を襲う。体が浮遊感と痛みに襲われると同時に状況を把握する。にやりと口の端を引き上げた目の前の少年によ

り、私は薬棚に叩きつけられたのだ。

…………ド…………ッ

「っ…………くっ」

派手な音を立てて、これまで丹精込めて作った薬が床に撒かれ細かな煙を上げる。一般的な商品棚だから、危険なものはここにはない。例え煙を吸い込んだとしても害はないだろう。

しかし、私にとっての害は今この瞬間も片手を私の顎の下へと固定し、首を圧迫してくる存在だ。

「あつは、本当に何の力もないんだ？ ただの薬屋さん？ ルインイシルとは全然性質が違うんだ？」

「…………ふ、う…………あ…………」

「ねえ、あんたが死んだら…………闇猫はおれを殺しに来るかな？ それとも嘆き悲しんで勝手に消えてくれるかな？」

全て疑問系で投げ掛けてくるのに、私に答える余地はない。問い掛けている間もどんと手に掛けている力は強くなって、私の首を締め上げている。

…………殺される。

素直に死を予感した。

「美しいとき、なんて馬鹿げてる。あんたが居るから馬鹿な夢を見る連中が出るんじゃない？ 消えれば良いんだよ。闇猫も自滅するだろうし…………ああ、種を保有しない肉体の死はどんな感じなんだろう…………」

うさぎのように赤い硝子玉のような瞳は恍惚としていた。自身の行為と思想に酔っている。

目の前がちかちかする。

じわりと浮かんできた生理的な涙に視界が緩む。喘ぐように開かれた口からは熱い息が微かに漏れ、端からは涎が垂れる。

「マシロさん、一人で何を騒いでいるんです……か……」

その声に天井しか見ていなかった視線を、何とか声のしたほうへと泳がせる。シゼが中で作業していたのを忘れていた。

「あれー？ まだ人が居たんだけ？ この家は変だな。気配が掴みきれない……ま、良いや」

「……………ぜ、にげ、て……………」

何とか声を絞り出したら、五月蠅いとばかりに喉が絞まって、がはっと鈍い音を吐き出した。

「面白くないこといわないですよ。首の骨折れちゃうから、これ以上騒がないでね」

「種屋、候補生……ですか？」

助けるなんていわない。だからお願い逃げて……………！！

私はこの願いだけは届いて欲しかった。口癖のようにシゼはいつていた。護ることは出来ない。自分はその用向きには不向きだと……………。だからちゃんとシゼは自覚してくれているはずだ。

視界が霞んできた。

重くなる瞼を落としかけたとき、その熱風は私を襲った。
うわっ！ という短い悲鳴と共に首への圧迫感が消えた。

「こっちー！」

強い力に腕を引かれ私は半ば引きずられるように店の外に出た。
外光が眩しく瞳を閉じる。

「止まらないで！ 走ってっ！！」

転げるように大通りに出た。

私の中に今起きたことが嘘のように、大通りはいつも通りの喧騒に包まれていた。行きかう人を避けて、私は街路樹脇に据えてあるベンチに腰を下ろす。

「大通りまでは追い掛けては来ないでしょう。事後処理が面倒になるでしょうから」

「……っ、ぜ」

「まだ辛いでしょ。声は出さなくて構いません」

息も苦しかったけど、それよりも突然襲ってきた恐怖に奥歯が噛み合わず体が小刻みに震えてしまっていた。情けなく身体を抱き締め丸くする。

シゼは申し訳程度に上に着ていた白衣を私に掛けてくれたけれど震えは止まりそうにない。

「視界は大丈夫ですか？ 熱で焼けていませんか？」

普段より数段優しげに掛けられる声に、こくこくと私は頷くことしか出来ない。

「薬は後日作り直すとして、店には種屋店主殿が戻るまでは帰らないほうが良いでしょう。もう、居ないとは思いますが……とりあえず、治療のために、少し落ち着いたら王宮に向ってはどうかと思いますが……」

大丈夫ですか？ と重ねられて私はまた頷いた。

「それにしても、どうしてあんな人がふらふらしているんでしょうね……？」

「……っほ……ど、どう、して」

「はい？」

「し、て……どうして、直ぐ、逃げなかったの」

掠れる声で何とかそれだけ繋いだ。

シゼは馬鹿だ。

いつも助けられない。

自分では無理だといっておきながら、いざそのときになれば無茶をする。

二人とも逃げられたから良かったようなものの、シゼに何かあったら私はエミルたちに顔向けが出来ない。

私は今とてつもなく情けない顔をしているのは分かる。そして非難めいた目をシゼに向けているつもりもある。それなのにシゼはくすりと笑って肩を竦めた。

「どうしてでしょう？ 分かりません。でも、こうして二人とも助かったのですから良かったじゃないですか？」

問題はありません。と、続けたシゼに問題大有りだと口にしたかったが、それより早くシゼが続ける。

「本当にどうして僕が居るときなのか。気をつけてくださいよ。僕は、ああいうのに向いていないんです。ただの薬師なんですから……でも、彼はまだ未熟だった。力は自分で制御出来ないほど溢れているようでしたが、未熟でした。だから、あんな子供だましに引かかった。あんなのに引かかるとはアルファさんくらいです」

それはつまりアルファは子どもだと？ いや、そっちじゃなくて同じ種屋になるものでも、私の首を絞めていたのがブラックだったから、効果はなかったってことかな……。ふと、そんな図が脳裏に浮かぶものの全く現実味が無い。何がどう転んでも有り得なさ過ぎる。

「丁度、僕の居たところには色々危険なものが並んでいましたからね？ 簡単な摩擦だけで爆発するものも多々ありましたし……」

全部ぶちまけましたけど、損害のほうは補償しません。とにこり顔。

別に請求したりはしないけど……大赤字は覚悟しろということか。

「少し楽になりましたか？ こっち向いてください」

促され顔を上げた私の頬を両手で包み、そっと首筋に向かって撫で下ろしていく。少しくすぐったく……

「いったっ！ 痛いっ！」

かなり痛かった。その悲鳴に合わせてシゼは「もう少しじっとして」と真剣に触診する。

「昼真っから仲が良いねー」

通りすがりの声にシゼは思わず手に力を込め、私は悲鳴を殺した。慌ててシゼは謝り真っ赤になっている。

「えっと、とりあえず王宮へ向きましょう。馬車を捉まえますね」

立ち上がったシゼの服を反射的に掴んでいた。一分一秒でも一人になるのは嫌だ。怖い。

それに気がついたのかシゼは私の腕を取って、立たせてくれた。

「大丈夫なようなら少し歩きましょう。その途中で馬車を拾いますから……」

怪我人には優しいようだ。

第六話：実は一番マイペース（1）

「いったい！ 痛いつてばっ！！ や、やめ」
「止めません。少し静かにしててください。放置していたら租借に問題が出ますよ？ 少しずれてます」

「前言撤回っ！ 全然優しくなかった。」

王宮に辿り着けば下準備は整っていたのか、直ぐにシゼの仕事部屋へ通された。書斎というよりは、図書館で見慣れた研究室だ。

「痛みも痣も……手は尽くしますが、暫らく取れないと思います。あとでカナイさんにも診てもらえば今よりマシになると思いますけど……」

一番は店主殿に診て頂いたほうが良いですよ……と気遣わしげに続けられる。

私はそれに首を振った。

ブラックには伝えない。そう決めた。

だって、こんなこと伝えようものなら何が起ころかわからない。私は生きてるけど。無事だけど。あの白猫は殺されかねない。いや、ブラックなら確実に消す。そんな自信があった。

どういう理由で暴拳に出たのかは分からない。分からないけれど、ブラックに彼を殺させたくはない。正直訳も分からず襲われたことを思えば、店の損害を思えば少しくらい痛い目を見ても良いのではないかと思うが、ブラックには加減がないので……諦めるしかない。

……カチャ。

「シゼ、王宮入りご苦労さん。こっちに来るようにいわれたんだ、けど……て、マシロ？」

まさか私が居るとは思っていなかったのだろう。用事とやらを済ませてから訪問してきたのはカナイだ。私の姿を見つけて素直に驚いている。や、と片手を上げると首を傾げつつ、おう。と返してくれた。

「ふーん……。大体分かった。ったく……蒼月教徒の連中は何をやってるんだ。自分ところのガキくらい躰けとけよな……」

怪我の様子を見てもらっている間に、事情を掻い摘んで説明した。

「ブラックに伝える伝えないは、お前に任せるけど、バレるだろ？ フツーに……店の内装くらいはこれから見てきてやるけど、薬の在庫まで復元は出来ないし、俺がそこで魔術を使ったらその痕跡が残る。それに気が付かないブラックじゃないと思うけど？」

「……大丈夫、だよ。ブラックは私がいわなかったらいいたくないことだと判断してくれるから、言及しない。問質されなければ、一応、蒼月教徒とぶつかるとは避けられると思うし」

カナイは不器用なので、治癒速度を上げるための処理を施し終わるとシゼと入れ替わった。シゼは丁寧に塗り薬をつけ油紙を張り、白い布を当てたあと、包帯を巻きつけてゆく。

「痣にならないと良いですね……」

その流れるように手馴れた動きが終わり、そっと包帯の上から撫でたあと重ねたその言葉は意外だった。

「ほら、次はお前」

余った包帯や薬を片付け始めたシゼの腕を掴まえたカナイは、反射的に大丈夫だと口にしたシゼを無視して、ぐいっと袖を上げた。肘から手首に掛けて赤くなってしまっていた。

「っ」

「大丈夫じゃない。軽い熱傷だけど、痛むだろ？ このくらいなら俺が治せるから」

……気が、付かなかった……。

私だって薬師なのに、シゼの痛みにも全く気がつけないで、自分のことばかりで……情けない。

「気付かせないようにしたんだから気付かなくて当然です」

「カナイは気付いたのに」

「は？ 俺？ 当たり前だろ。今の話からしてシゼが無傷とは思えないし、それにこいつが目に付くところに怪我を残すとは思えない」

「大体カナイさん大きさです」

「大きさでも良いの。ほら、よ」

カナイがするすると手のひらをシゼの腕に滑らせると、簡単にシゼの赤みは取れてしまっていた。

「軽くても放置しとくと皮膚が変色するぞ？ って、いわれなくても分かるよな」

魔力による治癒術は万能ではないけれど、薬よりは即効性がある。苦笑しつつ立ち上がったカナイとほぼ同時に部屋の扉が叩かれた。部屋の主の了承を得て開かれた扉の先にはメイドさん。恭しく腰を折ってから伝えてくれた。

「エミル様がお呼びです」

私たちは顔を見合わせたあと、カナイはメイドさんに「全員か？」と問い掛ける。

「え、いえ、シルゼハイト様にご到着されていれば……というお話でしたので……あとは白月の姫がお見えでしたらと……」

おどおどと続けたメイドさんにカナイは頷いて少ししか開いていなかった扉を開き「俺は店を見てきてやる」と部屋を出た。その後姿を見送ってから、伝達してくれたメイドさんにお礼をいって私たちもエミルの私室へと向った。

「何かあったのかな？」

「そうですね……僕に、ということだけなら、ご自身で来られるでしょうし……」

道すがらそんなことを呟きあい私は眉を寄せた。

……コンコン

他の部屋より少しノックの音が重たい気がするの、この扉が普通ではないからだと前にカナイが教えてくれた。上位王位継承順位保持者は手厚く護られるようになっていらいが、逆にいえば困われているに過ぎないとカナイが苦々しく零していたのはまだ最近

のことだ。

普段から使用人を寄せないエミルは、手ずから扉を開けて私たちを迎えてくれた。ぴつたりと扉が閉まったところでエミルは直ぐに私の首に触れる。

「どうしたの、これ、大丈夫？」

「……う、うん……」

なんと説明して良いか分からなくて、私は頷いただけだ。

「シゼもご苦労様。予定より早かったね。薬の方は大丈夫だった？」

にこりとシゼにも微笑んだエミルにシゼは「あ」と声を漏らしそのあとは黙した。エミルに嘘は吐きたくないし、深い説明も自分にして良いかどうか分からなかったからだと思う。

「あ、あの……薬は」

いいかけた私の口に、エミルはそつと手を当てて「あとで良いよ」と微笑んだ。

……エミルはもう既に何かを知っているのだろうか？

そして、もう痛まないのかとか、後遺症として何か残らないのかとか聞きながら、暖炉の前にあるソファへ促してくれる。

シゼはお茶を淹れますね。と、傍にあったティーセットが載ったワゴンの傍へと寄った。

「さて、マシロが来てたのなら、もしかして関係があるのかな？」

私の隣に腰掛けてそういったエミルに私は首を傾げる。あ、横の動きはちよつと痛い。

「蒼月教団のレムミラスから手紙が来てね。僕に早急な面会をとい
つてるんだ」

その言葉に私は肩を強張らせ、シゼはティーセットをカチャンと鳴らした。ああ、あるの？ と毒なく微笑んだエミルに、私とシゼは顔を見合わせたあとゆっくりと頷いた。否定するのも隠すということも無駄だろう。

第七話：実は一番マイペース（2）

「なるほどー……」

エミルの笑顔が黒い。

「それで釘を刺しておこうってことか……」

かと思っただら落ちていたようだ。私はほっと胸を撫で下ろしたのに

「蒼月教団はトップを据え変えたほうが良いね。訪問と同時に……」

全然落ち着いてなかった。冷静じゃなかった。

「エ、エミル！ ストップ！ レムミラスさんにも何か理由が」

「必要ないね？ 必要ないよね。この世界にありながら白月に……中立であるはずのものに、手を出そうというんだ。そのくらいの覚悟はあるだろうし」

マシロが気にすることじゃないよ。と、につこり。

気にします！ 気にしますよ！ 私は十分に気にしますから物騒なことを考えないで下さい。

「だ、駄目だよ！ エミル、は、話くらい聞いてあげて。それに、ほら私もシゼが助けてくれて無事だったし……問題ないよ。私はエミルに誰かを傷つけるようなことをして欲しくない。お願い、そんなことで手を汚さないで」

エミルにそんな業を背負わせたくないしそれに私自身、人の命の責任なんて持てない。懇願する私を暫らく見つめていたエミルは、はあと物凄く重たい溜息を吐いた。

「被害者であるはずのマシロが、そういうなら僕は強行出来ないけれど、ブラックの耳には入れるべきだと僕は思っよ？」

「え？」

エミルにしては珍しい意見だと思った。素直に目を丸くした私にエミルは苦笑する。

「僕もマシロとはそこそこ付き合いが長いし、分かるよ。因みにマシロとあってからのブラックも知ってるような知らないような……」

そつと横から差し出されたティーカップを受け取りながらエミルは話を続ける。

「これはマシロの命が危険に晒されたんだ。それをどういう理由があったからといって、聞かされずに居るのは辛いと思う。もしも僕だったら絶対に嫌だ」

絶対に……と、重ねたエミルに私は口を噤んだ。

エミルは、そんな私の頭をいつもと同じように、ふわふわと撫でた。そして、傍に立っていたシゼに顔を上げる。

「シゼ。ありがとう、マシロを助けてくれて……」

「え、いえ……その……」

急なお礼にシゼは、ぱあっと頬を朱に染めて動揺する。シゼはエ

ミルの前では年相応だ。そんなシゼにエミルは立ち上がると、私にしたのと同じように頭を撫でた。若干驚いたようで少しシゼが逃げたが気にしない。

「でも……」

「？」

「でも、無理はしないでね。マシロもとても大切だけれど、シゼだって僕にとって大切なんだ。僕は君を失うわけにはいかない」

双肩に手を掛けてそう告げるエミルにシゼは、困ったような笑みを零して頷いた。掛けてくれる言葉は嬉しい。でも、あの場では他に方法がなかった。そういいたいのだろう。

きつとエミルもそのくらい分かっていて、でも、いわずには居られなかったのだと思う。

「じゃ、面会してあげようかな」

「え？」

「ん？ いったよね。レムミラスが面会を求めてるって……」

いや、手紙っていつてたよね。てことは後日の話じゃないの？

「マシロは同席して。彼は君がここに居るという前提みただったから……シゼも大丈夫なら同席して構わないよ。君も当事者だから」

その言葉に頷いたシゼを確認して「さて、行こうかな」と口にする。

「えつと、今？」

「今だよ。もう、待ってるんじゃないかな？」

にこにこそういったエミルに苦い笑いが零れる。普通にお茶してたよ……。レムミラスさん待たせてさ。悪かったなと微塵でも思ってしまう私は小心者だ。エミルなんて、勝手に決めて勝手に訪ねてきているのだから問題ないとのんびりしたものだ。

王宮の一室で待ちぼうけしていたレムミラスさんは、若干顔色が優れなくなっていた。途中で合流したアルファが扉を開いてくれると慌てて立ち上がり恭しく頭を下げる。

「此度王子には……」

「挨拶は結構なので、早く本題に入ってください」

お怒り気味の王子にレムミラスさんは、また腰を折って私とエミルが席に着くと本題に入った。因みにアルファはエミルの隣に立ちシゼは私の隣に立っていた。

「王子も既にお聞き及びかと思われませんが」

「ええ。どうしてお一人なんですか」

間髪居れずに頷いたエミルにレムミラスさんは怯むことなく「それはお察しく下さい」と続けた。

「今、マリルに危害を加えたものを同行させることは、彼女の精神衛生上よろしくないと思いましたがので控えました」

私の？ まあ、確かに会いたとは思わないけど。

「彼にはこちらでそれ相応の処罰を受けさせています」

「子どもなのにですか！」

反射的に口を挟んでしまった。みんなは少し驚いたような空気をまとったが、レムミラスさんは少し小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「当然でしょう？ 貴方は貴方に危害を加えたものを野放しで構わないのですか？」

それならそれで都合が良いですが。と、口にしたレムミラスさんをエミルが一瞥する。

「え、そりゃ、野放しは困りますけど……でも、一体どんな」

「それは貴方には関係のないことです」

膝の上でゆるりと組まれた指先を軽く揺らして、エミルが「貴方は」と話し始める。

「……貴方は少々マシロに対して失礼が過ぎるのではないですか？ 今回は僕に、お願いですか？ それとも、マシロに、なのですか？」

疑問符が一応付いているような気がするが、とてつもない威圧感を感じるのには私だけだろうか？ 私は庇護されているようだけど……肌寒さを隠せない。

レムミラスさんはエミルの言葉に僅かに逡巡し「マリル殿にです」と答えた。私にお願いとは意外だ。

「それならそれ相応の話し方というものがあるのではないですか？ 蒼月財団の団長殿は礼儀も敬意も払えぬとの認識で構いませんか？」

エミルの穏やかなチクチク攻撃に黙したレムミラスさんに私はわたわたと続きを促す。それに頷いて特に語気を緩めることもなく話を始め

「美しいときを与えてくださるマリル殿ならご理解いただけることと思います。今回の一件はこちらの監督不行き届きも否定は出来ません。しかし、元を質せば……憂いと嘆きが生んだことです」

と長い前置きから始まった。

第八話：籠の中の焦燥

「……………それで、どうするんだ？」

一通りの話を終え、お願ひします。と、念を押してレムミラスさんは退席した。途中から合流したカナイに問い掛けられ、私は唸る。

「まだ考え中」

あの、レムミラスさんが……嫌味で皮肉屋で、私とは絶対相容れない感じなのに、頭を下げた。建前とかとりあえずとかそういうのではなくて、きつと本気で頭を下げていた。あの白猫 名をルカというらしい を護つてのことだと思う。彼本人にとつてあの少年がどんな位置に居るのかは知らないけれど……私に希^{こいねが}うだけの価値のある人材なのだろう。

「今夜はどうする？ 城に部屋を用意しようか？ それとも馬車を用意しようか？」

話し始めた時間も遅かったけれど、結局終わったら日はとつぷりと暮れてしまっていた。だから、そういつてくれたエミルはカナイに「大丈夫だったんだよね」と確認を重ねた。カナイは先にした報告と同じように頷いて、大丈夫だと重ねる。

「アレもいつてた通り、店のほうは何事もなかったように元通りだ。薬瓶は空が並んでるけどな……」

『私共が用意したものではご不安でしょうから』

それが空の瓶の原因だ。

「シゼも暫らく派遣するよ」

いってくれるよね？ と穏やかに問われればそうでなくてもラブ
エミルのシゼが断るわけない。問題ありませんと頷いてくれた。私
はありがとうと二人に礼を告げ、馬車の手配を頼んだ。

帰りの馬車は、心配だからとアルファを共に付けてくれた。カナ
イは状況報告がまだ残っているからとエミルと何やら難しい顔をつ
き合わせていた。

挨拶と迷惑を掛けてしまったお礼もそこそこに私は帰路につく。
アルファたちが引き返していく馬車を窓越しに見送って、元通り
だけど、がらんとした店内を見回し嘆息。

明日から暫らくは暇をしなくてすみそうだ。

私は一階部分のお店に明かりを点けることもなく、ぐったりと疲
労感募る身体を二階へと上げた。

はあ、と嘆息して寝室等に繋がる書斎の扉を開ける 直接寝室
へも入れるけれど私のいつものルートだ と、暖炉の前にあるカ
ウチソファの上で黒猫が丸くなっていた。

私がそつと扉を閉めて、部屋の中へと踏み入れば、猫はふつと頭
を上げて身体を起こし、絨毯を踏みしめるときには私の見慣れた姿
に戻っていた。

歩み寄ったブラックは片腕で私の背を抱き、開いた手で私の左手

を取ると、指輪に軽く唇を寄せた。そして疲れてしまっている身体を労わるよう包み込むように抱き締めたブラックは、そっと包帯に唇を添えて「どうしたんですか？」と当然の問いを掛ける。

「……………酷い寝違い方をしたの」

すらりと口から出た台詞に、ブラックは音もなく笑う。

……………僕なら絶対に嫌だ。

そういつたエミルの言葉が脳裏に過ぎって胸が苦しくなる。私は嘘を吐き通すか、事実を口にして説得するか悩んだ。

そのせいで次の言葉が出なくなってしまうている私をブラックは両腕に力を込めて、ぎゅっと抱き締める。

すりつと頬を寄せ、耳元に唇を添えるとそっと囁く。

「我慢します」

「え？」

問い返せばより強い力を腕に込められる。

「我慢しますから、マシロの口から事実を聞かせてください。今日……………何があつたんですか？」

懇願されれば私は答えないわけにはいかない。この世界で生活するようになって、私には沢山の大切なものが出来たが、一番大切なものを問われれば　口にするかどうかは別にしても　迷いなくブラックと答えると思うから……………。

だから私は彼の腕の中で大きく深呼吸し

「あの、ね……」

ブラックの背に回した腕に力を込めて、私は覚悟を決めてゆっくりと話し始めた。

人は変われるはずだし、ブラックだって少しは丸くなった、はずだ。突然発砲したりも少なくなったし、きっと……きっと大丈夫。

「消しましょう」

「いやいやいや、待って、我慢するっていったよね？」

……甘かった。

立ち話もなんだからとソファを陣取っていたが、すつくと立ち上がったブラックに合わせて私も腰を上げる。

「マシロに手を掛けるなど許されません。確実に私は喧嘩を売られています。しかも、とても卑怯で有り得ない手段を持って……」

「我慢するっていったよね！」

「いーましたけれど、許して良いレベルの話ではありません」

憤慨するブラックに眉を寄せた。

ブラックの胸元をぎゅっと掴み、厳しい顔で睨みあげれば僅かな沈黙が支配する。

部屋の隅にある柱時計の振り子が揺れる音すら大きく聞こえるほどの静けさのあと、先に視線を逸らしたのはブラックだ。

ん？ 何気に頬が赤い気がするけど、どうしたんだろう？ 私
それを問うより早くその理由は分かった。

「……………誘ってます？」

誘ってません。全く誘ってません。

今日は体力の限界まで頑張りました。無茶いわないで下さい。そ
して、この流れのどこでそんな話に持っていけるのか、相変わらず
貴方の掴みどころがさっぱりです。

「そ、そんな全力否定しているような顔をしないで下さい。軽く凹
みます。いえ、凹みました。慰めてください」

「……………誘ってる？」

「誘ってます」

はああああ……………私の盛大な溜息。

「兎に角、今日は外出禁止！ 蒼月教団とか財団の本部とか、いつ
ちや駄目だからね！ ルカくんに出したら駄目だよ！」

私の剣幕にブラックは、はあと短く嘆息し肩を竦めると「仕方な
いですね」と零した。まだ怒り覚めやらぬという感じではあったも
の、ブラックはソファに腰を降ろし、ぽんぽんとその隣を叩い
た。私に座れといっているのだと思う。

「包帯解きますよ」

腰を降ろした私に直ぐ掛かった言葉に頷いた。

まだ、痛みが残る部分を治してくれるつもりなのだろう。シゼもブラックが施せばきつと痕は残らないとお墨付きだった。

互いの息遣いも聞こえてくる距離で、そつと首筋に掛かる指の動きは心地良くもくすぐりたい。

「ルカの……」

「え……」

軽く瞼を落としていた私はブラックが紡ぎ出した名に瞼を持ち上げた。ブラックは私の絞首痕を見ながら独り言のように続けた。

「彼の気持ち……苛立ちが分からないわけではないです」

「ブラック？」

私の疑問に気がついたのか、ブラックはふふつと笑いを零して「意外ですか？」と口にした。

「マシロに危害を加えたのは正直許せません。私の前に姿を現すようなことがあれば消します。ですが、まあ……そのことだけをいうのなら、私がここの結界を緩めていたのも良くなかったです……」

「それはブラックのせいじゃないよ」

監視されているようで嫌だと、結界を緩めさせたのは私自身だ。毎日が平和そのものでこんなことがおこるとは微塵も思っていないかったから……ではあったのだけれど。

間髪居れずに口にした私にブラックは微笑み、ありがとございませす。と添え、脱線しそつだった話を戻した。

「ルカは生まれるのが早すぎたんです」

「どつという意味？」

「言葉のままです。彼は種屋になるべくしてその素養を持って生まれた。ですが、私はこの座を安々と手放す気はありません」

そんなの当然だ。ブラックが種屋をやめるときはこの世界にはもう彼は存在しない……。私もきつとその存在意義をなくし消えてしまっているだろう。

塞ぐ気持ちを悟ってか、ブラックはそつと私の頬を撫でて微笑む。

「役目にはそれほど執着していませんが、今の私は生には執着しています。それに、ルカと私には埋めることの出来ない決定的な差。経験という大きな溝があります。ルカにはそれを超えることは出来ない。この経験は種屋に就かないと、きつと身につかないでしょうから……」

シゼもお陰で助かったのだといていた。

「ようするに、彼は種屋になるべくして生まれ、幽閉に近い形で囲われているにも関わらず、種屋に就くことなくその一生を終えるのです。サーカスの檻の中の猛獣のように扱われ、来るはずのない出番を待つ」

それはとても虚しく、そして長い時間でしょうね……。と、締め括って私の目じりにキスをした。くすぐったくて横に首を傾けたが、もう、痛みはなくなっていた。

「自由にしてあげれば良いじゃない。彼の人生を……」

「ルカの人生は種屋になることです。申し訳ないですが、直接、彼がその目的で私のところへ来ようものなら、迷いなく私は彼を種に還します。……そんな自殺行為も彼には許されないでしょうけれ

ど」

いって笑ったブラックは泣き言をいつているようで、私は胸がチクチクと痛んだ。

だからいい子いい子と頭を撫でるとふにゃんと頭頂部の猫耳が左右に垂れる。可愛すぎる。

そんな私に慰めるとばかりに擦り寄ってくるブラックを制止してふと……。

「お腹すいた」

色気も何もないことを口走った。

第九話：釘をさすなら最後まで

翌朝、私がぼんやりと覚醒するとブラックは既に起きていて、ゆるゆると眠っている私の髪を梳いていた。

「おはよう」

ぼんやり口にすれば耳に心地良い優しい声で「おはようございませ」と返ってくる。凄く心地良くて、起きる挨拶でも眠りに誘われているような気になる。

うつらうつらと瞼を持ち上げたり下ろしたりしている私の目じりにキスを落として「起きないんですか？」と笑いを零す。分かっている。分かっているよ。起きるつもりなんだけど……居心地が良くて。

「何時？」

「ティータイムの頃合いですね」

いわれてもまだぼんやりしている。ティータイムか、お昼を廻っているわけではないだろうから十時くらいということだろう。普段ならそういう時間だ。

「もっと早く起こしてよ」

「とても幸せそうに眠っていたので」

すみません。と、とぼつちりなのに謝罪してくれる。私はもぞもぞと起き上がり、ベッドの上で膝を抱えた。

いくらお客の来ない店でも、開けないわけに行かない。本当はお休み……ていうか、ああ……。

「どつしたんですか？」

「商品がないんだった……それに」

シゼが……といいかけると同時に部屋をノックする音が聞こえた。

「マシロさん、まだ寝ているんですか？ 昨日の今日なのに店の鍵が開いていましたよ」

中の返事を待たずに扉を開けられて、無用心です。と続けたシゼに、私は反射的にブラックの頭をがつつり持ってベッドに沈めた。

「先に調剤室で始めていますから、顔を洗って降りてきてくださいね？ あと、ハクアにも連絡をしておいて貰えると良いかと……どうか、しましたか？」

「な、なんでも、ないです。直ぐ降りるよ」

なんとかシゼにそう答えると、シゼは不思議そうに首を傾げたものの「お願いしますね？」と重ねて部屋を出て行った。

ぱたんつと扉の閉まる音と同時に、ブラックが暴れた。反射的に黒猫の姿になつてくれていた。

「マシロは私を窒息死させる気ですか？ 寝台の上で死ぬると思つていなかったのだからそれはそれで満足ですが……」

「鍵」

「はい？」

「鍵、私掛けたよね。開いてたって……ブラック、シゼが入ってきたの知ってたでしょ！」

目くじらを立てた私にブラックは、あー……と漏らしてから「そうですね」と微笑んだ。

悪いと思っていないその態度に拳骨を加えてベッドに沈めると私は早く作業に取り掛かるためにベッドから抜け出した。

ベッドの中で高貴さを漂わせつつも愛らしさを失わない黒猫が、酷いです、と漬れているが気にしない。

シャワーを浴びて目を覚まそうと、適当な着替えを引っ張り出し抱えた私に「手伝いましょうか？」と声が掛かる。

ぴたりと足を止めて、眉を寄せた私の視界には元のブラックがベツドの隅っこに腰掛けてこちらを見ていた。

「……何を？」

シャワーをとかだったらもう一度、沈んでもらうしかないと思う。

「入浴を……」

ぐっと開いた手を握り締めた私にブラックは「ええと、間違えました」と焦ったように見せてから続けた。

「薬のほうですよ。何か作りましょうか？」

ブラックの申し出は嬉しい。願ったり叶ったりだ。

「でも、種屋のほうは？」

薬屋さんはうちじゃなくても王都にはたくさんある。でも、種屋はそうじゃない。

「構いませんよ。傀儡に店番させます。その代わり、夜はこちらに居られなくりますが……私は何をすれば良いですか？ 店主さん」

につこりそう告げるブラックに心が温かくなる。ブラックは本当に私を甘やかせることにかけても天才だと思う。

「……で、その手伝っていただけの店主殿はどちらに？」

調剤室に居なかったシゼを温室で発見して、その旨を伝えると首を傾げられた。

「ブラックには、ここには置いていない材料を取りにいつてもらったよ。元々、不足気味になっていたものもあるし、その次いでも兼ねて」

シゼの腕の中から瑞々しい色を湛える薬草が入れられている籠を取り上げてそういった私にシゼは頷いた。私が温室で栽培しているものはそれほど多くはない。温室自体大した広さもないから仕方ないし、私はあまり増やすということが苦手で……あまりあると枯らしてしまうのだ。

「ですが、ふふ……これまで種屋店主を顎で使う人が出てくるなんて有り得ない話ですよね………なんというか、ある意味、マシロさんは偉大です」

「……貶してる？」

「まさかっ！ 言葉のまま褒めています」

噛み殺したような笑いを含んでいたので、必ずしもその言葉通りとは思えないがシゼの可愛くない発言はいつものことなのでもう気

にならなくなっていた。

私に対して軽口叩き、嫌いだなんだと平気で口にするシゼだけど、仕事はとても真面目にこなしてくれる。もともと彼は最上級階位卒業業者で私とは出来も違うから、作業効率も良く店主の私の方が小間使いだ。

私の集中力は常人らしく数時間、もしくはもっと早く切れたり入ったりするから、その度に作業台とは違う場所でそっと休むのに、シゼはぶっ続けで作業を行ってくれている。途中勿論休むようには声を掛けるが……休んだのは、お昼を無理矢理食べさせたときだけだ。

日が傾いてきてお日様の残りが部屋に差し込んでくるころ。ブラツクは戻ってきて調剤室の脇に荷物を積んでくれた。

「ありがとう、大変だったよね」

中にはもちろん貴重なものも含まれている。

「そうでもありませんよ？　ただ季節的にすぐ手に入らないものがあつたので……それは、市にでも行くしかないと思いますが、今日はそこまで時間が取れなかったので」

「十分だよ。あとは私でも何とかかなると思うし……」

「私は好きでやっているので存分に使ってくださいね」

いいつつブラツクは調剤室の扉を気にしているようだ。どうかしたのかと問えば、いえ、と首を振った。

「私は種屋に戻るのかと思います。問題はありますか？」

ブラックが持ち込んでくれた薬草や実を確認しつつ「大丈夫だよ」と答える。

「……シルゼハイトにもほどほどにするように伝えてください。天才肌は限度を知りませんから……貴方の為に尽くすのは分からなくもないですけど、私より長く一緒に居られるのは少し嫉妬しています」

意外な台詞に顔を上げるとしよぼんとしていた。シゼにやきもちこれは考えてなかった展開だ。私は傍に置いておいたお手拭で微妙に緑色になってしまった手を拭い向き合う。

「シゼは家族みたいなものでしょう？ それに手を貸してくれているのはシゼの意思というよりはエミルに頼まれたから、だよ？」

実際弟という感じしかない。

まあ、私と血が繋がっていてあんな美形にはなりようがないけれどね？ 以前、図書館で周りは全て男の子という中で生活していたときは、そんなこということなかったのに今更と感ずると同時に不思議にも思つ。

「そうですね、すみません。なんとなく……マシロがとてもこの世界に馴染んできたなと感じて……悪いことではないのですが」「寂しいの？」

きょとんと訪ね返した私をブラックは困ったような顔で見つめて苦笑すると「そう、ですね」と肯定した。

なんか余りにも素直で、頬がぼうつと熱持った。なんだろう、このバカツプルな感じ。でも……そんな風にどうしても感じてしまうブラックがやっぱり少し寂しくて私も同じように苦笑した。

「私はずっと傍にいるよ？ 私はいつまでたっても異界人だよ。だから変わらない、それに……ブラックは異質ではないよ」

大丈夫、心配ないよ。と告げてそっと抱き締めて背伸びすると頬に軽く口付ける。ぎゅっと私を抱き締める腕に力が籠って、ほうつと大きく息を吐く。

「ルカの言葉ではありませんが、きつと世界が、誰かが私からマシ口を奪ったら……きつと私は許さない。世界を破壊し自らも壊れる自信があります」

そんな怖い自信持たないで欲しい。持たないで欲しいけど、重たいくらいのブラックの気持ちは私を心地良くさせる。余程私の方がブラックに毒されてしまっていると思うのにそこまでは伝わらない。想いの重さが同じだということを伝える術は何もないことがとてもどかしい。

だから今度は唇にそつと口付けた。

「あのお、もう出て行っても良いですか？ オイルが切れているのですが……」

……びくうっ！！

私の肩は思い切り跳ね上がったことだろう。

シゼがっ！ シゼが居たんだった！ すっかり忘れてた！ その流れでここまで来たのにすっかり忘れてた。他人に商品作らせて、私ってば、私ってば私ってば……！！ 穴があつたら入りたいっ！ いや、寧ろ埋めてくれっ！！

「……………ランプ用なら……………キッチンの奥にあります……………取ってきてください」

恥ずかしすぎてシゼの顔が真っ直ぐ見られなくて、私はブラックの胸に額を押し付けたまま、一階のミニキッチンを指差した。シゼはあっさり「分かりました」と答えて奥へと向う。

第十話：知らないかもしれませんが

うーっつと声を殺した私は、雰囲気でブラックが笑っていることに気がついた。恨みがましく顔を上げると、顔を逸らされた。そして片手で口元を覆って肩を揺らす。そこまで、笑うな。というか、分かっててやったよね。明らかに……。私は扉を背にしたから気がつかなかったけど、ブラックは確実に気がついてたよね。

「ブラックー……」

恨みがましい目で見上げれば、ブラックはにこにこ楽しそうに笑って「怒った顔も可愛いですよ」とこめかみに、ちゅっとキスを落として「また明日」と消えてしまった。

「全く、ちゃんとドアから出て行けっつていつてるのに」

むすつと口にした私に呆れたような溜息が聞こえた。

「そっついう問題ではないと思いますよ」

私は再びぎくりと肩を強張らせて、ゆっくりとシゼを振り返った。良い湯で加減というくらい赤くなってる自信はある。シゼはオイルポットを持って「これですよね？」とフツーに確認してくれた。

「う、うん。そう。……あー……ええつと、その、お見苦しいところを……すみません」

「ごによごによと続けた私にシゼは呆れたように笑ったあと首を振った。」

「仲が宜しいのは良いことです。マシロさんが抑止力になっているのは事実ですから」

「…………シゼ、そういういい方は」

ブラックが暴れ馬か世界の災厄かというように口にしたシゼに私は眉を寄せる。私はブラックが唯の人であっても、唯の獣族であっても好きだと思う。

「そうですね…………マシロさんはあまりご存じないですしね。種屋店主殿のことを…………」

「今は違うのだからそれで」

「そうですね。ええ、そうですね…………間違っていますよ」

やんわり笑みを深めたシゼが、どこか泣いているようで私はそれ以上食い下がることは出来なかった。世界にとってブラックは闇の部分を負った業深きものなのだろう。

それからシゼはもうひとがんばりしてくれて、夕食を一緒に誘ったのにあっさり断られた。城に戻ってからもまとめておきたいことがあるらしい。

一瞬、戻ってからも仕事があるというシゼに申し訳ない気持ちになったが「単に、放置時間が必要だったものなので気にする必要ないです」とすっぱりと切り捨てられた。

仕方ないので簡単に食べられるだろうとサンドイッチを作ってバスケットに入れ帰りに持たせた。私の料理はいまいちだけれど、シゼの口には合うようで素直に感謝してもらった。

私はシゼを送り出してから戸締りをし、書斎にあった顧客名簿の控え カウンターの裏にあったものは綺麗に吹っ飛んでしまっただけになっていたので、を持って降り、パラパラと捲る。取り急ぎ渡しておいた薬がなくなりそうな人が居ないか気になっていた。

「……………ああ」

こつこつとペンの先っぽで用紙を突く。長期服用をしなくてはいけない薬が、ちゃんと服用してくれていれば、明日の夜には切れてしまう家があった。

シゼが今日用意してくれた中にはその薬はない。特別なものではないが、アレルギー系のもだからなくなると辛いだろう。

私は多く作ったサンドイッチで軽く夕食をとり明日届けてあげる薬を作ることにした。今から作れば、明日の夕暮れまでにはいつも届けている分量くらいは出来るだろう。

「まあ、ブラックも来ないしね」

正直一人暮らしにはあまり慣れていなかった。家は広いし、静かだし……。一人の食事も味気なく、簡単に済ませるか抜いてしまいがちだったりもする。一応そんなことを継続することへの危険性も分からないわけではないが、元の世界では家族に構われ、寮ではみんなに構われていた私としては想像以上に一人は重い。

はあと一つ溜息を零し、ちらりと左手の薬指に納まった指輪の深い煌きに口角を僅かに引き上げる。

頑張ると決めたのだから、頑張る。

うつんと頷いて、私は作業を開始した。

「マシロさん、マシロさん。こんなところで寝ていては風邪を引きますよ。一人暮らしたからといってだらしなさ過ぎますよ」

……うー、だらしないとは失礼だ。

「起きてください。マシロさん」

「駄目。起きる、無理」

私は何人だ？ という片言の単語を並べて片手を振った。うとうととし始めたころの記憶はある。朝日が昇ったところだった。

「あとのくらいで起きる予定ですか？」

かなり譲歩したと思えるその問い掛けに私は「一時間」と答えた。はあと呆れたような諦めたような溜息が聞こえたあとはもう五月蠅くされることがなくなつて、私は深い眠りに落ちた。

優しくて柔らかくて暖かくて、幸せな眠り。

いつまでもその心地に包まれて眠っていたい気持ちに絆され情眼を貪る。

貪る予定だった、の、に

……ジリリリリリリッ！

「ぎゃっ」

けたたましいベルの音に私は跳ね起きた。

目覚ましっ！ 目覚ましっ？！ 目覚ましどっ！

軽いパニックに落ちていつも同じ場所にあるはずの目覚まし時計を探す。

ぼちっ

「はー……」

ベッドサイドに置いてある目覚まし時計に腕を伸ばし、ようやく静かにさせると大きく息を吐き出した。

「ごし」と目を擦りつつ、目覚まし時計を握り締めると閉まっていたカーテンを開く。陽光が目痛い。昨日起きた時間とほぼ一緒だ。

ぼんやりと時計を元の位置に戻して、私は大きな欠伸を一つ。続けて背伸びを一つ。

「あれ？」

私なんでベッドに入ってるんだろう？ ブラックでも来たのかな？ ことんと手にした時計をサイドテーブルに戻して、ベッドの脇に揃えてあった靴を履き、ぼんやりしたまま階下へと向った。

「……ええ、そうですね。朝と夕で十分だと思いますよ。飲んでる間が、楽になるからといって服用回数を勝手に変えないで下さいね？」

一階に下りると聞きなれた声だけど妙に柔らかい話し口調が耳に入った。珍しくお客さんだったようだ。対応しているのはもちろんシゼだ。そういえば今日も同じくらいの時間に来るといつてくれたいた。

お客さんが出て行くのを見計らってから声を掛けた。

「店番ありがとう……それで、さ、私、ベッドで寝てた？」

シゼはカウンターの上で多分さっきのメモだと思うけど、それを取りながら「お客さん来るんですね」と失礼なことをいい顔を上げた。

「調剤室の作業台に突っ伏して眠っていましたよ。作業の邪魔になるので僕が連れてあげました。一時間と零していたので目覚ましも掛けておきました。おはようございます」

一息にそこまで告げてくれたシゼに「おはようございます」と返しても困惑が隠せない。

「は、運んだの？ シゼが、私を？」

「ええ」

「重いのに」

「そうですね。意識のない人間を運ぶということは容易ではないですが、一応僕も男なのでマシロさんを運ぶくらい雑作もないんですよ」

知らないかもしれないけど。と、少し拗ねたように加えたシゼに私は一瞬ぼかんとしたあと、我に返って一応「重くないっていつ

てくれるのが先だと思う」とぶーたれておいた。

「そういえば先程の方に渡したのもそうなのですが、価格表がみあたらなかったたので、とりあえず連絡先は控えておいたのであとで集金にいつてくださいね?」

「あー……そうだ、価格表も燃えちゃったんだ……あ、でも控えがあるから、あとで持って降りとくよ」

にこにここと告げた私にシゼは軽く眉を寄せる。

「もしかして、まだ僕に店番を頼むつもりですか?」

物凄く不機嫌そうだ。どうせお客さんなんて来ないのだから、ちよこつと気に掛けて置いてくれるだけで良いのに。喜んで引き受けてくれないにしても、嫌がられるとは思わなかった。

首を傾げた私にシゼは眉間の皺を濃くして、溜息。幸せ落としまくりだよシゼ。

「先程の方になんといわれたか聞いていなかったんですか?」

「ん? 聞いてないよ。もう帰るところだったし」

「夫婦経営になったのかっていわれたんですよ!!」

顔を真っ赤にして、ぷいっと顔を逸らさずかかと私の隣を追い越して奥の調剤室に向ったシゼに私は苦笑した。

「ごめんごめん。私が相手じゃ、そりゃ嫌だよね」

「……そういう意味ではなくて……」

おばさんというのは総じてそういうお話が大好きだ。どう見たっ

て私とシゼでは最悪姉弟ってところだと思っから、シゼはからかわれただけだと思っけど……それを真に受けて困惑しているシゼはちよっと可愛い。

「兎に角、出掛ける準備して私出るから、お昼までには戻るし、宜しくね？ 多分誰も来ないと思っけど、嫌なら、閉めといてくれたら良いから」

けらけらと笑いながらそう付け加えた私に、シゼは恨みがましい視線を向けた。王宮の、それも王子専属の薬師を顎で使うのは私くらいだろっ。

第十一話：白猫と私と黒猫（1）

私は昨夜、黙々と作った薬を紙袋にしっかりと準備して届けた。

今日も天気が良い。

いつものように道の脇にある水路を眺めつつ、次の目的地をシゼのメモを見ながら探す。名前から、ちよこちよこ来てくれているおばさんなのは分かったけれど、家まではいったことがなかった。

住所から家を辿るのはちょっと苦手だ。

私は街灯に掛かっている通りの名前を見て、道の角のプレートに焼き付けられている番地を一つ一つ確認する。多分、近づいているとは思っている。

「ご近所さんだと思ったのに配達先から探してるからちょっと分かり辛い。」

「お、あった……」

扉に掛かったプレートを見て頷く。

特に支払いが後になつたりしている家ではないから、集金自体直ぐに終了した。そのあとの、世間話というか……おしゃべりが少し長引いてしまったくらいで。

それらから解放される頃には、お昼の鐘が辺りに鳴り響く。お昼は何か買って帰ってあげよう。シゼにはかり頑張らせるわけにもいかないから、午後からは、私ももっと頑張ろう。

そう思って私は一人頷いた。

赤系のレンガで出来た建物の間に抜ける道を、のんびりと歩きながら店を目指す。

腕の中には食べ物系のお店が並ぶ通りで、ゲットしたお昼を抱えている。シゼのことだから、さっきの鐘も聞こえてないだろう。

没頭すると周りが見えないタイプだから。

でも、あの調子で頑張ってくれたら、明日からでもいつも以上に準備万端で店を開けられる。シルゼハイト様様だ。

私はふふつと笑いを零して、紙袋を抱え直すと少しだけ足の速度を上げた。

「……………おい」

わき道から声を掛けられたような気がして、私は足を止めきよろきよろと見回した。もともと人気のない道だけど、お昼時ということもありちらほらと歩いている人はいる。とはいっても、私のほうを見ている人は居ない。

……………気のせいかな？

首を傾げつつも、止めた足を一步踏み出せばまた声が掛かる。

もう一度足を止めれば細い路地から人影が現われた。

「っ……………」

暗いところから、出てきた姿に私は息を呑む。

見忘れるはずも見間違えるはずもない。無意識に首筋に触れ、抱えた紙袋を落としかけて抱き直す。

「何か、用？」

「そんな警戒する必要ないだろ」

いや、するだろ。するよね。

私の前に姿を現したのは白猫……ルカだ。

ちらほらと人が行きかうとはいえ、種屋候補生にそんな常識が通用するようには思えない気もする。大した理由もなく、訪問と同時に相手の首を絞めてしまうような人（猫）なのだから。

「警戒する必要ない。おれは今力をかなり制限されてる。屋敷を抜け出すので精一杯だ」

いわれて私はいぶかしみつつも観察する。

この暑くも寒くもない季節に、平静を装いつつも額に汗が滲んでいる。この間、目に付かなかった腕輪とかも見覚えがある。以前ブラックが、魔法石でハクアに作ったものに酷似している。

「大丈夫なの？」

反射的に出てしまった言葉に、ルカは目を細めて眉をひそめた。

「マリル様は殺されかけた相手にも慈悲を見せるのか？」

「そ、そういうわけじゃなくて……」

ただ純粹に辛そうに見えたから、そう訪ねただけなのだけ……それに、敵意がないといっている相手を警戒する必要もないような気もする。

言葉に詰まって黙した私にルカは、長く深く嘆息し、やや逡巡し

たのち私の方を見ることなく続けた。

「……何故、闇猫に告げなかった」

「告げたよ」

間髪いれずに答えた私にルカは驚いたように顔を上げて私を見た。

「レムミラスさんにも出来れば伏せて欲しいといわれたけれど、ブラックが我慢をすると約束してくれたから、だから私は話したよ」

ルカは私の言葉に信じられないというように困惑している。

「おれは生かされただけというわけか……」

「そんな風にいうのは良くないと思うけど」

素直に眉を寄せた私に、ルカは鼻で笑った。

「あんたに何が分かるんだ。おれの何が」

「分からないけどさ、何も。話す気があれば聞かし、用件が在るならそれも聞くよ。無理を押ししてまでどうして来たの？ 殺す気がないならなおさら」

自分で口にして、きゅつと心臓が痛む。あのときの苦しさと痛みが蘇ってくるような気がする。本当に死を直感する出来事なんて普通に生きれいれば早々ない。印象深くて当然だしトラウマになっても仕方ない。

そんなつもりはなくても私の表情は曇っただろう。それに釣られてかどうなのかは分からないが、ルカもどこか辛そうな表情を見せた。

「……あんた……いや、マシロに聞きたい」

ぎゅっと体の両側に下ろされていた腕に力が籠り、握っていた拳の節が白くなる。緊張しているのか、もしくは何かには構えているか……だ。

私も自然と緊張して息を呑んだ。

「美しいときとはなんだ？」

「え？」

「シル・メシア全てのものに与えられるという……白い月の少女が分け与えるという美しいときは、おれには与えられないものなのか？」

この世界に生まれ。この世界で育つたものなら当然の知識として、当然の望みとして、当然の希望として刷り込まれている”美しいとき“そんなものは事実存在などしない、と、思っているも、みんな信じずには居られない。

縋らずにはいられない。

この世界にとってそれはそういうものだと思う。

それは種屋候補生も例外ではないらしい。そして、その答えを私に、異世界から落ちてきたというだけの唯の人間でしかない私に、問われても……実は困る。

「……ごめん……。分からないよ」

それ以外私には答えようがない。重なるけれど、私は唯の人間なのだ。

特別でもないし凄い力を有しているわけでもない……

第十二話：白猫と私と黒猫（2）

「私は、ルカがいったように……非力な人間なんだよ。そんな私が……本当に白い月の少女だと、そう、思うの？」

ほんの少し非難めいてしまったかもしれない。そんなつもりはないけど、この問いに答える術を持たない自分が実は一番惨めで、一番嫌いなのだ。

ルカは私の答えを聞き、僅かに哀しそうな色を映す。

「青い月の少年は、物語の通り力を有している。なのに、どうしてマリルは、美しいときを持たないというんだ？」

「……ごめんね」

私の事情を知る、全ての人に掛けられる期待に応えられず、謝ることしか出来ない自分が辛い。謝罪を重ねた私にルカはそのあと直ぐ、くつくつと笑い始めた。

「別に構わない。おれに美しいときなんて、必要ない。馬鹿げている……」

顔では皮肉った笑みを浮かべ、言葉も吐き捨てているようなものなのに、とても哀しげに聞こえる。私の胸は、きりきりと痛み悲鳴を上げそうになる。目頭が、じんと熱を持ちじりじりと迫ってくる。

どうしよう、泣きそうだ……。

「良い香りですね、ランチはなんですか？」

くっと思いを呑み、なんとか涙を堪えた私に、聞き馴染んだ声が掛かる。それと同時に、ふわりと背後から抱き留められる。

私が、ほっと胸を撫で下ろしたのは対照的に、ルカは僅かに重心を下げ身構えた。

そんなルカに対してブラックはいつも通りの態度だ。

「初めまして、ルカ」

振り返らなくても分かる。

ブラックは好戦的な笑みを浮かべているだろう。私の前に廻ってきている指先は前に流れている髪を絡め取って遊んではいるが、きつと間違いではないと思う。

「今更、おれを殺しに出てきたわけ？」

「私は別に、自殺志願者の願いを叶えるほど優しくはないですし、弱いものをいたぶる趣味もありません」

反射的に私がいい過ぎだと眉をひそめたのを感じ取ったのだろう。ブラックは先手を取って言葉を重ねる。

「レムミラスには損害賠償請求をしておきましたので、今回の件はそれで終わりです」

その言葉に私は驚いて、顔だけブラックのほうへ捻るとブラックは「当然でしょう？」と微笑んだ。

「貴方がどう考えているかは分かりませんが、少なくとも、レムミ

ラスは安堵したように見えましたよ？ マシロの使いそうな言葉を借りるなら、何か方法があるはずです。貴方の望むようになるように……」

まあ、私は一緒に探す気になるほど、酔狂ではありませんが。と、締め括って肩を竦めたブラックに私は苦笑した。

非常にらしくない発言だと思う。

でも、ほんの少しだけでもブラックがルカのことを考えていることが分かるから私は嬉しかった。

「送りましょうか？ 財団まで」

そのまま黙ってしまったルカに、ブラックはそういったがルカは口角を引き上げて「冗談だろ？」と可愛くない口を叩く。でも辛そうな状態を隠しきれずは居ない。

「うちで休んでいく？」

思わずついて出た言葉に、背後からは呆れたような溜息が聞こえ、目の前の白猫は目にも明らかに肩を落とした。

「マシロ、そうやってなんでもかんでも、うちに引き込むようなことやめてください。白銀狼の一件で懲りたと思っていたのですけどね？」

う……にべもなくそう告げられる。ブラックがいうことも分からなくはない、分からなくはないのだけど。ほら、私は薬師だから、ね？ 辛そうな放って置けないしさ。

「用は済んだから帰る」

「え？」

私とブラックが、睨みあっている間にそう呟いて、ぎこちなく背を向けたルカを思わず呼び止めた。

「何？」

無愛想な声色に私は怯まない。というか無愛想なのはシゼで慣れている。

「用事、結局なんだったの？」

食い下がった私をルカは肩越しに睨みつけていたが、はあ……と溜息を落とすと「……もう良い」と首を振った。なんか失礼だな？

「二つ月の物語は、ただの童話に過ぎないことが分かった。十分だ」

そしてやや間を置いて、口端に微かな笑みを浮かべると

「あんたを殺さなくて良かったと、少しだけ思う……おれが、最初に手を掛けるのはあんただ」

びしりつとブラックを指差して明言する。

犯人はお前だっ！ じゃないんだから、人を指差してはいけません。いや、それどころかそんなこと宣言してはいけません。でも、ご指名を受けたブラックは「おや」と虚をつかれてはいるようだけど、特に気にしている風ではない。

「籠から抜け出す術を、もう少し上手に覚えたらいつでもどうぞ？ 手加減しますから」

にこりと余裕で口にしたブラックに、ルカは、かつ！ と頬を高潮させて踵を鳴らすと、その場を立ち去り裏路地に消えた。慌てて追いかけて路地を覗いたが、もう姿はない。

ブラックっ！ と挑発したことを咎めるように、睨みつけてもブラックはどこ吹く風。

「マシロを狙うことはもうしない。と、明言したようなものですか、良かったじゃないですか。私は一安心です。ああいうタイプはアルファと一緒に馬鹿正直なので、正面から来るでしょうし……私これでも手加減を覚えたんですよ？」

まるで褒めて、とでもいうようにそういつて微笑んだブラックに、私は嘆息し「帰ろう」と道を急いだ。

店のドアの前では、シゼが挙動不審気味にうろつろつしていた。時折、ポケットから懐中時計を取り出して時間を見て溜息を重ねている。

「マシロって罪作りですよね」

ぼつりと、零したブラックに私は首を傾げ、何かあったのかとシゼに駆け寄った……

第十三話：二つ月への招待状

その招待状は、珍しくうちの店にブラックが居座っているときに届いた。

「え？ 舞踏会？」

「はい。陛下より直接賜って参りました。どうぞお納めください」

深々と腰を折った執事 確か上級使用人？ とか聞いたけど私には上も下も分からないから纏めた から封筒を受け取ると二通あった。

一通はシル・マリル宛。 もう一通はルイン・イシル宛。

ようするに私とブラックへと宛てたものだ。

裏を返せば、いつもにも増して仰々しい蠟印が押されている。王様から直接、というのは本当らしい。

私は短く嘆息して、ブラックに一通渡しカウンターを覗き込むと、ペーパーナイフを取り上げ自分の分を開封する。

「どうぞお二方にはご参加いただくようにと陛下からのお言葉です」

一度上げた頭をもう一度下げた執事を、ちらと見て私はブラックを見た。

ブラックは椅子に座ったまま、ゆるりと組んだ足を組み直し招待状を眺めている。そんな風に招待状をちゃんと見ているなんて珍しいな、と思うと出した答えも珍しかった。

「良いですよ。マシロのドレス姿も楽しみですし、陛下には二つ月が昇るとお伝えください」

ぱたんつと招待状を畳んでにつこりと微笑んだ。

ブラックの言葉に「承りました」と、もう一度深々と頭を下げた執事は、きびきびと踵を返し店を出て行った。

それを見送って私はブラックを見ると、ブラックは封筒に戻した招待状をこともあろうか燃やした。慌てて声を掛けると「もう一通あるのですから問題ないでしょう?」と、につこり。

私は手元の招待状を見て、それはそうだけと……と零す。

「マシロは何色のドレスが良いですか?」

「私も本当に行くの?」

「え、私一人に行けというのですか? 寂しいです。踊るのは久しぶりでしょう? たまには顔を出さないとパートナーの足が心配です」

悪かったな。ダンスもいまいちで。

「こつこつ誘いはしよつちゆう来る。」

来るけど受けるのは、十回に一度か二度だ。殆どブラックが面倒のひと言で却下してくれるのに……。私は短く嘆息した。

「そう暗い顔をしないで下さい。私もたまにはマシロと踊りたいんですよ」

いって笑ったブラックに、なんだか私は素直に喜べないでいた。

翌日私は久しぶりにマフィンを焼いた。

私のお菓子作りの腕もそこそこ上達して、店に出せるとはいえな
いけれど、みんなが敬遠してしまうほど不味くはなくなったはずだ。

可愛らしく二つに分けてラッピングした。

一つはエミルたちに持って行ってあげると、もう一つはシゼの
研究室に持って行ってあげる分だ。こちらは少しだけ甘さが強い。
シゼの口に合わせてみた。

因みにブラックには、ダイニングテーブルの上に放置しておいた。
多分、先に来たとしても気がついて食べるだろうし、遅ければ一緒
に食べるし、気にするほどのことじゃない。

私は、それらを紙袋に入れて、早速王城へと向かった。

今日は休日。

お店もお休み　しなくても閑古鳥が鳴いてるので気にしなくて
良いけど　のんびりと大通りを歩いて行く。休日の大通りは、特
に何かあるわけでもなく、大道芸人とか普段はない屋台とかも出
ていて色々賑わう。だからふらふらと散策するだけでも楽しくな
ってくる。

こういう場所だから、自然とカップルも目に付くし、普通にデー
ト出来ないのはちょっとだけ残念だなと思う。

王宮の外門まで歩くと大体一時間くらい掛かる。

のんびりしているともっと掛かる。私の足が遅いからだとかナイ
にはいわれたけど普通だ。

王宮の門に辿り着くと、でっかい門の両脇に立っていた門番さんが、にこりと微笑んでくれる。もう顔見知りだ。そのお陰で直ぐに馬車の手配をしてくれる。王宮門から王城までも、これまた結構な距離があつたりするわけだ。

確かここから……正面フロアの奥には、でんつと階段があるのだけど、それを登ると、王城の中核というか、まあ、王様の謁見室とかそういうのがあるだけで……私には基本的に関係ない。

その両脇にある扉から奥に入れば、左側から通路に出たらエミルたちが居る棟に通じるし、右側から入れば研究棟とか管理棟とかに通じている。

「どちらまで？」

扉の前で番をしていた兵士に止められて、私はおどおどと「シルゼハイトさんに会いに……」と答える。

こんなところで止められるのは凄く珍しい。

新しい人なのかな？ と、顔を見るとやはり知らない人だった。

兵士はまじまじと私を頭の天辺から足の先まで見つめて眉をひそめる。

私の持っている身分証は、お店の許可証くらいだけど……それじゃあ、ここへ入るには不十分だろう。どうしようかなあと、困っているところ「姫っ！」と声を掛けられた。

兵士さんが慌てて敬礼をした先を振り返ると……これまた知らない人だ。というか、物凄く綺麗な人。あえていうなら、某塚系の麗人だ。

階上から声を掛けてくれたようで、その人物は足早に私のところまで駆け下りてきてくれた。

「白月の姫……いや、マシロと呼ばれるのがお好みかな？」

可愛らしく首を傾げられ、私は曖昧に頷く。

ここでは『白月の姫』と呼ばれることの方が多けれど、正直名前前で呼んでもらえるほうが良い。

「そうか！ エミルから噂は聞いている！ 直接お話する機会を得ることが出来て良かった」

ぎゅっと両手を取られて強く握られる。

驚きを隠せない私に目の前の麗人は、にっこりと私に微笑んだあと、後ろに居た兵士を睨む。

「白月の姫は、王城の細部に至るまでその入室の制限を受けることはない。周知のことだと思っていたが？ ここに立つ兵が知らぬとはどういうことだ」

凜と響き渡る声はとても素敵だ。

その言葉に兵士さんは、慌てて頭を垂れ謝罪する。別に私は怒ってないけど、麗人はお怒りのようだ。

「お前の上官は誰だ」

「あ、その……」

「お前の上官は誰だと聞いている。上官の名も忘れたのか？」

蛇に睨まれた蛙。そんな言葉が脳裏に過ぎる。私はやはり、こういうのは好きじゃない。

でも、口出しもしちゃいけないことも分かってるんだけど……兵士さんは一生懸命謝ってるし、彼のいい訳を聞いていると、いつもはもつと奥の警備を担当しているらしい。私はいくら許されても王城探索するほど冒険家じゃない。面識がなくて当然だ。今日は急に交代を命じられ、ここに立っただけのようだ。

「あ、あの。私気にしてないので、あまりことを大げさにすることとは……」

おずおずと口を挟むと麗人は、ぱつとこちらに視線を移し、微笑んだ。

「白月の姫はお噂に違いなく、お優しい。姫の慈悲に感謝しろ」

あっさりそう口にした麗人に、兵士さんは深々と頭を下げ「ありがとうございます！ キサキ様」と重ねた。

第十四話：三番目のお姫様

キサキ？ キサキと仰いますと 私の記憶が確かなら……第三王位継承順位の お姫様だ。社交界でも常に上段で華を添えている。私も何度か見かけたことはあったけどあまりにも高嶺の花？ というか、近寄れる雰囲気ではなくては話す機会には恵まれなかった。

「もしかして、気がつかなかった？」

明らかに面食らっていた私に、キサキ様はにこりと愛らしい笑みを浮かべる。ここでお姫様といえばメネルやアセアしか私は知らなかったけど、あの二人は神秘的な感じのする美人だ。

キサキ様はそういう感じではなく、華やかな美人系だ。

それに……キサキ様の格好は私の間違いでなければ上級武官の制服に似てる気がする。

「無理も無い。私は普段こんな感じだよ。社交界などの場ではどうしても父が私に女装をさせたがる」

「え！」

生物学上、間違いなくキサキ様は女性だ。益々目を丸くした私にキサキ様は声を上げて笑った。

「ごめん。いや、すまない。私は普段騎士塔や軍を管理していてね？ こっちの方が何かと都合が良いんだよ」

「え？ キサキ様が学長だったんですか？ 確か騎士塔の学長は腰

が弱い」高齢の方じゃ」

思わず口にした私にキサキ様は尚笑う。

「確かに、アレは面倒臭がりだから。私はそれもひっくるめて管理しているんだよ……それにしても『様』はないだろう？ アセアやメネルのことは呼び捨てているのだから、私も同じで構わない。もちろん、私もそうさせてもらう」

そういつとキサキさ……キサキはやんわりと微笑んだ。ああ、やっぱり姉妹なのだなと思う。その笑顔がメネルに少し似ていた。

「それで、マシロはこれからどこへ？ 時間が空いているなら私と一緒にお茶でもゆっくりどうかな？」

にっこりとそう告げられて、私はちらりと手にしていた紙袋を見てから「ごめんなさい」と首を振った。それとほぼ同時に声が掛かる。

「キサキ様。マシロさんは研究棟に用事があるんです。そのあとは恐らくエミル様たちに用があるのでしよう。お互い忙しいのではないですか？」

聞き覚えのある声に私は喜んで振り返った。

「シゼ！ 丁度今から貴方のところへ行こうと思ってたんだよ」

にっこりとそう口にした私に、シゼは大きく溜息を吐いて「そうでしょうね」と肩を竦める。

「連絡があつてから随分経つので……」
「心配してくれたんだ？」

思わずにやにやと聞き返した私にシゼは、ぼつと頬を染める。相変わらず可愛い。

「していません！……ただ、面倒ごとに……あー、いえ、僕も用事があつただけです」

シゼのいいわけに、私は笑いを堪えることもせずには嘖出すと、シゼはぷいっと来た道を戻り始めてしまった。その後姿に待って！と、声を掛けると少しだけ足並みが緩くなった気がする。

「……ごめんなさい。キサキ。お茶はまた今度ということ。あんまりシゼの臍を曲げると直すのに大変だから」

くすくすと笑いながらそう告げて手を振ると「あ、ああ」と頷いたキサキを確認して、開け放った扉の横に立っていた兵士さんにも「騒がしくしてごめんなさい」と謝ってから通り過ぎた。

「驚いたな……あのシゼが懐いているのか？」

私は背後からキサキの笑い声が聞こえて、少しだけ振り返ったけど理由は分からなかった。

そして、シゼとお茶をしたあと、本当は手伝いをしたかったのだけれど……私では力不足だということは分かりきっていたので、折角だからと、私の色々と知らないことを教えて貰ったりして夕方まで時間を潰した。

エミルの部屋に到着すると居たのはカナイだけだった。

「カナイだけ？」

「んー、ああ。お前が来るだろうからって俺は留守番」

窓辺の席に腰掛けて、本のページを捲っていたカナイにもう遅いよ？ と歩み寄ると忙しいんだと返事が返ってきた。

「そうなんだ？ ……カナイは暇そうだね」

「俺は宮仕えじゃないからな。基本的にエミルが王宮を出るときか以外は、ひ……暇なわけじゃなくて自由だ」

暇なんだねカナイ。いい直した時点で、そういつているようなもので悲しいよ？

私はカナイのお向かいに腰を降ろした。

タイミングを見てメイドさんがお茶を運んできてくれる。メイドさんが下がったのを見計らってカナイは本を閉じると「もうこんな時間なんだな」と外を見た。こいつ、人の話を聞いていない節なんとかならないのか？

「会議というか打ち合わせが長引いてるんだろっな」

「ふーん。何か大きなことがあるの？」

紅茶に少しだけお砂糖を入れて、かき混ぜていた私の手元をぼんやりと見ながら、カナイは少しだけ唸って「変わったことじゃない」

と口にした。

「舞踏会の前なんてこんなもんだろ」

「あー……舞踏会ね」

嫌なことを思い出した。思わず眉を寄せた私にカナイは訳知り顔で頷く。

「お前も参加なんだよな。精々パートナーの足元に気をつけてやれよ」

「五月蠅いな。私だって一通りは踊れるの！ カナイだって踊れないでしょ」

カナイがダンスフロアまで引つ張り出されているのは見たことない。アルファはあるけど。アルファはあの容姿からフロアに出るとかなり目立つから見逃さない。

悪態吐いた私にカナイは口角を意地悪そうに引き上げる。

「俺は踊らないだけ。なんだったら、練習台になってやるうか？」

いつて私の手を取るとぐいつと引いて立ち上がった。そして自然に開始姿勢をとるカナイに、私は慌てて首を振った。

「わ、分かった。分かったから！ からかってごめん」

カナイは私が振り解いた手をひらひらと振りながら「分かれば良い」と壁に背を預けた。なんかカナイって付き合い自体は結構長いけど、正直、スキンシップ率は一番低いから、ただのダンスの練習とはいえ、ちよっと緊張する。

第十五話：近くて遠い見えない距離

私はカナイから顔を逸らして、赤くなっているだろう頬をぺちぺちと叩いた。

「ていうか、そんなに恥ずかしがるなよ。こっちまで照れる」

「……べ！ 別にそんなつもり」

はないといたかったが、話の途中で扉が開いた。

エミルたちが戻ったのだらうと、扉のほうを見ると確かに部屋の主が直ぐに私を見つけて、にこりと微笑んでくれた。

お邪魔してます。と、笑い返そうとしたら声がつまり視界が真っ暗になる。

「マシロ！ お久しぶりですっ。会いたかったです」

「……苦しい」

「はい？」

「苦しいから離れるっていつてるのっ！！」

暴れると素直に離れたものの、私は少しだけ肩で息をしたあと深く長い息を吐く。無遠慮に抱きついて私を圧死させようという人物はこいつを置いて他には居ない。

「どうして、ブラックが居るの？」

会いたかったって、朝まで一緒だった。珍しく休日だというのに外せない用事があるって聞いていたのはコレだったのだろうか？

「議会中にマシロからの恋文が届いたので、放って置けないでしょう？ マシロにも会いたかったですし……」

「うわ、会議中だったんだ。ごめんね？ エミル」

正面で邪魔になるブラックを避けて、エミルに謝罪する。いつもの手紙で連絡しておいたから、会議中に紙飛行機が飛んできたのは拙かっただろう。

エミルは脱いだ上着をメイドさんに預けつつ「嬉しかったから、気にしないで良いよ」と微笑んだ。いつもながらのエミルの台詞に、ほわりと頬が熱くなり慌てて話を進めた。

「今日はね、マフィンを焼いたから……」

いいつつ椅子の上に置きっぱなしになっていた包みをメイドさんに預ける。

そんな大層なものではないけれど、恭しく受け取ってくれる。こういうのは慣れないけどここは王城だし、エミルは王子様だ。仕方ないことも多い。

「それで、マシロちゃんはカナイさんと何やってたんですか？ マシロちゃんの顔が赤かった気がしますが？」

ひょこりと現われたというか、元々一緒だったんだろっけど、アルファはそういつてテーブルの上に置いてあるお茶菓手に手をつける。

「気のせいだよ。ちよつとダンスの練習を……」

「それなら僕がやりますよ。絶対、他の人より上手く立ち回れると思いますよ」

口いっぱいになっていたお菓子を、ごくんっ！ と飲み込んだアルファはまだ口もつけていなかった私のお茶を喉に流し込んだ。ご馳走様、といったあとで、これ、マシロちゃんのものであってますよね？ と確認。その確認もどうなんだかという感じだが私はそうだよ、と頷いた。

「さ、始めましょう」

私の了承なんて必要ないのだろう。

アルファは、さつさと私の手を取って「カナイさん音、音！」と無茶振りをし、溜息を吐いたカナイが指をぱちんつと鳴らすと、どこからか柔らかな音楽が溢れてきた。

流石！ と、喜色を浮かべたアルファは、かつんつと軽く床を弾くとステップを始めてしまった。

練習といっても簡単なワルツだ。上手に誤魔化せば未経験でもなんとかなるものだ。とブラックにも教えてもらっていた。そして一番にぶつくさいいそんなブラックはというと、

「それは僕らに作ってもらったんだけど？」

「ケチですね。マシロが作ったんですから私にも食べる権利があります」

くだらないことでエミルといい合っていた。あの二人はいつまで経っても相容れない。それにしても……

「なんかちよつと踊りやすいかも」

ぼつと零した私にアルファは「でしょ？」と微笑む。

「アルファはチビだからだよ」

新しく入った紅茶に口をつけながらカナイが茶々を入れた。いわれてみれば、他の三人とは頭一個分以上は身長差があるけど、アルファとは十センチもないくらいだ。

アルファはカナイの声にむくれたが、私は何となく自分がダンスが上手くなったような気がして嬉しかった。だからそのままを伝えたら、アルファは、にこりとまだどこか幼さの残る笑顔を向けてくれたあと、急に私の肩にもたれ掛かって溜息を吐く。

「ちよっ！ と、慌てるよとアルファは直ぐにもう少し踊りましょー、と体勢を立て直す。」

「僕、今回は当日会場に顔を出せないんですよ」

「それは本当にお気の毒ですね。マシロのドレスは今回も素敵ですよ。夢見草をイメージしましたから」

「へー、マシロは可愛いから何着ても似合っけど、きっと綺麗だろうね？」

……がつっ

「痛っ！」

「ぐっぐっ、ごめん」

ブラックとエミルが、詰まらないことで意気投合させるから、足元がおろそかになった。思い切り踏みつけてしまったから、アルファは短く唸って動きを止めた。

ぐったりともたれ掛かってきたアルファに「大丈夫？」と重ねると「平気です」と口にしてくれるけど、殆ど抱き締められてしまっている状態になっている私は、わたわたと両腕の行き場をなくして焦った。

予想通り空気が凍り、ブラックがアルファの首根っこを掴まえた。簡単に引き離されたアルファは、ぶつくさいってたけど直ぐにマフィンの元へ駆けつける。アルファの口に合うお菓子はなかなか作れなくて、最近やつとまともに食べてもらえるようになった。ちよつと達成感。

「どうしたんですか？」

私の傍に戻っていたブラックは、私のがんびりティータイムに入っている三人をぼんやりと見ているのに気がついて顔を覗き込んでくる。

私は、なんでもないと軽く首を振ったけど、図書館ではとても近く感じていた三人の輪にもう私は居なくて、私とは別なんだなと思うと寂しく感じていた。

それと同時にアルファがブラックに首根っこ掴ませるとは……昔なら絶対に有り得なかった。絶対乱闘騒ぎになっていたし剣を抜かないなんてことはない。

少しは歩み寄っているのだろうか？

「マシロには私が居ますよ」

そつと私の髪を撫でてそついったブラックに、私は自然と微笑む。

第十六話：海は未知数

そのあと数日平穏な日々は続いた。そして平穏を破ったのはけたたましい訪問客の登場だ。

バン！

「ハニー元気にしてたかいっ?！」

壊れそうな勢いでウェルカムベルが鳴り、扉が軋む。いつもいつてるのに、どうしてももう少しまともな登場が出来ないのだろう。それから……

「ハニーと呼ぶのはやめなさい」

「はっはっは。可愛い仔猫ちゃん。今日も沢山お土産を持ってきたよ」

どんとカウンターの上に麻袋を載せられる。それと同時に、ふわりと潮の香りが漂ってくる。

「仔猫ちゃんもやめなさい。ロスタ」

あなたはそんなキャラじゃなかったはず。

私は出しかけた台詞をかるうじて飲み込んだ。

私が直接会って話したのは、マリル教会の一件がひと段落したあとで、ロスタが海に出る前の話だった。

海は一匹狼。孤高の人。っぽい雰囲気を漂わせたロスタを、百八十度変えてしまった。

硬派なロスタは海の藻屑になっただけで、海から時々ふらりと戻ってくるロスタはすっかり笑顔眩しい軟派な青年になっていた。

日に焼けた肌に、短く切られ無造作に立ち上げられた髪、広い海、広い空、煌く太陽を一身に浴び、キラキラしている。

人を近寄らせない雰囲気を持っていたのに、今は犬のように愛くるしく尻尾を振っている感じだ。

「はあ……海に出るまでのロスタが懐かしいよ。もっと落ち着いてもっと大人だったような気がする」

「マシロ、過去に縛られるもんじゃないぜ」

私の許可も得ることなく荷物を広げ始める。

流石に今回は海産物は入ってない。前に鮮魚などを入れていて、心の広い私でも怒った。

「大体、シゼなんて凄いいカルチャーショック受けてたよ……あれ、何かのトラウマとかになるんじゃないかな？」

「あいつ頭固いからな」。勉強ばかりしているとマシロもあなるぞ」

しなないとロスタみたいになるなら、私はやってシゼみたいになるほうが良いと密かに思う。

「ほら、上等品だろ？」

「買い取れっというんでしょう？」

「ごろごろと無造作に出てきたのは、各種珊瑚とか真珠の類だ。これらは薬の材料になるから、持ち込んでもらえるのは嬉しくないわけではないけれど……。強引さにちょっと困る。」

「こつちは、そうだけど。これは土産。キカルの特産品。香油だ。良い女つてのはこういうのにも気を配るんだろ？」

ひよいと取り出した、ガラス瓶を私の方へ押し付けた。

「ありがと……と、受け取ってまじまじと見つめる。細かな細工の施してある瓶はそれだけでも価値があると思える。」

もう一度ちゃんとお礼を重ねようと思って瓶から顔を上げると同時に、扉が開いて普段では有り得ない女性陣を招き入れた。

「ロスターお帰りなさい」

「待ちくたびれたわっ」

「今日は何かないのー？」

口々に彼女たちの口から発せられる言葉に、ロスタは振り返りにこりと微笑み「お待たせ仔猫ちゃんたち」と両手を広げてウェルカム。

「……だからお前誰だよ……。」

重ねるけど、変わるにも程があると思う。

はあと私が嘆息したところで、ロスタはちらりとこちらを振り返り、表借りるぜ。と、いってどやどや押し掛けていた女の子たちと共に外へ出た。

ロスタはどういうわけか、うちの店の前で露天を開く。名品珍品ずらり勢ぞろい！ って、感じて最初は面白いのだけど騒がしいこ

とこの上ない。

でも、毎日というわけでもなく不定期。そして滅多にないことでもあるから私も強くは断れない。だから仕方なく容認している。

私は暫らくロスタが持ち込んだ素材を整理して、なんとかカウンターの上が見えるように片付けた。

カウンターの隅っこにかけてある顧客名簿にも目を通す。今日の配達もないし、取りに来る予定の人も居ない。ロスタたちが迷惑掛けても最悪両隣に謝りに行けばすむだけだ。

そのことに安堵して私は真珠をランプに翳す。

「綺麗」

傷一つない一級品だ。

それなのにあんなぞんざいに扱うなんて酷いな。……まあ、私もこのあと真珠パウダーにするために削るけど。

そう思って苦笑したあと、仕舞いこむ。そして、ロスタへ支払うお金を袋に用意して、外の様子を見に出た。

外に出てみるとさっきよりは人数は減ってるような気がしないでもないけれど、ざっと見て七・八人が寄っている。そのうちの一人が私の姿に気がついて、ロスタが勝手に広げた商品から顔を挙げ折っていた腰を伸ばした。

「この間頂いた香水。もう作ってないの？」

突然そう問われて私は「え」と言葉に詰まってから、答える。

「香水は売ってないんです。あれは私が趣味で作ってただけだから

……もし気に入ったのなら、時間を見て作りますよ」

営業スマイル。といっても売るつもりはなく、サービスなのだけ
ど。

私の言葉に、声を掛けてくれた女性は「本当？是非お願いっ」と両手を顔の前で組んだ。可愛らしいお願いポーズだ。私はその様子に頷いた。

「……なんの騒ぎですか？」

女性の声に混じっても掻き消されることのない、聞き馴染んだ声に私は振り返る。そのときには既に私の隣に当然のように居たブラツクは不思議そうに人だかりを見ていた。

「ロスタがまた店を開いているだけだよ」

「ほう、彼の店は繁盛しますね？」

別に皮肉でも何でもなくただそう思ったただけだろう。私は特にそれに食いつくこともなく話を続ける。

「今日はどうしたの？ 明るいうちに来るなんてちょっと珍しいよね？」

「ええ、マシロに少しでも早くこれをお見せしたくて」

と答えてくれたブラツクは肩から大きな袋を掛けていた。見覚えのある感じの袋だ。ああ、確実に舞踏会用のドレスだろう。

「ですが、今は無理そうですね。中で待ってます」

「うん、ごめんね」

素直にそういつてくれたブラックに私も答えて、扉の前に立っていた位置をずらし、ブラックが中へ入れるようにした。ブラックは中へ入る前に私の頬に軽く口付けてから店の奥へと消えた。

もう、恥ずかしいな……と、思いつつブラックの触れた頬を押さえて嘆息すると、なんだか妙に静かになってしまったお客さんうちの客ではないが　たちが、声を上げた。

「ねえねえ、今の人誰？」

「貴方の恋人？」

「わたし王都に長く住んでいるけれど、あんな綺麗な方、見たことないわ」

彼女たちは、現在の種屋店主殿に面識がないらしい。

それはとても平和で幸せなときを過ごしている証拠だろう。

ブラックの職業を知らなければ、確かにブラックはとても魅力的な存在なはずだ。私なんかとはとてもつりあうことのないくらいに……。

私は曖昧に微笑んで「えっと、まあ……」と頷いた。そして再び黄色い声に包まれてしまった。

第十七話：軽いトラウマ

日が暮れる頃にはお客さんも商品もがらんとして、ロスタは片付けを始めた。私もそれを手伝うように広げられた敷物を畳みつつ、「本日も盛況なり、って感じだね」と笑う。

「ああ」

「そういえば、ロスタは剣はやめたの？」

「素養がないから遊び以下だ。と、ぼやいていたことを急に思い出した。」

「ロスタは銀貨と銅貨で重たくなった袋の口を開きつつ、「これ重いから両替してくんね？」といいながら私の問いに答える。」

「んー、諦める？ まさか、だからこうして金貯めてんだろ？」

「にやりと口角を引き上げてずっしりとした袋を持ち上げる。」

「…………種、買うつもりなんだ？」

「ま、生きてる間に間に合えば…………な」

「素養がなければいくら学んでも身につかない。」

「この世界で生きる人は、そういう風になっっているらしい。だから…………教えてもらったり、慣れたりとかで、何でも出来るようになる出来ることはかなり少なく薄いけれど、そして魔術系は私は普通の人だから無理だけど　私はとても不思議で異質な存在らしい。」

「そのせいもあってか、ブラックがなんでもかんでも教えたがるから、私はすっかり多趣味になった。」

「あんたはさ、もっと自信もって良いと思うぜ？」

畳み終わった敷物を抱えてぼんやりしていたら、腕の中から取り上げてロスタがにかつと笑う。そして、痛いくらいに人の肩を叩きながら続けた。

「なんでちょこつと突かれただけで暗い顔してんの？ 誰もあんたを卑下したりしないだろ。あんたは別に見劣りなんてしてねーよ」

「べ、別に私は何も」

「お、そういえば今日の荷には黒真珠がなかったな？ 今度持ってきてやるよ。それとも一緒に海に出るか？」

口の中でもごもごとした私をあっさり無視してロスタは話を続けた。

「ていうか、なんで急に黒真珠？」

「あんたと同じ色だからだよ」

ぼすつと人の頭に手を乗っけて、がしがしと撫でる 撫でられているのだと、多分、思う。かなり攻撃的だ。

「それ以上近寄るところから撃ち殺しますよ」

上から不吉な台詞が降ってきて、ロスタは私の頭から慌てて手をどける。

そして見上げた先では、二階の窓からブラックが面白くなさそうな顔を覗かせていた。

「貴方はさっさと花街にでもいって、もうひと稼ぎしてきたらどう

ですか？ 自力で種を手に入れるには人の一生は短いですよ」

ブラックは特に声を張っていたりはしていないし、普通に声を出しているだけだけど、とても聞き取りやすく良く聞こえる。

「…………ちつ。いけ好かない奴」

「聞こえてますよ」

当然耳も良い。

ロスタは一纏めにした荷物をよいしょ、と背負って「じゃ、またな」とあっさり暇を告げた。夕飯くらい一緒すれば良いのに両替も良いのかな？……って、ブラックとじゃ普通に嫌かな？ 私は引き止めることをやめて忘れず代金を支払うと「またね」と送り出した。

「マシロ。早く上がってください。マシロのドレス姿が見たいです。着てみてください」

「えー、今？」

「今です」

私は嬉しそうなブラックの声に、肩を竦め「はいはい」とやる気のない返事で店の扉をくぐった。

「みんなパーティの準備で忙しいんだね」

私は仕事用の大きなバッグを肩から掛けて、シゼと並んで歩いていた。今日はマリル教会 孤児院：陽だまりの園 の園児たち

の健康診断だ。

「僕だって忙しいのに……忙しいのに……」

シゼは私の話なんて聞いているのか聞いていないのか、さっぱりな感じでぶつぶつとうわ言を呟いている。私は開業してからは、定期的に陽だまりの園の子どもたちを見ている。ハクアの様子も気になるし、未だに王宮監視下にあるレニさんのことも気に掛かるからだ。

ブラックは正直良い顔をしないが止めることもしない。

「なんかね、急に翁が隠居するっていい出しちゃって……頼りに出来るお医者さんはシゼが真っ先に思いついたんだもん！ 仕方ないよね？」

頑張つてちょっとくらい可愛らしくにこりとそういった私を、シゼは暫らく見つめて、はあと溜息を重ねた。何？ その溜息っ！

「エミルさんからも頼まれましたし、良いんですけどね。別に」

良いのならそろそろ愚痴愚痴をやめてもらえると、私は嬉しいけど、仕方ないか。そんな私の心境を悟ったのかどうかは分からないが、シゼは「そういえば」と話を振ってきた。

「翁といえば、何かあったのですか？ ご健勝だと思っていたのですが……」

「体調を崩したとかそういうのじゃないみたいだよ。なんか、若いもんに任せるときが来たとか急にいい出したらしくて……」

レニさんが「翁の気まぐれには参ります」と本当に困ったように

零していたのを思い出して、私はふふつと笑いを零した。

「どうしたんですか？ 急に笑い出すなんて、またねじでも外れたんですか？」

また、ってどういう意味だ。

「そういえば、この間ロスタが戻ってたよ？ 王宮に顔……出さないよねえ？」

「出していたただかなくて結構です」

突然話題を変えた私に苦い顔をして、シゼはうんざりという風に答えたがどこか柔らかい。嫌っているわけではない、それが分かるから私もなんだか優しい気持ちになる。

「ナルシルのこと……宜しくね？」

「診てみないと分からないことです。それに翁が経過を観察するしかなかつたのなら、僕で何とか出来るなどという希望は持たないほうが良いです。僕はまだ医者として未熟ですから……」

ナルシルは、今の第一ターリ様の長女アセア姫の嫡男だといわれている。しかし、複雑な事情が絡み、今は陽だまりの園預かりとなっている。

アセアはもともと体が弱く、今は白銀狼の血液により精製される薬で、何とか命を繋いでいるような状態だ。その血をくしくも受け継いでしまったのがナルシルだ。

私もはつきりとは分からないけど、多分心臓疾患を持つてると思う。

ここでは身体にメスを入れるという概念がないから、外科手術を行うようなことはない。外傷などがあるものに関しての縫合などは、その限りではないけれど。基本的に、病気などの原因追及もあまりなく、大抵の場合は症状の緩和。痛みを緩めること……苦痛を和らげるといことがここでの病への取り組み方なのだ。

元の世界での僅かな医療知識　ニユースとかで新しい治療法や手術への挑戦などの番組等見たりして得た一般的なもの　が、余計にもどかしさを与える。

私が元の世界で医者であったなら、もっと確かな知識をここに植えつけられるのに……。

そうは思っても、実際の私は唯の薬師だ。だから他の人と同じように経過観察を行うしかない。

「マシロさんもぼーっとしてたら、ハクアの血液採取量を間違えますよ？　気をつけてくださいね」

いって微笑んだけど、多分冗談ではないだろう。私は、気をつけます。と頷いた。

第十八話：絢爛豪華な箱の中の舞踏会

前日は雨だった。雨期が近いせいで、珍しい話ではないけれど足元からひんやりとした冷気が立ち上る。寒い時期ではないけど雨の影響で地面が冷えているせいだ。

「こういつとき当日も大雨とかだったらどうするの？ 中止とかになるのかな？」

私は鏡の前で、嫌々ながらの舞踏会への準備のため、ブラックにチョーカーを留めてもらいながら素朴疑問を投げ掛けた。ブラックは手際よくかちりと止め具を止めたあと、柔らかく私の髪を梳かしながら答える。

「中止にはなりませんよ。特に今夜は……雨なんてことになれば、宮廷術師が総出で王宮を結界で囲みますね。まあ、心配しなくても過去、こういつ夜に雨が降ったことはありません。今夜も降らないと思いますよ」

「……ねえ、今夜って何か特別なの？」

私の髪をそつと巻き上げてくれているブラックに尋ねれば、ブラックは緩く微笑んで「変わりませんよ」と答え

「退屈なだけです」

と、露わになった私の首筋に唇を寄せた。くすぐったくて首を竦めれば、ふふつと笑いを零される。

「なら、参加するなんていわなければ良かったのに……」

どんなに素敵なおドレスを着る機会だといっても、私はああいった社交界に出ると自分が場違いだと痛感する。煌びやかな世界は私には不似合いだ。

はあ、と思わず吐いてしまった溜息にブラックは困ったように微笑んで、仕上げに優しいピンク色の櫛を挿した。ドレスとお揃いだ。

「良く似合っていますよ」

夜会のたびにドレスやアクセサリを新調するのはどうかと思う。でも、そうするのが普通らしく、私の家では仕舞いきれないからもう多くのドレスたちが種屋のクローゼットの中で眠っている。一庶民の私としてはとても勿体無く感じる。

「迎えが来ましたね」

馬の蹄が雨に濡れた地面を弾く音でも聞こえたのだろうか。

耳をそばだたせたブラックは、そっと私の手を取って立ち上がりせると「行きましょう」と促した。いつもながら無駄の一つもない所作。夜会用の正装も良く似合っている。

思わず見惚れてしまっていた私に、ブラックは苦笑して「マシロはいつも可愛いですね」と繋いだ手を持ち上げると指輪に口づける。

「そうだ、これも……今夜には地味ではないですか？ 他に用意したもので」

「嫌だ。これは外さないって決めてるの」

私の我俣にブラックは、どこか嬉しそうに瞳を細めると、その代わりのように「腕輪を忘れていましたね」と口にして、鏡台にある宝石箱の中からチョーカーとお揃いのものを取り出し、そっと腕に通した。

町の薬屋さんの前に、王宮の馬車が停まっているなんて早々ない。そのちぐはぐな様子に苦笑しながら私はブラックと一緒に王宮へと向った。

案内された広間は、夜だというのを忘れるくらい煌びやかで眩しく贅の限りを尽くしているようだ。少しゆっくりし過ぎていたのか、既に多くの人で賑わっていた。

私はそっとブラックの腕を取りエスコートしてもらうと会場に入った。ざわざわと騒がしかった室内が、一瞬にして静かになりその殆どの視線を奪ってしまう。

私はこの瞬間が一番嫌いだ。

でも、隣に立つブラックに恥をかかせてはいけないと気丈に振る舞い背筋を伸ばす。

さあっと潮が引くように、みんな上座までの道を開けてくれる。

向けられる視線は実のところ様々だ。

上流階級の人たちの間では、あまりにもブラックの存在は有名だし、そんな傍に居たり、現在一番王に近いと囁かれるエミルの傍にいる私もここでは有名で、噂のネタも尽きない。

そんな有名なのに豪邸を構えることもなく、町で薬屋なんてしているんだから、この人たちにどう揶揄されていても仕方ない。私たちが前に進むと、出入り口付近からまた先程と同じような喧騒が戻ってくる。

やっと他の人たちからの奇異の目から抜け出したと、ほっと胸を撫で下ろしたところで、高らかにラッパが鳴り響きジルライン陛下を筆頭に王家筋の人たちが顔を出す。もちろん、現在筆頭であるハスミ様……エミルやキサキも一緒だし、その傍にカナイの姿も確認できる。

小さく手を振るとカナイは気がついたようで僅かに口元を緩めた。

陛下の挨拶のあと、控えていたオーケストラが演奏を始め、自然な形でダンスタイムに持ち込まれた。今回は舞踏会ということだし、深夜を過ぎてもこの演奏は止むことはなく延々と続けられる。

その間、挨拶回りをし、歓談を行い……ダンスを踊る。

みんなそれぞれにこれを飽きもせずに繰り返すのだ。疲れれば、こつこつ日は迎賓棟が開放されているのでそこで休んだり、もちろん泊まって帰るのも問題ないと聞いた。私は落ち着かないから必ず帰るけど

「なんか、今日は妙に王家の人たち……人数が少くない？」

ターリ様方は基本的に全員出席のはずだけれど　もちろんエミルのお母さんは出てくることはない　王妃様の姿すら見えない。私の知る限り皆さん、この手の会が好きな人たちなんだけど、な…。

「踊りましょう」

私の零した疑問は音楽に掻き消されてしまっていたのか、ブラックは、くんと私の手を引いてフロアに出た。

「足元、見なくて良いですよ、私を見ていてくだされば息を合わせられます。大丈夫、私となら出来るでしょう?」

大丈夫です、と重ねてブラックは私の手と腰を自然に取る。拘束感は全くないけれど、安定感と安心感がある。ブラックが大丈夫だといえば、基本なんでも大丈夫だった。

「そうだね」

やっと頬が緩んでそう答えると、ブラックはにっこりと微笑んで、自然に足を踏み出した。息が合うか合わないか、という話なら合わないわけではない。

うん……上手にターンも出来た。

「……ブラック、悪目立ちしてない?」
「マシロが綺麗だから目を引いて当然です。あと、一曲だけ付き合ってください」

慣れてくれば周りも見えるようになり、人の目が気になって問い掛けた私にブラックはあっさりと返す。それをいうならブラックだと思っけれど、本人は間違いなく本気でそう思っているのだろうか、あえてそこに突っ込むのは止めにした。

無駄だから。

……それよりも

「あと一曲？」

「ええ……次の曲が終わったら輪を外れましょう」

少し意外だった。

今は踊り始めてから二曲目の終盤辺りだと思っただけど、私が根を上げるより早く引き際を決めてくれるとは思わなかった。

「すみません……今夜は最後まで一緒に出来ないんです」

「……そ……か……」

ブラックがそういっただけで、直ぐに察しがついた。

“仕事”が入っているのだろう。

しかも、裏の……。

私は微かに痛んだ胸の痛みに気がつかなかったフリをして、改めて「分かった」と頷いた。

そのあとは、ブラックがタイミングよくダンスの輪を抜けてくれるまで、何を思っていたのか良く覚えていない。そんな私を責めるでもなく、ブラックは「少し外の風を吸いましょう」とバルコニーまで連れて出てくれる。

第十九話：大広間を抜け出して

こつつと石のバルコニーに出れば、本当ならヒールは水を弾くはずだった。昨夜はかなり降ったのだ。丸一日くらいで乾ききるとは思えない。

でも足元は全く濡れていなかった。

こんなところに王城の人の頑張りが窺えてちよつと微笑ましくなった。

普段、あまり動かないから直ぐに暖かくなつた身体を夜風が心地良く冷やしてくれる。

「ああ……飲み物でも持つて出れば良かったですね……」

すっかり忘れていた、という風に口にしたブラックに苦笑する。いつでも私を一番に考えてくれるブラックにしては珍しいっかりだけれど、別に喉がからっからというわけじゃないから問題ない。

居るだけで悪目立ちする私たちは、そつと人目を避けるように端へと身を寄せた。

「フロアへ戻つたら、エミルたちがマシ口を見つけてくださいますから……正直、あまり頼りたくはないですが……仕方ないです」

はあと本当に嫌なのだろう、吐いた溜息が妙にリアルで笑ってしまった。

「分かった。でも、エミルは忙しいんじゃない……」

「そうですね、ですが。それでもマシ口の傍には顔見知り置いてくれると思います……カナイとか……ですから妙な気を遣って、決して一人にはならないで下さいね」

一人になるなという部分を強調したブラックにほんの少し萎縮して私は頷く。ブラックはそっと私の頬を撫でて、本当をお願いしますね？ と重ねる。いつも以上に慎重な気がする。

私は、一人にはならないよ。と、繰り返して頷くとブラックはそっと私の顎に手を掛けて軽く上向かせると唇を塞いだ。

「ブ、ブラック！ 人に見られるから」

「見えない位置ですから平気です」

ブラックのいい方だと、見られても平気だといっているように聞こえるのは気のせいだろうか？

「……………つう、ちょ」

繰り返されていた浅い口付けが、ぐいっと腰を引く腕の力と共に深くなつて私は僅かに抵抗した。でもそれは許されず、より深くというように口内に侵入してくる。

私の好きな角度も深さも熟知しているブラックを相手に、そう長く正常な思考が続くわけもなく、私は吞まれるように口付けに応えた。

「っ……………も、ダメ……………」

息苦しいのと、もっと欲しいと思う気持ちとで限界になり、私はブラックの首に絡めていた腕を解いて、胸を押した。

名残惜しげに、頬と唇に軽い口付けが落ちてようやくやく離れてくれ

る。私はきつと茹蛸よりも赤くなっているだろうし、瞳だつて潤んでしまっているに違いない、鏡を見なくても分かる。きつと恍惚とした表情をしているはずだ。

でも、ブラックは特に息を上げることもなく、私の目には殆ど変わりなく見える。正直いえば負けた気分だ。

「すみません、暫らくフロアに戻せなくしてしまいましたね」

「……ホントだよ、もう」

頬を膨らませたところで何か効果があるとは思えない。思えないけど、少しくらい不貞腐れたって良いと思う。

「ですが、もう少し一緒に居られるいい訳が出来たので、私は嬉しいです。今夜はもうこの場を一度離れたら、こうして抱き締められないので……」

「……」

そういつてほんの少しだけ憂いを見せたブラックに、私はなんと声を掛けて良いか分からなくて……黙ってまたブラックとの距離をつめると胸に頬を寄せた。もう殆ど条件反射のように、傍に寄ればそつと抱き寄せてもらえる。

そんな距離が私自身とても心地良い。

「マシロ……」

「ん？」

肩口に頬を寄せると直接ブラックの熱が肩から伝わってくる。

「愛しています」

「うん」

私だって愛してる。
好きだ。

ブラックの代わりなんて誰にも出来ないよ、馬鹿みたいに本気で思ってる。

「どうか……嫌わないで下さい……」

「……え？」

それなのに、重ねられた台詞に私は驚いてブラックのほうへ首を捻ったけれど、その表情は見えなかった。

「……もう、大丈夫でしょうか？ 顔を、見せてください」

いつて顔を上げたときには特に変わった様子はない。きっと私の方が不安そうな顔をしていることだろう。それを慰めるように、ブラックは笑みを浮かべて「口紅も落ちてしまいましたね？」と冗談めかして口にしてもう一度私の顎を取る。

そして、すつとどこからか出した、リップをそつと引いてくれる。

「綺麗ですよ。マシロの肌にはアプリコットが映えますね？」

「……ありがとう」

なんだか胸が苦しくて、直ぐに言葉が浮かんでこなかった。わけの分からない不安が私の心を暗くする。どくんどくんと鈍く低く打ち付ける自分の心音が重たい。

「マシロ、一人にならないで下さいね。それから帰りは誰かに送らせてください。もしも王城に泊まるようでしたら明日迎えに来ますから、待っていてください」

子どもにいい聞かせるように、もう何度目かになる注意事項を繰り返したブラックは、頷いた私の手を取って、その手のひらに頬を摺り寄せ「では、私は行きます」と眉間に少し皺を寄せて微笑んだ。するりと滑らかなブラックの頬を滑り降りる指先が、完全に離れてしまう瞬間、私は反射的にブラックを引き寄せ、ぐっと背伸びをして口付けた。

そして強く抱きついて重なる。

「愛してるよ。私も！……嫌いになんて、ならない、なれないから……」

でも、もしもこれからやろうとしていることが辛いのなら、行かないで……そう続けそうになるのを、私は必死で堪えた。

ブラックは好きで種屋をしているわけじゃない。
そしてその業を背負ってしまった時点で辞めるわけには行かない。

「はい……私はマシロだけを信じて、愛しています」

そう告げたブラックは、とんとと地面を蹴って私の腕からするりと抜けて消えてしまった。

私は暫らく誰も居なくなつたその先を見つめていたが「一人にならないで下さい」と執拗に念を押ししたブラックの言葉を思い出して、素直にフロアに戻ることにした。

第二十話：しゃるういだんす

出たときと同じように音楽とお喋りがフロアには溢れていたが、正直私はもう帰りたかった。

「マシロ、良かった。見付からないかと思ったよ」

そして忙しいはずのエミルが、私を探し当てて歩み寄ってくれた。もう大分場も和んだのか挨拶のみは終わっているようだ。

「一曲踊ろう?」

帰りたいとお願いする前に、そう誘われて「一曲だけ」と重ねて願われては私も断れなかった。「じゃあ、一曲だけ」と、差し出された手をそっと受け取り私はもう一度中央に戻った。

最初の一步でちょっと踏んでしまったけれど、あとは自然に踊れていると思う。

「でも、珍しいね? エミルが踊ろうなんて」

「……え、あ……ああ、うん。最初に踊るのはマシロが良いなと思うってたから……つき合わせてごめんね」

先程まで種屋店主と踊っていたパートナーが、次は今一番の有望株であるエミリオ王子と踊っているのだ、周りの目が若干気になる……いや、寧ろ痛い。でも、エミルにそんな風について貰えるのは嬉しいことなのだ、そう、思う。

「今夜は引く手数多だね」

ふふつと冗談めかして口にすれば、エミルも同じように笑って「それはマシロのほうだと思うよ」と返してくれる。私はこれで今夜は踊り納め。このあと、馬車の用意だけでも頼もうと思っただらエミルの方が先に口を開いた。

「このあと、僕は多分暫らくはフロアに掴ると思うんだ……マシロのことはシゼに頼んであるから」
「シゼに？」

物凄い意外だった。アルファやカナイのように護衛も兼ねているメンバーがここに居ることは多いけれど、シゼのように裏方側の人が出てくることは稀だ。

「今日は外の警備にアルファをとられてしまっているから、人手不足なんだよ。人は多いけれど、僕の腹心以外はマシロの傍に寄せたくないからね」

……特に今夜は……と、続けたエミルはどこか遠くを見ているようだった。

ブラックといいエミルといい今夜は少しだけ、ほんの些細なことだろうとは思っけれど違っている。そのことにきつと本人もあまり気がついていないと思う。でも、私は見逃せない。それなのに追求することも憚はばれる。それが、とてももどかしい……。

そうこうしているうちに約束の一曲は終わってしまう。次の曲に入る前にエミルはそつと手を引いて輪を一旦外れた。

「マシロ……」

もう、いつてしまうのだろうと思つたら、私の名を呼んだままじつと見つめられてしまった。室内の光に反射して、若草色の瞳はエメラルドグリーンにも見える。その瞳に映る私はとても不思議そうな、間の抜けた顔をしてしまっているように思う。

辺りの喧騒も音楽も耳に入らない、というように見つめられて、私は少し困ってしまう。

それによろやく気がついたのか、エミルは、はたと我に返り「う、ごめん」と僅かに頬を上気させて謝罪した。

「綺麗だなと、思つて」

にこりと直ぐにいつもの調子に戻つてそう告げたエミルに「ありがとう」と応える。その程度は社交辞令の範囲だろう。この世界は美しく色鮮やかなものばかりだ。暮らす人たちが特にそうだ。私はカナイ以上に地味だ。

「ねえ、エミル。もし、何か困つたことがあるなら……」

「大丈夫」

「え？」

「大丈夫だよ……心配しないで……僕を甘やかさなくて良いから……」

そういつて愁いを帯びた笑みを浮かべたエミルに、私は首を傾げる。

私がエミルを甘やかせたことなんて、これまで一度もないと思うのに……変なの？ 問い返そうと思つたら「エミル様」と声が掛かった。エミルが振り返ればその先にはシゼが居て、その後ろには意外にもメネルが立っていた。メネルはエミルの異母妹でアセアの双子の姉だ。

「メネルっ！」

「マシロ、久しぶり」

メネルは、その日身に纏っていた董色のドレスがとても良く似合っていた。光を紡いだように白に金を溶かしたような髪が室内の照明に反射してメネル自身が淡く輝いているようだ。

実際本当にそうなのだけど、童話の中のお姫様といえどこんな感じだ。シゼにしても、上流階級なんていわれる人たちと並べても全く引けを取らないと思うくらい素敵だ。

「お互い珍しいわね？」

にこりと悪戯っぽい笑みを浮かべたメネルの台詞に私も微笑む。

「私は今夜星の行く末を見守りに来たのよ」

メネルは大聖堂で星詠みを学んでいる学生だ。

だから時折メネルの意味深な台詞は、真理をついているのだと思うけど、常人の私には理解不能だ。だから首を傾げてしまったのだが、メネルはそれ以上そのことについて語るつもりはないのだろう。

「マシロの手を取りたいところだけど、女同士では踊り辛いわよね」

いって肩を竦めたメネルは、仕方ないという風に「お兄様、お借りしても宜しいかしら？」と付け足した。私はメネルの冗談にくすくすと笑いを零して頷く。

「うん。私はもちろん」

ちらりと隣を仰げば、エミルはやっぱりと私に微笑んでから「じ

「やあ、失礼して」とメネルの手を取った。立ち去り際に、マシロを頼んだよ、とシゼに念を押す。私はそんなにうるうるしたりしないし、王城はそこそこ来ているから迷子にもならないというのに。みんなとても心配性だ。頼まれたシゼは神妙に頷いていた。

「何か飲む？ それとも踊る？」

二人の姿が見えなくなってから私はシゼに問い掛ける。もちろん、あとの選択肢は冗談だ。それなのに、

「マシロさんが踊り足りないというのなら、お相手します。貴方を退屈させないように、ということですから……」

……私はどこかの子どもか、我侭姫のどちらかだと思われるているのだろうか？

「シゼも踊れるんだ？」

ちよつと意外。

そう思ったのを隠しきれて居なかったのだろう。シゼは短く溜息を落として「一応」と頷く。

「王宮に入るときに、簡単には身につけません。ですが、はつきりいわせていただければ、好きではありませんし、得手ではありません。ご配慮ください」

はつきり踊りたくないっていえば良いのに。苦笑した私にシゼは少し困ったような顔をしたけれどあまり苛めるのは可哀想だ。私だってダンスは苦手だしね。

「じゃあ、もし、大丈夫なら外に出ない？」
「外？ バルコニーまでなら……」

うん。それで良いよ。と、早々に決定して私はシゼの腕を取った。そして、さつき入ってきたばかりのところで、一度立ち止まったシゼは、給仕の人からシャンパングラスを二つ受け取って、一つ私に渡してくれる。

小さな気泡がふわふわと上がって綺麗だ。

「はい、シゼかんぱーい」

殆ど無理矢理、ちんつとグラスの端っこを軽く合わせる。ちよこつと口をつけると冷たくて甘い。飲み口が柔らかい感じだ。

「なんか今日さ、エミルも、ブラックも……少し変だよな」

「……そう、ですか？ 僕には同じに見えます。いつもと変わらない……同じですよ」

同じです。と、重ねたシゼにまで違和感を覚える。それ以上同じ質問をされないようにか、シゼはグラスをくいつと傾けた。

バルコニーの柵に背を預けて煌びやかな室内を見やる。キラキラと光が反射して私の日常からいえば、全くの別世界だ。

だから余計にこの場所に自分が不似合いな気がする。

ふうと嘆息して会場に背を向けると、今日も変わらずそこにある二つ月を見上げる。

「月のようですね」

「え？」

ぼつっとそう零したシゼを見たけれど、シゼも月を仰いでいて目

が合うようなことはなかった。

月を見上げるシゼの瞳はどこか感慨深げに細められていた。

「……………マシロさんのことです」

「えっと？」

らしくない台詞に、私は言葉を詰まらせた。シゼはそんな私に気づく素振りもなく続ける。

「必ずそこにあるのに、決して手が届かない。だから、みんなこうして見上げているしかない……………」

それは、どういう……………と、問い返そうとしたところで「こんな所に居たんですね？」と、声が掛かった。

第二十一話：秘密の優しさ（1）

シゼは歩み寄ってきた麗人に対して、不思議そうに首を傾げ「珍しいですね？」と口にする。

私は誰か分からなくて、シゼから半歩後ろくらいでその人を見てみると、私にもこりと微笑んでくれた。とても綺麗な人だ。礼装から男性だと分かるけど、中世的で、ドレスだって似合いそうだ。大柄だけだ。

「……………」

何も口にしない私に、シゼも相手も不思議に思ったのか、麗人は「ああ」と思い出したように口にして、ポケットを探り、目的のものを手にそつとその顔に宛がった。

「あ、ラウ先生」

「……………うわぁ……………マシロ。本当に私だと気がつかなかったんですか？ 軽くショックです。私の判断基準は片眼鏡？」

がつくりと落胆したあと、子どものように不貞腐れるラウ先生から隠れるようにシゼは口元を覆って肩を揺らした。ツボに入ったらしい。

「い、いえ、すみません。なんか私ここの雰囲気当てられてて、少しぼうつとして……………」

「良いですよー、別に。私は直ぐにマシロだと分かりましたよ。お人形さんのように可愛らしいから」

にっこりと微笑まれても、どういっわけか素直に喜べない。この

人の場合、なんというか……とってつけたような。という感じがピツタリなのだ。

「そうそう、シゼ。研究棟で騒ぎが起こっていましたよ？ 何か増殖させていませんでしたか？ わさわさ溢れてきてると……」
「え！」

一瞬にして、シゼの顔色が変わった。即思い当たることがあったのだろう。

一歩踏み出しかけて思い留まる。そして私を見て、刹那瞳を閉じると深呼吸。

「あとで処理します」

と続けた。ラウ先生はそんなシゼにくすくすと笑う。

「気になって仕方ないのなら、見てきて構いませんよ？ 私がマシ口の傍についてますから」

「……………ですが」
「問題でも？ 大丈夫、お姫様一人のお相手くらいなら私でも出来ます」

少し強引にも感じたが、シゼは私とラウ先生の間で視線を泳がせている。迷っているのだろう。

「良いよ。私は待ってるから、見てきなよ……あ、そうだ。その帰りに馬車も手配してくれると嬉しい。みんなには悪いけど、先に帰るよ」

そういった私にシゼはまだ迷っているようだったが、ややして「

ではお願いします」と踵を返し足早に広間を出て行った。その後姿を見送ってからラウ先生は改めて私に向き合い微笑む。

「場所を変えましょうか？」

「え、でも」

「人気に当てられた顔をしていますよ？　ここはとても騒がしい……それに、踵、少し辛そうに見えたのですが？」

……む。

庇っていた痛みを見抜かれて、ちよっぴり気後れする。誰にも気がつかれなくて良かったと思っていたのに。

「シゼが探しに来る前に戻れば問題ないですよ」

そういつて手を差し出され、何となく断れなくて私はその手を取り、距離をつめるとラウ先生の腕を取った。

「おや、東屋までと思ったのに、庭までは手が届いていないのですね？」

庭に出て靴が水を弾くとラウ先生は足を止めた。仕方ないから引き返そうとかいうのかと思ったら、私の方を見たラウ先生は「失礼しますね」と微笑んで、ひょいと屈んで私を抱き上げてしまった。

「ひっ！」

「ひいとは酷い。女性一人を抱えることくらい雑作もないことです

よ？ 大体、ここから見える場所なのだから引き返さなくても良いでしょ」

そのままスタスタと庭を突っ切ってしまふ。

私は濡れないけど、ラウ先生には足元がよろしくないとと思うのに……。私も歩くといいたかったけれど、そう口にするより早くポーチに到着してしまった。

ラウ先生は数段の階段を上がると石のベンチにそっと座らせてくれる。短くお礼をいって一休み。正直会場内の熱気の中にずっと居られるほど私は人ごみに慣れてない。大きく深呼吸して胸を撫で下ろす。

夜の少しだけ冷たい空気を吸い込むと、気分が安らいだ。

「気分良くなつたようですね？」

「え、あ……はい。すみません」

私はそんなに居心地悪そうにしていたのだろうか？

「足は大丈夫ですか？ ついでですから、見ましようか？」

そういつてくれたラウ先生に私は慌てて「大丈夫ですっ！」と声を張り上げた。ラウ先生は「そう？」と首を傾げる。

「あ、あの、私一応薬師なので……戻ったら自分でやります」

「ごによごによと口にしたら、ラウ先生は「そうでした」と微笑んだ。月明かりのみの中でもラウ先生の周りにはほんの少し光源が増えているような気がする。

ラウ先生は私の隣に腰掛けた。

そして、どこから出したのかひよいと私の前にお皿を出して「お一つどうぞ」といいながら自分は一つ取り上げて、先にはくりと食べてしまった。四角くて小さなお菓子。カカオの香りがするからチョコレートだと思う。甘いものは嫌いですか？ と、重ねられ、私は一つ貰った。

「美味しい」

予想通りのチョコレート甘さが口内にふんわりと広がり素直に感想が漏れる。中にはアーモンドが何か入っているようだ。

「そうですか？ 気に入ったのならもうひとつどうぞ？」

いわれるままに私は手を伸ばして口に含んだ。その様子にラウ先生はやりわりと微笑んで話を続けた。

「それにしても今夜は珍しいものが沢山見られましたね？」

「え？」

「エミルは踊っていましたし、シゼまで出てましたしねえ……種屋は仕事に勤しんでいるようですし」

何か知っている。そういつているようだ。私は何も知らない。聞くべきなのだろうか？ 私が遅疑逡巡している間にラウ先生は話を進める。

「近日中に、ジルライン陛下は退任される」

「え？」

「おや、ご存じないですか？ エミルは勿論承知していますし、青い月も知っているとしますよ？ 白い月のみ蚊帳の外ですね」

なんだか意地悪な物言いだ。私は混乱しつつも私が関与すべき事柄ではないということに頷く。

「私は……」

「お姫様は護らなくてははいけませんからね？ だからこそ、エミルも格好の悪いところを見られたくなかったのでしょうか」

私は良く分からなくて今度は素直に問い返した。

「エミルには異母兄弟は多いですが、特に歳の近い異母妹であるアセアとメネルの双子を愛していた。辛いと思いますよ」

アセアの病状でも悪くなったのだろうか？ この間薬を届けさせて貰ったときには、急にどうこうという様子はなかったのに……。

「エミルは選んだんですよ。そして、アセアではなく繋がるものを護った。上に立つものは辛いですね、何かを常に切り捨てなくてはならない、そして孤独でなくてはならない。本当に彼を理解出来るものはいない……」

「どういう、意味、ですか？」

何も聞いていない私は混乱するしかない。知って良いことかどうかも戸惑われる。でも、ラウ先生は今。お父さんであるジルライン陛下の執政官の補佐についているという話を聞いた。だから、王宮内のことに明るい。

「マシロは、本当に知らないんですね？ 今夜の闇猫の動向をご存じない」

私は、きゅっと下唇を噛み締めた。きりきりと胸が痛む。

第二十二話：秘密の優しさ（2）

「王が退位するということは、次の王様が決まるわけです。まあ、そちらはもう少し先になりますが……。しかし、王が退位を決定したあと、この世界では必ず行われることがある。それが今夜実行される」

ラウ先生はどこか楽しそうに淡々と話を進める。私は口を挟む暇も挟む理由も見つけられずただ聞いているだけだ。

「線が引かれる。王家の素養を持つものは全て消えます。王家の素養は生あるものみに許される。今夜みんな居なくなります」

告げられた内容の衝撃に私は思わず立ち上がった。ぐらりと刹那、眩暈に襲われて柱に片手を着く。

……。どうか、嫌わないで下さい。

そういったブラックの台詞が脳裏に蘇る。

目の奥がじんつと熱を持ち、視界が緩む……。

気持ちが悪い。

なんだか酷い吐き気がする……。

「そう驚くことでは有りませんよ。とても長い間続けられてきたことですから、特別というわけではないのです。王家の素養は重要ですが、線を引いてしまえばそれ以下のものは不要になるのです。そして内に秘めた種は邪魔になる。国を治めるものにとって氾濫分子となるものは少しでも少ないほうが良い」

「そうでしょうか？ と重ねられても私は、そうですねと答えることは出来ない。」

「この世界は命が軽い。」

「いつ誰がどんな形で殺されるかなんて分からない……でも、まさか……こんな形で……。」

「でも、そんなの……、みんな、それに、エミルが選んだって」

「自分でも何をいつているのが良く分からない。そんな私の様子にラウ先生は、可哀想な子を見るように、慈悲を含んだような笑みを浮かべ頷いた。」

「以前から陛下の退位の話は始めていました。ですが時期として少し早いです。マシロはナルシルのことを知っていますか？」

「私はなんとか頷いた。酷い頭痛がしてきた……吐き気も増してくる。」

「王妃はアセアが死ねば、その種をその子ナルシルに飲ませる腹づもりだと思われます。しかしながら、その程度では今更、上位継承順位に食い込むことは出来ない。結果的に、妹も、甥も失うことになってしまう。だから、エミルはこの時期を陛下に進言し、陛下はそれを承諾した」

「じゃあ、エミルは今夜……ブラックがアセアを消してしまうことを知っている。知っていて……」

「僕を甘やかさないで」

そういったエミルの言葉を思い出した。ああ、エミルはとも思い詰めた顔をしていた、だから私……気づいていたのにやり過ぎでした。私は馬鹿だ。

「もちろん。彼らに協力し彼らを護ろうとするものも出てくるでしょう、それらは全て王室に反旗を翻したとみなされ、同じように消えます。隠れていそうな氾濫分子も一掃出来る。とても合理的だ。そのために、陛下の近衛兵他……ハスミ様、エミル、キサキ様の近衛兵の中でも選りすぐりのものが、その対応に当たってます。アルファも居なかったでしょ？ 彼の腕は一級ですからね」

外の警備だつて……いつてたのに……。

「王宮はあの馬鹿げた一室を除いて、一夜限りの戦火が広がっています。あの部屋に居るということは、王室への忠誠を誓っているということの一番の表れですよ」

……止めなくちゃ……

こんな、馬鹿げたこと……やめさせなくちゃいけない……いけないと思うのに、体がいうことを利かない。だって、もしそれが本当で、もしそれが当然であるなら、異世界人でしかない私になんといつて、とめることが出来るんだろう。

止めることが正しいの？

やめると声高に叫ぶことが間違っていない？

ここはシル・メシアだ……

私の常識が及ぶ世界じゃない。私が知れば悲しむと、苦しむだろ

うと、そう思ったから、誰も私に告げなかった。

その気持ちを……私はどうしてあげれば……良い？
どうしてあげれば助けてあげられるの？
受け止めてあげられるの？

私は何をすれば何を選択すれば良いの？ ……

「このところ暇だったので、やっと動いたという感じですよ。あまりに退屈すぎると生きた心地がしない……」

……ラウ先生はさつきから微塵も変わることなく淡々としている。それよりも現状を楽しんでいるようにも見える。そして、私が傷付いているのを喜んでるようにさえ感じる。

そしてラウ先生は「マシロ、知っていますか？」と続ける。

「私はエミルのことが好きなんですよ。ええ、とても。彼は生まれながらにして特別でありながら、弱い。能力を持ちながら持て余し、常に迷っている。そう、その迷いはいつでも彼に影を落とし、苦しめる、それはとても面白い」
「そんないい方、酷い、です」
「そうかな？ 私はそう思わないけど。だって、私はこう見えてもエミルには昔から甘くて優しい。マシロも、少し考え直して、やり直してみてもどうですか？」

「ごん、ごん、ごん……」と後頭部に打ち付けるような痛みが襲ってくる。さつきから、私はどうしたんだろう？ 吐き気も治まらない……そんなにお酒を飲んだつもりもない、それなのに悪酔いした感じだ。それにしても酷すぎる……でも……。

「なに、を、ですか？」

搾り出すようにそう問い掛けた私にラウ先生は、さあ？ と肩を
竦めた。そしてやっと私の異変に気がついたというように「大丈夫
ですか？」と首を傾げる。

「あまり調子が宜しくなさそうですね？ 迎賓棟まで送りましょ
うか」

静かに差し出された手に私は首を振った。どうすれば良いか分か
らない、ラウ先生の話がどこまで本当なのかも分からない……分か
らないけれど、でも……

「失礼し、ます」

私はとりあえず、誰か……ううん、ブラックを探しに庭に出た。
足先に触れた芝生が水に濡れていて小さな飛沫を跳ね上げる。

「マシロ、今夜はダメです。そちらにも行かないほうが良いですよ
」！

ラウ先生の声がどこか……遠い。

足が重い、頭が痛い、気持ちが悪い……。

変だ……力が入らなくなって、体が地面に吸い寄せられる

足が、動かない……体が酷く、重い……体が……さ、さ、え……
られ、な……

どれ……っ

そして、私の視界は真っ暗に閉ざされた。

第二十三話・青い月

私は落ちた。

物凄い高いところか、すごい勢いで。

肌が冷たくて濡れそぼっているような感覚に襲われ私は目を覚ました。

「ん？ あ、あれ？ 二つ、どこ……？」

私は全然想像もつかないようなところに転がっていた。といっても芝生の上だったけど。雨上がりだったのか丁度濡れていて、冷たかったのはそのせいだ。気持ち悪いなと思いつつ、汚れを叩き落とそうと服に手を掛けて首を傾げる。

……。
なんだこのドレス……。私は確か学校の帰りで……。制服のはずで……。

てことは、夢。

私ってばまた変にファンシーな夢を見ているもんだ。辺りは夜なのか真っ暗で空には二つの月が浮かんでいた。

……夢決定。

そして傍にあつた壁を振り上げば……ゲームとか漫画とかとりあえず現実離れた世界の城の外壁のように思える。きよろきよろと挙動不審気味に辺りを見回しつつ、立ち上がると足を進める。この辺りに人は居ないのだろうか？ 虫の声一つ聞こえない。

第一村人を探してぼんやりと広大な庭を歩いていると、遠くから人が走ってくるのが分かった。走ってきた人は二人……に、見えるんだけど？ 人影は確認できたけど、顔までは見えない、もう少し近寄れば良いかとそちらに向う。

「王子、こちらに隠れて」

「無駄だよ、もう僕は構わないから……」

悪漢にでも追われているのだろうかと思われる会話に口出ししそうになつてそれは阻まれた。

「くだらない追いかけてこはやめてください」

涼しげな、夜の闇に凜と通る声。その声に二人が息をつめたと同じ時に、後から来た人？ はあるうことが、一瞬の迷いもなく

……ガウンツ、ガウンツ！！

発砲した。

……嘘っ！

私は思わず両手で口元を押さえて息を呑み、現状が理解出来なくて目を見開いた。半歩下がるように足を引くと芝生が水を弾いてしまった。

「……！」

犯人に気がつかれ彼は私を見つけるとこちらに歩み寄ってくる。

「どうしたんですか？ どうして、フロアから出たんです」

何か声を掛けられているような気がするけど現実が追いついてこない。

人を撃った。

人を殺した。

その人が私に歩み寄って来て手を伸ばす。

膝が笑ってしまつて、逃げられない……

「……っころ」

かちかちと奥歯がなって言葉も上手く出ない。

どっしり……

どっしり……

どっしり……。

混乱のあまり、頭の中がどんどんと痛みを覚えるほど強く脈を打つ。

「マシロ？」

嫌だ……殺される……！！

「ひ……」

殺さないで、撃たないで……

「ひと、」

伸ばされた指先は、私に届く前にぴくりと止まった。それを合図にしたように、

「ひ、人殺しーっ！！ い、いやああっ！！」

力の限り、叫んでいた。

逃げなきゃと思うのに私の足は一向に動いてくれなくて、私はその場にしゃがみ込み頭を抱えて繰り返し、意味を成さない声を上げ、ただ叫んだ。

「……っん、マシロさんっ！」

何度呼ばれたのかわからない。肩に手が掛かって私は慌ててその手を払いのけると暴れた。

「マシロさんっ！ ちょっと！ 痛っ！ あ、暴れないで下さい！」

闇雲に腕を振り回していたら誰かに当たって、その直ぐあと両方の手首を掴まえられてしまった。半べそ状態で顔を上げれば、さっきの人影じゃなくなっていた。

「大丈夫ですか？」

私の手首をなんとか押さえた人は月明かりのした、本当の色は何色なのか白っぽくキラキラと輝く髪の色をした、綺麗な少年……？ というよりは青年だった。瞳は翳って黒っぽく見えるけど、本当は何色なんだろう？

やっと私が大人しくなったことに安堵したのか、目にも明らかに肩を落として「手を離しますけど暴れないで下さいね？」と念を押す。私が、こくんっ頷けば手首は解放され、変わりに手を取られて「立てますか？」と立ち上がらせてくれた。

まだ足元が覚束ない私をしつかり支えてくれる姿は、やはり男の人だった。

「何があつたんですか？ 庭で転んだんですか？ もう、広間から出たりするからですよ。今夜は最小限の明かりしかないから許された場所以外は危険ですよ？」

なんか凄く子ども扱いされているような気がしなくもない。私は少しだけ落ち着きを取り戻すと、はっと思いついて夢の住人に告げる。

「今、そこで人が撃たれて！ 助けないとっ！ 犯人に襲われそうになって、だから、だ……だから、私……」

口にすると先程の光景が脳裏に蘇って、私は慌てて頭を抱えた。私を支えてくれていた人がその言葉に僅かに身体を強張らせたのが分かる。

そりゃそうだろう、人が殺されたのだから……でも、もう犯人が居ないなら、撃たれた人を助けないと。ふと、そう行き着いて足を踏み出そうとしたら止められた。

「どこへ行くんです」

「あつちに倒れたから……助けないと」

「無駄ですよ」

「え？」

「無駄です。もう、何も……兎に角何も残っていないはずですよ」

残ってない？ 誰かが助けたの？ 私が錯乱している間に？ 浮かんでくる疑問ばかりを私は何ひとつ処理できない。

だからその答えを求めてその人を見上げると同時に、肩に彼が着ていた上着が掛けられた。

寒くはなかったけれどその暖かさに少しだけ落ち着く。

「今、マシロちゃんの声が聞こえたけど、二人してどうしてこんな所に居るの？ マシロちゃん、転んだの？」

……夢での私はどじっ子設定なのだろうか。

あとから駆けつけた人は明かりが少なくても、色のはっきりとした人だ。金髪に碧眼。騎士服着て帯刀してなかったら、王子様だと思っような容貌だった。

「すみません。僕の不注意で……」

「ふーん。よく分からないけど、まだ残党とか残ってるかもだから、強化区域を出ないほうが良いよ。迎賓棟まで送ろうか」

そういつてにこりと微笑んでくれたとき、丁度いくつかの足音が近づいてきて私の身体は自然と強張る。

「隊長！」

「急に持ち場を離れてどうされたのです」

隊長？ この人、まだ若そうなのに、隊長なんてやってるんだ、
凄いな。私の夢なんだか壮大だ。

「ああ、ごめん。ちょっと、問題発生。君たちは持ち場に戻って、
僕もあとで直ぐ戻るから」

いいながら私の正面に立ち位置をずらし、彼らから私を隠してし
まう。

「はい？」

「最優先事項が発生したの。ほら、君らは戻る！ 隊長命令」

いってしつしと犬でも追い払うような仕草を付け足した。駆けつ
けた人たちは「分かりました」と直ぐに納得してくれ、闇の中へと
消えていく。

第二十四話：白い月

城の中へ入ると、ほわりと優しい明かりに廊下は照らされていた。次の建物への入り口で、可愛いメイドさんが「案内します」と腰を折ったのを二人はあっさり必要ないと拒否した。

しかし、どんどん進む騎士さんの後ろに続くと、最初声を掛けてくれた人は少し遅れた。振り返れば、先程のメイドさんに何か話を通しているようだ。メイドさんは何度か相槌をうって最後に深々と一礼するとその場を離れていった。

「あの、何か、問題」

「問題は非常に多いです」

並んだ彼にそうきっぱりといい捨てられ、私はしょぼんと視線を落とした。彼は怪訝そうな空気を纏い、訝しんで慎重に口を開いた。

「……マシロさん……あの、転んだときに頭でも強打したんですか？」

「え、あ……はい。打ったかどうかは分かりませんが、その、凄い頭痛がしました……吐き気も……今も少し」

「え」

私の台詞に二人とも時間を止めた。足も止めた。思わず追い越してしまった私も足を止めて二人を振り返る。

「マシロさん、その……僕らのこと分かりますか？」

「分かりません。でも、これは夢だから、みんな私のことは知っているっばいんですね？」

いつて私は首を傾げたが、目の前の二人は頭を抱えた。

「……………アルファさん……………エミル様と、カナイさん呼んでもらえますか？ もし捕まえられれば店主殿も……………」
「りょーかい」

二人はそれぞれに分担したのか金髪美少年は来た道に戻っていった。それを見送ってから、残った彼は「行きましょう」と足を進めた。

そして案内された部屋は豪勢だった。

どこかの遊園地の一角というくらい現実感はない。暖炉にソファ……………美しく彫りの入った柱。見上げれば、天井には宗教画のような絵が描かれていた。

「ここでは休めませんから、こちらへ」

その広い部屋を素通りして、彼は奥の扉を開いた。開けた先も広くて豪華。天蓋付きのベッドなんて初めて見た。

「直ぐに使用人が来るので、その方に、着替えを手伝ってもらって……………ああ、その前に」

座ってください。と、促され、私はベッドの端へ腰を降ろした。私の顔を覗き込んだ彼は少し迷ったようだが、一つ長い息を吐ききると続ける。

「僕は、シルゼハイトといいます。皆、シゼと呼びますからそれで問題ありません。そして、僕は現在王位継承順位第二位であるエミ

リオ王子の専属薬師です。今から少し触診しますけど……その、暴れないで下さいね？」

そういつて困ったように微笑んだシゼさんに私は頷いた。さつき結構まともにグーが入ったのだろう。申し訳ないことをしてしまっただ。

「頭つてどの辺りですか？ 髪下ろしても問題ないですか？」

確認するより早く彼はさっさと私の髪を降ろしてしまう。さらりと前に流れてきた髪は随分と長くなった気がする。

夢ではなんでも有りなのだろうか？ そつと長い指が髪を梳き、びくりと肩を跳ねさせた。

「痛かったですか？」

「あ、平気、です。少しくすぐったくて……」

「………なんというか、緊張感に欠ける人ですね。相変わらず

………」

そういつて零した溜息が見た目よりずっと老けていた。きつと苦勞の多い子なんだろう。

「後ろの辺りです、首の付け根より少し上」

私の話にあわせて、シゼさんの手が動き頭を撫でる。正面からこられるから、なんとか抱き締められてるみたいで、物凄く恥ずかしい。相手は真面目に心配して診てくれているというのに失礼極まりない。

「外からでは分かるようなものはないですね」

ゆっくりと撫でながら、短く溜息を漏らし、やはりカナイさんにかかぶつぶついいながら唸る。そして、ふと気が付いたように

「顔、赤いですけど、熱でも……」

いいながら反射的にシゼさんは私の額に手のひらを当てる。

「そういうわけでもなさそうですが、何かありましたか？」

「だ、大丈夫。大丈夫です。ちょっと、その、恥ずかしかっただけ、なので……」

額から手を離しながらそういつたシゼさんに、私はごによごによと答えた。そのどうしようもなく間の抜けた答えに呆れたのだろう。「え」と声を漏らす。

「マシロさんが、僕に、ですか？」

顔を上げれば、視線の先のシゼさんも顔が赤くなっていた。大人びた雰囲気なのに意外と可愛い人だ。そう思ったことに気がついたのか、シゼさんはこほんつと咳払いして、改めて私を見た。

「先程、夢と仰っていましたね？ では、貴方にとって、何が現実なんですか？」

「え……」

私の現実といえば、毎日学校に通って、授業を受けて友達とくだらない話をして家に帰って……それが、現実で、それが当たり前で

……

だからその様子を思い出す。

家族の顔も友達の顔も直ぐに思い出せる、思い出せるのに、どこか違和感がある。その違和感がなんなのか分からない、分からないけれど、それを考えようとしたら、ずきずきと頭が痛み、胸の奥がきりきりと締め付けられているようだ。

「……………っ、あ」

あまりの苦しさに、胸を押さえて膝に頭を落とす。

「大丈夫ですか？」

ほんの少し慌てたような声が掛かって、気遣わしげに手が背中を撫でる。

「い、たい……………。頭と、胸、が……………っ、あ……………う」

意識がまた混濁する……………

銃声がフラッシュバックする。

月を背にした影が私に手を伸ばす。

……………怖いっ！

そう思った瞬間、私は漆黒の闇に飲まれた。

きつと、これで……………私は夢から覚めるのだと思う。変な夢だった

……………

第二十五話：私の現実

「……………そう……………ラウと何かあったか……………もしくはそのあと何か」

「すみません。僕が離れてしまったので」

「ううん。仕方がないし、それにもし誰かが仕組んでいたならそれとは関係なく、きつところになったはずだよ……………そっちは、僕があとで問質すから良いとして……………それで、ブラックは？」

「見付からなかったです。というか、ブラックは自分から出てくる気がないと見つけるなんて無理です」

「はは、確かに」

はぁ、仕方ないな……………と溜息が聞こえて、そつと優しく誰かの手が額に触れ前髪をくるくると弄ぶ。

「それよりアルファは着替えてこいよ。外ならまだしも中に入ったら返り血目立つ」

「え……………このくらい大した事……………あ、ああ……………そうですね。着替えてきます」

なんだか物騒な会話が聞こえるような気がする。

ああ、身体が重い……………じわじわと、体の感覚が蘇ってきて、現実味を帯びてくる。

……………夢……………覚めたんじゃないかな。

「マシロ……………目、覚めた？ 大丈夫？ どこか辛くない？」

ぼんやりと視界に入った人影は、シゼさんではなかった。

数回の瞬きでやっと視界がハッキリしてきて、室内灯に映える空と同じ色の髪に、濃い翡翠色の瞳……綺麗な指先が私の額から頬を滑り降り離れていくのを少しだけ名残惜しく感じる。

「誰？」

「エミリオだよ。エミル」

「えみ、る……さん？」

私は気だるさを覚えながらも、何とか身体を起こそうと腕をついた。それを助けてくれながらエミルさんは「そうだよ」と微笑む。どこか優雅さの漂う人だ。

「頭もう痛まない？ 気持ち悪いのも治ったかな？」

傍に立っていたシゼさんから水の入ったグラスを受け取って、エミルさんが私の両手に握らせてくれる。私はそれに一口、口を付けた。冷たくて気持ち良い。水が流れ落ちる気道がひんやりとする。

「美味しい……」

そう、良かった。と、微笑んだエミルさんに私も緩く笑みを返した。

「ここで目が覚めてからのことは思い出さなくて良いから、その前は分かる？」

ゆっくりと問われて私は首を傾げる。私は……

「ええと、私、学校の帰りで……友達とちょっとあって……それで」

その帰り道で、寝ちゃったの？ でも、落ちたような気も……？
語りながら良く分からなくなっただけは首を傾げた。エミルさんは
その様子に柔らかい笑みを浮かべて「良いよ」と頷いた。

そして背後に居た長身の男性に目配せをして頷くと、彼と席を替
わった。不安そうな顔をしてしまったのだろう。エミルさんには「
大丈夫だよ」と微笑まれ、前に出てきた人には呆れたような溜息を
零された。

「あー、なんか今更自己紹介してどうだよ……。とりあえず、俺は
カナイ、エミル付きの魔術師だ。ええと、大まかに話したんで良い
よな？」

うわー……感じ悪い。あっさり適当宣言したよ。この人。

「それにしても、なんでまた記憶喪失なんだよ……。お前は記憶なく
すのが趣味なのか？」

「……………ごめん、なさい」
「カナイ」

カナイさんの悪態に思わず謝罪した。そんなカナイさんを窘める
ように、エミルさんが名前を呼び、傍に居たシゼさんが「あのとき
は記憶を失っていたわけではありませんよ」と窘めた。私には「あ
のとき」がそもそも分からない。でも、カナイさんは「分かってる
よ」と気まずそうに頭を掻きながら続けた。

「分かってる。お前が寝てる間に少し様子を見せてもらった」

何をデスか？ と訝しんだのを感じ取ったのか、変なことはして
ない！ と慌てて付け足す。

「外傷がなかったから仕方ないんだ。お前の中に何か入ってるのは分かったし、それを取り出そうともしただけど……どうにも、深くマシロの中に絡み付いてる。それが記憶に影響していると思われんだけど……きつちり、ここ『シル・メシア』に来てからの記憶が無いように思う。俺たちのことを分からないのが境だろう」

私にしてはとても世界設定のしつかりした夢だと思う。

「あー、まあ、もう、この際記憶が戻るまで、夢だと思ってるのはどうだろう？ そうすれば、お前の中で理解出来ないようなことも納得出来るんだろ？」

「ということとは、夢じゃない？」

そのあと、エミルの逆鱗に触れたカナイは私に最初から話をしてくれた。

四年から五年くらい前からの話だった。正直、私の頭は付いていない。それに混乱を防ぐためか、やっぱり面倒臭かったのかは定かではないけれど、多少なりはしよられていて概要しか伝えられない。

整理しきれないまま、調子が良いようなら、ということでは寝室に隣接した浴室を借りた。メイドさんが付き添いそうだったので、丁重にお断りした。

私は、どうやらこの世界で薬屋さんをやっているらしい。

それでそれより前は、図書館で学生をしていて、そこでさっきのみんなは同じ学生だったということだ……けど、王子や魔術師や騎

土つて通う先間違つてない？ シゼだけがまともに見える。

その関係上、私はみんなを「さん」付けで呼んだり、敬語を使ったりするような仲ではなく、もっと親しいものだったらいい。

だから「さん」を付けたら全員に拒否された。

ここで目を覚まして最初に発見した殺人事件は、危険だからこれ以上直接関わる必要はないといわれ、記憶が戻るまでの間不安だろ
うから、王城で生活していて構わないとまでいつてもらった。

昔の好とはいえ申し訳ない限りだけれど、現状では私も他に頼る
宛が思い浮かばない。

それにしても、私が薬屋をしていたなんて信じがたい。私は理系
の人間ではなかったはずだ。

はあ……と溜息を落とし、ふと、手元に目が行く。

沢山つけていたアクセサリーは、外したのだけど左手の指輪だけ
は、なんとなく外せなかった。水を弾いて煌くピンクダイヤはとて
も綺麗だ。

エミルたちは何もいっていなかったけれど、私にはこんなものを
貰い、この指に嵌める相手が居たのだろうか？

ふう……と一息吐き、用意してもらった夜着に袖を通した。

案の定ネグリジエ仕様だけど、ピンクフリフリではなくて良かつ
た。一緒に置いてもらっていたストールを羽織り、部屋に戻る。

……カチャ

戻るとそこに居たのはエミルだけだ。

ぼんやりと窓辺に置いた椅子に腰掛けて外を眺めている。私に気
が付かないのか物憂げなままだ。

「あの」

躊躇ったけど声を掛けないわけにもいかなくて、私は遠慮がちに声を掛けた。

エミルはその声に、「あ」と声を漏らすとこちらに顔を向けて、につこりと微笑んでくれる。とても優しく安心して笑みに癒され私は胸を撫で下ろす。

「大丈夫ですか？」

「え？」

「あ、えっと、その……大丈夫？」

敬語も止められていた。いい直した私にエミルは、ぷつと吹き出して「大丈夫だよ」と答えた。どこがツボ？ 王子のツボは良く分からない。きよとんと首を傾ければ、くすくすと笑いを零す。お育ちの良さが滲み出る笑いかただなと、ぼやんつとしてしまった。

「大丈夫だよ。ごめんね。ぼんやりしていて。それに、女性の部屋に居座るのはどうかと思ったんだけど、マシロを一人にもしておけないから……」

「ううん。気にしなくて良いよ。えっと、その……みんなは？」

私はエミルの傍に寄り問い掛けると、エミルは立ち上がり椅子を勧めてくれる。遠慮しても無駄だろうから私は素直に腰を降ろした。

「アルファは騎士団に一度戻ったよ。カナイとシゼは今後の治療方針の模索中」

「カナイは魔術師なの？」

私の素朴疑問にエミルはにっこりと微笑んで頷いた。

「カナイは薬師としてではなくて、治療師として一緒に考えてくれるんだよ」

そう答えてエミルは「そうそう」と話を続けた。

「もう頭痛はぶり返したりはしてない？ さっきシゼが鎮痛剤を届けてくれたから、もし痛むようなら飲んで眠ったほうが良いよ」

「ありがとう……エミル、あの、私」

口にしたは良いけれど続く言葉が思いつかない。尻すぼみになった私にエミルは瞳を細めるとふわりと私の頭を撫でた。

「大丈夫だよ。大丈夫……マシロのことは僕たちがなんとかするから。記憶がないということは辛いかもしれない、不安かもしれないけれど、でも、僕らは変わらず傍に居るから。方法が見つかるまで、また最初から始めれば良い。それだけのことだよ」

そして王子はこともあるつか床に膝をついて、私の両手を取って真っ直ぐ私を見上げると「そうだよな？」と問い掛ける。ぱあっと自分の頬が熱を持つのが分かる。多分、私は今真っ赤になってしまっていると思う。恥ずかしい。私は恥ずかしさに絶えかねてこくこくと何度も頷いた。

「マシロが望むようになるように、僕らは全力を尽くすよ」

紡がれた台詞と、そつと指先に触れた唇に、妙な既視感を感じたら……また、チリチリと頭の奥が痛みを訴えてきた……

第二十六話：ファンタジーなリアル（1）

……ん……

誰かが触れてる気がする。

寝る前にエミルは部屋を出たし……一人になったはずなのに、心配して戻ってくれたのかな？

髪を梳いてくれる指先がとても心地良い。凄く好きな感じだ。

手に誰かの指が絡み、触れていく。

離れたくない……離れたくない……でも、きっと私が目を開ければ誰も居ない。これは、夢だから……。

「……誰？」

瞼を持ち上げると、やはりそこには誰も居なかった。つうつと目尻から涙が零れ落ちて、私は慌てて拭いた。

分厚い遮光カーテンの隙間から朝日が漏れさしていた。長い夜は明けた。

目が覚めても私は城に居て。やっぱり現実なのだと、ちょっと思う。夢の中で眠る。目を開ければいつもの天井だと思ったのに、ベツドの天蓋だった。

放っておくと、どこまでも手伝ってくれそうだったメイドさんにストップを掛けて、私は自分の身支度を整える。

あれから頭は痛んでいないし、気持ちも悪くない。なのにやっぱり思い出せない。

……私は……この世界に本当に居たのだろうか？

そしてその日、私は部屋の移動を頼まれた。

ここは迎賓棟で、建物全体が来賓者用となっているため 今現在は、泊り客が居るから警備も厳重だけれど、他に居なくなると手薄になるし目が届かないから エミルの私室の隣を使わせてもらうことになった。

私はなんだか申し訳ないような気がしたのだけれど、「エミル様のご指示ですから」とメイドさんはさっさと私を案内する。

用意されていた部屋は、昨夜と同じように主室と寝室に分かれていた。王宮の部屋ってどこもかしこも広いんだろうな。

「何か必要なものがありましたら、何でもお申し付けください」

と深々と頭を下げてくれたメイドさんに萎縮してしまう。こんなお嬢様……お嬢様か。生活思っても見なかった。

困ったなあ。

ぼんやりと外を見ていたら突然扉が大きな音を立てて開いた。

「ごめん、マシロ。遅くなって……」

あ、ノックを忘れた。そう零して開きっぱなしになった扉についていたノッカーをコンコンと扉に打ち付ける。

「エミル。おはよう」

「おはよう、マシロ。頭痛はあれからかい？」

「うん、平気」

「そう、良かった……朝食は済んだよね？」

にこにここと歩み寄ってくれるエミルの背後で苦笑しながらメイドさんが扉を閉める。私が頷くとエミルは、そうだよ。と少し残念そう。

「昼食は一緒にといたいところなんだけど、午後から面倒な式典があるんだ。マシロは王宮の中で休んでいてくれて良いから。でも、どうしてもアルファとカナイは外せないから……もし、マシロが嫌でなければ研究棟で過ごしてもらえるかな？」

「研究棟？ シゼのところ？」

首を傾げて問い返せば、察が良いねと微笑まれた。

「夜もその続きで遅くなると思うんだけど、そのあとここへ寄っても構わない？」

「あ、うん……もちろん」

「良かった。数日バタバタとするから、あまりマシロと居られなくて心細いかもしれないけど、なんとか時間作るから」

そういつてまた頭を撫でてくれる。

「エミル……」

「うん？」

「今朝方、部屋に来た？」

「ごめん、顔を出したかったのは山々なんだけど……」

……そっか、エミルじゃないのか。じゃあ、やっぱりあれは夢だったんだな。

私は、申し訳なさそうなエミルに首を振って、いいの。と告げる。どうかした？ と重ねたエミルに私は何でもないと首を振り、それと同時にノックが聞こえた。入室を許せば見慣れた顔が現われる。

「エミルさん。やっぱりここに居た。準備出来ましたよ」

ぷりぷりと頬を膨らませて、歩み寄ってきたのはアルファだ。アルファは私を見つけるとにこりと愛らしい笑みを浮かべてくれた。

「マシロちゃんと一緒にいけないですよ？ 残念。研究棟まで僕が案内しますよ」

良いですよ？ といつてからエミルに確認を取るアルファに、エミルは苦笑して「お願いするよ」と頷いた。

「じゃあ、行きましょう」

というのが早いか私の手を取って歩き始めてしまうのが早いか、良い勝負だった。楽しそうに私の手を取って、城の廊下を歩くアルファは無邪気そのもので悪意の欠片もない。鼻歌でも飛び出しそうな雰囲気から明るく話し掛けられる。

「大丈夫ですか？ 頭痛いとか、治りました？」

「うん、平気」

「何か思い出したりしました？」

にこにこ訪ねてくるアルファに、私は僅かに眉を寄せて首を振った。

私は、仲が良かったという人たちのことも微塵も思い出せなくて申し訳なくて仕方ないというのに、アルファは「良かった」と微笑

む。その予想を裏切る楽観的な反応に、思わず「え？」と目を丸くしてしまった。

「これまでなんて、どうでも良いじゃないですか？ また僕のことやエミルさんのことは知れば良いだけだし、聞きたいことがあったら何でも聞いてください。喜んで答えます」

「あ、ありがとう」

「うん！ だからね、マシロちゃんはそのまま、王宮に住んじやえば良いんですよ。そのお姫様みたいな格好もとっても可愛いですよ」

お日様のような笑顔で、ぽんぽんつと話を続けるアルファに私も釣られて笑ってしまう。それになんだかアルファの言葉は、建前とかお世辞というよりは、そのとき思ったままとただ口になっているように感じる。裏表のない素直で率直な感じだ。

第二十七話：ファンタジーなりアル（2）

私たちは内庭を突っ切って、別の棟に渡り、中に入れば少し空気が変わった。

昨日まで私が居た場所や、今日移動した場所とは違って何となく無機質な感じがする。

「僕あんまりここ好きじゃないんですね。なんかここ入るとひんやりすると思いませんか？ 頭固い人も多いし」

子どもみたいに口先を尖らせてばやくアルファに、そうなんだ？と笑ってしまう。

「えっと、確かシゼの研究室は二階の中央から左側全部だったと思うから」

「全部っ?!」

思わず驚きに声を上げた私にアルファは、そうですね？ と不思議そうに首を傾げた。

「多分、主に使っている部屋は一つだろうとは思いますが……」

シゼって……王子様専属って私の想像よりずっと凄いのかも知れない。

そんなことをアルファと話しながら階段を上がれば、その先でシゼの姿を発見した。ぶんぶんっと大きく手を振ったアルファを見つけて歩み寄ってくる。

「じゃあ、また戻ったら迎えに来ますね」

にこりと私にそう告げて、シゼのほうに向きを変えるとアルファはにっこりと笑みを深めた。

「二度はないからね」

その一言に、シゼは眉をひそめる。そして、ふうと息を吐くと「分かっていきます」と頷いて別れた。

「迎えに来てくれたの？」

「ええ、まあ。アルファさんと全ての部屋を端から全て開けそうでしょう」

「そっか、ありがとう」

私はあえて突っ込まなかった。

アルファに送ってもらうなんて決めたのはさっきの話だし、きっとシゼは頃合いを見計らって廊下に出てくれていたのだと思う。指摘したら真っ赤になって否定しそうだ。

「僕は纏めなくてはいけない、仕事があるので……退屈になったらいってください」

ざっと見、真ん中くらいの扉から部屋に入ると、整然とした書斎だった。もっとぐつぐつしたものが置いてあるのかと思ったから拍子抜けだ。

「マシロさんが期待しそうなのは、この部屋じゃないですよ」

中央の机に腰掛けながらそういったシゼに、私はそうなんだと苦

笑した。私、シゼにどう思われてたんだろう？　そして今、どう思われているんだろうなあ。この調子で……、昨日はもっと優しくかったのに。

「あ、そうでした」

座ったと思ったらシゼは直ぐに立ち上がって、机の傍にあった棚を漁り始めた。そしてその中から次から次に、甘い香りのするものが出てくる出てくる……いや、棚のサイズと出てきている量がおかしいよね？　どうやってそこに入ってたの？

出てくるものよりその四次元的な棚が気になる。

「好きなものを好きなだけどうぞ」

「……ええつと……」

「昨夜のお詫びです。マシロさんの好きなものは、甘いものくらいしか僕は思いつかなかったので、片っ端から今朝買って来ました」

いや、昨日のお詫びされるようなことも思いつかないし、それよりもそれくらいしか思いつかないからって店ごと買いましたレベル　ちよつといい過ぎ　の、この甘味を私一人で平らげられると思っているのだろうか？

思わず、積み上げられた甘味だらうものを前に黙ってしまった私に、シゼは首を傾げる。そしてやっと気がついたのか「あ」と声を上げた。

「もう大丈夫だと聞いていましたし、顔色も良いように思ったのですが不調ですか？」

そこじゃなーいっ！　ズレてる。この子、綺麗な顔して頭も良いはずなのに、ちよつと残念だ。

「……ありがと。私は元気です」

はあ、と脱力して手近なソファに腰を降ろした私にシゼは「食べないんですか？」と首を傾げた。

「こっちの棟は凄く静かだよ。人が居ないみたいに」
「居ないですよ」

その返答に、あーんっと口に運びかけた手を止めた。
シゼは、私の視線に気がついたのか書き物をしていた手を止めて顔を上げる。そして私の疑問に気がついたのか話を続けてくれた。

「本日から七日間は喪に服します。城の中の機能は最低限のもの以外は停止です。この棟にも僕たちのほか申請の通ったものしかないと思うので、広さの割りに人数は殆どいません」
「え、じゃあ、今日の式典って……」

恐る恐る訪ねればあっさりと「葬儀ですね」と口にされた。

「まあ……国葬扱いではありませんが、密葬です。王宮の中だけで行われます」

「え、ええと……どなたが亡くなったの？」

重ねた質問にシゼは少しだけ瞑目したあと、ゆっくりと息を吐ききってから続けた。

「多くの方の式です。僕も詳細は分かりません」

王宮というくらいだし、国なんだから、どこかと争いでもしているのかも知れない。その犠牲者というのなら、シゼのいうことからも分からなくはない……。

私はそれ以上その話に突っ込むことは出来なくて、早々に話題を変えた。

「そのあと何かあるの？」

「あと、ですか、そうですねえ……ジルライン陛下が退位されますよ」

陛下ってことは王様だよな？　ということとは

「じゃあ、エミルが王様になるの？」

反射的にそういった私にシゼは、ほわっと頬を上気させて机の上で組んだ指先を軽く揺らした。

「僕は、そうなれば良いなと思います。ただ、現在王位継承権を持つておられる方は皆様素晴らしい方なので……必ずしもそうだとはいえません。それに、エミル様はお優しいので、彼が王位を望むことがあるとすれば、そうせざる得ない特別な理由でも出来たときだと思います」

私は饒舌にそう語ったシゼを眺めつつ、ぱくりとクッキーを頬張る。もぐもぐ、ごくん。

「シゼは、エミルが大好きなんだね」

こくんつとシゼが入れてくれたチャイ　そうかどうか良く分らないけど壮絶に甘いのでそうとしか思えない　を口に含んで、喉の奥に流し込んでから素直な感想を伝えると、シゼは驚いたように「え？」と顔を上げ私を見た。

私は別に特別なことをいったわけじゃない。今のシゼの様子を見ればみんな分かると思う。

「そう見えますか？」

「見えますよ？」

首を傾げ重ねれば、シゼは益々顔を赤くして椅子から立ち上がると背にしていた大きな窓の外を見た。

朝方よりも少し曇ってきた気がする。

何か見えるのかな？　と私も立ち上がりその隣に立てば、内庭の緑が望めた。綺麗に手入れの行き届いた庭は目にも楽しい。

「エミル様はお優しいのです……ですから、今だけでも傍に居て差し上げてください。僕たちでは到底彼の心の悲しみを理解することは出来ません。僕たちは、この世界で生まれ、この世界の常識の中で育った。だから、エミル様の悲しみや痛みは分からない」

ぼつぼつと告げるシゼは、硝子に映った私と視線をあわせると寂しそうに口角を僅かに引き上げた。とくんつと心の奥で音が鳴るように、何かが響く。

「私、何も出来ないと思うけど？」

「知ってますよ」

いや、そこはそんなことないというところだと思っ。違っか？
違っのかっ？！

「何もなくて良いんです。何も……」

続けられた言葉の意味が分からなくて、首を傾げればシゼはくすくすと笑いを零した。衣擦れのように微かな音で笑う控えめな笑い声。それでも、どういうわけか、それが彼らしいのだと私の何かが理解している。

「僕が口にするのはおこがましいですが、エミル様は今とても傷付いている。でもきつと僕らの前では？^{おこ}にも出さないことでしょう。彼は僕らのことを良く知っているから、そして、マシロさんなら同じ悲しみを理解出来ることも、きつと知っている。だから、傍に居てあげてください……」

そこに記憶は必要ありませんから……

そう締め括ったシゼに私は良く分からないまでも、こくと頷いていた。そんな私にシゼは「ありがとうございます」と場違いな礼を告げ、あっさり話題を変えてしまった。

「マシロさんは、ラウ＝ウィルという方にお会いしましたか？」

ぼつと訪ねられて、私は首を振った。シゼはそうですか。と、頷くと片手で曇り一つない窓ガラスをすつと擦る。

顔を上げて視線が絡むことはない。シゼはどこを見ているんだろっ？

「ラウ＝ウィルというのは、図書館に居たころの僕の雇い主みたい

な方で、王宮でいえば次期国王の補佐に就く予定の人物です。とても風変わりな方で捉えどころのない方なのですが、僕はその方も嫌いではありません」

いって目を細めるシゼは確かにその人のことを快く思っているのだろう。

「ですが、彼は自由奔放すぎるところがあります。彼の一部は信頼にたるものですが、その反面彼の一部は信頼に欠ける部分もあります。それでも、彼にいわせればそれも誠実さであると平気でいってしまうでしょうね」

「な、なんというか複雑な人だね？」

「そうですね。複雑な人です」

私のどうともつかない感想に、シゼはやっとこちらを向いて口元を緩めると、本当にそうです。と重ねた。

そしてポケットから、懐中時計を取り出して「もうこんな時間です」
と呟いたシゼの手元を見る。

「綺麗な時計だね？」

いえば、シゼは止めていたチェーンの先を外し、どうぞと私の手に載せてくれる。

落ち着いた金の色の時計は、手の中にしっかりと納まる。ぱちんと蓋を開けると、蓋の内側には何かを記念するものだろう日付が刻まれていた。

そつと閉めれば表面の細かい彫がとても丁寧で、素人目にも良いものなんだろうと分かる。一通り堪能してシゼに戻せば、シゼは何かを懐かしむようにその時計を見つめ、表面をそつと指で撫でた

あと同じようにまた仕舞いこんだ。

「大切なもの？」

問い掛けた私にシゼは少しだけ驚きを浮かべて私を見たあと、ふつと笑みを零して頷いた。

「気に入っているんです。大切な方に頂いたので」

その雰囲気になんかそれ以上言及は出来なかったが、ほんの少しだけシゼが大人びて見えた気がした。

第二十八話：デリカシーに欠けるのはお約束

日が暮れる頃には空は泣き出してしまった。

雨脚は直ぐにとても速くなり、私を迎えに来るといつていたアルファは顔を見せることはなかった。

「酷い雨だね」

「ああ」

ただ外を見た感想を述べた私に、あっさりとした肯定だけが返ってくる。

そして戸口で待っていた私に「ほら」と目的のものを見つけたのか、カナイは一冊の本を押し付けた。夜の闇を模したような黒い装丁に、紅い月が描かれている。そして金の文字で書かれた本のタイトルは『白蒼月紅譚』小難しいタイトルだけど童話らしい。

メイドさんとか、各区域の境に立っている兵士さんが私のことを時折『白月の姫』と呼ぶことが気になった。だから、迎えに来てくれたカナイにその話をした結果。今に繋がる。

「その本……あまり子供向けじゃないんだが……まあ、良いか」

と私の部屋へ戻るまでの間カナイはぶつくさといっていたけど、勝手に解決したらしい。ぺらぺらと歩きながら本の中身を斜め読み。

確かに文字がぎっしりさん。

子供向けという雰囲気ではない。

……子ども？

いえ、私は十分に大人ですよ。カナイさん。

一言物申そうと顔を上げたところで、ぐいっと腕を引っ張られた。おととつと、カナイに廊下の脇へと寄せられると正面から荷物が歩いてくる。私は、カナイに肩を支えられたまま、その荷物が通り過ぎるのを待っていたら擦れ違いざま、私たちを発見した使用人が肩を跳ね上げて「申し訳ありません」と頭を下げた。

「荷物荷物荷物っ！」

反射的に腕をいっぱい伸ばしたが届かない。

絶妙なバランスで積み上げられていた箱が廊下に崩れ落ちると思つたのに、箱は宙で止まった。そして慌てて手を伸ばした使用人の腕の中に再び納まる。さっきよりは安定した感じで。

「お手数お掛けして申し訳ありません」

と口にしたところから、カナイが魔法だか魔術だかで手を貸したのだろう。使用人に対しても勿論カナイは愛想がない。

「構わないから、落とさないように運んでくれ。どうせ、俺の部屋に運ぶところだったんだらう？」

「は、はい、そうです」

「開けておくから、奥の書棚の前に積んでおいてくれ」

「承知しました……あの、姫様にも申し訳ありませんでした」

「え、ああ。良いですよ、別に……それより手伝わなくて大丈夫ですか？」

ここに体格だけはあるのが一人居ますが、と隣に居たカナイの腕

を叩けば、いわれた彼は苦笑して首を振り「ご心配ありがとうございます」とだけ答えたあと暇を告げて、通り過ぎていった。

「カナイも手伝ってあげれば良いのに」

その後姿を見送っていた私を他所に、カナイはさつさと歩き始めてしまう。追いかけて、ぼやけば「そりゃ悪かったな」と肩を竦めた。むっ。ちよつと馬鹿にされた気分だ。

「雨止まないね……」

本日何度目かの台詞。

黙って本のページを捲っていたのだけれど、退屈になってきて私は本を閉じ外を見た。

返事がない。

私は眉間に皺を刻んで、カナイを見た。カナイはあのあとどっさり持ち込ませた本に埋もれていた。

「……雨季に入るから。と、何度いわせるつもりなんだ？」

手元を覗き込んだ私を邪魔臭そうに片手であしらって、カナイは顔を挙げ、顔に宛がっていた眼鏡を外した。

「聞いたよ。何度も……なんか退屈なんだもん。話しよーよ、それとも何か他の……」

カナイは目頭をぐぐーっと押しながら、嘆息。

「お前、本当に緊張感ないな。焦りとかないのか？」

緊張？ 焦り…… やや黙すとカナイに「ないんだな」と呆れたように口にされ反射的にあるよっ！ と語気を強めていた。

「色々あるよ。私にだって思うところっ。でも、大丈夫だっていったんでしょ。みんなが大丈夫だっていうから、だから、私がそれを口にするのは駄目じゃない。駄目じゃ、ないかと思うから」

いいつつ私は隣の開いた席に腰掛けて頭を抱える。

「信じられないよ、私がこんな世界で暮らしてたなんて……」

くしゃりと頭を抱えて愚痴を零す。嫌な場所だとは思わない。

みんな良くしてくれるし過ごしやすいとも思う。
でも、この世界が自分のホームグラウンドだと、どうしても実感が湧かない。もう何年も過ごしていた場所だなんて、思えるわけない。

私はこの間まで高校生だったんだ。

それなのに鏡に映る自分の姿だって、あの頃より少し大人びている。それはもう自分であって自分じゃない。混乱しないわけない。

でも、ここに居た証のようにこの文字が読める。

私がペンを持てば、すらすらとこの世界の文字を書き綴ることが

出来る。ここに来たばかりの頃、エミルが教えてくれたのだと
思っていた。私の記憶なんて関係なく、身体は素直にこの世界のことを
覚えていて、確かに馴染んでいる。

私はもう、どこの誰なのか正直なところ分からなさ過ぎて、どう
しようもない……

じわりと浮かんでいきそうな涙を、こっそりと拭いた私に、取り繕
うような咳払いが聞こえ、カナイは、あ、あーっとわざとらしい声
を漏らした。

「……あー、こほんっ。悪かった……あー、うん。俺も忘れ
てた。お前はそういう奴だな。弱っちいのに無理を平気で押すんだ
った。悪い、いつも通りにし過ぎた」

ぼすつと大きな手が私の頭を押さえつける。

待て、待て、待て。

これは謝罪している人の態度じゃない。ぐぐつと額が膝に近づくと、
膝と仲良くするつもりはないっ！ 怒ろうと思っただら押し掛かった
手のひらは、ぐしゃぐしゃと人の頭を掻き雑ぜてあっさり離れた。

第二十九話：異世界で幻想童話

「それで、さっきの本読んだのか？」

顔を上げて乱された髪の毛を手櫛で整えつつ見ると、カナイはその辺りに広げていた紙を一枚、分厚い本の間に挟んで閉じる。休憩するということ表示だろう。

「うん、読んだ」

「白月の姫 イコール 白い月の少女 イコール 異世界人、つまりお前だ。民間人には知らない奴が多いと思うし、それでお前の平穩は保たれていたんだけどな、王宮の連中は大抵知っている。お前がこの世界とは別なところから来ているということ……本当にそう思っているかどうかは別としても、そうだとしたほうがこの連中には都合が良いんだ」

いいつつ少しだけ机の上に場所を取ったカナイは、部屋の隅にあったワゴンを引っ張ってきてお茶の準備を始めた。控えてくれたいたメイドさんを気が散る、の一言で追い払ってしまったので仕方ない結果だ。

慣れた手つきでお茶を用意しているカナイの手元を見ながら私は話を続ける。

「じゃあさ。同じように青い月の少年も居るの？」

問い掛けにカナイは僅かな沈黙のあと短く答える。

「……………ああ」

「ふーん。私と同じところから落ちてきたの?」

私の重ねた質問にカナイは首を振った。

「この世界の人間だ。青い月の少年は、力の象徴として蒼月教団という青い月を崇める宗教団体の生き神として祀り上げられている。あっちが会いたいと思わない限り、会うことは叶わないだろうな」「カナイは会ったことあるの?」
「ああ。まーな」

歯切れの悪い台詞で締め括りカナイは私の前にもお茶を出してくれた。その様子はあんにこれ以上は聞くなといわれているようで、私は話題を変えた。

「アルファは何してるの?」

「さあ」

「エミルは?」

「会議だ」

「着いてなくて良いの?」

そう長い時間一緒にいなくてもエミルがカナイとアルファを特別に信頼しているのは良く分かる。その人たちをどちらもつけることなくというのは不安ではないのだろうか?

「まあ、普段なら着いてるけど、今最優先事項はお前だからな。お前を一人しておくよりは、王宮内に明るい自分が一人の方がマシなんだろう? 多分、アルファの部下が着いてるはずだ。招集が掛ければ直ぐ俺も向うけどな?」

それは、私とその白い月の少女とやらだからだよな? 追求する

かどうか迷って、私は気恥ずかしくてやめた。

「雨季ってどのくらい続くの？ これからずっと雨？」

カナイが入れてくれたお茶を両手で包み込んで呷くと、カナイは、ふっと真つ暗な外に大粒な水の音がだけが響くのを見つめた。

「そうだな。暫らくは雨の方が多いだろう。ここは雨の少ないところだからこの時期さえ乗り越えればあとは、ほぼ良い天気恵まれる。二週間……長くても三週間くらいだよ」

雨嫌いなのか？ と重ねられて私もカナイと同じほうを見る。

「…………別に」

特に天気思い入れはない。晴れていけば洗濯物が良く乾くし、散歩しても靴が汚れないから良いなと思うくらいだ。雨が降っていてもこの雨だれの音を聞くのは悪くないし、たまには濡れて歩くのだって別に良い。

「この天気はアルファの機嫌を激悪にさせる。暫らく顔を見せなくても気にしなくて良い。それがあいつなりの気の遣いかただから」

「よーするに今日はもう顔出さない？」

「そうだな」

それ以上の追求は私に必要なという雰囲気を感じて私はそれ以上の言及は控えた。

「私の記憶、戻せそう？」

机の上に山と詰められた本を叩きながらそういった私に釣られるように、カナイは本を睨みつけて、溜息一つ。

「……………鋭意努力します」

約束どおりエミルは遅くに来てくれたけど、ほんの少し疲れが顔に出ていた。それを指摘すれば、やんわりと微笑んで平気だと答えしてくれる。入れ違うようにカナイはシゼのところへ行くと部屋を出て行ってしまった。

雨脚は益々酷くなり正にバケツを引っくり返した、なんて陳腐な表現をしたくなるくらいの土砂降り。

そんな窓の外を眺めつつ、今日はどうだった？ と私の話を聞いてくれる。

でも、私が話すことなんて特に変わったことはない、ということくらいだ。だって、これまでの経験がゼロなのだから、それらと関連付けて話をすることが出来ないし、それまでの私がどうだったのか分からない。

今日一日の話なんて、そんなにだらだら話せるようなことはない。

「ごめん、好みが分からないんだけど、お砂糖要る？」

お疲れっばいから少し甘いものを考えたのは良いが、シゼのところから持たされたお菓子を一緒に出してあげようかと思って用意していたら行き詰った。

私の問い掛けにエミルは、ああ、と歩み寄ってくる。「なしで良いよ」と紅茶の入ったカップを取り、お皿にあけていたクッキーを摘んだ。

そして、ぱきんつと半分口に割りいれ物凄く普通に「はい、あーん」といわれて反射的に口を開けてしまった。

「ふふ。マシロは可愛いね。美味しい？」
「う……美味しい、です」

私は自然と赤くなる頬を隠すように口元から顔を覆って、クッキーを噛み締めた。こんなことされたら味なんて正直よく分からない。

エミルはそんな私を楽しそうに眺めながらお茶を飲んで、丁寧に馳走様、といってカップを置くと一息吐く。そして、遅疑逡巡していたようだけど、ふと顔を上げると私と目が合う。

「ごめん、やっぱりちょっと……マシロに楽しい話をしてあげられそうにないから、今夜は部屋に戻るね……夜遅くに来ておきながら……」

本当、ごめん。と続けたエミルに、私は首を振る。やっぱり、平気なんかじゃなかったんだ。今日は葬儀だっけって、朝方のあの妙なテンションの高さもきつと過ぎてしまつと持たないのだから。上に立たなくちゃいけない人は、気丈で居なくてはいけないのだからから、本当……大変だと思う。

何も必要ないから、傍に居てあげて欲しい……そう思ったシゼの言葉が脳裏に過ぎり、私は「また明日」と別れを告げなくてはいけないところだ。

「あの、エミル」

「うん？」

「もし、まだ眠らないなら、ここに居ても良いよ？ あ、別に、何も話さなくても良いから……ほら、一人でいると良いこと考えないというか、どんよりするというか、そのほら。こんな天気だし」

思わず必死に引き止めてしまった。

私、何やってるんだらう。

恥ずかしい。

もしかしたら耳まで赤くなっているかもしれない。私は、慌てて「ごめん！」と謝罪して、残っていた紅茶を呷ってワゴンの上に乗せた。

「ありがとう……でも、あまり遅くまで僕がここにいるということ
は、邪推するものが出てくると思うから、今夜は部屋に戻るよ」

余りに恥ずかしくなって顔を上げられない私の髪をそつと撫でて
そういつてくれたエミルは、きつと絵本の中の王子様のように優しい
笑みを浮かべているのだらう。それに……邪推って……エミルの
言葉の意味を察して、私は益々身体を縮めた。

第三十話：犬じゃないよ狼です

カナイの言葉どおり翌朝も雨だった。

朝食は特別に、なんだと思うけど私の知った面々で揃って私の部屋で取ってくれた。でもその中にアルファの姿はなくて、少し寂しい。エミルは「朝稽古があるから抜けられないんだ」といつてくれていたけれど、本当のところは雨が原因かもしれない。それを証明するように、昼食の席でもアルファの姿は見なかった。

そして、今日も対外的な用事がないのだろうカナイが、私の部屋に残って本と睨めっこ中だ。

「何か分かった？」

あまりに退屈なのでカナイの手元を覗き込むと、あー、とか、うーん、とか生返事ばかり返ってくる。人の話なんてさっぱり聞いていないようだ。私は眉を寄せて「カナイのデベソー」「うん」「カナイの地味男」「ああ」「カナイのむつつりー」「そうだな」という不毛な会話を楽しんだ。

……いや、全然楽しくないっ！

「カナイー、かつこいー、すてきー、だいすきー」

「あー、そう……は？」

やっと顔を上げた。私が眉を寄せるのとほぼ同時に

「お、お邪魔して申し訳ありませんっ！」

と慌てて謝罪するメイドさんの姿が目に入った。

今の棒読みのどの辺りを、どう勘違いしたのか分からないけれど、顔を真っ赤にして可愛いメイドさんだ。カナイは背後に居た私をしつと手で追い払って立ち上がると、「どうしたんだ？」とメイドさんに歩み寄った。

傍で足を止めたカナイに、メイドさんは小さな声で何かを告げる。正直気分の良い雰囲気ではないけれど、私はお客さんだ。聞かなくて良い話の方がここには多いのだろう。

「はあ?! あいつら、この雨の中わざわざ来たのかっ」

「はい、どうしてもマシロ様と面会をと申されまして……」

折角小声で話していたらしいのにカナイがぶち壊した。

「そうなんですよ、お邪魔しても宜しいですか?」

僅かに開いていた扉から、にゅっと手が生えてきて、観音開きの扉が一枚開け放たれた。それと同時に白い大きな塊が突進してき……

「うわあ!!」

『主っ!』

篤い抱擁を受けた。

巨大な犬だ。

私は勢いに尻餅をついたらワンコはその足の間から抱きついてきて覆い被さる。片方の腕で何とか身体を持ちこたえるが、流石にキツイ。

そして、冷たい。

雨に濡れてますよっ!

「ハクア、駄目ですよ。マシロさんが潰れます」

その一言にぐいぐい押してきていた力が少し緩んだ。私がほつとしたのも束の間、目の前のワンコは、ふっと人の形を取った。そして視界はいつきに真っ暗になり今度はぎゅぎゅう抱き締められる。

「主っ！ 大事無いか。大病を患っていると聞いた！！」
「ぎゃあっ！！」

事態は悪化した。

……そして

とっても冷静な訪問客が、犬人間を私から引き離してくれた。カナイは用件を伝えに来たメイドさんに部屋の片付けを頼み、山と詰まれた本を移動させたあとだった。手際が宜しいようで……。

「……で、長期療養とありましたが、一見したところご健勝そうに見えるのですが？」

優雅にティーカップを傾けている人は、マリル教会というところの司祭様で、レニさんというらしい。そして、私の膝の上に顎を乗せて懐きまくっている犬は、ハクアといい白銀狼という種類の狼だそうだ。カナイにこそりと教えて貰った

「ああ、元気だ」

「ではなぜあのような連絡を……」

やわやわと膝の上のハクアの頭部を撫でていた私が視線を感じて顔を上げると向かい側に居たレニさんに、にっこりと微笑まれた。ぽうつと頬が熱持ってしまい私は慌てて顔を伏せた。

「あれは同じように蒼月教団のレムミラス氏のところにも送ったんです。全てに中立であると誓約を立てたものが、この王宮にのみ滞在しているとあれば、特に蒼月教徒は面白くないでしょうから」

王子にすらタメ口のカナイが敬語を使ってる。若干上からっぽいけど。驚いている私を他所にカナイは話を続ける。

「病気は病気。療養中も間違いいはないです。虚言は述べていません。ただ、少しばかり特殊な症状で……」

どこまで説明したものかとカナイは口籠ったのだろう。それを察したようにレニさんが頷き口を開く。

「なるほど、その辺りは察しましょう。記憶障害が出ているようですし」

レニさんの台詞に私は再び顔を上げた。私の目はどうして分かったのか？ と、無言で問い掛けていたのだと思う。カナイが短く嘆息し、あゝあ。と小さく漏らしたのが聞こえた。

「普段のマシロさんは、ハクアの受け流しももう少し上手くやるようになっていましたし、私にもそれほど余所余所しくはないでしょう？ そんなに縁遠い間柄ではないはずですよ」

ね？ とにっこり同意を求められても、私には分からない。分か

らないからカナイに助けを求めるように顔を向けると、カナイは小さく肩を竦めてレ二さんに説明を始めてくれる。

「あまり公にはしないで貰いたい。仰るとおり、マシロは記憶を失ってます。一部、なのですけど……今現在、全てにおいて調査中なんです。一番はマシロの記憶を取り戻すことを前提に」

「なるほど、また何かに巻き込まれてしまっている、と、お考えなんですね。マシロさんはそういうの得意ですからね」

おっと、私がいうべきことではないですね。失言でした。と、楽しそうにころころと笑うレ二さんに対しカナイは苦虫を噛み潰したような顔をして「ほんとにな」と小声で漏らした。

『では主は私のことも覚えていないのだな』

くーんつと鼻を鳴らしつつ、そう口にしたハクアに申し訳ない気持ちになる。

「ごめんね……。カナイとシゼが尽力してくれるから、きっとそのうち戻るよ」

『ああ、身体に無理が掛からなければそれで構わない』

私がハクアと話をしている間に、カナイとレ二さんは話を進めていた。

「昨日今日の記憶がない、というわけではないようですね。もしかして、こちらに来てから……ですか？」

「……ああ」

レ二さんの問いにカナイが頷けばレ二さんは、なるほど。と、締

め括って「ハクア、長居は身体に障ります。お暇しましょう」と立ち上がった。ハクアが名残惜しげに立ち上がると、伏せていた金銀妖瞳が真っ直ぐに見上げて寂しそうに尻尾を垂れる。

「ごめんね」

いい表しようなない罪悪感に襲われる。彼らの知っている私は、今の私じゃない。私ではその代わりは勤まらない……それがとてもどかしい。

暇を告げる二人を扉まで送り、そこでハクアは私の気持ちを察してか、丁度お腹辺りに来る頭を擦り付けて『主であることに変わりはない』と告げた。

『主が気に病むことはない。私は忘れないし、これからも良好な関係を築けると思う。気に病むな』

「ありがとう」

そう答えれば、レニさんも重ねてくれる。

「マリル教会はいつでも貴方を歓迎します。安心して私の元をお尋ねください」

そして私の手を取ると指先に軽く口づける。

「っあ、ありが、とう……」

赤くなる顔を抑えることも出来ずに、もごもごとお礼を告げた私に、レニさんにはっこりと微笑んで「いいえ」と口にする。

「心配しなくとも、マシロの件はこちらで解決します」

ほんの少し^{けん}険を含んだ声が聞こえてきた。

声の主はエミルだ。

少し慌てて駆けつけてくれたらしい、僅かに頬を上気させている。

第三十一話：不味い！ もう一杯！

「おや、エミル王子」

「約束も取り付けず、ここまで入城されるというのは、些か礼儀を弁えぬ愚行だと思えますが」

「王城は今かなり手薄ですねえ、まるで喪に服しているあのときと同じようです」

「……ことは時が来れば公になります。今、外野が事態を憶測することは必要なことを見誤りますよ」

二人とも笑顔だ。

今日の天気の話をしているように、なんでもないことのように、口になっているのに、なんだろう、この寒々しい感じ。私はハクアを後ろに隠し、カナイの影に隠れた。

カナイは「俺を盾にするな」とぼやいて苦笑したが、そのまま私の前に立ってくれた。

「それはそうと、王子。私は万が一の確立だったとしても王宮に召抱えられたのかと思いましたよ。いくら貴方がご執心だったとしても段取りも踏まずに」

「ねえ、帰るんじゃないの？ それ以上無駄口叩くようなら切り刻むよ。棟の前の馬車が邪魔なんですから。慈悲をかけられて生きてるんだ、もっと上手に立ち回りなよ」

……っ

刹那、窓を撃つ雨の音が激しくなったような気がする。

傍にいたハクアが絨毯の床に爪を立て、私はカナイの腕を思わず掴んだ。廊下の淡い明かりを受けキラリと光る。鋼の細い切っ先が

レニさんの喉下に突きつけられる。

「アルファ。剣を納めて。マシロの部屋の前だ」

エミルの言葉に剣を構えているのがアルファだと再確認する。

その制止にアルファは無言で、ひゅつと空を切り剣を鞘へと納める。普段のキラキラした天使のような表情はなりをひそめ、今はレニさんに対してか、何に対してなのか……嫌悪を露わにしている。

眇められた瞳はレニさんを暫らく睨んだあと、ふいつと逸らし塞いでいた退路をあけた。

レニさんは、さっきまで抜き身の剣を向けられていたにも拘らず、感情の読めない涼しい表情のまま「長居して失礼しました」と口にしてハクアに声を掛けると、その場をあとにした。

その後ろを、アルファはきつちりと着いていってしまった。

「あれ、大丈夫なの？」

「うん、ちよつとご機嫌斜めなだけだから……」

どこまで斜めになればあれほど、雰囲気を変えられるのだろう。

そのあとアルファは不機嫌全開なまま戻ってきて、私から離れなかった。別に良いんだけど、言葉通りべったりさんだった。

無言で……。

私は新手の拷問かと思うような時間を過ごすことになった。

数日何事もなく私は王宮内で過ごした。暇かといわれれば確かにかなり暇だ。

三日ほど前まではカナイが毎朝足しげく私のところに通ってくれて、私の病気？ の進行具合を確かめてくれていた。

でも、その原因が分かり、それ以上の変化が現れないようにすることに成功したあとはぶつつりと来なくなった。

身の回りのことは全てメイドさんがやってくれる 私つきの侍女は三人（シシイにララ、リズ）も居て、放っておけば顔を洗うことすら手伝ってもらえそうな勢いで世話を焼いてくれる お嬢様やお姫様に憧れる気持ちがないわけではなかったけど、それを実際に体験すると、正直一般市民で良かったと思う。

「マシロさん、今日の分の薬を持ってきました」

相変わらず外は雨続きで外出も間々ならず、私はぼんやりと外を眺めているとシゼが部屋に入ってきていた。もちろんノックをしてリズに扉を開けてもらったのだと思うけど、私の耳には全く届いていなかった。

「ありがとう」

私はシゼが届けてくれた、どくだみ茶をものすごく濃く入れたような、微妙にとろみのある液体が入ったコップを受け取る。ありがたいのか、ありがたくないのか人肌の温度で飲みづらいことこの上ない。

「飲んでください」

明らかに渋っている私に、シゼは冷酷にもあっさり告げる。

「これ味の改良とか出来ないの？」

「そんなことに時間を費やして良いのでしたら検討します」

……「ごめんなさい。」

きつぱりとそういいきられて私は大きく一つ深呼吸して、コップの中身を一息に呷る。なんとか上がってきそうなのを堪えて飲み下せば「不味い」以外の感想はない。もう一杯なんていったことないのに毎日届く。

そう、カナイが来なくなった原因はこれだ。

私の中で記憶を閉じ込めてしまっているのは、今はこの世界に存在しないとわれている古代種の植物だろうというのがカナイとシゼが弾き出した見解だった。

ただ、ある一定の記憶・期間のみ封じている辺り呪い染みているから、何かしら変質を遂げたものを体内に植えつけられていると考えられ、下手に手を出せないで居るのが正直なところでもある。

それに……少しの実験に付き合っただけでも、私は目を回すような痛みを覚えてしまって……これ以上の侵食を防ぐことだけが今現在出来ていることなのだ。

「分かりました。もう少し改良の余地がないか、カナイさんが図書館に詰めている間に考えます」

涙目になってしまっている私に同情的な気持ちになったのか、そういつてくれたシゼにお願いします。と、重ねた。

「カナイ、いつ戻るかな？」

「明日には一度戻りますよ。明日は式典ですから雨だろうとなんだろうと、皆さん揃います」

カナイは先のシゼの言葉どおり、図書館に詰めている。

王室所蔵の資料だけでは足りないと、世界の全てが標されているといわれる図書館に調べ物をしに出たつきりなのだ。

ちゃんと寝てるのかとか、食べてるのかとか、心配したらアルファに「本の虫なので、あれは一種の病気です」といわれた。ようするに好きらしい。

調べることがなくなったら、カナイはいつきに老け込み隠居するだろうからあれで良いのだそうだ。

「式典つて？」

「現国王が退位表明を行います……以前お話しませんでしたか？」

小首を傾げて訪ね返され私は直ぐに思い至る。

「……もう、あれから一週間も経ったんだね」

「ええ。これからまた暫らく忙しくなります。……ああ、僕は変わりませんけどね」

つまりエミルがといたいのだろう。

喪に服しているこの期間、みんな静かに過ごしているという話なのに、エミルは毎日忙しそうだ。それなのに、私の相手も欠かさず

してくれる。　噂のラウさんの特別授業にも参加させてもらった。
掴みどころのない人だ　嬉しいけれどほんの少しだけやっぱり申
し訳ない。

何か役に立つことはないかとシシィたちにも聞いてみたら、その
ままで良いといわれてしまった。ようするに役立たずは大人しくし
ているということだろう。

物凄く凹んだ。

シゼを見送ったあと、ぼんやりと時間を持て余す。私が動けば誰
かしら一緒に動かないといけないようになっているみたいなので、
私は極力良い子にしていた。

濃灰色の疑惑（前書き）

本編とは関係なくもないけれど、直接は関係ないマシロ視点では語られることのない裏側のお話です。

目を通して通さなくても、問題ないように構成してあります。

お時間があり、尚且つ混乱しないぞっ！（ここ重要）という自信のある方だけ是非どうぞです。

濃灰色の疑惑

「エミルさん。報告しても良いですか？」

マシロの部屋から自室へと戻れば、アルファが直ぐに部屋へ訪ねてきた。

表情からして良い話というわけではなさそうだ。エミルは短く溜息を吐いて「どうぞ」と促す。

「例の件ですけど、詳細な数字が挙がりました。依頼遂行は無事完遂されましたが、被害もかなり出ています」

いって、脇に挟んできていた書類を持ち出して、エミルの机の上に載せた。

「数字は……報告書にしておいたので、それを見てください」

「……うん。あとで目を通すよ」

「正直、騎士団への早い人材補填が必要です。その人材選出のために、暫らく忙しくなりそうです。これは僕ですけど……」

アルファは面白くなさそうに眉を寄せて肩を竦める。

エミルはそれに苦笑しつつ「そう」と呟いて、窓の棧に肩を預けると、分厚い雲に遮られいつもそこにあるはずの二つ月も照らさない庭先を所在無く眺めた。

……相変わらず雨が降っている。

好きとか嫌いとか天気に関して、アルファほどの特異な感情は持ち合わせていないものの、晴天の多いシル・メシアでの雨季は都全

体を暗雲で覆ってしまっているようで気が滅入る。
事実良くないことが起こるのは大抵この時期だ。

「じゃあ、カナイかシゼを死てるよ」

ぼつと口にしたエミルにアルファは、残念そうに眉を寄せ肩を落とす。そして、やや間を空けると、窓硝子に映るエミルと目を合わせて訪ねた。

「ラウさんのほうはどうだったんですか？ 黒？」

「……………うーん。白を切られたけど、濃灰色つてところかな？
彼はなかなか踏み込ませないよ。それに……………」

硝子越しに視線を合わせていたアルファから、ふつと目を逸らして溜息を重ねる。

「話したそうだよ」

「え？」

「マシロに、あの夜のことは伝えただって……………マシロ、記憶が戻らないほうが良いかもしれない……………。もちろん、最終的な判断はマシロに任せるけれど、でも……………きっと悲しむことになる」

暗い表情を隠すことないエミルに、アルファは事態が飲み込めないというように「え」と重ね、そして「冗談キツイ……………」と苦々しく吐き出すと前髪をかきあげ頭を抱えた。

「僕も口止めしていたわけじゃない。かん口令でも強いていたなら、責任を求めることも出来るのだけれど、今回は難しい」

「でも、マシロちゃんがそういうの嫌がるのくらい分かる」

最後まで口にしないうちに、自ら口を閉ざした。

分かっているからこそ、伝えたのかもしれない。このところシル・メシア全域平和だった。穏やかな日々は、彼にとってさぞかし退屈なものであつただらう。

「エミルさん、命じてください。僕なら、ラウさんを消せます。居ないほうが良い」

真つ直ぐに射抜くようにそう告げるアルファを振り返り、エミルは哀しげに「駄目だよ」と首を振る。どうして！ と責めるアルファに苦笑して駄目だと重ねる。

「消すのは簡単だろうけれど、アルファも無傷で済むとは、正直思えない。それに、アルファが傷付くことも、ラウが居なくなることもマシロは望まないだろう。僕らにとつて、ラウの代わりはいくらでも作ることが出来るけれど……きつと、そんなことでは納得してくれない。どうせ、恨まれるならもう少しましなことで恨まれたいかな？」

「でも」

「ラウが消えてもマシロの件を解決することにはならない。下手をしたら最後の一手を逃すかもしれない……今はまだ、そのときじゃない……」

だから、勢いに任せてうっかりしないでね？ と重ねたときにはエミルはいつもの笑みをその顔に戻っていた。

……コンコン。

まだアルファが食い下がろうとした丁度そのとき、訪問者を知らせるノックが響いた。こんな時間に王子の私室へと訪問してくるも

のは極僅か。とても限られた人間だけだ。

そのため、エミルの返事を待つこともなく「入るぞー」と扉は開いた。

「なんだ、アルファ居たのか？」

物凄くむくれたように見えたアルファに、入室してきたカナイは「どうした？」と首を傾げる。

「どうもしません。どうもしませんけど。カナイさんって間の悪い人ですよね！」

「……何？」

アルファに責められて状況説明を求めらるるうちに、エミルを見たが、エミルはにこりと微笑んで「僕は丁度良かったと思うよ」と答え、机まで戻る。

そして、机上に載ったアルファの報告書を、ちらと見たあと隅に重ね。大量の資料をお供にしてきたカナイの荷物置き場に当てた。

どさどさつと無遠慮に放り出される資料と本の山に、アルファは「何ですかそれ？」と素直に眉を寄せた。

カナイは、作業もそこそこに出てきたのか顔に当てたままになっていた眼鏡を外しながら「あー……お前にいつたっけ？」と目頭をぐりぐりとマッサージしながら話を進める。

「エミルは、シゼからある程度話聞いてると思うけど、マシロを宿り場にしている古代種の資料だ。シゼからエミルがその資料を欲しがってるって聞いたから、王宮（こしやう）にあるぶんだけは集めてきた」

アルファへの説明をしている間にエミルは机上の本をばらばらと

捲っていた。

「紙が挟んであるところが該当箇所になる。全てを見る必要はないと思うから、注釈も入れておいた」

「カナ伊さんが注釈入れるってことは、全部目を通した資料なんでしょう？ エミルさんが見る必要ないじゃないですか」

そんな面倒させなくても……アルファはそういつつ、机上に歩み寄って、本の山をこつんと突いた。

「僕が知りたいっていったんだよ。シゼとカナ伊に任せているし、それに不安なんてないけど……知りたいんだ。マシロが今、何に苦しめられているか……」

ぱたんつと閉じた本の装丁を、つつと指先で撫でながらそういったエミルに、アルファはそれ以上食い下がれなかった。

「あとー、図書館にも問い合わせたが希少種の保管は学長が行っていたらしい」

「それって、つまりラウさんが肩代わりしてたってことでしょ?! やっぱり黒じゃないですかっ!」

苛々とそう口走ったアルファに、カナ伊はうーん、と唸って「それがそうともいい切れないんだ」と濁す。

「保管されているものは、あるんだ。図書館に」
「え?」

「まあ、それが本物がどうかーなんて、今じゃ発芽させるのも困難だろうし、分かるやつなんて種屋くらいだろうけどさ」

それで、その種屋は相変わらず何してるんだ？ と話を振ればエミルは難しい顔をして唸ってから口を開く。

「ブラック、ブラックね……うーん……何か臍を曲げてるね。使いを出しても聞かなかったことにするんだよねー……こっちも人手不足になりそうだよ」

「じゃあ、そっちに僕が回りましょうか？」

「ううん。あれは放っておいて良いと思うよ。少し時間を置くよ……」

仕方ないなというように嘆息したエミルにアルファは曖昧に頷いた。

そのあとは銘々然して当たり障りのない会話をし、暇を告げた。

自室に戻るまでの、道すがら肩を並べたアルファにカナイは、重い口を開いた。

「手、出すなよ」

「……なんのことですか？」

魔法灯の明かりだけで保たれる廊下は、歩くのに不自由しない程度の明かりだ。その中でも、アルファが苛々としているのは肌で感じる事が出来る。

カナイは、そのことに嘆息し「ラウさんのことだよ」と率直に告げた。

「あれ、黒いでしょう？ カナイさんだっけそう思ってる。見逃すんですか？」

「エミルは命じたか？」

「……いえ」

「お前は何だ？」

「……………エミル様の護衛騎士です」
「分かってるなら良い」

でもっ！ と尚も重ねそうだったアルファにカナイは話をさせなかつた。

「考える。今がどれだけ不安定な状態か。お前がもしラウさんに剣を抜いてみる、何が起こるか考える。今、王宮内部で争うのは良作じゃない。あれでも一応、あの人はここでの権力者だ。あの人に味方するものも多い。報告、上げたんだろう？ 今、騎士が足りない」と、護衛が足りないのだろうか？ 采を違えるな……………」

「……………分かってる、分かってるっ！ でもっ！」

「アルファ……………」

「良いんですか？ 許すんです、か……………マシロ、ちゃんをあんな目に合わせた奴を……………カナイ、さん、は、エミル、さん、だって、なんとも思わない……………はず、ないのに」

ぎりぎりとお歯を噛みながら搾り出すアルファの台詞に、カナイは「さあな」と軽く答えるだけだ。

「ああ、俺、明日から図書館詰めるから。時々は様子見に戻るけど、暫らくはシゼに任せっ切りになると思う。お前も新人いびりに飽きたら着いていてやれよ」

「酷いな。別に僕はいびってないですよ。死に急ぐなという警告です」

やっと剣の柄から手を離れたアルファを、カナイはちらとだけ確認して、へいへいと軽口で閉めると「じゃあな」とひらひら片手を振りながら自室へと続く廊下へ折れた。

アルファはその後姿を見送って足を止めると、傍の窓に歩み寄って、雨音だけ忙しく響く闇を睨みつける。

「采を、違えるな……か……」

僕が守るべきは現在王位継承順位第二位の王子。エミリオ様だ……白月の姫でも、マシロでも、ない……違えるな、違える、な……。

「ちえ」

結局、カナイさんだって抑えきれないからここから出ていくんだ、どっちが大人気ないんだよ。

アルファは行き着いた答えに苦笑して、こつんと窓硝子を叩いた。

そして、柔らかな絨毯を、抉るくらいの勢いで蹴り上げてから自室へと戻った。

空にも二つ月は姿を現さない。

地上の月も割れてしまった……世は今、しくしくと泣き続けている。

第三十二話：刷込みとか吊り橋効果とか

「エミルはまだ部屋に戻らないのかな？」

「そう、ですね……まだお戻りにはなっておりませんが。もう遅い時間ですし、もしかしたら、あそこかもしれないわ」

そういつて微笑んだシシィに頼み込んで、思い当たるところへ案内してもらった。

相変わらずの雨模様だというのに、エミルは庭園のポーチで過ごすことがあるらしい。大抵の場合、一人で居て誰も寄せ付けられないから少し躊躇したけど、駄目そうなら帰れば良いだけだ。

私は廊下から脇に逸れて目的のポーチまでは、小さな石の敷き詰められた道を傘さして歩いた。傘に当たる雨音が心地良く感じる程度には緩くなっていて良かった。

途中で振り返れば、心配そうに見守ってくれていたシシィが、ぺこりと頭を下げて来た道を帰っていくのが見えた。

「エミル？」

屋根のあるところまで来て、私は外に向かって傘を閉じ、ぱんつと軽く払って柱に立て掛けてから声を掛ける。

「……………あれ？ マシロ……………どうしてここに？」

私に来るのはかなり意外だと思ったのか、ほんの少しだけ目を丸くして驚いた様子だったエミルは直ぐに私に隣を勧めてくれた。

私は素直にそこに腰掛けてから質問に答える。

「シシイが、多分エミルはここだろうって連れてきてもらったの」
「そんなに遅くなつてた？」
「うん、結構遅いよ」

全く気がつかなかった風なエミルに笑みを零して頷いた。そして、私は持つてきていたブランケットをエミルの肩に掛けた。

「こんなところでじっとしてたら体が冷えちゃうよ」
「……ありがとう」

掛かったブランケットを手繰り寄せて、ふわりと微笑むエミルはとても綺麗だ。でも少しだけ哀しそうに見えるのは私の気のせいかな？

「エミル……大丈夫？ 何か哀しいことあった？ あ、えっと、私じゃ詳しいこと分からないし、あんまり役に立たないけど、えーつと……誰でも良いから話をするだけでも、その……」

いいながら、エミルの立場上、心うちを明かせる人間が少ないことくらい一般人の私にだって分かる。自分が口にしたことの浅はかさ気がついて、私は最後まで口にすることは出来ず口を閉ざした。エミルはそんな私に気がついたのか「ありがとう」と口元を緩めて笑みを作ったあと、直ぐに瞳を憂いに翳らせた。

「うん……そうだね。故人を偲んでいたんだ」

……あ

そうか、今夜が最後なんだ。明日からは普通の、いや、エミルにとってはそれ以上に忙しくめまぐるしい日がやってくる。だから今

夜くらい心静かに過ごしたって……。

「ごめん、私気が利かなくて……えっと、部屋に戻っておいた方が」
「妹を……妹を亡くしたんだ」

立ち上がりかけた私の足にそつとエミルの手が置かれる。そこにいてというように添えられた手に私はもう一度腰を落ち着けた。

「異母妹だったんだけど、小さい頃、良く遊んだんだ」

「……うん」

「僕は少し普通じゃないんだ……その子には双子の姉が居て、いわれたよ。決まっていたことだと……悲しまなくて良いと……でも、僕は生きていて欲しかった。生きていて欲しくて、ただその我侷で、マシロにも無理を掛けていた。無理を掛けて……普通には手に入らない薬を作らせ続けて、でも結局、駄目だった」

私の膝に載せられた手が、きゅっと拳を作る。隣を見上げてモエミルはこちらを見ては居ない。しとしとと降る雨をじっと見ている。苦悶の表情を浮かべて。

「思い入れのある人を亡くして、悲しむのは当然だと私は思うけど……」

臣兄や、郁斗が……そう思うだけで、心が鉛になったようにずっしりと重くなる。思うだけで本当ではない。事実ではないのにそれだけ胸が痛むのだから、現実を起こっているエミルはもつとずつと苦しくて当たり前だ。

それなのに、エミルは苦しそうに首を振る。

「ここでは違うんだよ。ここでは違う。尊ばれるのは“種”だ。個

人の命なんて種の入る器でしかない。器が壊れたからって悲しみを抱いたり、その思いに縛られるのは普通じゃなくて……僕だって、選択をした。僕が決めたんだ……それなのに、まだ迷ってる。これで良かったのかって……」

記憶のない私にはこの世界のことが良く分からない。エミルのいう種というのも理解して上げられない。

「駄目だな」

はぁ、と深く長い溜息を零してそう締め括ったエミルは、壁に背を預けてぐんつと空を仰ぐ。顔に当たる雨に瞳を細めて深呼吸。頭を冷やしているのだろうとは思っけれど、あまりお勧めできるような方法だとは思えない。

エミル、と声を掛けて袖を引けば、直ぐに頭を起こしてくれた。

「国を背負うかもしれない人間が思うことじゃない」

雨に濡れた髪をかき上げながら、そういつて苦笑する。

直感的にエミルが泣いていたのだと感じた。

……エミル様は今とても傷付いている……。

シゼの言葉を思い出した。こんな当たり前の理由で苦しんでいるのに、シゼは自分も含めみんなこの痛みが分からないといっていた。

どうして？ どうして、分からないんだろう？

第三十三話：キスまでの距離

「……私は……私は駄目じゃないと思うよ？ 私には、特に今の私にはこの国の事情なんて分からないけど、命は軽んじて良いものじゃないと思う。私は、その、えっと……エミルが何を選択したのか分からないけど、でも、迷ったり悩んだりするのは間違っと思ってないと思う」

だから、一人で泣かないで……

いいかけて、手を伸ばしかけて、私は慌てて引っ込めた。こういうときに触れていいのは限られているはずで、きつと無遠慮に誰もが触れていいわけじゃないと、そう、思う。

今の私にはエミルとの距離が、分からない。

私は、一度だけきゅっと唇を噛み締めえてから、話を続けた。

「迷いが無い恐れを知らない、何かを決断するときに必要なことだと思うけど、でも、私は、迷いながら悩みながらの決断していくほうがずっと大切だと思うよ」

自分の中で口にしたことを反芻する。私は変なことといったらるか？ いや、寧ろ何いってんだ私。

「えっと、その……足を止めなければ、考えることをやめなければ、それは間違いじゃないと、そう」

思う。と続けたかったのに最後までいえなかった。

エミルの影が降ってきて、私を包み込むと「マシロまで濡れたらごめん」といってから腕に力を込めた。触れることに躊躇してしまつた私は馬鹿みたいだ。

雨に濡れたせいか、いつもより強くエミルが使っている香水の香りが纏わりつく。とても柔らかくて若草のような香りにほんのり甘い香りが混じる。

「いい香り」

「え？」

しまった。つい場違いにも程がある感想を述べてしまった。

「あ、ごめん。そのエミルって優しい香りがするなど、そう、思つて」

「ごによごによと口にするとエミルは、ありがとつと頬を寄せてくる。私はあまりの近さに呼吸をするのも戸惑われるのに、エミルにとってこの距離はいつも通り、なのかな？」

「僕も気に入ってる。僕をイメージしてくれたんだって……凄く嬉しかった」

香りもお手製なんだな。

プレゼントだったのかも、それにエミルのいい方からすれば女の子だ。調香をするなんて上流階級の趣味は違うな。なるほど、と続けた私とそのあとの言葉が続かないことに気がついたのが、エミルは少しだけ迷つたように唸って続ける。

「あー……その、記憶にないときの話をするのは、混乱して可哀想

かなと思っただけど、念のため……マシロがくれたんだよ？」
「え？」

私が香水を作るような人間だったとは！ というか、なんか身につける香りを送るなんて……なんとというか、やはりそんなに近しい関係だったのだろうか？ エミルが予想したとおり混乱した私にエミルは、ふふつと笑いを零す。

そして、私の背から片手を離すとそつと頬に触れた。

まだ少し冷たい手に、なんだか苦しくなつて自分の手を重ねる。微かにぴくりと反応したけどエミルはそのまま居てくれた。

冷たいエミルの手がじわじわと熱を取り戻してくれる。心の中も同じように暖かくなってくれれば良いのだけれど……そんなことまで、私に出来るとはやはり思えない……。

自分の不甲斐なさに胸が痛む。

シゼは何もしなくても良いといつてくれた。傍に居てあげて欲しいと。

でも、でも、そんなのじゃ全然足りない。もっと、もっと、慰めてあげたい。私でエミルに降り注ぐ悲しみを癒してあげられたら良いのに。

強く、強く、そう思ったらじわりと目頭が熱くなつてしまった。

「マシロ？」

「っ！ あ！ ごめんっ！」

視界が緩んで、慌てて顔を拭おうと思つたら手を押さえられた。え？ と顔をあげると「僕にさせて」と微笑まれエミルの長い指が

そつと目元を拭っていく。

何度も優しく、目元をなぞる。頬を撫でる。
くすぐりたい。苦しいくらい心拍数が上がってしまう。

……でも、それすら心地良い。

エミルの優しさがじわりと染みてくるような気がする。

「マシロはやっぱりそうやって僕を甘やかせるよね……」

不意に零したエミルの言葉に、私は「え？」と目を丸くした。それが可笑しかったのか、エミルはやっぱりと瞳を細める。

「それは、マシロが優しいからだって、分かってるんだけど……マシロの傍は凄く心地良い」

ど、どうしよう……やっぱり、凄くドキドキする。

恥ずかしさに直視できずに、逃げるように視線を逸らした。きつと私顔真っ赤になってるし、きつと触れられてるからそればれてる、よ、ね？

頬に掛かっていた手が、するりと滑りおきてきてそつと私の顎に掛かる。そこにほんの少しだけ力がかかって私の顎を持ち上げた。

恐る恐る視線を上げれば、エミルは凄く近い距離に居た。睫毛の本数まで数えられそうな距離に、私は思わず息を詰める。でも見つめてくる月さえ拝めない夜の闇に黒く翳った瞳から逃れることも出来ず、ただ囚われたように私は見つめ返していた。

マシロ……と名を重ねられ、私は瞼を落とした。

吐息が感じられるほど近くにきて「……………」とエミルが息を殺した。思い描いていた感触が来ず不安に瞼を持ち上げればエミルが暗い中でも分かるくらい真っ赤になって口元を覆っていた。

「ごめん。マシロの気持ちも考えずに……………」

「……………え、あ……………」

私こそすみません。言葉に出来ずに私はただ赤くなる顔をエミルから逸らした。そして目に入った指輪に私は瞳を細める。

もしかしたらエミルが贈ってくれたものかもしれない。もしそうなら、私はきつとエミルに恋をしていたのだろうな……………と、思うと自分の知らない私にほんの少し嫉妬しそうになる。

「戻ろうか?」

「え、あ、ああ、うん」

立ち上がったエミルが私に手を差し出すから慌てて私はその手を取った。

「エミル、傘なの?」

「うん、走ってきたから。マシロの傘に入れてくれる?」

「もちろん」

記憶が戻ったら、私たちはもっと近くなるんだろうか? それとも……………。

第三十四話：刻まれたもの

……翌日。

私は、式典の邪魔にならないように自分の部屋で良い子で過ごした。

退屈だったけれど、でも、今以上に迷惑は掛けられないし、私に出来ることはやっぱりお留守番するくらいだ。

エミルとは、なんだか気恥ずかしくて、エミルは普通にしてくれているけど、なんとなく目を合わせ辛い。それはきつと私の我侷なのだろうけれど、高鳴る鼓動に何かを間違えそうで、ほんの少し怖いような気がしていた。

何が、怖いんだろう？

変なの。

みんな私の混乱を防ぐために、あまり多すぎる情報の開示は行わないのだと思う。昨夜だって、エミルもそういつていた「マシロが混乱すると可哀想だから」と。

だから、私に変な違和感に囚われる必要はないはずなのに、本当に一体何が怖いんだろう？

そんなことをぼんやりと考えて、時折リズムやララと当たり障りのない会話をした。二人とも仕事熱心なのか口止めでもされているのか、質問にも完結にイエス・ノーと答えて終わってしまう感じで、味気ない。でも、あまり親しい会話とか止められているのかもしれないと思うと、私も馴れ馴れしくすることは出来なくて、自然と無口になっていた。

夜は大抵シシイと一緒に居てくれる。

シシイは三人の中で一番年若くて、大人と子どもの間という雰囲気を持った子で、親しみやすい。突っ込んだら確実に口を滑らせるタイプの子だろうなというのが直ぐに分かった。分かったから、やっぱり私はあとからシシイが困るようなことは聞かないことにしていた。

そのシシイに、エミルが部屋に戻ったことを聞き、私はエミルの部屋へと向う。

いつもなら廊下から廻って　　どういうわけか、私の寝室からエミルの寝室にも繋がっているのだ　　行くのだけど、なんとなくその日は寝室を突っ切った。そして扉の前でふと足を止める。

中から話し声が聞こえる。まさか独り言ではないだろう。こんな時間の訪問者と、漏れてきた声に手をとめてしまった。

「やっと顔出したね。全く……使いを片っ端から消してくれるから、人手不足になるところだったよ」

「足りないのなら、民衆から徴収すれば良いでしょう？　人員だつて喜んで差し出す」

「……そういう冗談は面白くない」

確かに面白くないが、エミルにしては珍しく不機嫌声だ。エミルでもあんな風に話す相手がいるのだと思うとちよつと不思議だ。

私はノックしようと挙げた手を、ほんの少しの好奇心によって静かに下げた。

「別に冗談のつもりはありませんけどね。それより、本題をどうぞ。私は忙しいのです」

「マシロのこと以上に重大なことなんてないよね？　それをどうして放っておくの？」

自分の名前が出たことにも驚き、不遜な態度で答えていた相手が僅かに息をつめたのが分かった。

「貴方方に任せているだけです。それとももうお手上げなのですか？ 私に助けを希こいねがうのですか」

は「……とエミルの深い溜息が聞こえる。

あんな風にエミルが息を吐くことも珍しい。「あのねえ……」と、どこか呆れたように続けようとしたエミルの声に被さるように相手は続けた。

「貴方の望みでしょうか？」

「え？」

「マシロが最初に出会ったのが、もし、自分であったなら。その隣で手を取ったのが自分であったならと、そう願っていたはずです」

「……………」

……………どくんっ

私の心臓は強く脈打った。

エミルが願っていた。だとしたら、実際は違っていたということだ、違っていたのならそのときの私は、誰に出会い、誰の手を取っていたのだろうか？ 胸がキリキリと痛み苦しくなる。誰とも知れない相手の言葉に、エミルと同じように私も酷く動揺する。

どういう意味が分からない。

分からないけれど、エミルにとってそれは突かれないところだったのだろう。エミルが、声を殺し逡巡しているのだろうことが伝わる。

よく分らないけど、助けが必要かもしれない。

私は、思い切ってドアノブを握り直した。

ぐっと力を入れたところで、話はまだ続いていて……私はその扉を押し開くことが出来なかった。

「それに、今、マシロは私を近寄らせないでしょう」

相手のその台詞に、エミルは一拍おいてから「なぜ？」と問い返した。

「記憶がないというだけでマシロは、マシロのままだよ。彼女がそうあること以上に大切なことがあるの？ 意味もなく、誰かを寄せ付けないということはないと思うけれど……」

何となく雰囲気で相手が笑ったのが伝わった。

「無理ですよ……マシロは私を受け入れられない。まっさらなところに私は一番最悪な記憶を刻んでしまった、マシロは私を知らない……知っていることといえば、私が、唯の人殺しだということだけ……」

……ガタッ

思わずドアノブに掛けたままになっていた手が震えて大きな音を立てた。

私は、立ち聞きしてしまっていたのがバレた申し訳なさよりも、相手が口にした台詞の方が衝撃的で……足音が扉の前まで来ていることに気がつかなかった。

閉じたままの扉が静かに開き私はよろめき出た。

「大丈夫？」

と、私を支えてくれたのはもちろんエミルだ。

エミル越しに、部屋の中央に立っていた人物が視界に入る。

……ずきっ

どくんつとまた大きく心臓が脈打ち、視界が揺らぐと酷い頭痛がぶり返してきた。どんだん息が苦しくなってくる。まるで誰かにぎりぎりと言を絞められているようだ。

「っ、あ……あ……」

「ちょ、マシロ?! 大丈夫？」

ずるずると膝から崩れ、エミルは寄りかかる私を慌てて支えてくれる。

視界の隅で、黒い靴先がこちらに一步踏み出したあと、きゅっと後ろに引き、そのまま消えてしまったような気がする。

ふざけた、猫耳に……尻尾……一度見たら絶対に忘れないだろう立ち姿だ。私はその姿に殺されかけた。首を、絞められ、て……。

頭の中で、月を背にしたその姿が明滅する。

その余りにも現実離れた、優麗な姿に息を呑み、恐怖する。

「ぶ、うっ……っは」

……息が、出来ない……息が……。

苦しい。助けて、殺される。コロ、サ、レ、ル……

「誰か！ シゼを呼んできて！」

私の視界は何も捉えず、白と黒に目まぐるしく点滅する。
エミルの慌てた声を最後に、私は意識が途切れた。

第三十五話：つまり園芸屋さん？

次に目を覚ましたときには、もう見慣れたベッドの上だった。ゆっくりと呼吸すると、もう息苦しくは感じない。

私は、解放された。

「マシロ？ マシロ、大丈夫？ 急に倒れたから驚いたよ……平気？」

どこともつかないばしょを彷徨っていた私の視界にまず入ったのはエミルだ。

凄く不安そうな顔をして覗き込んでくれている。私は、何とか強張る頬を緩めて笑って見せた。そして、ゆっくりと身体を起こして、枕を背に座った。

もう、どこも痛まない。

それでもやっぱり軽い眩暈を覚えて、俯いてぐつとこめかみを押しさえてから深呼吸。そして口を開いた。

「さっきの人、誰？ 私、あの人に殺されかけたような、断片的だけど……急に思い出して……」

口元に添えた指先が微かに震えている。情けないな……。そんな私の手をエミルはそっととって包み込んだ。

「彼はブラックというんだ。僕は彼を擁護するつもりは微塵もないけど、彼がマシロに手を掛けるようなことは有り得ないよ……。だから心配しなくても大丈夫だよ？」

「…………でも、私確かに…………」

大丈夫だというエミルの言葉を疑うつもりはない。つもりはないのにあまりにリアルな記憶の断片に私は戸惑う。

「記憶が混濁してしまっているんですね」

そつとエミル越しにティーカップを差し出してくれる。中身はホットミルクだ。受け取って少し口に付けると、くどいくらい甘い。シゼ仕様だと直ぐ分かった。

続きを促すように、私もエミルもシゼのほうへと視線を寄せる。

「すみません。このところ実験的に古代種を弄ったので…………断片的な記憶が出てしまっているのかもしれないです。きっとその襲われた記憶は、白い猫のほうだと思います。同じ獣族で混同してしまっているでしょう」

申し訳なさそうにそういったシゼに、気にしないでと告げてから、改めて思う。私は日常的に命の危険に晒される生活を送っていたのだろうか？ 断片的な記憶…………確かに、顔ははっきりと思い出せなかった。

「マシロさん…………すみません。あの…………出来るだけ早く新しい解決の糸口を見つけますから」

私が物思いに耽ってしまったっていると、責任を重く感じたシゼが酷く消沈した台詞を吐いた。

「あー…………俺も図書館に戻って探し直す。もう少しだけ待ってくれ」

カナイまでそんなことをいい始める。

カナイは久しぶりにここに帰ってきたのに、少し休んだほうが良い。

私は嬉しいような申し訳ないような気持ちになって、でもやっぱり嬉しいほうが勝つのか自然と笑みを零していた。

「気にしなくて良いよ。二人とも頑張ってくれてるもん。ないものを追いかけても仕方ないし……抑止剤が出来ただけでも昨日今日のことを忘れてないだけでも凄いことだよ。ありがとう」

私にはここに来て一週間分くらいの記憶しかないけど、それでも忘れたくないと思う。消えてしまった私の記憶も、その期間を知っている人たちも今の私と同じように忘れないで居てほしいと思っっているのだろうか？ だとしたら、私はその思いに応えなくてはいけないのだろうか……？ だとしても私は今この場に居る誰も責める気にもなれない。

その日一日、私はベッドの中で過ごすことを余儀なくされた。

心配してくれるみんなに悪いから素直に従うけれど、眠るにも限界があるし退屈にも程がある。翌日のお昼前にはその限界が襲ってきた。

ぼーっとする頭を起こして私は大きく背伸び。ベッドから抜け出せば控えていたメイドさん 今の担当は昨日もお世話になったシィだ が慌てて駆け寄ってくる。

「大丈夫、私は病人じゃないから」

退屈すぎて死にそう。と素直にぼやくとシシィは困ったように微笑んだ。

「そうだ、ブラックってどんな人？」

とことごとく今日も飽きることなく降り続く雨を確認しに窓辺に寄りながら問い掛けた私にシシィは小首を傾げ「存じません」と口にする。

「え、昨日来てた、ほら猫耳と尻尾をつけてた変な人だよ」

頭上に両手を添えてぱたぱたと扇ぎながら、そこまで告げると合点がいったのか「ああ」と頷いた。

「彼は種屋です」

「……ふーん。園芸屋さんか……」

ぼつりと呟いて外を見る。地面にはこのところの長雨で小川のような流れが出来ている。

王宮に出入りしている庭師ってところかな？ ……とてもそんな風には見えなかったけど。偉そうだったし。雇われている人の態度ではなかったと思う。

それに何より、人を殺している、にしては……自由すぎる。みんなが深い介入を望まないことが分かるから、詳しく問質することは避けた。

きつと私の記憶が戻れば、この程度のパズルは解けるのだろう。きつとそのときの私は知っていたはずだ。だから、気にならないといえは嘘だけど、余計な心配をみんなに掛けたくないから、あえて

突っ込まない。

……それに……

窓ガラスに添えた手には指輪が光る。私が瞳を細めるとシシイがここにこと口を開く。

「綺麗ですね。ここでは『愛を叶える石』と呼ばれているんですよ。婚約や結婚する際によく使われる石なんです。でもそれほど立派なもの私は今まで目にしたことありません」

ターリ様方もお持ちではないと思いますよ。と、夢見るように続けるシシイは女の子だ。シシイの話をそのまま受け取るなら、私にはやはりそれを贈られるような相手が居て、その人はこの国でそれなりの影響力を持つ人物なのだろう。

それを思い出せないのはやはり少しだけ残念だ。

頬が緩むのをなんとか堪えたところでコンコンとノックが聞こえた。シシイが急いで扉に寄りそつと開ける。

「マシロ、気分はどう？」

顔を覗かせたのはエミルだ。

「平気だよ」

「……良かったら、少し話せないかな？」

にっこりと誘われて、私は断る理由もない。退屈していたところでもある。

準備するからちょっと待ってて、と一度寝室からエミルを追い出して慌てて着替えた。

第三十六話：そんなうつかりご勘弁

「早く雨が止めば良いのにね」

並んで回廊を歩きながら、どんよりと曇っていてはらはらと涙を零す空を見上げる。

エミルは、ついてきていた使用人をあっさりと必要ないと追い払ったので、二人きりだ。私が、お邪魔しているところは基本的に人が少なく、使用人も最小限なのだと思う。

通常状態に戻ったといっていたけれど、これまでとあまり変わらない。

「みんな帰しちゃって大丈夫？」

「大丈夫だよ。僕だって多少なりはなんとか出来るし、それに、カナイもアルファも呼べば直ぐに来てくれる。彼らより対応の早い武人は居ないよ」

みんなの話しをするとき、エミルはちよっぴり誇らしそうな顔をする。それがいつもより少しだけ、子どもっぽくて可愛いなと思う。でも、カナイは図書館とやらだし、アルファも今日は騎士塔とやらへ行くといっていた。直ぐといっても、限界があると思うのだけだ。

私はエミルに手を引かれのんびりと歩みを進める。

雨が降っていないければ、庭に出ても良さそうだ。霧雨のような雨だから、びしゃんこになるといふことはないだろう。とはいっても、曇天では緑も陰る出来れば青空が望みたい。

「今日は誰も訪ねてこなかった？」

「え？ うん、エミルが寄ってくれたただだよ」

突然の問いに当然の答えを返す。エミルは「そっか」と頷いたあと、話を続けた。

「ここは僕の居住区で僕の領域だから、出来る限り勝手はさせないけど……昨日、ジルライン陛下が退位を表明したから、次の王位を巡って少し騒がしくなっているんだ」

「……うん？」

「だから極力僕の傍に居て。今、王位継承権を持っているのは僕を含め三人で、その僕らの仲は特に悪くはない。悪くはないけど……この時期はうっかり殺されちゃうこともあるから」

「ないないない、うっかりで殺されるようなこと普通ないっ。」

「マシロには危険はないけど、マシロの存在を欲しがるものは多くて、正直、影響力はかなりある」

私の頭の整理も追いつかないまま話は進んでいく。

「マシロは……今どう？」

「え、どう、とは？」

「記憶、早く取り戻したい？」

ふと、足を止めてそう問い掛けたエミルを私は見上げた。真面目に聞いているのだろう。

だから私も正直に答える。

「よく分からない。エミルたちが良くしてくれるから、今現在、記

憶がないからって困ることもないし……でも、この間みたいに、記憶をなくす以前の私を知っている人と出会って混乱する。どう接して良いか分からないし、早く思い出さなくちゃとも思う……分らない。なくて良いとは思わない、でも、どうしてもと問われると……自信ない。カナイやシゼに面倒を掛けてるとも思うし」

ぼつぼつと言葉にして外に吐き出していると、なんだかしょんぼりとした気分になってくる。その気持ちを察してか、エミルは「そっか」と微笑んで、ふわふわと私の頭を撫でてくれる。

「シゼもカナイも分からないことを追求するのが好きだから、やらせておくと良いと思うよ。マシロが責任を感じる必要はない。特にカナイは、知識欲を掻き立てる題材がなくなったら隠居しちゃうと思うし……それを考えると、マシロは常にカナイに新しい問題を投げ掛けてくれるから、僕もとても助かってるよ」

それは喜んで良いのかな？ ようするに問題児なんだよね、私……。

「僕、個人の意見としては、記憶があってもなくても根本的にマシロはマシロだから……気にならないんだけど。それに、今のままならこつやって傍に居られるし。役得だよね」

にこりと無邪気に笑って「行こう」と手を取るとまた歩き始める。

「でも、今……そのことを公には出来ない」

一瞬前まで、にこやかだったエミルは廊下の先を睨みつけて続ける。

「さつきもいったけど、この国にとってマシロの影響力は大きい。今、争いなく平穏を保っているのは二ヶ月が中立を保つという誓約を交わしているからで……マシロに記憶がないということも理由に反故されかねない。そうになると、現在第一継承順位にあるハスミは、国と並ぶのではないかという武力を保持している蒼月教団を面白く思っていないから、潰しに掛かるかもしれない……第二位のキサキにしても、魔力と武力の均一化を求めているし、大聖堂を相手としてことを起こす危険がある」

「え、じゃあ、この間私マリル教会の人に……」

慌てて口にした私にエミルは、握る手に力を込めて視線を私へと送りにこりと微笑む。

「彼は大丈夫だよ。彼は白い月の信者だし、非武力団体でもあり、なんととってもマシロには返しても返しても返しきれないくらいの恩があるからね。僕や周りを謀ることはあっても、マシロにだけは誠実だと思うよ。何より、傍にいる白銀狼はマシロの命しかきかないからね。司祭が何か妙な動きを見せれば、即マシロへと情報が流れると思う」

よく分からないけど、記憶のある頃の私ありがとう。

そっか、と零して胸を撫で下ろした私にエミルは微笑み「平穏を望むんだね」と続ける。

「平和が一番じゃないの？」

私は、争いなんて無縁の世界で生活してきた。誰かがそれによって命の危険に晒されるなんてこと、身を持って経験したことは全くない。

平和なんて当たり前前にそこにあるものだと、そう、思っていた。

そんな私の呑気な返答に、エミルは軽く頷いた。

「うん。そうだね……じゃあ、僕もマシロの望みを叶えるために、少しは努力しようかな」

「努力？」

「そう、王様になる努力。僕には他の二人に比べて圧倒的に知識を得る時間が短かったからね、王宮の中の意見としてはあまり僕はお勧めしない感じかな？」

そう切り出して、本当に私に語りかけてくれているのか、不思議なくらい単調にエミルは続ける。

「でも僕にはいざとなれば、僕の後ろ盾は強固だ」

「後ろ盾？」

「うん、そう……あまり持ち出したくはないけれど、それでもそういうものも含めて僕の一部だ。図書館、マリル教会、そして、何より白月の姫。これらが全て脅威だうっかりつてことは周知の事実なんだよ。それもあって一番暗殺率も高いんだけど」

曖昧な笑みを浮かべてそう締め括ったエミルに、肝を冷やされた。凄く怖いことを口走っているのに、どこか現実味を帯びない様子は、私に恐怖を与える。

第三十七話・王子の話は常に迷走

「……………いわないで」

「うん？」

「怖いこと、いわないで……………」

エミルにとっては日常茶飯事なのかもしれない、特に珍しいことじゃないのかもしれない。

それでも、私にとってはとても恐ろしいことだ。今日は無事でも明日はどうか分からない。そんな風に緊張して毎日を過ごすなんて耐えられない。

「エミルは、妹さんのことをとても重く捉えてた、それなら自分のことも、もっと重く考えて……………王様が誰になるとか、そういう壮大な部分じゃなくて、もっと、身近なところで……………重責に耐えかねて、そういう風にいつてしまうのも分からなくないけど、でも、エミルが心を許して良いと思うのなら、常に正直でいて……………格好つけなくて良いから」

説教染みた偉そうなことをいつている自覚はある。

でも、変に明るく取り繕うようなエミルの台詞に耐えかねた。

他の人がどうか分からない、

この世界がどうか分からない、

でも、この間のエミルが本当なら、エミルは命を軽んじては居ないはずだ。

それなのに……………と、思うととても辛かった。

落ちた沈黙がきりきりと胸を締め付けて、居た堪れないから……
私はエミルの腕を解いて部屋に戻ろうと思ったのに、離れかけた手はさっきよりきつく繋がれた。

え……と、思ったけれどエミルの顔を見ることが出来なくて、益々押し黙る。

「ごめん、僕が悪かったから、逃げないで」

そういわれて私は恐る恐る顔を上げる。

「泣きそうな顔させちゃったね」

いって、私の頬を撫でたエミルのほうが泣きそうな顔をしていると思う。

「本当にごめん、僕は説明があまり上手なくて、一番大切なことを伝えてない」

泣いていないのに、そういって目じりを拭ってくれるエミルの指先がほんの少しくすぐったくて、ほんの少し心地良い。

「僕は君が好きなんだ」

「え」

あまりに突然告げられて、私はとても間の抜けた顔をしてしまったと思う。

でも、エミルは勢いに任せるように、私から一時も目を離すことなく真っ直ぐに見つめて話を続ける。

「記憶に関係なく好きなんだ。だから、多少の無理も推す。格好つけたくらいで済むならそうする。でも、それで君を不安にさせてたら意味ないよね……本当に、ごめん」

いいつつそつと私の両手を取り、緩く腰を折って口づける。

その辺の人がやれば爆笑物なのに、エミルがやると型に嵌っているというか、凄く自然でスマートだ。

駄目だ、王子様熱でくらくらしそうだ。

私は何か、えっと、答えたほうが良いんだよね。

好きとか、嫌いとか？

はいとかいいえとか？

え、ええええつ？！

重要度はどの辺りなんだろう？

大体、一国の王子様とのロイヤルなお付き合いってどういうことだろう？

一気に沢山の思考が頭の中に駆け巡り、パニックを起こす。

「マシロ？ 大丈夫？ なんか沸騰しそうなほど真っ赤になってる

よ？」

「あわわっ」

そうさせているのは貴方です。

「ふふ。マシロは可愛いね」

そんな恥ずかしいことをさらりと告げて、お上品に微笑むと、もう駄目ってほど距離が縮まって、ちゅっと額にキスが落とされる。

……私を茹で殺しにするつもりだ！

くらくらしそうになつてると、いつから近くに来ていたのか「エミル様」と声が掛かった。エミルは、明らかに纏っていた空気温度を下げ「何？」と顔で笑って目で射殺しそうな雰囲気で振り返る。

「は、ハスミ様が、白月の姫にご面会をと……」

「ハスミ？ ハスミが何？ あの人の空気読まなさ具合は天然なのかな。キサキなら絶対計算だと思っけど……」

エミルはやや唸ったあと、そつと耳にあるカフスに手を掛ける。

「アルファ戻つて」

呟いた。

その余韻が完全になくなるまでに「乱闘ですか？」と嬉々とした声が掛かる。

早っ！

「乱闘騒ぎではないんだけど、マシロを部屋まで送つて。僕はハスミの相手してくるから」

「僕、ハスミ様のお相手の方が良い」

「剣を交えるわけじゃないから、マシロを頼むね」

につこりと次を許さない雰囲気ですういったエミルに、アルファは「はい」と頷いた。

「しかし、ハスミ様は姫をと」

「何？ 大丈夫だよ、僕が行くから」

エミルの言葉は絶対という感じだった。にべもない。用件を伝えに来た兵士は深々と腰を折り、エミルを先導していった。

私たちはその後姿を見送ってから「行こう」というアルファの開口と共に足を進めた。

今日のアルファは少しだけ機嫌が良いようだ。最初よりはそっけないものの、普通に会話をしてくれる。

「さつきから気になってたんだけど、熱でもあるの？」

私の隣を歩きながら、ぴとつと額に手を当てて無理な体勢で顔を覗かせてくる。私は冷め切っていない熱に気がつかれたことにますます赤くなり、平気だと、なんでもないと叫んでしまっていた。

アルファは、そんな私の不自然な返答に「それなら良いんだけど」と答えてから、にこりと笑顔を取り戻して話し始める。

「あのねあのねっ！ 今年の雨季は早く明けるらしいんだ！」

「アルファは晴天が好きなの？」

「別に何でも良い。何でも良いけど、雨は嫌い」

うん。嫌いなのは良く分かるよ。

ただ嫌いってだけでも、きつとないんだよね？

口調から態度から全て豹変しちゃうんだから、半端ない嫌い方なのだろう。

「早くやむと良いね」

「うん」

素直に頷くアルファに頬が緩む。でも、その言葉とは裏腹に、私たちが見上げた空はまだまだ青空とは程遠かった。

ガールズトーク(1) (前書き)

これを読まなくても本編には全く影響はありません。
貴方にくすりっゝを届け出来れば幸いです。

ガールズトーク(1)

「ねえ、シシイ」

「こちらをどうぞ、と用意された服に袖を通し、背中を留めてもらいながら声を掛ける。最後まで留めて、裾を払うと、シシイは前に流していた髪をそつと後ろに流して梳き整えてくれる。

「私、毎日違う服でなくても全然気にしないんだよ」

「というか、勿体無い。」

一般庶民の私にいわせるとなんだか贅沢すぎるような気がするのだ。ここ一週間以上。私は一度も同じ服を着ていない。

最初に着ていた夜会用のドレスほどの派手さはないけれど、逃えが良いのは良く分かる。

どれも既製品などというものではないだろう。

「ですが、まだ、ありますし……折角マシロ様のために逃えさせたものですから」

「う」

部屋を移動させて直ぐ、私は針子さんたちに襲われた。

いや、襲われたというのは申し訳ないけれど……勢いが、そんな感じだったのだ。だーっと何人が寄ってきて、私の頭の先から足の先指の長さまで計って、ざあっと潮が引くように引いていった。

私がぼかんとしている間に全て終わったのだ。

「だって、ほら、えっと勿体無いじゃない、私一人にこんなに」

わたわたと口にすれば、シシイは可愛らしく、ふふつと顔を綻ばせる。そして、私に椅子を勧めながら、私が腰を降ろすのを確認するとお茶の準備を始めてくれた。

朝身支度を整えて、一杯の紅茶を飲んでから朝食。これが流れだった。

「マシロ様は珍しいことを仰いますよね？ どの姫様もそのようなことは仰らないと思いますよ。勿体無いなどということがありません。全てマシロ様のためにあるものなのですから」
「……ええと……私は、その、ね」

どろこんと遊びをして洋服を次から次へと汚してしまっ子どもではないのだ。ごによごによと口にしような私に、にっこりと微笑んでシシイはティーカップを私の前へと置いて話を続ける。

「それに、これはエミル様からの贈り物ですよ。色や全体のイメージなどは、エミル様のご指示で詠えたと聞いています」

「え、そうなの？」

「はい。お忙しい方ですが、生地もご自分でお見立てになったとかご本人がお召しになるものでもそのようなことされたことないのと、仕立て屋が噂しておりました」

そうなんだ……と、重ねて、ぼうつと赤くなる顔を隠すようにティーカップを傾ける。

贈り物といわれたら、無碍にも出来ない、出来ないけれど、それはそれで買がれすぎだと思っただけだな。

ふうと、両手で包み込んだカップに息を吹きかける。

その様子を、暫らく眺めたあと、珍しくシシィから声を掛けてきた。

何か聞きたいことがあるらしい。少し歯切れが悪そうに、もじもじとするシシィに私は話しても良いよと苦笑する。

私の了承にも尚いい辛そうにしつつ、ややして意を決したように話を始めた。

「本日は、日中もマシロ様のお世話をさせていただくのですけれど、あの、カナイ、様は、いらっしやるでしょうか？」

「カナイ？ カナイって、あのカナイ？」

「はい」

まあ、私の知っているカナイは一人しか居ない。私はシシィの質問に、短く唸る。

「最近、シゼの方が多いよね。今日は来るのかなあ？ 私も知らないんだけど」

そう答えれば「そうなのですか……」と目にも明らかにしょんぼりとする。私はカップの中身を飲み干して、ソーサーに戻すとシシィを見た。

「何か用事があったの？」

「え！ あっ！ いえっ！ そのような、用事など滅相もないっ！ 私のようなただの使用人が用などあるはずありませんっ！」

……いや、そんなに必死に否定しなくても……。

「来てもらえるようにいつてみようか？ カナイが一番の暇人だっ

て聞いたから、多分何とかしてもらえるんじゃないかな？」

因みにアルファ情報だ。

「い、いいいえええ！」

「……シシイ。それは、はいなの？ いいえなの？」

シシイの奇声に笑いながら聞き返せばシシイは真っ赤になって顔を伏せてしまった。可愛い……。

「シシイはカナイが好きなの？」

椅子の背もたれを抱えて質問を重ねれば、シシイは「そんなんっ！」と慌てて顔をあげて私と目が合うとまた伏せた。

そして、もじもじとエプロンを苛めながら続ける。

「あの、本当に、そうではなくてですね。ええと、その、私がこちらに上がったのはまだ日も浅くてですね……その、カナイ様は私共の間でも、憧れといいますが、その……もう少し、……と、お近づきに、といえますか……それで、滅多にお会いする機会もございませんし」

「ああ、引き籠もりだもんね。あれ」

「いつ！ いえ、そのっ！」

「ようするに、憧れの的ーとか、ファンとか、そういうのかなあ？」

……個人的な話をさせてもらえるなら、アレが？ といいたいけれど、夢見る女の子シシイにそんなことはいえない。

「でも、意外。人気投票！ とかしたら、断然エミルとか上位に上がりそうだけど」

「めめめっ！ 滅相もないっ！ に、人気投票なんてっそんなっ！」

……ああ、あるんだ？

何気にシシイの反応から察した。まあ、仕方ないよね。ここに居るだけでも容姿だけで目を引く人も多い。私はふらふら出歩かないから分からないけれど、城内ってなるともつと沢山居るんだろうし？ あ、ちよつと興味あるかも。

「で、で、誰の名前が挙がっているの？」

知り合いは少ないけれど、確実に彼らの名前はあるだろう。

シシイは顔を真っ赤にさせたまま逡巡したけれど、私の、凄く聞きたいっ！ と、お願いっ！ の強さに折れた。皆様にはどうかご内密に……と前置いて私との距離を詰め話を始めてくれる。

隣に座ることを勧めたけれど流石にそこまでは了承してはくれなかった。

ガールズトーク(2)

「私は断然カナイ様なのですけれど、シルゼハイト様が最近上位に上がってきました。取り付く島もない雰囲気の方で、エミル様以外の方とこちらで口を利いているのも見たことなかったんですよ。ですが、マシロ様がご滞在してくださるようになってから、随分と柔らかい雰囲気になられて、乗り換える方も増えました」

やっぱりシシイは突くと饒舌になる。

にこにこ楽しそうに話してくれるシシイに、私も楽しくなってきた。うんうんと相槌を打ちながら続きを促した。

「ララさんはエミル様では意外性がないからと、アルファ様に投じていらっしやいますし」

……ん？

「ええと、リズさんは大穴狙いでラウ様をと……」

……んん？ 大穴？

「司祭様が連れ去るかもーっ！ とか、人外説も」

きゃーっつと黄色い声を上げて盛り上がるシシイに私はストップを掛ける。

「ちょ、ちょっと待って！」

「はい？」

「何の話をしていたっけ？」

なんだか私の予想からずれてきて、シシイに問い直す。シシイは私の質問に、きょとんと瞳を瞬かせて、子リスのように愛らしく首を傾げると

「白月の姫争奪レースです」

「……は？」

シシイが意味不明な言葉を発した。

「ですから、どなたがマシロ様を射止めるかという賭けを……あ、も、申し訳ありません」

慌てて両手で口を押さえたけど、シシイ。いい切ったあとだから遅いよ？ 別に怒ったりしないけど。呆れているだけで。

「いや、謝ることはないけどさ、そんな不毛な賭け成り立つの？」

「え！ マシロ様はお選びになられたんですかっ！」

「いいいいーっ！」

声が裏返った。

私は慌てて咳払いをして、なんとか整えると続ける。

「選ぶも選ばないも、そんな私を好きだなんて人」

……僕は君が好きなんだ。

今はダメー！ を思い出した。今度はシシイの変わりに顔が沸騰する。

「ちちち、違うの、エミルとはなんでもないので、」

「ああ、やはりエミル様が」

「そ、そんな、まさかっ！」

「カナイ様が有力だと思いましたが、とても打ち解けていらっしやるように思えましたし、あと、もうひと押しをと思って」

何をひと押しですか？ いや、それよりも、揉めたことくらいしか記憶にありませんが。カナイは多分私を女として見ているとはとても思えないけれど……。

「マシロ様はどういった殿方と添い遂げたいとお考えですか？」

「え？ 添い遂げ、って、え、結婚っ？！ いや、そこまでは、まだ、あ、ああ……ええと、そう、だなあ……強いていうなら、私だけを好きで居てくれる人、かなあ……」

もう、裏切られるのは嫌だから……

そう答えて、私は思い出したくもない過去を思い出し、今日も雨の降り続く窓の外を見上げた。

「マシロ様は本当に可愛らしい方ですよね」

「はい？」

シシイのネジが外れた。

「マシロ様は色々と謙遜されますが、私、マシロ様のお世話を仰せつかることが出来てとても幸せです。マシロ様ならどなたと結ばれまして」

「結ばれないよーっ！ 結ばれてないよーっ！！」

強く重ねた。

「あ、ああ、そうでした。愛はゆっくり育むものですよね」

それもちっがーっ！

と、突っ込みそうになったら、部屋にノックが響きシシイを待つことなく扉が開いた。

「女の子は朝から楽しそうだね？」

おはよう。と生憎な天気とは裏腹に、微笑んだエミルにシシイは慌てて、申し訳ありませんと腰を折った。

「定時にマシロ様をお連れするのが仕事なのに」

「え、ええっ！ ごめんっ。私が無理矢理話を引っ張ったからで、シシイは、悪く……」

「怒ってないよ、全然。マシロが楽しそうで良かった」

わたわたししている私たちにくすくすと笑いながら、エミルは歩み寄ってくる。

「でも、時間が圧しているのは本当。良かったら一緒に朝食でも如何ですか？」

にっこりとそういって手を差し出したエミルに、私は一瞬「う」と息を詰めたあと、おずおずと手を受けて「喜んで」と重ねた。

「聞いてた？」

部屋を移動する間に問い掛ければ、まさか！ と首を振られ、ほつと胸を撫で下ろす。

「ちょっとしか聞いてないよ」

っ！ ……聞いてたんですね？ ああ、もう……恥ずかしいなあ……。

「ああいうのは良くある冗談というか、お遊びというか、あー、その」

「ごういう時期だし娯楽は必要だよな？ でも、大穴にラウまで入ってると思わなかった」

一体どこから聞いてたんですかつ！ 王子っ！！

やはり、侮れないエミルの発言に、私はそれを追及することが怖くて、あはは……と乾いた笑いを零すに留まった。

これだから、なんとなく、この人の手を取るのには怖い気がする。

好きか嫌いか世界にこの二択しか存在しないのなら、好きではあるのだと思うんだけど……な？

乙女心はフクザツなのです ……

ハナノサクコロ(1)(前書き)

ブラック視点です。ご注意ください

ハナノサクコロ(1)

あれは、二度と見ることの叶わない景色になるだろう
でも、花の咲く頃、きつとまた赴くだろうと思っていた

そのときもやはり

二人で ……

「別に良いんだよ？ わざわざ猫にならなくても」

『猫な私は嫌いですか？』

「え？ そういうわけじゃないけど……」

ほんの少し意地悪に返せば、戸惑いがちに否定が返ってくる。
そういう意味で、マシロが口にしたわけじゃないくらい分かっている。でも、マシロが考えているよりも、ずっと『種屋店主』という肩書きは暗く重い。平穩を望み、常に優しくあるマシロにはとても苦しいだろう。

「なんとなく、それじゃ、過ごし難いんじゃないかなと思ったただけだよ？」

それに……と、続け掛けたところで店の扉が開いた。日に数名有るか無いかの来客だ。マシロはにこりとカウンターから立ち上がり「こんにちは、ニフレさん」と声を掛ける。

こんにちは、と返した女性客はちらりと、目を留めてからカウンターに歩み寄り肩を竦める。

「あの猫、たまに居るねえ？ 猫が薬屋なんかに寄り付くのも奇妙なもんだけど、それを良しとするのもあたしゃどうかと思うよ？」
「そうですか？ 私は可愛いと思いますけど」

マシロはその台詞を気にすることもなく、にっこりと交わして「ご入用は何ですか？」と早々に話を切り上げた。

マシロが立ち上がり空になった丸椅子に飛び乗って丸くなる。残る暖かさが心地良く、頭を落とし目を閉じた。

「娘がね、この間の鎮痛剤を気に入っていて」

「ああ。あれですか？ 体に合って良かったです。では、一回分ずつ煮出せるように包みますね。五日分、くらいで構いませんか？」

マシロの丁寧な対応に、客はにこにここと頷いて、窓際にある小さなテーブルセットに腰を降ろした。

マシロは背にしていた棚から、目的の瓶を手に取り、慣れた手つきで小さな麻袋に一回分ずつの量を計って包む。

「ここくらいだよ、そんな風にまでしてくれるの」

「そうなんですか？ 目分量じゃ出来ないし、ちょっと家でやるには面倒ですよね？」

最後の一つを包み終わって、紙袋にそれらを詰めたらマシロはカウンターから抜けて、客の傍に歩み寄った。

「お釣り待ってくださいね」

紙袋を手渡し代金を受け取ってから、マシロは小走りにカウンターへ戻ってくる。その後ろを「慌てなくて良いよ」とのんびり口にしながら客は歩み寄ってきた。

「ねえ、マシロちゃん」

「はい？」

「ここにさ、時々居る董色の髪をした、綺麗な子。あの子とは、今どうなんだい？」

「董色？ ああ、シゼですか。どうってどう？」

手にしたお釣りを渡しながら、マシロはその含みのある物言いに気がついたのか「ああ」と笑った。

「シゼは時々お手伝いに来てくれる知人です。普段は王宮で働いている子ですし、私にはとても」

「ああ！ そうだと思ったよ」

どうだと思ったというのだろう。聞きたくもない不愉快な会話に耳を震わせる。

「うちの隣にね、顔はまあ十人並みなんだけどさ、良い子が居るんだよ。マシロちゃんも、もうそういう年じゃないのかね？」

「いえ、私はそんな」

「マシロちゃんは余らせておくには惜しいよ。図書館を卒業した上に店まで切り盛りするんだからね」

マシロは微塵も余っていない。もし、自分が居なかったとしても、客がいうとおり引く手数多だ。そんな民間人が近寄ることが出来るほど、易い存在ではない。

もう、いつその無駄口が永遠にたたけないようにしてしまおうかとも思ったが、ここへ来てから戻らなくなったといったら、変な噂が上がるだろう。

ふーっと苛々とした息を吐いて身体を丸めなおした。苛立たしげに尻尾が揺れてしまうのは、自分でもどうしようもない。

「私はそんな褒められるような子じゃないですよ。それに、そういう気はないので、お気持ちだけで」

やんわりと断ったマシロに「そうかい？」と後ろ髪引かれていたようだけれど、マシロはそれ以上その話を続けることを許さなかった。そういえば、と、客の好みそうな噂話を持ち出して、体よく追いついてしまふ。ありがとうございました。と店の扉を閉めてから吐いた溜息が重たかった。

カウンターまで戻って来て、こちらを見たのは分かったが、身体を動かすこともしなければ苦笑して、秤に使った皿を手に奥へと引っこ込んだ。

店の奥にあるミニキッチンから水の流れる音が聞こえ始めると、すつとと椅子から降りた。

「マシロ」

ふつと元の姿に戻って背後からマシロの矮小な背を包み込めば、くすりと笑みを零される。

「拗ねてるのかと思った」

「拗ねませんよ、くだらない」

「うん、くだらないよ」

こつとマシロの肩に顎を乗せれば、擦り寄るように首を傾けてくれる。そつと瞋目しやや黙した後、マシロは出しっぱなしになっていた水を止めて「濡れちゃうから離れて」と酷なことを口にした。

それを無視してそのまま抱き締めていれば、もつっと可愛らしく口先だけの不満を零して、手近なタオルで手を拭う。

「ほら、仕事に戻れないから離れなさいってば」

ひらひらと手にしていたタオルを振ってそういうけれど、獣族は猫ではないと何度いえば分かってもらえるのだろう。時折、マシロから本気で猫扱いされているような気がする。

「今日は早目に店仕舞いして、出掛けませんか？ この間出たときに、遅咲きの夢見草を見つけたんです。今がきつと見ごろになっていますよ」

「夢見草、かあ……じゃあ、週末にでも」

「花の命は短いんですよ？」

別に花などどうでも良かったが、今すぐに、マシロを独占したい欲に駆られた。

マシロは比較的、夢見草……桜といったかな？ に弱い。

圧巻するほどの場所も好むが、人の手のはいつていない場所に佇む立った一本の巨木とか、マシロは特に喜ぶ。今までそんなものに見向きもしなかったが、マシロが喜ぶということが分かってからは、ちよくちよく気に止めるようにした。

「お客さん、あるかもしれないけど、仕方ないよね。うん。花は今だけでもんね」

一人自分を納得させるように口にして頷くマシロに、来年も咲きますよ。と、意地悪を口にしそうになったが黙った。

「じゃあ、私店を閉めるから待ってて」

「私は馬を手配してきますよ」

「それは遠いの近いの？」

「難しい質問ですね。徒歩では夜になります。魔術を使っても問題ありませんけれど、マシロ、いつもそれを味気ないというので……」
「ん、じゃあ、馬を直しく」

マシロの切り替えの速さは賞賛に値する。するりと腕の中から抜け出して、にこりと可愛らしい笑顔で告げる。

それに異を唱えることが出来る人間はきつといない。

……私も、その一人だ。

「直ぐ戻りますから準備をして待っていてください」

そういって、軽く頬に唇を寄せれば擦ったように首を竦めて「はいはい」と、それこそ夢見草が綻ぶような笑みを零す。その笑みを向けられると、自分でも気持ちが悪いくらいほど満たされる。

「何かおやつを」

「ついでに買ってきますね。時間が勿体無いでしょう？」

特に他意はなかったが、邪推したマシロは、少しだけ不機嫌そうに眉を寄せて、そ。とそっけなく口にして、さっさと店に戻っていた。その後姿にも、顔が緩むのだから終わっている。

ハナノサクコロ(2)

そこは山間で遠方に出ていたときに中継地点として、立ち寄っただけの場所だった。

岩肌を晒した崖の谷間から水が溢れ滝となる。河へと続く源流だ。それを受け止める窪みが泉となり清水を湛えている。

辺りの木々は緑の葉を大量に茂らせ、その泉に影を落としているというのに、その巨木が一本だけ、今も尚薄紅色の花をつけていた。

「綺麗」

馬を泉の傍で休ませている間に、巨木の下まで歩み寄ったマシロは、首が痛くなるのではないかと心配になるほど見上げて感嘆の息とともにそう吐き出した。

「気に入りましたか？」

そっと歩み寄って問い掛ければ、うん。と、静かに頷いて幹にそっと手のひらを宛がい、頬を寄せた。

「でも、かなり年みたいだね。今日きて良かった」

来年は無理かもしれない。そう含めていることは、いくらそういう感慨深いことに縁がなかったとはいえ、マシロのことだから察することが出来る。

確かに、マシロのいうように巨木の中は虚ろに近いだろう。かなり老齡だ。桜雨にも耐え抜いた力強さは健在だが、来年までは持たないだろう。

ざあっと駆け抜ける風に攫われるような気がして、手を伸ばしたらマシロの肩に触れる前にマシロは乱れた髪を直しながら顔をあげた。

「あれ、アルク草じゃない？」

一輪だけで咲いているなんて珍しい、と口にして、行き場をなくしてしまったこちらを気に止めることなく、マシロはその場を離れた。

「一輪じゃないですよ、そっちの奥に結構咲いています。この辺りも群生地なのでしょうね」

残念に思い、嘆息するも、マシロの問いに答えないわけにいかない自分が滑稽だ。その答えに地面に伏していた膝を立て、茂みの奥を覗いたマシロは「本当だ」と立ち上がった。

「私、以前採取に行ったとき、アルファにお願いしちゃって見なかったんだよね。だから、ちょっと得した気分かもっ」

「それは良かった」

「ねえねえ、これ、持って帰ったら店の温室で育てられないかな？」

にこにこと聞いてくるマシロに、出来るでしょう。と答える。

「あ、でも、手狭かな……増えそうだし」

「それなら、種屋くさやの温室でも構いませんよ」

どこか職業病の抜けないマシロに苦笑しつつ助言すれば、マシロはやや迷ったあと「やめとこ」と決定した。

「使用頻度は高くないと思いますけど、気に入ったのなら持ち帰っても構いませんか？」

土から離してしまっただけは直ぐに枯れてしまう性質を危惧しているのなら、そんなこと問題ない。その程度のことか雑作もないことだということくらい、マシロにも分かりそうなものなだけだ。

「良いの、良いの。ちょっと思ったただけだから、気にしないで」

にこりと割り切った笑顔を見せられても、何故だか腑に落ちなくて首を傾げる。それを察したのかマシロは小さく溜息を吐いて「だからね」と続けてくれる。

「場所が分かかってるんだから、必要なときに採りに来れば良い話でしょう？」

「マシロがそんな面倒しなくても」

素直に返すと、マシロは、もうっ！ と少し怒ったように語気を強めた。

「だから、一緒にまた来よう！ っていつてるの」

ぶいっつと顔を逸らしてそう告げたマシロに、ようやく合点がいった。

「ああ、なるほど」

「ブラックって、どこか抜けてるよね。天然なのかな……」

頬を染めて、ぶつぶつと零す愚痴も可愛らしい。

正直いえば、抜けているというよりは、実際は知らないだけだ。だから、検討付けることが出来なくて、マシロの中の当たり前の繋がり、時折よく理解することが出来ない。

その辺りの至らなさ具合に自己嫌悪に陥るが、マシロはあまり気にはして居ないようだ。その証拠に……

「マ、マシロっ！ 何やってるんですか」

「え、何って、ほらもう寒くないし、ちょっと水遊び？」

考え事をしている隙に、マシロはあっさり靴を脱ぎ捨て、スカートの裾をあげて泉の淵に腰を降ろして水を弾いていた。

「寒くなくても風邪を引きますよ」

いって歩み寄れば、マシロは足先で水を弾くのをやめて泉の中へ立ち上がる。底の見える浅い泉ではあるが、転びでもして痛い思いをするのは忍びないと思ったのに

「綺麗で、気持ち良いよ？ ブラックも入ったら？」

逆に誘われてしまった。

確かに、風に煽られて散った花びらが水面に落ち、傾いた陽光を煌かせる情景は美しい。それをただ見るに留めず、自ら楽しもうとするマシロはもっと瑰麗だと思っけれど、伝えたら否定されるだろう。

遠慮します。と、口にして、転ばないように気をつけてください。ね。と重ねれば、分かっているよと返ってくる。分かっている、転ぶのがマシロだ。

「っ！」

……っ！

「危ないと、いったのに……」

きっと、水面に浮かぶ夢見草の花びらでも拾おうとしたのだろう。その途端、予想通りバランスを崩したマシロの腕を慌てて取った。

ああ、結局、水に入ってしまった。

濡れそぼるのはあまり好きではない。

「ああ、猫って濡れるの嫌うよね」

「……ですから、私は猫ではないと、何度も」

眉を寄せれば、そうだったとばかりに口にされて、短く嘆息する。

「でも、服が濡れるのは嫌だったんだよね？ どーせ、すぐ乾かせるでしょう？」

「まあ、そう、ですが……」

水を吸って重くなる衣服は気持ちの良いものではないと思う。

「嫌なのに、魔術も簡単に発動出来るのに、来ちゃったんだ？」

マシロはどこか嬉しそうにそう続けて、掴まえたままになってい
る手を持ち上げ笑った。いわれてまじまじとマシロを掴んだ手を見
る。

「

……」

本当に……どうして、今自分は水の中に居るのだろう。

マシロを助けるにしても、時間を止めるなり、風を操るなりすれば良かっただけの話なのに……咄嗟に出たのは腕だった。

「頭、冷やしたほうが良いですね」

判断力が確実に鈍っている。変だ。おかしい。

こんなことをするより、力を使ったほうが確実にだし、何よりマシロにとっても安全なのは明白だというのに。

「は？　なんでっ」

「え、ですから……もっと的確で確実な方法が山とあったと……」

思い切り声を裏返したマシロに、慌てて説明すれば、マシロは途端に噴出した。くつくつと楽しそうに笑って、歩み寄ってくるそのまま腕を回して抱きついてくる。

裾を支えていたほうの手も離してしまうから、マシロの服まで結局濡れてしまった。

「マシロ？」

「……っ、ご、ごめん。面白くて、つい……」

謝罪しつつも尚笑っている。

暫らく、笑いのツボとやらに入ったマシロを戸惑いがちに抱き締め返していれば、ようやく治まったのか、ひょこりと顔を上げる。

「ありがとう」

「はい？」

突然告げられる謝辞の意味が分からない。

「つまり、ブラックは正常な判断が出来なくなるくらい、私のことが好きなんだよね？」

「え、ええ、と……？」

「直ぐに何パターンも、助ける方法くらい思いつくのに、咄嗟に出たのは腕だった。考えるより先に身体が動いちゃったんでしょう？
しかも、自分でおかしくなったんじゃないかと思っちゃうくらい、無意識に。だから、この、私のために伸ばされた腕が凄く嬉しい」

凄く好きだと続けられて、もう、どうでも良くなった。

マシロがいうとおり、無意識だった。

危ない！ と思ったら、反射的に身体が動いていた。
掴まえて、何事もなくて、心の底から安堵した。

ハナノサクコロ(3)

……安堵。

「安堵、か……」

歴代の種屋が必要とはしなかった言葉だ。

それをぼつりと零しても、誰も拾うことはない。

月明かりしか差し込んではいないこの場所には、今、誰も居ない。隅に設けてある円卓に突っ伏して、室内を見回すと、そこかしこにマシロの姿が刻まれている。今、その姿を追っても幻影でしかない。

種屋は”愛”なんて不確かなもの必要としない。深い業と闇。孤独と、虚無。混沌とした世界だけを知るものだった。

ルール以外は、欲望のままに生きて、虚しさを埋めるために殺戮を楽しむ。快楽を求めればそれだけの数の女性を虜にし、不要になれば消してきた。

人物。行為、そのどれにも……執着することはこれまで一度もない。

世界が創造され、種屋が置かれてから、一度だって……種屋自身を見たものは居ない。

マシロだけが……

この世界を知らない、彼女だけが、見てくれていた。

そういえば、あの日、あのあとどうしただろう。

マシロが余りにも可愛くて、愛しくて、抱き締めて怒られるまで口付けた。結局、押し倒しかけて、ずぶ濡れになって怒られたのに、笑いが止まらなかった。

ひとしきり遊んで、腰を下ろすころには、すっかり陽は落ちていて……夢見草の枝の間から見上げた二つ月を、珍しく綺麗だと思った。

「月、一人で見てると寂しいよね」

ぼつと零したマシロの言葉の意味が分からなかった。月はいつでも変わらずにそこにある。これまでも、これからも、きっと唯一変わらない不変なるものだ。

「月は御伽噺のように、私にブラックを連想させる。今はこんなに近いのに、一人で居ると到底手が届かない」

いつて絡めとられた指先からマシロの怯えが伝わる。ひんやりと熱を失った指が僅かに震えている。

「大丈夫ですよ、大丈夫。私たちだって何も変わらない。マシロが望みさえすれば、いつだって手の届く距離に、熱を伝えられる距離に、触れて、口付けられる距離に居ますよ」

……いつでも、マシロが望めば……

それでもなお、何処か不安そうに月を仰ぐマシロの視界を奪った。

僅かに驚いたように目を見開いたけれど、直ぐに双眸を閉じ伸ばされた華奢な腕は、私の首に絡みついた。

マシロの存在は心地良い。

愛らしい唇から紡がれる声も、耳に優しく届き、荒涼とした心を満たしてくれる。

見つめてくれる瞳も、偽りを一切感じさせない、真っ直ぐなもので“種屋”“獣族”でもなくルインシルⅡミアを見ている。

楽しいとか、嬉しいとか……陽の当たる部分は全てマシロが持っていた。

だから、今、何も無い。

気を紛らわせるくらいにはなっていた、安易な殺しも、今は何も紛らわせてはくれなかった。

次にこの種を受け継ぐものは、この記憶を、この想いを……どう思うだろう。同じように、愛してくれるものを求めるだろうか？それとも、愚かな先代だと晒うだろうか。後者であれば、きつとただの種屋でいられるだろう。

これまでと変わらずに、永遠に埋まることのない己の半身に飢え、破壊を繰り返す。

種屋はそうあるべきなのかもしれない。

そうすれば、何も感じることもない。

それが出来ない私は、唯一無二の白月を求めるばかりだ。それが叶わぬなら、最大の禁忌すら私を縛る枷にはならない。

マシロに会いたい

マシロに触れたい

誰よりも愛していると伝えたい

今は、それすら彼女を傷つける　茨の森に沈んでしまっている。

茨の棘がこちらに向いていれば良かったのに、この身が引き裂かれるだけで済むのなら、迷わずに手を伸ばすのに……その全てがマシロに向っている。

会いたい

触れたい

伝えたい

愛など知らなければ良かったと、微塵も思えないほど深く想っている……

花の咲く頃……同じ場所で……同じように……同じものを見たい

……それが叶わぬなら……いっそ……

ハナ　ノ　サク　コロ　マデ　マテ　ナイ

ハナノサクコロ(3) (後書き)

土曜日から通常本編更新に戻ります。引き続きよろしくお願
い
た
し
ま
す

第三十八話：想い人・想われ人（1）

『主、これでは籠の鳥と変わらぬのではないか？』

あれから時々顔を見せてくれるハクアにそう告げられて私は苦笑する。

確かに、私は殆どこの建物の中に居る。外も雨だし、外の空気を吸いに出るといつても回廊を散歩するくらいのものだ。

でも、エミルが教えてくれた話もあるし、やはり記憶をなくしたままの私がうるうるとするのも都合が良くないだろう。

それにこの棟で可能なことは、ここでやるようにしているのか、エミルも良く傍にいてくれる。大抵はラウさんの授業に付き合っている感じだけど、メイドさんたちも、少しは話し掛けてくれるようにもなつたから、退屈もしない。

「そんなことはないよ」

いつてハクアの頭を撫でれば、ハクアは額を私に摺り寄せてくる。その犬らしい　狼だけど　姿に瞳を細める。

窓に持たれかかれれば、外気に冷えた窓ガラスが体温を奪い白く曇る。薄暗い日が続くと時間があまり分からない。でも時計を見る限りでは、夕時だ。

『私には外の詳しいことはあまり分からぬが、外は変わりない。主は私に常に自由であるように求める。それと同じように主も自由で

あつて構わないのではないか？」

「別に私は不自由を感じてはいないよ？」

実際、ここで欲しいといえば手に入らないものはない、手に入らないただ一つのものが自由……なのだろうか？

「ただ、私は薬屋さんをやっていたというから、そのお店のことが少し気になるのだけど……」

そんな瑣末なことを口にしては駄目だと思つて、みんなにはいわからなかった。でも気にならないわけじゃない。

『それならばここを出てはどうだ？ 家が戸惑われるならマリル教会に居ても構わないと思う。レニも……』

「でもそこでも同じように私は、中に居ないといけないのでしょうか？ だったら、ここに居るのと大差ないよ」

自分でも不思議なくらい強い口調になつていて、私は驚いて口元を押さえると、ごめん、と謝罪していた。

私たちの間に沈黙が落ちると同時に、部屋にノックの音が響いた。戸口に立っていたララがそつと開くと、エミルだ。脇には大量の書類を抱えていた。

「あ、あれ？ ハクアが来てたの？」

王子が手ずから運んできた荷物を、慌てて受け取つたララは、部屋の中央にあつたローテーブルの上に載せた。続けて「書き物が出るように準備してくれるかな？」と、エミルに掛けられた声に頷いて踵を返す。

「エミル、一体いつまでこの生活をマシロに強いる。マシロはいつ解放される」

私の元から、ずっと離れたハクアはエミルに歩み寄る間に人型をなし、冷たい声色でいい募る。ちよつと待って、と私が止める隙もない。

ハクアの台詞にエミルはちらとだけ私のほうを見て、気にしないでというように、緩く口角を引き上げる。

「それじゃあ、僕がまるでマシロを軟禁しているようだ」

「しているではないかっ!」

「君がどう感じていようと、構わないけれど、僕はマシロを籠の鳥と思ったことはない。ただ、彼女のために今何が必要か、どうあることが安全かと考えた場合、今の状態になってしまっているだけで、マシロが望めばいつだって出られる」

……いつだって出られる。

そうだったのか？　ここに居なきゃいけないと思っていて、ここから出てはいけないのだと思っていたから、そういわれたことに少し驚いた。

「私には、優しい主に付け入っているようにしか見えない。人間はいつだって自分本位で愚かだ」

「君たちは人間をそういう風にしか見ないから見えない……：兎に角、客人が居るような時間でもない、他に用がないようならまた日を改めて欲しいんだけど」

微塵も動揺を見せることなくそう繋いだエミルに扉のほうへ促され、ハクアは苦々しく短く唸る。

二人、もしくは種族間にどんないざこざがあるのか分からないが、友好的な関係とはとも思えない。私に対して、あれほど柔らかく接してくれるハクアの言葉とは思えない。

それだけ私のために募らせてくれた苛々に、胸が篤くなるのは駄目なことかな？

「ハクア、私は大丈夫だから。また、いつでも会いに来て……その、今日もありがとう、心配してくれて」

そつとハクアの腕に触れて「大丈夫だから」と重ねれば、ハクアは、じつと私を見つめたあと大きく息を吐いて、分かった。と、頷いた。

部屋をあとにするハクアを見送ると声が掛かる。

「マシロは食事まだだね？」

「え？ ああ、うん」

「じゃあ、食事のあと少し出よう」

につこりといつもと変わらない様子でそういつてくれたエミルに、私はこくと頷いた。

視界の隅っこで、申し訳なさ気に積み上げられた書類を気の毒にも思ったけど、エミルがそういうのだからあちらはあとで良いのだろつ。

第三十九話：想い人・想われ人（2）

いつも通り、アルファやシゼも呼びつけて　カナイは図書館に缶詰　食事を取ったあと、二人ともさっさと持ち場に帰ってしまった。師団司令部を任された関係上、アルファは今忙しいらしい。

エミルは食事前に告げた通り私を連れ出してくれた。

「エミル、そっちは……」

進んでいこうとする方向では、この棟を出てしまふ。躊躇した私に、エミルはにこりと「大丈夫だよ」と口にした。

「ごめんね、ハクアにいわれるまで気がつかなかつたよ。マシロはもともと、じつとなんてしてられない性質たちだったのに……確かに同じ景色しか見られないのでは、息も詰まるよね。雨が止んでいれば庭にだって出られるんだけど、とりあえず城の中でも気分転換になるかな？」

「でも」

「大丈夫だよ、僕も一緒だし。それに、元来マシロはこの王宮で制限を受けていないんだ。先代ジルライン王の命により、マシロは自由を許されているんだよ」

私は王様とも顔見知りだったのだろうか。なんとというか、いつの間にか一般人ではなくなっていたのだなと痛感。

外はもう真っ暗になっていたけれど、城の中は明るかった。

柔らかな光が各所に灯されて、綺麗だ。天井も高く開放感に溢れている。室内だけでも少しい窮屈さを感じさせない。少しだけ装飾過多のような気もしないでもないけど、宮殿と呼ばれるに相

応しい。

時折、見回りの兵士に親しげに声を掛けられたが、エミルが適当に交わしてくれた。私の交友関係広い。

「こちらは現在締め切られております」

「少しだけ、良いかな？」

ふらふらと城内散策を楽しんでいると、エミルがひととき大きな扉の前で足を止めた。

扉の両脇に居た扉番に止められたが、エミルはにこやかに許しを請う。二人は顔を見合わせたあと私のほうを見て、もう一度二人で目配せする。

「次の王陛下が決定されるまで、締め切られるのが慣わしではありますが」

「白月の姫は城内において制限を受けません。こちらは解放なりませんので、あちらからで宜しければどうぞ」

にこりと笑みを浮かべて柱の奥に見えた通常サイズの扉を指した。エミルが、ありがとう。と、礼を告げれば二人ともぴっと姿勢を正した。

「この奥にはね ……」

いいながら扉を開き私を招き入れてくれる。

「玉座があるんだよ」

広い……いやもう、私の通常感覚からしたら比較する対象が思

いつかないくらいだ。足元の大理石も完璧に磨き上げられていて、僅かな光源をも反射し、室内をより明るくさせている。

エミルに手を引かれるまま奥に進めば、数段上がった壇上に宝石が散りばめられた豪華な椅子が一つ据えてあった。

「凄いねえ……」

一般市民の私にはそれ以外、それ以上の感想は述べられない。

「本当、凄いよねえ……ここに座る人、一人で国が大きく変わるんだ。善悪は関係ない」

私たちの『凄い』の意味は全く噛み合っていないかったけれど、エミルの言葉には素直に

「……怖いね」

そう思った。

「うん、怖い」

そつと椅子を撫でてそういったエミルは、苦悶の表情を浮かべていた。

「ついで、この間までここに座っていたジルラインは、どちらかといえば争いや権力自体に特に興味のない人だった。だから、上辺だけの平和は保たれていた。それに器は壊れないに限る。とも、思っていたから無駄に消える人は少ないほうだった」

私には良く分からない、分からないから、重ねて、怖いな。と、思うことしか出来ない。

黙ってしまっていた私に気がついたエミルは「ごめんね」と短く詫びて私の元に戻ってくる。そして、そっと私の両手を取る。

「前にもいったよね……僕はこの座を欲しいと思ったことはない。国が荒れようと潰れようと、そんなことに正直興味なかった。僕自身、王家の種を入れる器でしかないと思っていたから……」

「……………」

「でもね、今はこの椅子に座っても良いと思ってる。そうすれば、マシロの暮らす場所、マシロの見る景色位は護ってあげられるから」

エミルの瞳はとても綺麗だ。

若草色の瞳に、部屋の中の明かりが映りこんでキラキラとしている。だけど、その中に映る私は、とても普通だと思う。

とくん……とくん……つと心地良い緊張を孕んだ心音が全身に木霊する。エミルに見つめられると身体中が僅かに熱を帯びる。この浮かなくなる感情の名が私には分からない。

大きな手のひらに乗せた私の手を、そっと撫でると、指輪のあるところで少し止まった。瞳の色が少し陰る。

「外さないんだね？」

「……………うん。外しちゃいけないような気がして……………」

エミルは私の答えに「そっか」と、頷いて僅かに眉を寄せた。

その様子からエミルがくれたものではないのかもしれないと思えた。

だったら、これを私に贈ってくれた人は誰なんだろう？

その人は今、私をどう思っているんだろう？

……どうして、傍にいてくれないのだろう……。私を、愛していたから贈ってくれたのではないのだろうか？

「……ロ、マシロ」

「え」

浮かんでは消える、答えを得ることが出来ない疑問に胸が苦しくなる。そうして、押し黙ってしまった私にエミルが何度も声を掛けてくれていた。

間の抜けた返事で、顔をあげたときには何度名を呼ばれていたのだろうか？

「大丈夫？ 泣きそうな顔になっていたけど、何か嫌なことでも怖いことでも思い出した？」

いって顔を覗き込んでくれるエミルのほうがいつも泣きそうだな。そう思うとなんだか、ほんの少し申し訳なくて、ほんの少し嬉しくて、顔が綻んでしまう。

「ごめん、平気だよ。ただ、私でっきりこれをくれたのはエミルだったのかな？ って思ってたから、違うんだったら、どうして今、その人は居ないんだらうって……そう思ったら、なんか急に、哀しくなって……」

「マシロ」

平気だと重ねて、笑ったつもりだけど、きっと上手くいかなかったのだろう。エミルは、苦しげにきゅっと唇を引き結んで瞑目したあと、ゆっくりと開いた瞳で私を見つめて口を開く。

「僕には彼の考えていることは分からない」
「知ってる人なの？」

私の問い掛けにエミルは十分に間をおいてから「うん」と頷いた。

第四十話：うっかりいつく？

「彼が居れば、マシロの中に根を張った古代種を取り除く方法も、きつと分かるんじゃないかと思う。でも、答えない。理由は分からない……きつと彼の中で出ない答えがあるんだと思う」

どこか苦しげに告げられる言葉に私は「もう良いよ」と口にしたかったのに、エミルの話を遮ることが出来なかった。

「……思っけど、僕は彼が嫌いだ。今、マシロがどれだけ不安がつているか分かっているはずなのに、それなのに逃げてる。彼は、間違はなく、現状を一番理解しているはずなのに」

取った手にきゅつと力を込めてエミルは続ける。

「マシロ。僕の想いに応えて」

「……………」

「僕の隣に座って……僕は君が白月の姫であろうと、聖女と呼ばれている存在であろうと関係ない。記憶があってもなくても関係ない。僕は君が、マシロ・ヤマナシが好きだ」

叫ぶように告げられて、私は逡巡する。

私がエミルを選ぶということは、もうこれまでの私は必要ないということでもあると思う。

きつとこの宮殿に上がり、今までの私は居なかったことになり、全て新しく始まる。そして、エミルは私を受け入れて、必ず幸せにしてくれると思う。私個人を好きで、傍においてくれると思う。

……でも……それで、私は良いの？

それまでの私が、望んでいたかどうかは分からないけれど、白い月の少女として成したことはどうなるの？

「……………」

だからといって記憶を取り戻せば、私はそのとき愛していた人への思いも蘇ってしまうかもしれない。私は、そのときエミルを傷つけないという自信はない。だとすれば、やはり私の記憶はないほうがいい。そう、思うけれど、不安で、エミルのことを大切にも思うからこそ、私はエミルの気持ちを受け入れることに戸惑う。

そんな私の気持ちに敏感に気がついてくれたのか、エミルの手が俯いてしまっていた私の顔を優しく包み、そつと上向かせる。

優しい瞳が、大丈夫だというように、ゆるりと細められて、弧を描いていた唇が優しく音を紡ぐ。

「君を、護るよ……………」

エミルの大きくて綺麗な手が、私の頬を撫でる。

見上げた先の彼に、永遠の誓いを立てるように告げられた言葉。

目を覚ましたら、全く知らない場所いた。

それなのに、私はここに居たといわれ、意味の分からない、到底理解出来ない役目を持つ少女と重ねられ、更に混乱した。

簡単に人が死に、それを咎める術のない混沌とした世界。

それを現すように降り続ける雨。

助けて欲しかったのかも知れない。

私にとって何もないこの世界で、私だけが必要としてくれる人が自分がここに居る新しい意味が欲しかった……

これまでではなく、これから先、

この世界で生きなくてはならないのならば、誰かに、新しい私の役目を与えて欲しかったのかも知れない。

私はずっと怖かった……知らない私が成したことも、今の私が何も出来ないことも、何も知らないことも

その全てが、とても、とても、怖かった。

……きつとその、全ての恐怖から、彼は救ってくれる……

私は自然と瞼を落とした。

柔らかく暖かい気配が、私を包み、音もなく距離が縮まる。

息が掛かる距離まできてエミルは突然、ふつと顔を挙げ「離れろ」と私を突き放した。

それと同時に轟音と共に天井が崩れ、エミルの身体は軽々しく吹き飛ばされる。

「エミルっ!!」

どっ！ と、玉座の天蓋を支える柱に打ち付けられ、ずりりと床に腰を落としたエミルは、悲鳴に近い私の声に、大丈夫と応えるように片手を僅かに挙げてくれた。

「随分と好き勝手いってくれますね。私も貴方は嫌いです」

ガラガラと、積み上げられた　つい先程まで天井であったはずの　瓦礫が広間に流れ込むように崩れ、とつ、と小高く積み上げられた山となった一部の上に足をつけてエミルを見下ろしているのは、種屋だ。

ゆらりと尻尾を揺らし、好戦的な表情でエミルを見下げる姿には、寒気すら感じる。

種屋とは何？　どうして、種を売るといふ生業だけならこんなことまで出来るんだらう。彼はどうして、エミルを傷つけるんだらう……。

「だって、逃げてるよね……。出来ることをしない、そんな奴にマシロは任せられない」

エミルは、ぐいっと口の端から流れ出た血を拭いたけれど、直ぐにじわりと血が滲む。

ずきんつと頭が痛む。

前と同じように、目の前が明滅する……。記憶が混濁しているだけだ……。これは違う……。

以前、シゼにいわれたことを頭の中で反芻する。

違う、目の前の人じゃない、私を殺そうとしたのはこの人じゃない……でも、私の目の前で人を撃ち殺したのはこの人だ！　ぐらりと大きく体が揺らぐのをなんとか押し留めて床を踏みしめる。

「うつかり死んじゃうことの多い時期ですよね」

楽しげに口にしたその台詞に肝が冷える。

「確かに……そうだね。僕を殺すんだ？ 依頼もなく、君の意志で」
「ええ、私の意志で」

圧倒的に有利に見える種屋に一步も引けと取ることなく、エミルは挑戦的に口角を引き上げて、そっとカフスに触れる。

「カナイ、アルファ……」

呟く口元が音を紡ぎ終わる前に、ふっと黒猫の頭上からアルファが降ってきた。

稲妻が真っ直ぐに落ちるように

ドンっ！！

閃光が走る。

その衝撃で飛び散ってきた破片に、目を瞑り身体をビクリと縮めると

「お前は動くな」

という聞きなれた声が届いた。え、と私が声を漏らせば、いつの間にか私の前にカナイが立っていた。

第四十一話：規格外だよ！全員集合！

「カナイ！ 被害を最小限に、結界を張って！」

飛んできたエミルの台詞にカナイは頷き、ふつとどこからか出した短剣を八本、部屋の壁に散らした。的確に放たれた短剣は、その持ち場で、目視出来ない変質をとげ部屋の中を完全に困ってしまう。

「いきなり攻撃は、お行儀が悪いんじゃないですか？」

「それを、仕込み杖程度で防ぐ人にいわれたくないね！」

キンつと金属同士が弾きあう音が冷たく響く。

アルファは、身の丈ほどある大剣を振るっているのに対し、相手は杖の頭部を捻って引き抜いた細身の剣だ。

明らかにアルファが優勢に見えるのに、相手は一糸乱れることない。それが力の差を如実に現しているようで、総毛立ち立ちすくむ。

「そして」

アルファの剣戟を軽く受け流しつつ、ちらりとカナイを見る。

私もそれに釣られるように、私の前に立つカナイを仰ぎ見る。一点を睨みつけ、口内で何かぶつぶつと唱えていると思うと、

「散れっ！」

カナイの一声に反応するように床にごろごろと転がっていた瓦礫が弾け飛び、黒猫へと襲い掛かる。

間髪いれずに雨が降りこんで来る天井

既に夜空が窺える

から雷が落ちてきた。激しい光に私は思わず目を閉じたが、次に目を開けたときには変わらず彼はそこに立っていた。

対等に空から降り降りてくる雨粒すら、彼には無縁のようだ。

「結界を維持しながら大技使うのは良いですが、詰めが甘くなりま
すよ」

にこりと、そう告げて、ぴんつと指先を弾くと無数の風の刃がカナイを襲った。

刃のような風が私にも迫ってきたのに、微塵も影響がない。というよりは、刃が避けたような印象すらある。

カナイは、なんとか防いではいたただけけれど、無傷というわけにはいかなかった。ぽたぽたと零れ落ちた血が床を赤く染める。表情は読めないけれど、きつと痛い。よ、ね？

「それから、貴方もちよろちよろと鬱陶しい」

続けて静かにそう告げると、剣を引かなかったアルファが仕掛けた一撃に乗じて、一線走った。

「……………っ！」

「ごとんつと鈍い音がして、アルファが地面に片方の膝をつく。

じわじわじわ……………つと鮮血が床を染めていく。剣を取り落としたのだと目で追えば、その手は剣を握ったままだ。握ったまま床の上で黙っている。

「ひっ」

私が両手で口を塞ぎ、息を呑むのと同時に、アルファは新しく剣

を握り再び地面を蹴る。

ぴつと黒猫の頬を赤が染める。すいっと流れるような動きでアルファを避けると

「両腕、いらなぃんですな……」

「やめろっ！」

冷たい声にカナイが叫ぶ。

でも、それは遅かった。

擦れ違っただけに見えたアルファは無残にも肩から床に滑った。降り込んでできていた雨が赤い流れをより一層早いものにする。

声もなく、身動きが取れなくなったアルファは、歯噛みするよう
に身体を縮めた。額を支えに立ち上がろうとするが、到底無理だ……

……身体を支える、腕が……一本も、な、い……

黒猫の力は圧倒的だった。

カナイは私にもう一度、動くな。と、念を押して、エミルの前に走った。

どうして、どうして、どうして……

なんで、こんなことに……何が原因で、何が引き金になって

「わ、たし……」

私が居るから、私が記憶をなくしてしまったから……私が……引き金……？

私のせいで、今、みんなが痛い思いをしているの？ どうして……

……？

分からないよ、分から、ない

頬に当たる水滴が氷の粒のように感じた。
まるで雪のようだ。

冷たくて、痛い……

その中で私は孤独だった。痛くて寂しくて、苦しくて……私を助けてくれたのは、誰だっただろう……？　いつか、そんなことがあったような気がする。おかしい、私の知るはずのない記憶が、脳裏にチラつく。

冷たい雨……雪……身体を芯から冷やす雪。凍った心を、誰かに救われた。私はいつも誰かに救われる。

私は、いつも助かるべきではなかったのかもしれない。

「カナイ、僕よりアルファを……早く」

「駄目だ」

「術式でも私に敵わなければ、貴方に手はない。さっさとお友達の腕でもくっ付けてさしあげてはどうですか？　王子の言葉ですよ？」

こつっこつと水を弾く音。刻一刻と彼らの終焉は迫っているのだらう。

……じゃあ、私は、いつ終わるの……？

そう思った瞬間、ずっと鉛のように重くなってしまうていた両足が動いた。

「やめてっ……」

私はカナイとエミルの前に立っていた。
ぴくりつと黒猫は足を止める。

両腕を広げて立ちふさがる私に、カナイは、邪魔だ、どけ！ と、怒るが聞こえない。

聞きたくないっ。

「お願い！ やめて。アルファを……カナイを、エミルを……お願い殺さないで……誰かが今ここで死ななくてはいけないのなら！ 私を！ 私を殺して」

力の限り叫んでいた。

……寒い、痛い……怖い……。

でも私は叫んでいた。きゅつと唇を引き結んでも、その奥で、歯が恐怖でかちかちと小刻みに震える。それを隠すように私は続けた。哀願した。

「みんなを助けて……！ 私なら、最初からここに居るはずのない人間だから。私は今、何も持つては居ないから、だから、大丈夫……私を殺して？」

死ねば、夢から覚めるかもしれない。悪夢なのか良夢なのか分からないこの世界から。

頬を伝う雫は雨なのか涙なのか分からない。分からないことばかりだ。

ただ、告げきった私から恐怖は消えて、意味を成さない笑みが零れた。

カナイが私の肩に手を掛けて、ここからどかせようとしているのだと思うけど、私は退かないっ。

私の耳には誰の声も届かない。何も聞こえない。何も聞きたくない……それなのに……どうして、彼の声だけは耳に届くのだろう。

「……私に……貴方を殺せというんですか？」

私に……と、繰り返した黒猫に私はしっかりと頷いた。

それでみんなを助けてくれるなら、救われるなら、私はいらない……。

「無茶……いわないで、ください」

黒猫は雨に濡れた前髪をぐしゃりとかき上げて、刹那きゅっと唇を噛み締めて俯いたあと、意外にも泣きそうな顔で笑って、ふっとその姿を消してしまった。

それとほぼ同時に私の耳に音は戻ってきて、膝が、がくんと地面に吸い寄せられる。

良かった、これで、みんな死ななくて済む。そう安堵すると急に自分の身体が重くなった。そして、これでまた、この夢は続くのだなど、絶望した。

「マシロっ……」

がつつとカナイに腕を掴まえられて、床とは仲良くならなかつたけれど、ぐらぐらと揺らぐ視界は私の目の前を真っ暗にした……

また、私は彼を泣かせてしまった……

また？ ……どうして、私は、そんな風に、思ったんだ、ろ、う……どうして？

第四十二話：夢待ち人

……暗い、な……

雪、冷たい……寒い、な……この広い世界で私はたった、一人きりの特別……

ただ、一人きり……一人、ぼっち……とても、さむい

「……大丈夫、大丈夫ですよ……だから、お願い……」

波の漣に紛れるように微かに届く声がする。

……ワタシ、ヲ、モトメル ノハ……ダレ……？

ぐっとベッドの端が沈んで、誰かが私の傍に寄ったのだらうと分かる。気遣わしげに頬に触れる指先が微かに震えている。

そんなに怯えなくても、私は何もしいし何も出来ない。

何も怖いことなんてないよ。

「怖く……ない、よ……」

夢だか現実だか分からないまどろみの中で、私はその手を掴まえた。

相手の緊張が伝わってくるようで、私はきちんと覚醒して言葉を伝えたいと思うのに、もう片方の手で目を覆われた。

「これは夢です ……」

紡がれた言葉に、私は無意識に頷いていた。
でも、この声には聞き覚えがある。ついさっき聞いたはずなのに、
奇妙なことにあのときのような恐怖は全く感じなかった。

「マシロ」

私の名を紡ぐ声はとても優しく、愛しくて……その音だけで満
たされる気がする。

それは、とても不思議な感覚だった。

「記憶を、望みますか？」

不安げに、怯えるように、伝えられた言葉に、私は何も答えられ
なかった。

今もなお私の答えは ……分からない、だ。

何も応えられない私に、彼がふっと笑ったような気がした。そし
て、目元から離れた手のひらは私の頬を包み愛しそうに撫でる。

ほんの少し体温の低い手のひら。

それをとても心地良く感じるのは何故？

「貴方に選ぶ自由を差し上げましょう」

人の気配を直ぐ間近に感じる。

とくとくと早まる心音は心地良く身体に響き、不思議と落ち着い
ていた。

「少し触れますよ?」

問い掛けたくせに私の返答を待つことなく、左腕は私の顔の横について、右腕が私のお腹にそっと添えられる。

何かを探すように、ゆっくりと上に登ってくる手のひらの感覚に私は息を詰めた。

「大丈夫ですよ。ゆっくり同じように呼吸しててください」

大丈夫だと重ねられて私は肩の力を抜くように細く長く息を吐ききってから、ゆっくりと吸い込む。

この声、さっきじゃなくて、もっと、ずっと前から知ってる気がする。それに、何度も「大丈夫」だと……この、大丈夫に私は支えられていたような、そんな不思議な懐かしさすら感じた……。

ややして安堵感すら感じてしまっていた重さが、体からなくなる。私は急に不安になった。沈んでいたベッドの端がふわりと戻って、彼が離れていくのが分かる。

私は堪らず目を開けてしまった。

丁度立ち上がった彼と目が合って、私は慌てて身体を起こす。

恐怖とか怒りとかそういうのではなく、ただちゃんと向き合いたかった。それだけなのに対峙した黒猫は困ったように微笑む。

「夢……だよね」

口にした私に黒猫は仕方ないなというように「はい、そうです」と頷いてくれた。

そのまま、ふっと消えてしまつのではないか？ と、思った人影を掴まえることが出来て私は、胸を撫で下ろした。

目の前の有り得ない風貌の男性は、ちらりと私の手元へと視線を送つたような気がして、私は無意識に左手を包み込んだ。指先に指輪が触れる感覚を確認してほつとする。失くしていない、ちゃんとここにある……そう思うだけで安心する。

聞きたいことも問い詰めたいことも、怒鳴り散らしたいことも山ほどあるのに、私はその一つも口に出来ずに、彼を見上げていた。名前……なんといったっけ……エミルたちは確か

「……………ブラック？」

そう呼んでいたような気がする。

暫らく横になっていたせいで声が掠れてしまっていて、あまり上手く口に出来なかつたと思う。それなのにブラックは、瞳を細めて「はい」と感慨深げに頷く。

「ブラック」

「はい」

繰り返した私の声を噛み締めるように双眸を閉じ、丁寧に返事を返す。そして十分に間をおいてからブラックは目を開けると私の名を呼び話を続けた。

「貴方がもし、ここでの過去を捨て新しく生きなおすなら、今のまま過ごして下さい。誰も貴方に不自由をかけたりしないはずです」

「……………」

「そして、もしも、過去を望むなら……彼らに伝えてください。」

焰』と『結界石』と」

「焰と結界石？」

「そう、彼らに伝えれば彼らは答えに行き着くと思います」

「どうして……どうして、そんなことが分かるの？」

「それは、私が種屋だからです」

「……種屋って、何？」

「今ここでもう一度それを知る必要はありません。知らずとも、白い月の少女は皆を導くでしょうから」

「どこへ？」

「美しいときへ……です」

ブラックの発する言葉は、ひとつひとつが彼自身を強く傷つけているような気がした。だから、私はそれ以上の質問を重ねることが出来なかった。

「……信じて良いの？」

最後にとばかりに掛けた、当然ともいえるだろう台詞にブラックはとても静かに答えた。

「私は、マシロを信じています。そう、決めていたのに、取り乱してしまっていて、思い出すのに時間が掛かってしまいました」

「……私を、信じて……？ だから、私にも信じると、そういうのだろうか？」

どうして私の心は激しく揺さぶられるのだろう。

どうしてこの人の声だけで、私はこんなにも胸が熱く、そして、その表情に苦しくなるんだろう。

「貴方だけを信じています」

そういつてくれているのに、ブラックは

「そんなの無理って、泣きそんな顔をしてるよ」

伝えれば、笑みは自嘲的なもの変わって「泣きそんなんです」とあっさり認めて腰を折ると、私の身体をきゅっと抱き締めた。

「私の代わりに白猫が訪ねてきたら、もう終わったのだと思ってください。貴方は何者にも縛られる必要はありません」

そして、消えてしまった。

いいたいことだけ、だらだらと告げて勝手に消えてしまった。

激しい頭痛と眩暈が常だったのに、それが、胸の痛みが変わり「行かないで」と口にしそうになっていた自分に自嘲的な笑みが零れる。

触れ合った体に残った熱が消えてしまわないように、私は思わず自分の身体を抱いて丸くなった。無駄だと分かっているのに、

強く、

強く、

……掻き抱いていた。

第四十三話・正論者には逆らえまい

「……………」

私はじわりと浮かんでくる涙を無造作に拭って、ベッドから抜け出した。

それとほぼ同時に、寝室の扉が開きシシイが顔を出す。私と目が合うと、シシイは目にも明らかに胸を撫で下ろしたようで、小走りに駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？　どこかお辛いところはございませんか？」

頭の前から足の先まで眺めながらそういったシシイに私は大丈夫だと頷いた。

「エミルは？」

私の質問にシシイは刹那息をつめたあと、瞳を伏せると「今は駄目です」と首を振った。何が駄目なのか食いつけば、驚いたような顔をしたものの、ゆっくりと説明してくれる。

その穏やかさが、今の私にはとてももどかしい。

「ハスミ様とキサキ様へ、状況説明をされています。今夜中にはお戻りになると思いますが、まだ戻られてはいませんでした」

あの騒ぎは夢じゃない。

「じゃ、じゃあ、アルファとカナイはっ！　二人とも無事？」

がつつりと両腕を持って問い詰めた私にシシイはこくこくと頷いた。

「二人ともご無事です。闇猫に襲われて無事で居られたのは姫様のお陰だろうと……」

「会いたいの！二人に、会いたいの。どうすれば良い？どこに行けば良いの？」

シシイの言葉を遮って重ねるとシシイは困ったように眉を寄せた。

「今夜はご辛抱ください。城内がざわついております。これまで一度も玉座に傷を成したものはおりませんでした。それが今夜破壊されてしまったのです。今は」

「ものなんて直せば良いじゃないっ！ただ座るだけの椅子になんの価値も無いっ！兎に角、そんなものどうでも良いから、二人の無事を確認したいの。みんなに会いたいよ」

必死に食い下がる私にシシイは心底困ったように、遲疑逡巡したあと、何か一大決心をしたのか、顔を上げるときゅっと口元を締め、頷いた。

その決意に感謝して、私はシシイの話を待った。

「外を廻って行きましょう。研究棟の隣が寮病棟になっておりますから、部屋は私も知りませんが……大丈夫、あちらの知り合いに私が聞きます」

目立ちますから被ってくださいと、ストールを大きく開いて頭からばさりと掛けられ、私はそれを両手で胸元に抱いた。

「少し濡れますが……」

「気にしないで」

この際その程度のことどうでも良い。

きっぱりといい切った私に、シシイはにこりと微笑んで、では行きましょう。と、部屋を出た。

……ドンドンっ！ ドンドンっ！

私は、シシイに案内された部屋の扉を殆ど殴るように叩いた。

中の足音がこちらに近づいてきているのが分かって、ノックをやめなきゃいけないのに、手の勢いが止まらなくて、苛立たしげにノックを重ねてしまっ。

「ここは病室ですよ。そんなに、叩かなくても……うわっ」

扉が開くと同時に、勢い良く雪崩れ込んでしまった。私を正面から受け止めたのはシゼだ。私の顔を見て物凄く驚いている。今夜来るとは思っていなかったのだろう。

「マシロさん！ どうしたんですか？ しかも濡れてるじゃないですか」

「二人とも無事？！ アルファの腕は！ カナイの傷はどうなの！」

シゼの話を聞きもしないで、そう詰め寄った私に、シゼは呆れたように嘆息し「大丈夫ですよ」と答えた。

「本当に？」

「本当ですよ。ぴんぴんしている、とはいえませんが、命に別状は

ありません。数日あればカナイさんは元のように回復すると思います。アルファさんのほうは完治には暫らくかかると思いますが、あの人の回復力も桁外れなのでそれほど心配には及ばないでしょう」

ゆっくりとそう口にしつつ、落ち着いてください。と、重ねたシズはするりと私の頭からストールを取り去ると、傍にいた看護師さんのような人からタオルを受け取る。

「兎に角、貴方が風邪でも引いてしまつては大変です。濡れたままだと体が冷えますよ」

ふわりと頭から掛けてくれたタオルは柔らかくて暖かった。

「そんなに、泣きそうな顔をしなくても」

心底困つたようにそういつて笑つたシズは、こちらですよと部屋の奥へと案内してくれた。

そして奥の一室への扉の前でノックするように手を構えて、ぴたりと止まつたシズは、ちらりと私を振り返り「アルファさんは機嫌が最悪です」と注意した。

今更、その程度のことを念押しシズに、私は、ふつと気が緩み「分かつた」と頷いたときには笑えていたと思う。その様子に微笑んで、シズは静かにドアノブを捻り「失礼します」と開いた。

「誰の機嫌が最悪なんだよ、シズ。可愛くない」

「……そんなことより、お二人ともどうして立っているんですか？ 横になつていてくださいって」

むつと眉を寄せたシズの台詞を二人はあっさりと切つた。

「部屋に帰んの。俺古臭い臭いは嫌いじゃないけど消毒薬臭いとこ
ろじゃ、眠れない。デリケートだから」

「僕も部屋に帰る。病人じゃないから」

「二人とも怪我人です」

「あれ？ マシロ。お前大丈夫なのか？ 頭とか、頭とか、頭とか
……」

それじゃあ、私は頭弱い子みたいに聞こえる。

シゼを完全に無視して、私に歩み寄ったカナイは、タオルの上か
ら私の頭に手を乗つけて顔を覗き込んでくる。

「あた、」

「頭も身体も大丈夫です」

繰り返しそうだったカナイに釘をさせば、ふっと口角を引き上げ
てよしよしと頭を掻き雑ぜられる。

「私より、カナイたちはどうなの？ 平気なの？」

「平気平気」

ひらひらと手を振ったけど、カナイは左腕をアルファは右腕を吊
っている。

「そんなやせ我慢しなくても、平気じゃないでしょカナイさん。ほ
らほらほら、骨まで見えてたんですから」

アルファは健勝そうな左腕で、カナイの腕をぐりぐりと圧す
と、カナイが悲鳴を上げた。……素晴らしい悲鳴だ。

「すっぱり切り落とされてた奴にいわれたくねーよっ！ー！ お前、

絶対！俺が完全回復しても手を貸してやらないからなつ。覚えてるよっ」

二人とも凄いことを平然といい合ってるけど……耳にしただけで痛そうだ。というか、あれはやっぱり夢ではなかったんだ。

アルファの切り落とされた右腕が脳裏に蘇って私は血の気が引いた気がした。

「二人とも怪我人です。ベッドに戻って……戻りなさい」

シゼが怒りに満ち満ちた声を出した。

眉間の皺は、これ以上濃くするのは無理！というほど深く刻まれている。年齢よりシゼが老けるのも仕方ない気がした。

その最大限の要因と思われる二人は、その声に顔を見合わせたあと、私のほうも見て、渋々とベッドに戻っていく。

「ここは僕の領域です。僕が良いというまで動くことは許しません。貴方方二人が、こんなところでごろごろしなくてはいけない間に何かあったらどうするんですか。一分一秒でも早い回復を目指すのが当然でしょう。子どものようなことを、うだうだといわないでください」

……シゼのお説教は正論だけに誰もいい返せない。

押し黙った二人に、シゼは静かに付け加える。

「今夜一晩だけで構いませんから」

相当妥協した結果だろう。

シゼは重たい溜息を吐いて「包帯取ってきます」と踵を返した。

いわれてみれば、カナイの腕は再び出血していた。そのことにカナ

イ自身気がついていなかったのか、私の視線に気がついて身体を強張らせた。あの悲鳴は伊達じゃない。

第四十四話：シル・メシアという舞台の盤上遊戯

「あー、お前も座る？　そこら辺、椅子あるだろ？」

今更だけど、室内はちょっとしたビップ待遇な病室という感じだ。仲良く並んでいるベッドも、セミダブルくらいあるんじゃないだろうか？　ゆったり出来る空間が用意されていると思う。

多少、消毒薬の臭いはするけどカナイがいうほどじゃない。

椅子はあるけど私はカナイの傍により、ベッドの端っこに腰掛けるともたもたしていた腕を取り上げて肩の上で結ばれていた三角巾を解いた。少し抵抗されたものの強引に進めたらすんなり折れた。

「なんか不器用そうなんだよね……カナイって……」

「ほっとけよ」

ふうと短く嘆息しつつ、血が滲んでいる上腕の包帯を解くために袖を折る。すると包帯を解いていくと痛々しい傷が姿を現す。丁度、シゼが戻ってきて「替わりますよ」というのを断って、私は新しい包帯を受け取り取り替えていく。

「やっぱり慣れてるな？」

「……そんなに頻繁に怪我しないよ」

「そーいう意味じゃないだろ」

「マシロさんも一応薬師ですからね、身体に染み付いているのでしよっ？」

不要になったものを片付けつつ、ほんの少しだけ嬉しそうな声色

でシゼが告げる。

私が薬師。

お医者さんもどきのようなことをしていたとは、正直思えないけど、シゼがいうように酷い傷跡にも抵抗ないし、包帯も上手に巻けたと思う。

「雨、上がりましたよ。これで少しは作業が進みますね」

包帯を取り替えている間に、退屈したアルファは、窓を開け放ち真っ暗な庭に目を凝らす。廊下から漏れてくる魔法灯の明かりで見る庭は少し薄気味悪い。

でも私はそこを突っ切ってきた。

「本当だ……雨季明けかな？」

「うん、そろそろだと思えます。長かったですね」

「たった二週間だろ」

そのたったが、アルファにとってはきつと一年で一番長い二週間だったのだろうし、私にとって一番濃い二週間だった。というか雨季は去っても私の問題は、まだ解決を見ない。

「アルファ……」

「なんですか？」

「物凄い普通にしてるけど、腕、大丈夫なの？」

帰るときには声を掛けるようにと念を押して、シゼは部屋を出て行った。もちろん二人には安静をいい渡したけどこの二人が護るかどうかは定かではない。

「大丈夫ですよ」

いったあと、ごによごによとまだ剣は握れませんが、と加えてそっぽを向き

「僕は剣を握る手は両方いけるので、別にそんなに困らないです」

「その辺の一般兵や騎士見習いと一緒だよな？ 今、騎士塔に放り込んだら、絶対、袋叩きだろうな……雨続いてたしなあ」

「カナイさんの減らず口を塞ぐくらいは出来ますよ」

「ざーんねん。俺は略式詠唱で発動可能です。アルファの鈍^{なまく}ら剣より早く発動する自信があるね！」

「やってみないと分からないじゃないですか」

「す・とーっぷ！」

そんなのどっちもどっちだ。

それよりも安静を今しがたいわれたところなのにと、立ち上がりかけた二人を睨みつけた。

アルファは、ちえっと退屈そうにベッドに戻りごろりと横になる。

「マシロも早く戻って休めよ。いきなりあんな乱闘に巻き込まれたらビビるだろ。眠れそうになかったら、シゼに何か出してもらえよ」

珍しく優しいカナイの台詞にありがとう、と返す。

確かに私がここに長居をしたところで何も変わらない。そのくらいならみんなに心配を掛けないためにも、ベッドに潜り込んで目を閉じるのが一番だ。

そうするよ。と、告げシゼと同じことを二人に念押ししてから部屋

を出す。

出て直ぐのところにはせは居ただけけれど、少し書き物をしていた。出てきた私に気が付くと、「少し待ってください」というから、私はぼんやりと閉めた扉を背に待つことにした。

「……………なよ」

「分かってますよ」

別に立ち聞きするつもりはないのだけど、中から二人の声が漏れてきていた。離れるかどうか迷ったけれど、また喧嘩とか始めてはいけないから、私はそのままそこに居座った。

「本当に、分かってるのか？」

「分かってますって、僕は、エミル様の騎士です。エミル様の命令以外のことはしないし、無駄に突っ込んでいたりしません。犬死はご法度です。はい。分かってます。種屋に手は出しません。負け戦はしません。どうせ僕はあれに敵いません。ええ、ええ、もう二度も煮え湯を吞まされてますからね、身に染みています。分かってます。分かってます」

アルファ、一体何回「分かってます」を繰り返したんだろう。

そのたびに「分からない」「納得できない」と悲鳴をあげているようで胸が痛い。きつと、隣で聞いていたカナイもそうなのだろう。先ほどまでのように茶化したりも一切しなかった。

「土台、闇猫相手に剣を揮うなんてこと馬鹿げているんです。僕を切りつけたと同時にカナイさんまで巻き込んで幻視を見せ続けたんですよ？ 有り得ない」

「お前にとっては腕一本で済んで良かったじゃないか」

「……………あのとときの芋虫状態の屈辱的な気分を、カナイさんも味わえ

「良いんです」

苦々しく口にするアルファの台詞に呼吸すら辛く感じる。

「どうせ、種屋にとってこの世界なんて、たった一人でプレイしている盤上遊戯でしかないんです。僕らは種屋に生かされている。それが分かっても、僕たちは僕たちの居場所を護るために剣を取るしかない。本当に、馬鹿馬鹿しいですよね」

「そうだな。誰が始めたゲームなのか分からないが、俺たちは唯の器だ。俺たちがそう思うんだ、町の奴らからしたら種屋は畏怖の存在でしかないっていうのも納得……一人でしか居られない、というのも納得だ……」

真摯な二人の会話に、私はもうこれ以上聞いていられなくて、そっと背を離しかけて、その続きにふと押し留まった。

「今、少しでも違うことがあるとすれば、常に一人であったプレイヤーが二人居るということです。マシロちゃんが、親を盤上から逸らしている。だから安泰で居られるんです。御伽噺と一緒にですよ？ 唯一、白い月だけが、青い月を抑えていられる。その箍が外れたら、見る影もない。ブラックも”種屋”を入れる器でしかない。ただ、それだけの遊びなんですよね」

アルファの声は、雨の日の機嫌の悪いそれでもなく、いつもの明るいそれでもなく、苦悶に満ちたものだった。

カナイはその台詞に、やや間を置いて、そうだな。と同意する。僅かな沈黙のあと、改めて声を発したアルファは、取り繕っている、としても幾分か色を取り戻していた。

「マシロちゃんがプレイヤーに戻らなければ、世界はどうなるんで

しょうね?」

「別に、変わらないだろ? この世界はいつだって不安定だ。争いなんて珍しくない。王権交代が行われるときは尚のことだ」

俺たちのすることは変わらない。そう続けたカナイに、今度はアルファが「そうですね」と答えた。

「エミルさんを守るだけです」

「……ああ」

命を左右するものが、遊び感覚で行われている世界。そんな世界で……私の存在に意味があるとすれば、それはこれまでの記憶が必要不可欠。そういうことだろうか?

私は、後ろに回して扉に付いていた手を、ぎゅっと握り締める。

「マシロさん、行きましよう?」

そして、やっと掛かった声に、私は「あ、うん」と、答え、一度だけ扉を振り返ってから、シゼの後ろに続き寮病棟をあとにした。

第四十五話：楽な道？ 茨道？

「……どうかしましたか？」

ほんのりとした明かりだけで保たれる視界の廊下を歩きながら、黙り込んでいた私にシゼが問い掛けてくれる。少しでも心配そうな色が見えるのは隠そうとしても隠せなかった部分だろうか？

「うっん……どうもしない」

私の心は揺れていた。今、ここでシゼにブラックから聞いた話をすれば、私は近いうちに記憶を取り戻せるかもしれない、でも、本当に、その記憶取り戻して良いのだろうか？

私は、命の掛かった盤上ゲームのプレイヤーを勤めるのだろうか。私が誰かを殺すことがあるのだろうか？ 今夜みたいに、多くの血が流れて……。

「考え事も結構ですが、今夜は休むのが最善だと思います。心も疲れているでしょう。そんなときに、何かを決断することは良くない」

僕は、そう思います。と締め括ったシゼに私は何も応えなかった。シゼと一緒に部屋まで戻ってくると、シシイが心配そうに出迎えてくれた。

「マシロさんは、シャワーでも浴びて冷えた身体を温めて、着替えてください」

帰りは室内を通ってきたけど、行くときにスカート裾は汚れてしまっていた。もちろんいわれなくてもそうするつもりではあった

が、今日は素直に頷いた。

「シゼはどうするの？ もう、休むの？」

「僕はこれからエミル様に、二人の怪我の具合を報告してから、寮病棟に戻ります。あの二人は放っておくと病棟まで破壊しかねませんからね」

肩を竦めてそういったシゼに、私とシシィは顔を見合わせてくすりと笑った。

私が着替えなどを済ませて部屋に戻ると、シゼはもう居なくなっていた。ぼんやりとしたまま、私がベッドの端に腰を降ろすと、シシィがティーカップを持ってきてくれる。

ほわりと上がる湯気に気分も少しだけ和らいだ。

香りからしてホットミルクだと思うけど、少し違う香りが混じっている。

「蜂蜜が少し入っております」

「ああ、それで……ありがとうございます」

両手でそっと包み込んで、ふーっと少し覚ましてから口を付ける。ほんのりした甘さがじわりと身体に広がって胸が落ち着く気がした。

「シシィも、他のメイドさんもよく気が利くよね。王宮勤めとなると自然とそうなるの？」

特に大した話題もなく問い掛けた私に、シシィはありがとうごさいます。と、礼を告げてから話してくれる。

「殆どはエミル様とシゼ様のご指示で、私どもは動いております。そのミルクもシゼ様に先程仰せつかりました」

「ふーん……結構細かいことまで気にしてくれているんだね？」

「ごくんとカップの中身を飲み干すと、そつと手の中からカップを抜き取ってベッドに入るように進められる。」

「エミル様はもちろんですが、皆様、マシロ様をとても気に掛けていらっしやいますよ。マシロ様は皆様からご寵愛を受けていると思われます」

「……………白月の姫、だから？」

自嘲的な笑みを浮かべてそう問えば、シシイは慌ててそのような理由だけではありませんよ。と首を振ってくれるけど、そういう理由も含まれるってことだよね。

分かっていたことだし、それでもそのことに存在意義があるなら良いか。とも、思わなくもない。でも、今の私にはその意味もない。

「エミル、戻ったかな？ もう、寝てると思う？」

私の質問に、シシイはやや思索して「起きていらっしやると思いますが」と答えた。

「まだ、頬の腫れが引いていらっしやらなかったようですし、冷たいタオルなどお持ちしては如何でしょう？」

にこりと微笑んで、そう続けてくれたシシイに、私はそうだね、と頷いた。そしてシシイが用意してくれた、ちよつと冷えすぎなのでは？ と思われるタオルを片手に、ぐるりと廻ってエミルの部屋へ向おうとしたら、シシイに止められた。

「こちらから直接向かわれては如何ですか？ 夜着ですし」

そう告げられて、それもそうだね。と、笑って返し、寢室同士繋がっている扉を叩く。中からは少し驚いたような声が返ってきて、私だと告げればどうぞといってもらえた。

そつと入室すれば、エミルは一人でぼんやりとベッドの端に腰掛けていた。

入ってきた私に顔を挙げ「大丈夫？」と優しく問い掛けてくれる。そして、腕を伸ばすとおいで、と招いてくれた。

私はそれに誘われるまま歩み寄ってエミルの正面に立つと、そつと微かに赤みの残る頬に触れる。

「っあ、マシロ手が氷みたいだよ？ 大丈夫？」

びっくりつと身体を引いたエミルに、反射的に謝った。

「ごめん。冷やしてあげると良いかと思って、冷たいタオル握ってきたから……」

いって反対の手に握っていたタオルを見せると、エミルはなるほどと笑い、そのタオルを取り上げると、ベッド脇にあった小さな台の上に置いてしまった。

「マシロの手で良いよ。冷たくて気持ち良い」

「え、あ……うん」

すつと私の手を取って頬に当てると、今度は気持ち良さそうに双眸を伏せた。

男の人の頬に触れているのに、とても肌理が細かくて綺麗だな、とか、睫毛長いな、とか思ってしまうと必要以上にドキドキしてしまう。その影響だとは思わなければ、直ぐに手のひらはエミルの頬の温度を奪い取って暖かくなってしまふのに、エミルはその手を離そうとはしない。

落ちている沈黙に耐えかねて、私が名を呼べば、ん？ と顔を上げ問い掛けるように瞳を細めた。

「あ、あの……エミルは大丈夫なの？」

つて、頬が赤いのに大丈夫なのって質問もどうかと思う。私は必要以上に動揺している。

「大丈夫だよ。ああ、といつても、ちょっと奥歯が抜けちゃったから、別の歯を入れないといけないんだけど」

それで腫れていたのか。

私は妙に得心しつつも、その原因になったのが多分自分だろうと思うと哀しくなる。

「ごめんね……私が居たから」

正直、頭の整理は全く追いつかない。

でも、みんなの話を纏めると、きつと私に指輪を贈ってくれたのは、あの黒猫で、彼は罪人？ とか、あまり良くない人で……きつとみんなから畏怖の念を抱かれてしまっているような人だ。

それでも、きっとあの人には私が必要だったのだろう。

そうじゃなかったらあんな泣きそうな顔しない。彼を助けるためには、私の記憶はきつと必要だ。それを取り戻してしまっただら私はこの世界で……

「おいで」

きゅつと唇を噛み締めると、エミルは私の腕を引いて片方の膝へ座らせると、ふわりと抱き締めてくれた。心地良い温もりにほっとするものの、どこか落ち着かなくて気持ちこそわそわと浮き足立つ。

「エミル……」

ぼつりと名を呼べば「うん」と柔らかい声が降ってくる。

「教えて欲しいの」

「……うん。僕に分かることならなんでも」

問い掛ければ、必ずそう返ってくる。

分かっている、質問する私は甘えているだけだということくらい分かる。でも大きな手が優しく髪を梳き撫で付けてくれると、甘えて良いのだと勝手に許されているような気になる。

「ブラックは私だけは殺せないといった」

「うん、そうだね」

「……この世界で、もしも私が必要とされるのなら、私は彼のことを思い出さないといけないんじゃないかな？」

エミルの胸に顔を押し付けていたから、声はくぐもっている。

それより先にぼそぼそとしか告げられない。それでもエミルはその声を拾ってくれて、思案気に唸る。

「マシロはどうしたい？」

「え？」

「マシロ自身は、どうしたいのかなと思って。僕の知っているマシロはね？ とても責任感の強い子なんだよ。それなのに自己評価は地を這うように低い。こんなに可愛いし、こんなに優しいのに、どうしてそんなに自分に自信が持てないのか、僕には不思議なんだけど……」

次は褒め殺しに合うのだろうか？ 私はエミルに額を押し付けたまま、ぐりぐりと頭を左右に振った。エミルがくすぐったそうに、くすぐすと笑ってくれるのが、ほんの少し嬉しい。

……私は、私自身は本当にどうしたいのだろう……。

第四十五話：楽な道？ 茨道？（後書き）

ここがBADENDとの分岐点になります。本筋とは全く関係ありませんが、もし、読んでみたい。と思ってくださる方がいらっしやいましたら、是非どうぞ。

4月1日（時間未定）より公開開始です。

裏なし（http://www11.plala.or.jp/
shappy/been/mouhitou1.html）
裏あり（http://www11.plala.or.jp/
shappy/been/2.html）

< の部分をR指定用のパスワードに置き換えてください >

第四十六話：好きの種類

エミルに投げ掛けられた疑問を頭の中で繰り返し考える。

考える。

考える。

考える。

行き着く答えを私は持っているのだろうか？

結局、ふうと嘆息した私にエミルが「ねえ」と声を掛ける。

「マシロ……マシロはどうしてここへ来たの？ 今夜はもう休むようにいわれなかった？」

「え？ あ、だから、その」

「使用人が止めなかった？ それとも勧めたかな？」

シシイは止めはしなかったけど、勧めもしなかったような、いや、勧められたのかな？ 私が考えて答えに詰まっていると、エミルはふふつと笑いを零し「マシロは可愛いね」と重ねる。

「ねえ、どうしてマシロの部屋と僕の部屋は繋がってると思う？」

「……………え？」

問われて改めて考える。

実際、確かに無用心な造りになっている。この内側の扉は全て鍵が掛からない。私とエミルの間は、常に行き来が自由なのだ。

「僕はそんなに安全圏の男なのかな？ 嬉しいような哀しいような

……………男としてちょっと微妙だよな」

「え、ええと、エミル？」

もぞりつとエミルの腕の中から顔を上げると、曖昧に微笑んだエミルと視線が絡む。

「な、何の話だっけ？」

「んー？ なんだったかな？」

緊張して問い掛ければ、悪戯をするときのように意地悪な笑みを浮かべたエミルが、はぐらかすように口にする。私はそれから逃げようように「そろそろ休んだほうが」と腰を上げようとしたら、ぐいっと腕を引かれて簡単にベッドに押し倒されてしまった。

……ぼふっ

と、柔らかなスプリングに受け止められ、私は目を丸くした。どうしてそんなことをされるのがさっぱりで、分からなかった。

「ちよ、エミル？」

「こづいっ仲だと思われていると思うよ？」

私の顔の横で肘をついたエミルの指先がそつと髪を撫でていく。体重は殆どかけられていないけど、覆い被さるようにされては私は動けない。

……邪推するものが出てくるといけないから。

最初に部屋に引き止めたとき、エミルは確かにそうだった。

それはつまりこづいっこと……そう思い至った瞬間、体の奥がざわざわとざわついて全身が熱くなった。

私の動揺を知ってか知らずに、エミルはぽつぽつと話を続ける。

「マシロは謝らなくて良いんだよ。何も悪くない。闇猫、世間一般的に彼はそう呼ばれることが多いのだけど、その彼を怒らせたのは僕だから」

そんなことはないとはつきり伝えたいのに、エミルがふわりと降りてきて私の首筋にキスをするから私はそれどころじゃなくて

「前に彼がいったよ『こうなることを望んでいたんじゃないか』って、僕はそれを否定も肯定も出来なかつたけど、今ははつきりと肯定出来る。僕はとてもズルイ人間で、マシロが記憶を失くしてしまつたとき、ほんの少しだけ嬉しいって気持ちもあつて」

そつと私の傍に横たわり左腕を枕にして、空いた右手で私の左手を絡みとつて、ぽつぽつと話を続ける。もう殆ど耳元で囁かかれている状態に、私は浮かされてしまつていて言葉の意味をちゃんと考えられる自信がない。

「これでまた、最初からやり直せるかもしれないと、そう思つちやつたんだ」

そこまで告げるとエミルは身体を起こし私の顔を覗き込むと、ねえ、マシロ。と問い掛けてくる。

声が上手く出ないから目を合わせると、エミルは瞳を細めて絡め取り繋がれていた手に、きゅつと力を込める。

「僕じゃ駄目？」

ちゅつと額に口付けられる。

「マシロが傍に居ると僕は嬉しい」

瞼に唇が降り目尻へと滑っていく。

「心穏やかにもなるし、癒される」

頬を軽く食まれぺろりと舌が這う。思わずぴくりと肩を跳ねさせると、繋いだ手に力が入り解放してはくれない。

「マシロが白月の姫である必要も、聖女である必要もないよ。ただ、マシロで居てくれれば良い……あんな失態を見せたあとだけど、僕がきつと君の不安を取り除いて上げるから」

思わず次は唇に触れられるのかと緊張すれば、口付けは耳朵を甘く噛んで耳元に下りてきた。

好きか嫌いかの二択しか、世界に存在しないなら、私はエミルを好きだと思う。嫌悪する気持ちは全く湧かないし、突き放す簡単な理由すら思い浮かばない。

「好きだよ」

そつと添えるように呟かれ「嫌だったり、痛かったりしたらいつて、直ぐやめるから」喉元に確認するようにキスを落としてから、そつと唇で胸元のリボンをしゅるりと解かれる。

引き絞っていた拘束が解かれれば、簡単に肩は肌蹴た。

繋がれている手は片手だけなのに、なんとなく全身を緩く拘束されているような気になる。

優しく触れられる愛撫に、身体は熱を持ち鼓動は早くなる。
直ぐにやめる……そういわれて、やめて欲しいのか続けて欲しいのか分からない。

……信じています。

私だけを信じているというのはどうということだろうか？

私はやはり記憶を取り戻して、そして白い月の少女もやらなくてはいけないのだろうか？

エミルなら私に何も考えなくて良いように、きつとこれから先これまでの記憶がなくても困ることのないように、取り計らってくれるだろう。優しく甘やかせてくれて、好きなことを好きなようにさせてくれる……でも、私はここにいたら、自分で何も考えなくなってしまうような気がする。

自分で考えて判断して行動する。

それすらやめて、何かあれば他人のせいにして、私はこの異世界で生きるのだろうか？

「……………っあ」

思考の海に吞まれていたのに、胸元を這う柔らかな唇と大きな手のひらに、ぞくぞくと心が振るえ現実を引き戻される。

唯一自由になる手でシーツの皺を強く掴めば「おかえり」と胸元で囁かれた。

エミルはちよっぴり意地悪だ。でもやっぱり優しくて、きつと私が無理に身体を動かしたり逃げ出そうとしたら、その手を身体を解放してくれると思う。

そのくらいの力の余裕があって、私の危機感をギリギリで刺激し

ていない……。

「……っん、エミル、ダメ……」

腰辺りに口付けて強く吸い上げるエミルに、私は始めて抵抗した。嫌とか痛いとかじゃなくて

「ダメ？」

「だめ、だ、よ」

声を出すと微かに熱っぽく息が上がっていた。

撫でられ触れられて口付けられていて、出来る限り感じないようにと努めたつもりだったのに、嫌だな……なんだか凄く恥ずかしいし、身体は続きを求めているようで、本当に恥ずかしい。

「何がダメ？」

エミルは視線が真っ直ぐ絡められる位置まで戻ってくると、頬を寄せて私の身体を抱き締めた。触れる肌が暖かい。直に伝わってくるような互いの心音がとても早くてくすぐったい。

「痕を残されるの、怖い？」

「……」

そういつて顔を覗き込んでくるエミルの頬は、少し朱を帯びていて瞳は潤んでいた。私の細かな気持ちさえも感じ取って察してくれるエミル。それならきつと、もう、答えを知っている……知ってるはずだけど、自分からは口にしない。

本当にちよっぴりズルイよ。

エミルのことを好きだと思う。
大切だと思う。
護りたいと思う。

だから、触れられるのも嫌ではないと思ったのに、何となく身体に痕を残されるのに抵抗があった。

ぎゅっと握って離されることになかった指先が解放され、そっと頬を包む。そして、唇が重なり、私は息を詰め瞳を閉じた。

軽く触れ合う口付け……優しくとても甘い。

僅かに唇を開き吐息を漏らせば、つうと舌先が唇をなぞり歯列を這う。

「……………うん」

じりじりとじらされるような口付けに、熱の籠った声が漏れる。

ドキドキが頭の芯まで支配して強く脈打つ、身体中が熱く浮かされる。でもそれ以上は決して踏み入ってこようとはしない、まるでそこには見えない壁か、誓約があるように互いに駄目だと分かっている。

「こっつして、唇にも触れさせてくれるのに……僕は、もっとマシ口が欲しいよ……ねえ、駄目？」

「……………」

私は声が出ない。

重ねられる口付けのせいではなくて、エミルの瞳がうつすらと涙に濡れていて……苦しい。私の声を答えを殺してしまう。それなのに頭のどこかは冷静で、それをとても綺麗だと思う。

「……僕じゃ駄目、なんだね？　好きだよ、好き。マシロが好き……」

鼻先が触れ合う距離で、唇が僅かに触れ合う距離で、苦しそうに紡ぎ出される告白に、ようやく私は「ごめん」と紡ぎ出せた。

「エミルのことは好き、嘘じゃない。でも、こういう好きじゃないと思う……本当に、ごめん」

近すぎるくらい近い距離で、私はやつと逃げずに口にした。

一瞬エミルの瞳は揺らいで、泣いてしまうのではないかと思ったけれど、ぐっと瞳を閉じて何かを堪えたあと、もう一度目が合ったときには微笑んでくれた。

そして、ちゅっ唇に軽くキスを落とされ、虚を突かれて目を丸くしている間に、身体を離すと肌蹴ってしまった夜着をそっとうしてくれる。

第四十七話・男性陣はお天気屋が多い

「どう足掻いても、彼には敵わないのか」

エミルはどこか悟ったような、諦めたような顔をして笑ったあと、私の左手に嵌っている指輪をぴんつと弾いた。落花流水の如くとは行かないねえ。と、しみじみ。ごめん、と尚重ねそうになる私の口元をそつと指先で押さえて、首を振る。

もう謝らなくて良いということだろう。

「今夜だけ、ここに居て……って甘えても良い？」

そんな顔してそんな風に問い掛けられたら、嫌だと、駄目だといえる人がどれだけいるんだろう？ 私は、こくんつと頷いた。良かったと微笑んだエミルは、ぎゅううううつと私を抱き締めてしまう。

ギブ……ギブアップです。王子……。

ばしばしと背中を叩けば僅かに力は緩んだけど解放してくれる気はゼロのようだ。

「彼は今夜来た？」

「……………うん」

「なんて？」

「……………信じてるって」

私がぽつぽつと答えるとエミルは、そう。と頷いて私を抱く腕に力を込める。

「彼が好き？」

「分からない。それに少し怖いとも思う。でも、泣かせたくない」

何故だか分からないけれど、とても純粹な人に思えた。

黒を身に纏うけどその心は子どものように無垢で、それこそ極端に善悪の判断すらつかないくらい真っ白に思えた。

そんな彼のことを、今私ははつきりと思い出したいと思う。

それに、もし、私が本当にみんなを　せめて私の知る範囲の人だけでも護りたいと本気で思うなら　ここで安穩としているわけには行かないと思う。私だけの平穩が、私の望みではない。私に出来ることがあるのなら、やっぱりやるべきだと思う。

これまでの私がやってきたことを、無駄にすることはしたくないとも思った。

「私ね……頑張りたいと思うの」

そう告げれば当然のように「マシロは頑張ってるよ」と返ってくる。そして、エミルは私を一旦解放すると、目を擦りつつ「少しだけ眠ろう」とシーツを上げてベッドの中に潜り込んだ。

もちろん「じゃあ部屋に」と戻ろうとした私は掴って「居てくれるっていったよね？」という若干強引な笑顔によってベッドの中へ引き込まれた。

翌朝、私たちは様子を見に来てくれたシゼに起こされてもんのすごく、複雑そうな表情をされた。焦っているいろいろ説明しようとした私を、あっさり二人とも無視してシゼはエミルの治療を始めてしまう。仕方がないから私は部屋へ一旦戻って、身支度をして薬の

ことをカナイとシゼに相談しようと思った。

部屋に戻ると、今朝の当番なのだろうアラが、にやにやと訳知り顔で迎えてくれた。シシイから絶対何か聞いた感じた。そしてそれはきつと、事実の斜め上くらいを歩いているだろう。だからって、否定しても受け入れてもらえないだろうことは想像に難くない。

それでも一応エミルの名誉のために説明したけど、案の定「分かっています、分かっていますよ」と微笑まれた。何を分かっているというのだろう。がっくりと落とした肩にアラは益々にやにやした。

「あ、あのね、さっきのはね？」

「別に僕はマシロさんがどなたと添い寝なさっていても結構です。興味ありませんから」

着替えが済んだ私は、シゼのあとを追いかけて寮病棟まで向っていた。シゼは私の釈明に、いつも以上にぶりぶりとそう口にする。聞く耳持たないという雰囲気だ。

「それにエミル様にしても、今後何人も召抱えられると思いますし」「多妻制なんだ？」

「王族は普通そうではないのですか？」

いやあ、これまで王族様とお近づきになる経験はないので知らないなあ。

まあ、エミルは優しいから、そこらへんの誰かに嫁に行くよりは安定していて、幸せな日々をおくらせてもらえるんじゃないの？なんて考えると、ちくりと胸が痛む。私は勝手だ。

一人で百面相してしまっているのではないか？ という私を、ちらりと見てシゼが続ける。

「……ところでどうして着いてきているんですか？」

「いや、だからアルファのお見舞いと、あと……シゼとカナイに相談があるんだと、いわなかった？」

「聞いていませんね」

すみませんでしたねっ！ シゼは、ぷりぷりすると手に負えないことが分かった。ここの男性陣はお天気屋さんが多いと決定。

「ねえねえねえっ！ マシロちゃんっ！ 王宮に上がるって本当？」

寮病棟に到着すると即、アルファにそう叫ばれて抱きつかれた。ぎゅっぎゅっぎゅっつと腕に力を入れられて、はい、も、いいえ、も口にすることは困難だ。というか、圧死目前。ああ、お花畑の向うで、おばあちゃんが……って、誰も死んでなかった。

「そろそろ、離してやらないと顔が凄いことになってるぞ？」

「え、ああ！ ごめんなさいっ！ 大丈夫？ マシロちゃん」

げほりつと、喉元を押さえて一つ咳きこむ。良いよ、アルファ。可愛いから許す。でもね

「青く、なつてるとか、いい方あるよね。凄いことって何よっ！」

カナイは許すまじっ！

憤慨した私に、カナイは「今も凄いことになってる」と後押しした。こいつ。

「カナイさんなんて放っておいて良いですよ。そんなことよりっ！」

普段の苛々顔が今日の天気のようにキラキラと輝いている。久しぶりの晴れ間は、アルファに陽気も運んだらしい。というか、情報が混乱してない？ いやいや、それよりも早くないですか！ 思っ
て、ふとシシイがここに友人が居る的な話をしていたことを思い出
す。

あそこが確実に発信源だ。

女の子は特にこの類の噂話が大好きだ。絶対良いネタを提供して
しまった。

「僕、凄く嬉しいですっ！ マシロちゃんならきつと、第一ターリ
様にもなれますね。だったら僕がしっかり護ってあげますから」

任せてください！ と、にこにここと続けられては、どこから突っ
込んで良いのか分からない。

カナイが傍でシゼに「で、どうなんだ？」と聞いているのが耳に
入る。シゼはあっさり「そうなんじゃないんですか、そんなくだら
ない話より、腕見せてください」と尋常じゃない機嫌の悪さに、お
仕事優先　これは当然　だった。

そのあと、私がシゼとカナイに昨夜の話　もちろん、ブラック
のほう　を伝えると、二人で顔を見合わせたあと

「ですが、そうなる……カナイさんどこまで凝縮できますか？」
「限界値があるから……熱の量が足りなくなるのが、いやでも焔
なら使えるかもしれない」

「燃やすという概念から、なんですから液体からでは拙いでしょう
し」

「やっぱり石か、石だよなあ」

ぶつぶつと二人で話しながら寮病棟を出て行ってしまった。シゼのほうは出て行く前に「アルファさんは安静続けていてください」と念を押し、私にはアルファの傍にしているように重ねられた。

閉まった扉を睨みつけてアルファは、ぼふつとベッドへ乱暴に腰を降ろし「あーあ」と零す。

「何か思いついちゃったみたいですよねー」

つまんないのー！ といいつつ、アルファは肩から下げていた三角巾をあっさり取り除き、ぼいとベッドの上に放る。そしてベッドに腕を付いて、少し傾ける「やっぱりまだちよつとつきが悪いなあ」とか怖いことをいつている。

「ほら、ちゃんと吊つとかないと」

「大丈夫ですよ。ぽろつと取れちゃったりはしませんから」

して堪るか！ 思わず眉を寄せた私にアルファは冗談ですよ。と苦笑する。アルファの冗談は笑えない。

「古代種が取れて記憶が戻っても、王宮には居てくれるですよね？」

「え？」

「僕、マシロちゃんが居ないと詰まらないです。図書館では毎日会えたのに、今は週に何度かでしょ？ それがずーつと続いてたから、凄く寂しかったんです。だから、ずっと王宮に住んじやえば良いのについて思っつて。そうすればいつでも会えるし遊びにいけますよね」

にここにこと純真無垢な天使の笑顔で告げられても、どう、だろう？ 私は町で薬屋さんをやっていたと聞いているしそっちを何とかしないといけないと思うし。

「何か仕事をしたいなら、記憶が戻ったら薬作るのも抵抗ないでしょう？ だったらシゼの助手とかにしてもらえば良いじゃないですか」

シゼの助手……。

神経すり減らしそうだなあ。シゼは悪い子じゃないんだけど、なんといいか好かれてる気がしない。いや、そうじゃなくて……私は元の生活に戻らないといけない。

「私は、薬屋さんに戻ると思うよ？ 今は分からないけど、そうしていたってことは、それに意味があると思うし、だとしたらやっぱり変えないほうが良いと思う」

「えー」

心の底からのアルファのブーイングをなんとなく嬉しく思ってしまうのは、あまり良いことではないとわかってるけど、一緒に居たいと素直に思ってくれるのは心がほっこりとする。

「トラブルメーカーが居ないと退屈すぎます」

例え理由がどうであつたとしても。

第四十八話：休みの日には何を？

そして、アルファはあっさり安静を無視した。

私は、殆ど引きずられるように外に出る。外とはいっても王城の中で目指すは大広間。玉座があつたところだ。

じつとしておいたほうが良いのでは？ という私の話は全くアルファの耳には届かなかつた。トラブルメーカーは、私ではなくてアルファじゃないのかと怒りたくなつたが、アルファの屈託ない笑顔を見るとどういふわけか怒る気力が失せる。

絶対、役得だと思う。

私とアルファが歩いていると、擦れ違ふ使用人たちは大抵姿勢を正す。

私に対してか、アルファに対してか、そこまでは分からないけど、アルファは全く気にならないのか私の手をぐいぐい引いて、早く！ というけれど、王宮ってこうやってみると、やっぱり私にとって居心地の良い場所とは思えない。

「おや、噂の人発見です」

「ラウさん相変わらず暇そうですね？」

朝露のように爽やかな笑顔で声を掛けてきたのはラウさんだ。

エミルの授業で何度か顔をあわせていた私は、素直すぎるアルファの腕を引いたけどアルファはちつとも気にならないようだ。

「ええ、とても暇なのですよ。暇なので遊んでもらえますか？」

「嫌ですよ。ラウさん滅茶苦茶、意地の悪い遊びしかしないじゃないですか」

どんな遊びだろう。些か気になる。

「おやおや、心外ですね？ そんなことありませんよ？」

につこりと深まる笑みに、肌寒さを隠せなかったけれど、ラウさんにはばれてないと良いな。そんなことが頭に過ぎっていると、涼やかな声で「ねえ、マシロ」と声を掛けられ慌てて返事をする。

「エミルに堕ちましたか？」

「このーひーとーはー……。
ついていけない。」

アルファの後ろにやや隠れていた私を覗き込んだの一言。私を殺す気らしい。ぼふつと音が出そうなほど顔が赤くなったのは分かる。それを見てラウさんはこころごとく楽しそうに笑った。

うん。意地が悪い人なんだよね。というかこの人だけは、全く底が見えない。

例えるなら……不二子ちゃんだ。おお。ぴったり。

「違うみたいですよ。近いうちに家に帰るらしいです」

簡潔に答えたアルファにラウさんは、へえと訳知り顔で声を上げた。

「私はエミル贖身なのですが、残念です。しかし、帰るということはご病気は完治されたのですね」

「されるのですよ、ラウさん」

「なるほど、これから……ということとは闇猫の助力でもありましたか？ あの騒動の先か……あとに……」

いってラウさんは階上を見上げる。釣られてアルファも私も同じ方向を見ると思った以上に崩落していた。さっきまでそんな風に見えなかったのに、不思議だ。

「あちゃー……これ、今日明日では片付きそうにないですねー。宮廷術師総出ですね。それにしても、これだけやらかしても隠そうとするんだ。僕、魔力ゼロだから通り過ぎるところでした」

「ふふ。仕方ありませんよ。城の中枢に鉄槌を落とされては、格好がつかないでしょう？ 上の人たちも必死なんですよ。大体、壊した本人たちが満身創痍なのですから、手伝わせるわけにも行かないです。うん、仕方ない」

話の内容から憶測すると、多分魔法的な何かで隠されていたのだろうと思う。それをきくとラウさんも手伝っていたのだろう。ていうか、必死な上の人たちってラウさんたちのことじゃないんだろうか？

「壊したのは闇猫ですよ。僕らじゃないもん」

もんって、ああ、そこが突っ込みどころじゃないか。

「あの、私何か手伝ったほうが」

「ごによごによと口にした私に、アルファとラウさんの視線が集中する。」

居心地が益々悪い。

でも、壊した原因になるようなことをしたのは私だし、私にも責

任がある。瓦礫運びとか掃除くらいなら私にだって出来なくはない。

「無理。必要ないですって、僕は怪我人だし、マシロちゃんは病人ほらほら、帰りましょう。シゼの頭にまた角が生えますよ」

それを分かってて抜け出してきたのはアルファだということは、この際気にはいけないのだろうか？

「マシロ。もし早く戻れるようなら本人に直させてくださいね」

ぐいぐいと今度は帰り道をせかされた私に、ラウさんは声を掛ける。私は首を傾げたが「お大事に」と重ねたラウさんに質問を重ねることは出来なかった。

「さて、これからどこに行きましょうか？」

「え、寮病棟に戻るんじゃないの？」

「ええっ！ 嫌ですよっ！ 折角鬼が居ないし、仕事も追いかけてこない。遊ばないでどうするんですか？！」

……… 休息するんだと思うよ？

そんなことをいっても無駄。なんだろうな。遊ぶ気満々のアルファに仕方がないなと手を引かれた。

調理場で「カナイさんがいつも取りに来るものください」と注文したアルファは、調理場の人に大きな目のバスケットを貰った。重そうだったから代わりに持つといったけど却下。私はそんなに非力に見えるんだろうか？ 腕の付が悪いとかいつている人よりマシだと思っのに。

私はそのままアルファの後ろについて歩き、大きな建物の裏に来

た。礼拝堂のように見えるけれど……古ぼけていてあまり手が入っているとは思えない。

傍にあった大きな木の傍にバスケットを置くと、小さな飛沫が上がった。まだ完全に芝は乾いていないようだ。

アルファがきよるきよるしたあと、ピューと、口笛を吹く。

その音を聞きつけて……

「わ……猫っ。可愛いつ！」

ひよこひよこつと物陰から、数匹猫が顔を出した。

「カナ伊さんのことだから、忘れてはないと思うんですけど、こっそりお世話しちゃいましょー」

にこにこそう口にした、アルファはバスケットから集まってきた猫ちゃんたちに給仕を始めた。多分みんな成猫だと思うけど少し小さい子もいるし、ああ、お腹の大きな子がいる。

私も、アルファの隣に膝を付いてお手伝いを始めた。どの子も人懐っこくてふわふわで可愛い……。お腹の大きな子だけ少し警戒してるけど、それは仕方ないよね。

第四十九話・月は愛であるためにある

……夕時

私はシゼの研究棟に招かれた。結局、陽が高い間は猫と戯れていた。塞ぎこみそうな暗い気分が幾分か上昇する。もしかして、それを狙つてのアルファの自由人っぷりだったのなら、私は感謝しないといけない。

アルファと、一緒に指定された部屋へ向うとカナイの腕を治療中だった。私の考える、というかシゼのいつていた研究室ばいというのはこのことだろう。何箇所かシンクが設けてあり、広い平台が並んでいる。その上に並んでいる器具は、今は特に使われていないようだけど、化学実験室を連想させた。

包帯を解かれたカナイの腕を見れば傷はまだ生々しく見える。消毒をするだけでも酷く辛そうだ。

「カナイさんは痛みに弱いだけですから、マシロちゃんがそんな顔しなくても良いですよ」

一緒になって顔を顰めてしまっていた私に、アルファがけらけらと笑いながら告げる。それもそうだと納得したところで背にしていた扉が開いた。

エミルかと思ったら外れ。

綺麗な軍服姿の女性が入ってきた。

「マシロ、やっと会えた。ずっと面会をといっていたのに、エミルがうんとはいわなくて、願い叶わず噂を聞いて押しかけた」

知り合い？ 知り合いなんだよね。

動揺に口を閉ざすと、シゼがすつと立ち上がり「キサキ様」と釘をさすように口にする。

そうかキサキというのか。

キサキ、といえば、確かエミルの話に出てきていた。王位継承権のある人だ。

女性だとは思わなかった。

「マシロがこのまま王宮に留まると聞いた。エミルの手を取ってくれたと、美しいときを、ここより広められると。それならば私はエミルを推そう。白月に認められたのなら、それが王位につくのが道理であるう」

つらつらと私の手を取って並べるキサキ様に、私はおろおろするばかりだ。

「キサキ様。こちらへの入室はどなたが許可されたのですか？」

「私が城内で規制を受けることはない」

「あります。ここは私の管理するエミル様の領域です。エミル様の許可・管理者の許可がない方は入っていただいては困ります。それは貴方様の領域でも同じことがいえるでしょう」

助け舟を出してくれたシゼは、キサキ様の手から私を下げてくださいに入った。

それとほぼ同時に、カナイが後ろから私を引き、もっと後ろへと下げた。キサキ様は不機嫌そうに眉を寄せ言葉を重ねようとする。

しかし、それと同時に扉が開き「何の騒ぎかな？」とエミルが顔を出した。

エミル様。と、シゼが明らかに胸を撫で下ろしたのが分かる。緊

張っていたのだろう。体の両脇で握られていた拳が少し震えていた。

「どうして、キサキがここに居るの？ 何？ また例の件かな、謝ったよね。上王陛下だって、不問にするっていつてくれたのだからもうその件に関しては良いと思うんだ。他に僕に用事ならあとで聞くから席を外してくれないかな？」

にこりとそういつて微笑んだエミルに、キサキ様は私は姫に用があるんだ。と、いい募ったがエミルは部屋に入り扉を開けはなつたまま重ねた。

「マシロはまだ本調子ではない。明日明後日には元気になると思ってから、そのときにしてくれると良いんだけど？ そんなに急？ やつと出られるようになったところなのにそうやって白月を追い詰めるのかな？」

キサキ様はエミルの台詞に、はあと大きく嘆息し大げさに肩を竦めた。

「分かった分かった。全く、エミルはマシロのことになると顔色が変わる」

「うん。ここにいる全員変わるけど、うっかりなんて起こしたくはないよね？」

笑顔で脅してる。キサキ様はその台詞に、口角を引き上げた。

「お前の頼るべき眷族は役に立たぬだろう？ エミルが私に盾突くのか？」

「残念だね。異母姉^{ねえ}さんの嫌いな術師は回復力が早くてね？ うちの騎士ほど異母姉さん、魔力態勢ないよね？ うっかりいつとく？」

なんだかちよつと怖くなってカナイの腕を引けばそつと耳打ちしてくれる。

「ただの姉弟喧嘩だから気にするな」

「激しいね」

「ま、あの姉とあの弟だからな」

そして二人して地獄耳だった。睨まれて私たちは、ぴつと黙る。

「なるほど、その様子では、姫に峻拒じゅんきょされたのだな。噂は噂……か、残念だ」

「火のないところに、だと思っけど」

「ほう、では美しいときは手の内、か」

挑戦的にそういったキサキ様に、私はどきりと心臓が跳ね、エミルは、キサキ様の言葉に促されるようにじつと手を見る。そして静かに微笑むときゅつと手を握り締めた。

「月は愛であるためにあり……美しいときはこの手の中に……って、きつとみんな気がつくよ」

「……………」

そのあとキサキ様はそれ以上のことを口にすることなく「なるほど」とだけ残して部屋を出て行った。

キサキ様を見送ったエミルは、さて、とこちらを振り返った。そのときにはいつものエミルで、にっこりと微笑んで口火を切った。

「出来たって聞いたんだけど？」

「はい、あとはカナイさんの調子だけなんですけど……マシロさん、どうしますか？」

突然話を振られて「え？」と目を丸くした。ちよつと研究室見学を始めようとしていた。アルファと。

「お前は当事者なんだからもうちよつと緊張感持て」

な？ と念を押され、すみませんと歩み寄る。で、もう一度、嫌々シゼが話を聞かせてくれる。物凄く熱心に説明してくれたけど、専門的過ぎて半分以上分からなかったから要約すると 私が伝えたキーワードは、どこからアプローチして良いか分からなくなっていた二人に、超ひらめきを与えたい。

薬は出来ただけど、

- 1 . その薬を飲む。
- 2 . 外から治癒師が魔力で調節する。
- 3 . 根を張った種に行き渡らせる。

という作業をするにあたって、肝心要のカナイが怪我人で、多分出来るけど多分らしい。

時間がのんびり許すなら、カナイの完全復活を待つてからでも良いということだけれど、正直あまり時間がないと私は感じている。

記憶云々ではなくて、なんというか急がないと、黒いのが白いのになりそうな気がするのだ。

「飲む」

もうひとつの理由としては、次の王陛下がそろそろ決まるらしく、その際にはブラックが立ち会うらしいのだけど、出来れば私も立ち会って欲しいということ。

その期日が迫っているのだ。

キサキ様の強引な訪問もそのせいだったらしい。だから現状がどうであつたとしても、私の答えは変わらない。

「う、飲むのか？ 本当に？」

「え、何、カナイ自信ないの？」

「いや、ないというかあるというか、いや、あるけどさ。七割くらいは大丈夫だと思うけど……」

……七割。物凄く微妙な数字だ。

もごもごと口にしたカナイの腕にちらりと視線を送る。今はロビーの奥に隠れてしまっているけれど、確かにまだ痛々しいものだった。二人で顔を突き合わせていると、シゼが、あの、と発言する。

「ラウ博士に頼んではどうでしょう。彼なら治癒師としても優秀ですし、今回のカナイさんの代わりくらいは務まるのではないでしようか？」

その台詞に私は、ラウさんを脳内に迎え入れる。

今日も出会った麗しい人だけどクセのある人だ。カナイもエミルも少し考えているようだったけど、エミルがカナイに意見を求めれば、カナイは「ビミョー」という返答だった。

「そういえばラウさん、訳知り顔でしたよ？ 色々……あの人も関係者なんだから、尻拭いさせとけばどうですか？」

……尻拭い？

アルファがあっけらかんと口にした台詞にシゼは僅かに息を詰め、
エミルは、んーっと長く唸ったあと「そうだねえ」と納得してしま
った。

「カナイ、ちょっとラウを呼んで」

「へーい」

いまいちやる気のない返事だが、カナイは机の上にあつた紙切れ
を一枚取り上げて、何か折りながら窓辺へ。そして窓をかたんと
開けて両手を差し出し、ぱんっと叩く。

「おお」

カナイの折つた紙は蝶になって夜の闇の向こうへ、ひらりと飛ん
でいった。

それから十も数えないうちに扉はノックされた。入室してきたの
は待ち人ラウさんだ。

「おや、お揃いですねえ。召集に応じましたがどうかしましたか？」

早っ！ とか突っ込んだんじゃ駄目なんだよね。うん。私以外驚いて
ないもんね。

驚き顔を隠しきれしていない私にラウさんは、にこりと微笑んで「
遠慮なく驚いてくださって結構ですよ。急ぎました」と両手を肩の
高さまで上げて肩を竦める。

第五十話：この木なんの木？

そして、シゼから粗方の説明を受けて、ふんぶん、と頷いていたラウさんは、聞き終わると「ちよつと失礼しますね」と私に歩み寄って来て片腕で私の肩を抱き身体を固定すると、そつと鳩尾辺りに触れて目を閉じる。

「緊張しないで下さい」

付け加えられるけど前置きもなく突然されたら普通吃驚する。やや沈黙したあと、そつと手を離すと「なかなか育っていますね」と苦笑した。

「いけますか？」

というシゼの問いにラウさんは、うーんつと唸ってから「大丈夫だと思いますが……」と前置いてカナイを見る。

「折角ですから、カナイに補助をしてもらいましょう」

「え？ 俺が補助？」

「……なるほど、補助なんて必要としたこともやったこともない？ 全く、天才肌はこれですから。では、良い機会ではないですか相手に合わせるということを学びなさい」

ラウさんが先生モードに入った。

それは良いんだけど、なんか私モルモットの気持ちがあつてきた。ちよつぱり怖いよね。でもこの様子じゃ私に選択権もつないよねえ？

モルモットな私は、椅子の背を右側に持つてきて肩を預けると後ろにカナイが立ち、正面でラウさんが両膝を立てて私の身長に合わせた。

シゼが水と一緒に紅い錠剤　いやもう見た目石ころです　を持つてくる。デカイよね。親指の第一関節から上くらいの大きさがある。

「飲むんだよね？」

「そうですね……確かに大きいですよ。ですが、これでも凝縮したんです……我慢して貰えますか？」

ここまで来て薬の大きさが気に入らない程度でやめられない。

私は大丈夫だよ、と頷いて薬を受け取ると見つめた。これで私の記憶が戻る。周りの様子からして思い出さないほうが、知らないほうが良いこともあるように思うけど、それでもやっぱり私は記憶を求める。

自分が今出来ることをやる。

やらないことへ後悔するよりきつと良いはずだ。

でもやっぱりちょっと大きくて、勇気が必要で……と、遅疑逡巡すればラウさんと目が合ってしまった。にっこりと優麗な笑みを浮かべてくれる。良くも悪くも私だって信じるしかないんだ。ラウさんは少し気が置けないけれど、エミルもシゼも……みんな彼を信じるとことにしたんだ。私はそのみんなを信じる。

……怖くないっ！

私は生唾を飲み込んで大きく深呼吸。

「よし、行きます」

……「くっ」

「っん」

流石に大きくて喉に詰まりそうになると、ラウさんがそっと手を伸ばして喉を押さえてくれる。少し気道が開いたのかなんとか飲み込めた。

「大丈夫、捉えました……カナイも大丈夫ですか？」

カナイが無言で頷いた気がする。

背中から胃の辺りを押さえているカナイの手のひらが燃えるように熱い。ちりちりと、内部を焼くような鈍い痛みがゆっくと迫ってくる。

「今の薬を解放して根を焼き尽くしますから……少し時間が掛かります。気持ちを楽しんで、ゆっくり呼吸していてください。もし、熱く感じても実際の熱ではないですから慌てないで下さいね」

ラウさんが説明を添えてくれている間にも、体の中がじりじりと焼けているような気になってくる。ゆっくり呼吸しろといっても無理だ。

正直……痛いし、熱い……

ドライアイスにでも触れてしまったように冷たすぎて熱いというような変な熱さだ。

……ふわり

私が肩を押し付けた椅子の背もたれに頭を倒せば、誰かが触れる。視線を上げれば、エミルが回り込んできてくれていて、そっと私の頭を撫でてくれた。

いつものように微笑んで口パクで「頑張って」といつてくれているのだと思う。その笑顔に少しだけ救われる。

でもやせ我慢にも限度があり、額にはじわりと冷たい汗が滲んでくる。呼吸は自然と浅く短くなってしまう。痛みが細かく走り、どこかと一点に指定するのは無理だ。

ちりちりと細かく痛みが明滅する。血管の中を火花が迸っているようだ。どくんどくと自分の脈が熱を運んでいるようで、耳鳴りがする。吐き気がする。

「もう直ぐです。意識は保ってください、手放さないで下さいね」

閉じかけた双眸をうつすらと持ち上げると、いつも冷静で余裕があつて糸の切れた凧のようなラウさんの表情に疲労が窺える。

負担が掛かっているのは私だけじゃない。私だけが辛いわけでも、頑張っているわけでもない。

「……っ……う……」

痛みと冷たい熱さを必死に堪える。一瞬が永遠にも感じる。

「最後です」

ラウさんがそついい終わるのと同時に、体の中で何かがぱきんと壊れたような気がした。気がして……

「……………」

二人が腰を上げるのと同時に私も立ち上がり、慌てて口元を押さえてきよるきよるとする。

それを予想していたのか、少し離れたところから「こちらです」とシゼの声がして、私はシゼが招いたシンクに駆け寄る。

口を押さえていた手で、シンクの端を掴み激しく咽る。分かっていたことなのかシゼは私の背中を擦ってくれた。

「っ、ごほっ、ごほっ!!」

あんまり人に見られたい姿じゃない。みんなに背を向ける形に出来たのは、僅かながらの配慮だろうか？

「……………っは、は、ごほっ」

「残しては駄目です。全部吐いて下さい」

私は胃液と共に食べてもいない炭化した木の枝のような細かい欠片を、大小あわせてかなりの数吐き出した。頭に酸素がいなくて、ぐらぐらする。

目に涙が浮かぶ……………ああ、もう最悪。

「ぶっ、く……………っは……………げほっ」

これで最後とばかりに、ごんっとな飲み込んだ薬とほぼ同サイズの黒い塊を吐き出して、私はその場に入らなへとしゃがみ込む。

「よく頑張りましたね」

子どもを宥めるようにそういつてシゼは私にタオルを握らせてくれ、そつと身体を支えてくれる。頭はぐらぐらして、正直、正常な思考が廻るとは思えないけど、思え、ない、け、ど……どう考えたって、ここまで予想の範疇という感じだ……そういうことは先に、伝えてもらわないと、心の準備というものが、あ、る。

「もう、たお、れてい……?」

掠れる声で、ぽつぽつと紡ぎ出した私は、シゼの「良いですよ」という了承を最後まで耳にすることなく瞼を落とした。

第五十一話：出来なかったことと出来ること

「折角のやり直しも、徒労に終わったんですね」

「……人の恋路で遊ばないで欲しいな」

「遊んだつもりは……少し暇つぶしに……いえ、大切な王子のためだと思っただんですよ。これでも」

曖昧なところで不毛ない合いが聞こえた気がした。

私はとても長い間眠っていたらしい。

目を覚ましても夜だった。丸一日近く眠っていたということだ。

その間私は眠っているのか起きているのか分からない狭間で、忘れてしまっていた記憶を繰り返し返し夢に見ていた。哀しくて、寂しくて、怖くて……私は相当うなされていたらしい。

「……大丈夫？　少しは落ち着いた？」

心配そうに声を掛けてくれるのはもちろんエミルだ。ラウ先生修復作業に再び借り出された　を除いてみんな揃っている。私は、もう頭の中がぐちゃぐちゃして、ベッドの中で膝を抱え情けなく謝罪を繰り返していた。

変だと思いつつもそのままにしていたことへの罪悪感。

ブラックを止められなかったこと。

エミルの痛みがつけなかったこと。

私に出来ることはもつとあったかもしれない。

でも、私は何もしなかった。

何もしなかったどころか、一番みんなが辛いときに、一部記憶を欠落させるとか厄介な事件を起こしてしまった。情けないにもほどがある。

正直全て今更だ。

アセアたちのことにしても、みんな真摯に受け止めている。シル・メシアでは普通のことなのだ。受け止められない、理解出来ないのはやっぱりこの世界で私一人きりだ。

「馬の用意が整いました」

シシイが入り辛そうに部屋に入ってきてそう告げる。

「健勝なのが僕だけだから、僕が送ることになるけど、良いかな？」
「うん、エミルさえ良ければ」

いって笑ったつもりだけど泣いてしまった後だから目が痛い。歩いて帰るといっなのは即却下。馬車でも良いといっただけど、馬を出したほうが早いからという流れでこうなった。

なんとかベッドからにじり出ると、エミルが立ち上がるのに自然と手を貸してくれる。普通にそれに甘えてしまう私は、こういう状態にきつと慣れてしまっているのだ。

良いのか悪いのか良く分からないな。

「マシロさん、これ返しておきますね」

荷物も何もないから手ぶらだった私に、シゼが歩み寄って紙の束を渡した。何？ と首を傾げつつぱらぱらと捲る。

「うちの顧客名簿だね？」

なんでこんなところにあるのやら。

疑問符が拭えない私にシゼは、肩を竦めて「店主殿ですよ」と続ける。

「切れるところには作って配達させておきました。追加して記入しておきましたから、あとで確認しておいてください」

「え？」

「ですから、戻ったときに貴方が困ると思ったのでしょうか？」

そっか、ブラックってへんてこなところに気が利くよね。

きつとそのせいで自分が作って配達するわけにも行かないと思ったのだろう。なんとなくあったかい気持ちになって、自然と口元が緩む。

古代種の件もあったのに、シゼにとって全く関係ない私の店まで面倒見てくれていたとは……当分シゼに足を向けては眠れない。その感謝を十分に込めて、ありがとう。と、告げれば、別に大したことではないです。と、そっぽを向かれた。

いつもと変わらないシゼの態度が逆に嬉しくて、私は自然と微笑んでいたと思う。

「こつち向け」

「ん？」

続けてカナイに声を掛けられ顔を上げれば、がつつり顔を覆われた。ぐつと息を詰めればじわりと暖かくなる。

「べそべそすんなよ。ほら、これで腫れぐらいは引いたから」

こつんと弾かれ、数回瞬きすれば目元が痛いのが治っていた。

「ねーねー、マシロちゃん。明日来ます？ 来ますよね。急に居なくなるの寂しいです」

エミルが、じゃあ行こうか？ と、手を引いてくれたのとはほぼ同時にアルファが背後から抱きついたので、ずるずると引きずり首が絞まった。こいつはいつもながらに容赦がない。ぐえっと可愛くない声を出したところで、アルファはあっさりカナイに首根っこ掴まれて捕獲された。素直に寂しいと重なるアルファにまた明日と伝えてお礼をいつてから部屋を出た。

もともとこの区域には最小限の人数しか居ないし日が暮れば人数も減るから、もっと人氣が少なく静かな廊下をエミルと並んで歩く。

「エミルはいつでも手を引いてくれるよね」

なんとなく口から出た台詞にエミルが、そうかな？ と首を傾げ、そつ間を置かずになんてね。と頷いた。

「何度も助けてもらったし護ってもらった」

当たり前のようになってしまっくらしいに……王宮にみんなが戻ってしまつてから少し距離を感じていたのが事実だ。だから、また寝食を共にするときが来るとは思っていないかった。

迷惑を掛けたとは思っけど、変わらないみんなに不謹慎にも嬉しいと思つてしまつ。

「同じだけ僕も助けてもらつてるよ」

「……ありがとう」

「あれ？　もしかして信じてない？　ふふ、本当だよ。マシロがこの期間、ここに居てくれなかったら僕は何を選び取っていたか分からない。前なんて多分見えなかった。現実から目を逸らさずにいられたのはマシロのお陰だよ」

忙しいのは尚良かったしね？　と、続けて笑ったエミルに釣られるように笑っていたと思う。エミルのさりげない優しさは私にとつてとても心地良い。それに浸かってしまう私はエミルよりもきつとずっとズルイ……。

「はい、足掛けて」

建物から出たところで待機させていた馬の横で、腰を折って、手を台にしてくれるけど、物凄く申し訳ない。躊躇してしまうと「大丈夫。落としたりしないから、早く」とせかされ私は馬の身体にそつと手を添えて、エミルの手を借り持ち上げてもらって座った。

乗馬は正直慣れないと怖い。

真面目に高いんだよ。馬の背中って！

エミルは手綱を持ってサドルに足を掛けると身軽に後ろに跨った。

「あ、と……本当に店までで良いの？　辺境まで行っても良いよ？　真夜中までには着くと思うし」

簡単にいうけど、私はその帰りが心配だよ。エミル朝になっちゃうし。

「平気。多分、私の店のほうに居ると思うし……居なくても、私が戻れば来ると、多分、思う」

語尾がだんだん弱くなる私にエミルは「そうだね」と笑って頷いてくれた。それはもしもこなかったらどうしようという私の不安を払拭してくれるものだった。

「じゃ、しっかり掴っててね。とばすから」

いい終わると同時に駆け出した。景色を見る。なんて余裕はないけれど、ふと見上げた夜空には久しぶりに二ヶ月が出ていた。

……カランコロン

自分の家なのに、つい、そおつと扉を開いた。

真っ暗な店の中に、ぽつと明かりを灯す。ちよつと長めの旅行に出でいたくらいだけど、凄く懐かしい。カウンターも薬品棚も……埃一つ被ってない。

きつと、私の居ない間も帰る場所を護ってくれていたのだろう。

『彼の肩を持つ気はないよ。自分が傷付いたくらいのこと、マシロのことを蔑ろにするくらいなら消えれば良いと正直思った。種屋の代わりなんて直ぐに埋まるんだ。役目の変わりは幾らでもいる。彼である必要はない』

そう冷たく馬上で口にしたエミルを見上げると、「マシロにとっては、種屋ではなくてブラックが必要なんだよね？」と続けて微笑まれた。

それを踏まえたとうえで

『彼が、今回一番きつかったかも……ね？』

曖昧に微笑んでそういつたエミルの言葉を思い出す。いろんな意味でエミルだって巻き込まれてしまったのに、そのことを微塵も気取らせないエミルはやはり人格者だと思う。

ブラックに至っては、私にとって、きつかった……そんな程度の言葉で済ませて良いことじゃない。

私はきつとブラックの心を大きく抉ってしまった。

いろんなことに混乱していたとはいえ、ブラックに酷い言葉を投げつけた。

人殺しっ！！

はっきりと脳裏に蘇りどれほど後悔してもしたりない。

ブラックは私を信じてくれていたし、嫌わないうれしいと願っていた。

私も分かっていたのに……信じているといつたのに、嫌いになんてならないと、そう重ねたのに……それなのに、とても酷いことをした。

……私、サイテーだ。

カウンターに片手を着き、はあと嘆息すると同時にぽつぽつと涙が机を濡らした。

泣きたいのは私ではないはずだ。私はごしごしと無造作に目元を拭うけど、止まらなくて……仕方がないから零れるままにした。

以前の心を凍らせていたブラックなら、その程度の言葉なんとも思わなかっただろうし、嘲る程度で済んだだろう。でも、今は違う。それなのに、ブラックは独りだった。

「やっぱり駄目」

私は止まらない涙をもう一度だけ、ぐいっと拭って顔を上げた。会わなくちゃ、ブラックはまだ私を信じているとってくれた。辺境までは今からは無理だ。ここに居てくれれば良いんだけど……そう思つて、静まり返っている室内を見回した。

もともと私に人の気配を察するような特殊能力はないから、地味に探して廻るしかない。そう思つて、まずは居住区から探したけど居なかった。でも、どこを見てもいつでも日常に戻れるように整つていて、なんだかそれがとても切なかった。

私はこつこつと階段を降りながら溜息。

あとは、一階の調剤室とかだけだけど、そんなところに居るとは思えないし、やっぱり種屋に居るのかな。だとしたら来てもらったほうが良いのかな？ 呼び出すのってかなり図太い神経を要するよな気がする。壁に手をつけて再度がつくり溜息。

ミニキッチンや調剤室・乾燥庫には勿論人影なし。

ちらりと温室に目をやると、明かりが灯っているのが見えた。空調は整えてあるけど明かりはいつも点いているわけじゃない。ということは、あそこか……。

そう思った瞬間からドキドキと鼓動が早くなった。

第五十二話：おかえりなさい

……きいっ

温室の扉を開く、普段は全く気にならない蝶番の音が大きく響いた気がして、息を殺す。足元をすたすたとケテオセラが歩いていった。それを見送ってから私は後ろ手に、さっきより注意深くそっと扉を閉めた。

探すまでもなく、ブラックは温室での作業用にと置いてある丸テーブルに突っ伏していた。

そっと歩み寄れば、耳がぴくりっと反応する。普段から眠りの浅い人だ。それに、いつもなら、私がここへ戻ってきたときに、気がついてはいるはずだ。フリをする必要はない。だから、本当に転寝していたのだ。あのブラックが……。無防備すぎる。

きゅっと痛む胸を押さえるように胸元に拳を押し付ける。

ブラックは、私がもう一度足を踏み出すと直ぐに、ん……と頭を持ち上げた。

夜の闇と同じ色、私と同じ色の瞳が柔らかな魔法灯の明かりに照らされて揺れる。

つっと距離を縮めた私を見上げて、瞬きをして私の姿を捉える。

「……マシロ」

「うん」

何をいって良いか分からなくて頷くくらいしか出来なかった。

そんなどうしようもない私に、ブラックは腕を伸ばすと、身体の横に沿わせて、ぴくりとも動かせなかった指先に触れる。普段から

体温の低いブラックの手は少し冷たい。

今もそれは変わらないのに、触れた部分がじんつと熱く、燃えるような気がする。瞳を伏せ、きゅつと唇を引き締めた私の手を、そのまま絡め取ると、ぐいつと引いた。

あと一步が歩み寄れなかった私は、その勢いで簡単にブラックの腕の中に納まる。

繋がれていた手が離れ、腕が腰に回る。ふわりと全身が熱くなり、わつと泣き出してしまういそうなのを何とか堪えた。

「ああ、本物ですね」

ぎゅうつと腰の辺りに抱きついてきて「本物です」と重ねて鳩尾辺りに来る猫耳がふにゅーんつと左右に垂れる。

「……………口、マシ口。暖かい……………ああ、鼓動が聞こえる……………」

何度も何度も私の名前を呼び、腰に回した腕に強く力を込める。

それはとても苦しいくらいだったけれど、私はただ、受け止めるしか出来なかった。きりきりと締め付けてくる胸の痛みを堪えて、私なんかよりずっと沢山苦しい思いをしたブラックの頭に恐る恐る手を伸ばす。

触れて大丈夫かどきどきする。

緊張しながら指先が髪に微かに触れると、ぴくりと耳が驚いたように跳ねて、私は慌てて引つ込めた。でも、直ぐにへにゃんと下がったので、反射的なもので拒絶されたわけではないと得心し、もう一度、ゆつくりと撫でる。

柔らかな黒髪が、ガラス張りの天井から降り注いでくる月光を受けて、綺麗な光の輪を作り、指先で作られた波に流されていく。

どのくらいそうしていただろう。

ほんの僅かな時間にも感じたし、とても長くも感じた……ひとしきり、私が消えてしまわないことを確認したブラックは、大きく深呼吸したあと私を見上げて眉を寄せる。そして、かたんと立ち上がり、そつと頬に手を添えて顔を覗き込んでくる。

「泣いていたんですか？」

心配そうに瞳を揺らすブラックに私は首を振った。その反応にブラックは、笑みを浮かべ「そう」と瞳を細める。

「何も、いつては下さらないんですか？」

怒っている風ではない、責めている風でもない。ほんの少しの憂いを含んだ台詞。

でも、今……私が口を開いてしまったら。

「マシロ」

「……………さ、い…………。ごめんなさい…………ごめ、ん」

口からは謝罪しか出て来ないし、瞳から溢れ出す涙を止めることも出来ない。私は子どもみたいにぼろぼろ大きな涙を零して泣いてしまった。私は上げそうになる嗚咽を飲み込むために、両手でしっかりと口を塞ぐけれど、殆ど無意味だ。

「私こそ怖い思いをさせてしまいましたね。すみません……………それに、私の方が怯えてしまって、貴方を人の手に任せてしまった。マシロに出会うまで、怖いことなんて何一つなかったのに、やはり私はマシロに嫌われるのがとても怖かった」

違う、という声も出せずに、私は唸って必死に首を左右に振り声を絞り出す。

「ごめん、なさい……。私、ブラックを傷つけた」

折角カナイに腫れを取ってもらったのに、結局また泣いて瞼を腫らし不細工な顔をしていると思うけど、私はブラックを見上げた。見上げた先のブラックは、私を真っ直ぐに見ていた。微かに疲労を感じさせる瞳は緩やかに細められ、笑みを零してくれる。

そして、口元を覆っていた私の両手をそつと取ると、唇を寄せる。

「構いません。平気ですよ。マシロは私を選んでくれた。私を知らない状態で、私をまた選び取ってくれた……。たとえそれが私一人へ向けられた想いでなくても、私はとても嬉しいです」

「……………ブラック！」

本当にどうしようもないくらい、私を甘やかす。

私はそれが嬉しくて堪らなくて、力いっぱいブラックに抱きついてまた嗚咽を上げた。愛しそうに柔らかく髪を撫でてくれるいつもの仕草が、とても嬉しくて、とても感謝している。

酷いことをしたのは私で、傷つけたのは私なのに、それを微塵も責めることはしない。

「それに、治療も辛かったですでしょう？」

「そん、な、こと……」

「……………あると思いますよ。傍に居られなくて、居る勇気がなくて、すみませんでした」

私の痛みを自分のものとしてくれるのに、私は私のことだけでいつも手一杯で、ブラックのことまで気が回らない。自分の至らなさ

に益々涙が溢れて、止まらなくなる。

他に言葉がなくて「ごめんなさい」と重ねた私にブラックは、月の光が綻ぶように笑って「大丈夫です」と、優しく背を擦ってくれる。

ねえ、本当に、誰がこの人に心がないといったの？

誰が、闇しか知らないなんていったの？

私が落ち着くまでは、黙ってそうしてくれ腕の力を少しだけ緩めれば、ふわりと頬を寄せてくる。泣き腫らした瞼に唇を寄せられ軽く吸い付かれると、身体がじわりと熱を持ち、胸の奥がきゅっとする。

求め合うのは身体だけではなくて、心からその全てが欲しいと絶えるような気持ちになる。

やっぱり私はブラックが好きだ。

僅かに触れるのではとても物足りなくて、もっともっと触れて欲しいと思う。

くんと背伸びをすれば、自然と唇が重ねられる。

軽く啄ばむように口付けて、もっとと伸び上がると深く割り入ってくる。もう何度も繰り返されてきたことのはずなのに、飽きることもなく尚も深くと求めてしまう。

「……………マシロ」

「んう、なに？」

突然名を呼ばれて、喘ぐように問い直せば、妖艶な笑みを浮かべて唇の触れる距離で重ねられる。

「古代種を抜いたのはいつですか？」

「……ん、夕べ……丸一日くらい、寝ちゃったみたい、で……」

緩い愛撫の刺激に耐えながらそう答えれば、ブラックは益々笑みを深めた。

「では、今夜は眠らなくても大丈夫ですよね？」

「……っ……ん」

その台詞に答える隙もなく、再び唇は塞がれ、それと同時に抱き上げられると傍の円卓に座らされる。

思わず不意を突かれて、きょとんとしてしまった私に、ブラックは微笑み、ちゅっとな軽口付けを添えてから首筋に舌を這わせた。

ほんの少しざりざりとした感触のある舌先は、直ぐに私の脳内を麻痺させる。息を詰め、テーブルに載せた手を軽く握ればその上に大きな手が覆い被さって、きゅっとな握ってくる。

空いた手が、ずっと私の服に掛かったところで私はふと我に返った。

「……っ、駄目」

私も自由になるほうの手で、ブラックの手を掴み押し留めると、ブラックは不思議そうに私を見つめてくる。そして、勝手に何か納得したのか「ああ」と頷いて

「すみません、ベッドの方が」

「そうじゃなくて」

「はい？」

そこで心底不思議そうな顔をしたブラックに「そうじゃなくて」

と重ねた。

第五十三話：ただいま

「兎に角、ちゃんと謝ってからじゃないと駄目だと思つての」

「ええと……すみません？」

「私にじゃなくて、みんなに」

言葉を重ねれば、やっと察しがついたのかブラックは「どうしてですか？」と唇を尖らせる。物凄い不服というのを隠すこともしない。

「私も悪かったと思ってるし」

「別にマシロは悪くないです」

「いや、うん……ありがとう？ いや、そうじゃなくて、ブラックだけが悪い、いや、悪くない？」

ブラックが割り込むと、自分の頭の中までごっちゃになった。

「というか私が聞くのもあれだけど……それまで、何してたの？」

話が逸れたまま続けられれば、ブラックは、ふいっと顔を逸らした。

明らかに後ろ暗いらしい。ブラック？ と重ねれば、ごにごによいと答えてくれる。

「ええと、その……気分転換を……」

眉をひそめたのを肌で感じたのか、益々声を小さくして「乱獲、とか？」首を傾げて見せても駄目だからねっ！ それは、可愛いけど、そこじゃないからっ！ と、心の中だけで突っ込み短い溜息を落とす。

「気分転換、出来た？」

静かに問い掛けた私にブラックは身体を寄せて首を振った。

「苛々が募るだけでした。別に珍しいことでもなんでもなかったはずなのに、そのあとは、ただ、ただ、マシロがとても恋しかった」

しょぼしょぼと続けられて、ぎゅーっと抱き締められたら捨て猫でも拾ったような気分だ……。

「マシロの姿だけでもと思って立ち寄れば、エミルは勝手なことをいつているし、マシロは流されそうでしたし、我慢出来なくて気がついたら」

ああなっていたというわけか。

「マシロが、あれを背に庇うから……」

再び腕に力が込められ、あとの言葉が続かないブラックに胸が苦しくなる。そこまでブラックを追い詰めたのは私だ。当然といえば当然だけれど、私にブラックを責めることは出来ない。

私はそつと抱き返して頷いた。

「うん、ごめん……私が謝りに改めて行くよ。根本的に、私のせいだし、あれはやりすぎだよ。まだ玉座なんて直ってないんだよ？」

そう続ければ、ブラックは、不意にいつもの調子に戻って「宮廷術師も無能ですね」と告げる。

「アルファだってカナイだってエミルだって怪我したんだよ」
「自業自得です」

いや、自業自得とかいう程度で、腕落とされたり、骨が見るほど削がれたりするのは違うと思う。エミルだって下手したら顔の造形が変わっていたかもしれない。なんかそれはそれで、世界的美の損失の気がする。

「銃は使わなかったですし、殺さなかったです。腕だって、小爆発で飛ばしてれば、切り口が破損するので、二度とつかなかったんですよ。綺麗につけられるように、すっぱり落としたのに……とても良心的な判断をしたと思っています。私はとても冷静でした」

常に極端なブラックからいえば、確かに物凄い譲歩した結果なのかもしれない。かもしれないけど……でも、なんか放っておくと溝が深まりそうで凄く嫌だった。

そんな気持ちを込めて「本当に？」と、じつと見上げれば、ブラックは暫らく凄くものすご〜く、思索したようだけれど、

「……分かりました。明日謝罪します。謝罪はしますけど、心が籠ってないとかいわないで下さいね。悪いと思っていないのですから、籠るわけじゃないじゃないですか」

ぶーぶーっと、そういういつも一応了承だろう。

心が籠ってないのは問題だけど、それよりも、このまま必要以上の会話すらしなくなるのではないかというほうが問題だ。

だから私もそれで納得する。

「約束は守るので良いですよね？」

「いつて、ちゅつと口付けてくる。もちろんそれには応じるけれど答えはノーだ。」

「だーめっ。約束は守ってくれると思うけど、でも、駄目」

「ええっ、どうしてですか？ 私は今物凄くマシロが欲しいです。抱きたいです。マシロは、そう、思ってくださいさらないんですか？」

縋るようにそう重ねられては私も胸が苦しくなる。でも、実のところ、ブラックの顔色はあまり宜しいように思えない。魔法灯のせいかとも思ったけど、なんとなく違う気がする。

「私も、ブラックと同じ気持ちだと思うよ？ 思うけど、でも……私は薬師だから……」

そこまで告げれば、ブラック自身自覚もあつたのか、何か言葉を飲み込んだようだった。そして暫らく瞑目したあと、細く長い溜息を吐き「分かりました」と頷いた。

「一緒に眠るくらいはしてくれませよね？」

「うん。ゆっくり休んで……眠って、ないんだよね？」

私の問いにブラックは答ええない。ただ静かに首を横に振った。

嫌なことは夢に見る。これは私も経験済みだ。でも、私は泣いてうなされても目を覚ませば、ブラックが居た。大丈夫だと、ただの夢だと抱き締めてくれた。こちらが現実だと招いてくれた。

ブラックは独りだった。苦しくても辛くても、たとえ泣いていても……。私はその涙を拭ってあげることが出来なかった。

夢と現実の狭間で苦しんでいたのだと思う。不安定な心を持って余っていたのだと容易に想像がつく。

その証拠のように、ブラックはここで寝ていた。ここは種屋のよ
うにきちんとした護りが出来ている場所ではない。そこで、私の気
配にすら気がつくことも出来ないくらい、堕ちていたとすればブラ
ックにとって致命的だったはずだ。

その危険を冒すことすら、もう、どうでも良かったのだろう。

「ずっとここに居るよ、私は帰ってきたんだから」

大きく一つ深呼吸して、やんわりと告げると、ブラックはやっと
いつもの笑みに戻って、そうでした……と頷く。そして、私を抱き
締めてテーブルからそっと降ろしてくれる。

誰かを傷つけることがあるなんて、とても思えないほどに綺麗な
指先が頬に触れ、つつと撫でるとそのまま包み込む。

促されるように、見上げれば夜の闇と同じ色の瞳に私が映る。う
つすらと浮かんだ涙が温室の魔法灯に反射して、とても、綺麗だ。

ブラックには、ちゃんと心がある。それはいつも真っ直ぐ私に向
けられている。私はいつもその特別に浸りきって悦に入る。

ブラックはいつだって……私を想って、私のために、ただけに、
その涙を流す。

だから、私はブラックのためだけにこの世界に留まっている。帰
る術もないのだけれど、それを悲しいとは微塵も感じない。

くんと踵をあげ、腕を伸ばし首に掛ける。軽く引けば簡単に距
離は縮まって、額をくっ付けると互いに笑みが零れた。

「…………お帰りなさい」

「うん、ただいま……………」

第五十四話：そんでもってごめんなさい

翌朝。本当に雨季が明けたのか晴天だった。
やっぱり空は晴れているほうが好きかも知れない。

どんよりと気分の重たそうなブラックを連れて、私は再び王宮へと向かった。もちろんお伺いを立てたらアルファとカナイは本調子ではないため、休暇扱い。エミルもなんとか折り合いをつけてくれて顔を揃えてくれた。

そして……予想通り……

「うわぁ……ブラックが謝ってる」

「今、俺呪われた気分だ」

「シル・メシア王家も転覆しそうだよな」

散々ないわれようだ。予想の範疇だけど。そして、僅かな既視感。いわれた本人は臍を曲げている。眉間の皺がとても深い。

「別に私だって好きで口にしたわけじゃないです。悪いと思っ
ていませんし。当然の結果です。いわないとマシロが、させてくれ……」

「……ぎゅっ！！」

「い、痛っ痛いです。だって本当にマシロが」

まだいうかつ！ 私は思い切りブラックの腕をつねった。グーパンチはちよつと身長差からいって威力が低い。つねるといふ地味に痛い攻撃を最近覚えた。

「悪いことをしたら謝るこれ当然です」

きつぱりといい捨てるのと、ブラックは、はあと嘆息する。

しかし直ぐに復活「さ、帰りましょう。謝ったのですから」とにこやかに私の手を取る。

「そうだよね、マシロの腰にある赤っぽいハート型の痣。ちっちゃくて可愛いもんね」

……ん？

エミルのぼつりにブラックが耳をそばだてる。この辺り、と、自分の右側の後ろ辺りをちよんとつく。

「え？ そうなんですかつ？！ マシロちゃん見せて見せて」

「ちよつ！ ちよつとアルファ！ 乗っからないでっ、あははっ、ちよ、くすぐりたい、ない、ないない、ないってばっ」

……ごんっ！

「いった！ カナイさん、痛い、どうしてカナイさんが打つんですかつ！」

「そりゃ、まあ、近くに居たからだろ？」

私に確認という名目で押し掛かってきたアルファを、傍に居たカナイが、拳骨で黙らせた。そして、乱れた髪を直していた私にカナイ

イが「事実？」と聞くけど

「知るわけないじゃん。ないよ、多分？」

「……………ありますよ」

「え？」

「あります。私だけが知っていることだったんですけどね」

いいつつブラックは、すっと出現させた杖の頭を捻る。なんだろう、この空恐ろしい感じは。ぴりぴりと空気が肌を刺すようだ。おかしいな、エミルもブラックも笑顔なのに。

「消せば良いだけですよね。良かったです、簡単な問題で……………消えてください。潔く」

すらりと引き抜くと止める隙もない。

……………キンッ

と刃物同士がぶつかる音がする。これを聞き慣れたか思ってしまった。私はずっと終わっている。でも、割って入ってくれたアルファに、ほっと胸を撫で下ろす。

「引いてください、回復もしていない貴方なんて役に立たないですよ」

「やってみないと分からないじゃん」

ぐぐつと競り合う二人にタイミングを失いそうだったけど、カナインに「止めに行け」と背中を押された。カランつと競り合いに負け、アルファが剣を落とすのと同時に、ブラックをがっつりと捕まえる。間に合って良かった。

「もう良いから帰ろう」

「えー！ マシロ許すんですか！ 変質者です」

「はいはい、もう、良いから。王子様を変質者扱いしないの。それをいうなら……」

私にとってのブラックの第一印象が変質者だ。私が思ったことが分かったのか、ブラックは、短く嘆息して「昔のこと、ですよね？」とわざわざ確認する。そんなに不安そうに問わなくても、そんなこと今思っていない。でも、意地悪な私は、口角を少し引き上げただけだ。

それにエミルに関しては、許すも何も、多分見られたのはあのことだから、私にも非があるというか合意の上というか……なんともいえないよ。悪いけど。

ふつつつと湧いてくる罪悪感と、羞恥心に私は誰の顔も見ることが出来ない。吐き出した溜息とともに俯いて、ブラックの腕を引く張る。

「ほ、ほら……続きするんですよ」

「はい、そうですね」

切り替え早っ！ ぐずっていたのにあっさりと踵を返して先頭切って歩き始めたブラックに肩を落とす。

「マシロちゃんだいたーん」

かつんつと剣の柄を蹴り上げて、手元に戻したアルファの台詞に私は茹で上がる。

「回収するための、方便だよっ！ し、仕方ないじゃない、今度は

「王城ごとふっ飛ばしかねないよ」

私だってこんな恥ずかしいこといいたくていつてるわけじゃなくて、というか、重ねるけど、ただの口実ですから！ ブラックを回収する、口実に過ぎないんですからねっ！ 沸騰してしまった顔を隠しつつ私は大股でその場を離れた。

「自分で撒いたんだから凹むなよ」

「もう、放っておいてよ」

私にはもう何も聞こえませんかっ！！

王宮から種屋に戻り、ブラックとの約束通り、昏間から物凄く怠惰な一日を過ごすことにした。

お日さまは、まだ高い位置にあるというのに、それを無視して一日の殆どを寝室で過ごし、ぐるぐるぐるぐる……。

こんな生活を続けたら、七夕物語の二人のように引き離されそうだけど、一日くらいこんな日があっても良いだろう……ということにした。

「本当にある……」

帰って直ぐ、合わせ鏡で見てみた。

全然知らなかった。

何かないとこんなところの痣なんて発見出来ないと私も思う。ちらりと、ブラックの様子を窺おうと思ったら、ぎゅっと背後から抱

き締められ首筋に口付けられる。

「エミルと何があつたんですか？」

吐息混じりに問い掛けられ、私は言葉に詰まる。言葉に詰まった私にブラックは短く嘆息して外耳を食むと「口にしないで良いです」と続けた。

「何を聞いても気に入らないと思うので、我慢します」

「え、あ……でも、そんな、何か変なことがあつたとか、そういうのじゃ……ブラック」

身体を捻ってブラックを見ると、複雑な面持ちで私を見ていた。それがたまらなく苦しくて抱きつく。

「……………ごめん」

それ以外いえないことに気がついた。

「マシロの浮気は責めません。私にも非があると思うので……相手は許しませんけど……今回だけです。もう、マシロに他を見る余裕なんて与えないので」

いいながらもほんの少しの苛立ちを含んだように、強く噛み付くように口付けられる。互いの歯がぶつかってしまったのも気にせず、私もそれに必死に応じる。

私は、まだまだ身体で気持ち伝えるような術を持たなくて、受け入れてあげることだけで精一杯だ。

そのままベッドに雪崩れ込み、これ以上傍寄れないという距離を堪能する。

ベッドの中の肌触れ合う距離でだらだらとしながら、ちらりとブラックを盗み見る。

うとうとと 縁側で丸くなっている猫のようで物凄く愛らしかったので、そのままでも良いかと思っただけ しかけていたブラックは、私の視線に気がついて「はい？」と問い掛けてくれる。

ほんの少し勿体無いような気がしたけれど、仕方ないので私は話を切り出した。

「なんか不思議」

「何がですか？」

「いや、なんとというか、ブラックのことだから誰が仕組んだことだったのかー、とか一番に突き止めようとしそうなのにーと思って」

私まで釣られて出てきた欠伸を噛み殺し、そう口にすればブラックもああと頷く。

「言及したほうが良いですか？ 首謀者が分かってもマシロは何もさせてくださらないでしょう？ それに予想は付くので……」

「そりゃ、何もさせないけどさ。」

「傷つけたり仕返ししたりってなんかこっちが後々辛いと思うし。」

「私の心の平穏のためにもそのままが良いと思う。」

「ブラックってさ……ラウ先生になんか甘いよね」

「なるほど、やはりラウですか」

……私の馬鹿。

ぽふつと枕に顔を埋めて唸る。そんな私にブラックはくすくすと笑いを零す。

「古代種を手に入れることが出来る人物も、それを加工出来る人物も実はとても限られています。その上でマシロに怪しまれずに傍に寄れて、口にさせることの出来る人物はもっともっと限られるでしょう?」

「そんなに特殊なの?」

「そうですね。特殊です……これまでの歴史上、例がないわけではないですが、行うことが出来るのは私とそれ以外なら……多くの種を服用し、活かせているもののみです」

「え、じゃあ、ラウ先生って」

「うちの常連ですよ。とても昔から」

私の髪を指に絡ませて遊びながら、ブラックは話を続けてくれる。

「ラウはその生が尽きるまで、種を飲み続け……埋まらない隙間を埋めていくことでしょう。決して満たされない思いを永遠に抱きながら生き続ける。世界に退屈し、置かれた境遇に退屈し、自身に退屈する」

彼はどこか私に似ています。ぽつりとそう締め括ったブラックに私は胸が苦しくなる。

「……ブラック」

「昔の、ですよ」

堪らなくなつて呼びかければ、柔らかく瞳を細めて笑みを深め、キスをくれる。

「私には今貴方が居ます。最大の弱点ともいえなくもないですが、それがこんなにも心地良いものだとは思いませんでした」

すると頬に触れていた手のひらが私の身体を撫でて僅かに開いた距離を再び縮めた。

「マシロ」

「うん？」

鼻先の触れ合う距離で名を呼ばれる。絡んだ視線は甘く優しい。

「……もう、嫌わないうでくださいね？」

「……うん。嫌わない。嫌えないよ」

悪戯のように囁かれる台詞に、確実に応える。離れてしまったあ
のときから、きっちりやり直させてもらいます。

「ごめんね、と、ありがとう、と何より

「大好き」

を沢山込めて。

第五十五話：やっぱりお父さん

それから程なくして、私は城から召集を受けた。

あれから城に顔を出すかどうか迷っていたら、ブラックに「用事があれば召集が掛かります。それまではあまり王宮は安全とはいえないから近づかないほうが良い」といわれそれに従っていた。

いつも通りの仰々しい蠟印を押された封を切り、手紙を開く。流れるような美しい文字は誰のものだろう？ 内容は簡潔。王陛下を決定する場に同席して欲しいとのことだった。

「王様の決定ってどうやってするの？」

「ジルライン、いわゆる先代王が指名するのが通例ですね。今回は珍しく三人とも残っていますから、難しいでしょうねえ。ああ見えて、ジルラインは器を大事に思っていますから」

馬車を断つてのんびりと歩いて王宮へと向う途中。ブラックから話を聞く。

確実に決定会議には遅れるけど、どの道私たちは何事にも中立。王家問題に口を挟むのも間違っている。遅れるくらいが丁度良い、といったブラックの言葉に乗った。

「器、ねえ……」

「おっと、失言でした」

「良いよ、別に……それが普通なんだから」

そう割り切れない私のほうが、この世界ではおかしいのだろう。個人よりも、種のほうがこの世界では重要で中心なのだ。だから

みんな、人の形をした器。問質すことは私にはもう出来ないから、そのままになってしまっているけれど、そのせいでアセアも、他の王家素養の持ち主も消されてしまった。

エミルだけではなくて、ハヌミ様もキサキも大切な兄弟、臣下を失っているのだ。本当なら一番きついのはジルライン陛下だと思う。多く居たはずの子どもたちの殆どを、一夜のうちに亡くしてしまった。それはきつと彼が王位に就いたときも行われたことだろう。

延々と続けられてきたルールに私は簡単に口を挟むべきではないのだと……そう、思う。

王城に入ると待ち構えたように使用人の一人が歩み寄って来て深々と頭を下げた。私が反射的に腰を折ってしまうと、ブラックにふつと笑われてしまった。顔を上げた使用人も、刹那きよとんとしたものの、ゆるりと目元を緩めて「こちらです」と役目に戻った。

王城の中は大抵色々と人の行き来があるが、今日はなんだか空気が張り詰めているような気がする。

「マシロ」

部屋の前に到着すると、カナイが分娩室に入った奥さんを見守っているようにうろろろしていた。そして、私の姿を発見すると、真っ直ぐ歩み寄って来てそのまま捕獲し、ブラックからあっさり引き離す。

「ちょ、何？」

「頼む。一生に一度のお願いだ」

「は？」

「エミルを推してくれ」

次期陛下はジルライン上王陛下が決めると聞いたばかりなのに、どうしたのだろう？ それにカナイが私に頼みごと　犬猫の世話・本の返却以外で　これはかなり珍しい。

「大丈夫だ、お前の推薦なら誰も文句はいわない」

何でもお前の頼みきいてやるからっ！　とまで重ねる。
本当に、カナイにしては尋常じゃない。

ええつと、と、口籠っているとカナイの後頭部をブラックが小突いた。うつと唸って私に倒れてきそうなのを、あっさり首根っこ掴んで、ぽいっと脇へ放る。ブラックはかなり乱暴だけど、カナイは、とつと簡単にバランスを取り戻す。

「マシロにそんなことはさせません。女々しいですよ？　主を信じ
ていれば良いでしょう」

きっぱりといい放ったブラックに、カナイは恨みがましい目を向けた。

「その様子ではまだ決定していないのですね……」

やれやれという風にそういったブラックは、ふうと溜息を零した。

「庭でも散歩してから入りましょうか？」

いやいやいや、ここまで来て、もう既に遅刻だし、それはないよね？　にこにここと、そう私に振ってきたブラックに私は驚き目を見開いてしまった。ブラックは、そんな私の様子に、こほんっとなつ咳払いして「冗談です」といったけど、多分本気だった。

「ねえ、カナイ。選ばれなかったらどうなるの？」

扉の前でぽつと訪ねれば、カナイは首を振った。

俺は詳しく知らないけど、と前置いてちらりとブラックを見るが、ブラックはカナイの視線を無視した。

「物凄い嫌な予感がする。俺の嫌な予感は大抵当たる」

それなのにいつも嫌なところに踏み込むカナイは、不幸体質だと思う。

私たちを案内してきてくれた人が頃合いを見て扉をノックし、そつと開いた。

「二つ月登城されました」

みんなの視線が集まり私は微妙に下がった。ブラックの半歩後ろくらいで入室すると背後で、ずんつと重たい音を立てて扉が閉まる。

上座を案内されそうだったが、あっさりブラックは断って私たちは下の壁際の席に着いた。

なんとというか変な空気だ。

室内には口の字型に席が用意されていた。一番の上座には、もちろんジルライン上王陛下が居て、その隣には前執政官となるだろう見覚えのある初老の男性が立っていた。その正面にエミルたちが座っている。傍にはアルファも居るし、他二人の騎士服姿の人は、きつとハスミ様とキサキの側近だろう。

私たちと同じように壁際には、数人の偉そうな感じの人たちが並んでいる。

その中には、ラウ先生の姿もあった。なんか、王様決めているというよりは、裁判でもしているような感じだ。

「近隣の領地を任されている貴族たちですよ」

不思議そうにしてしまっていたのか、ブラックがそつと説明してくれる。名まで一々上げなかったのはそこまでの興味が私にないことを分かってだと思ふ。覚える自信もないしね。

「……………ジルライン様、ご決断を」

もう何度目かの台詞なのだろう。

周りは少々うんざりというような雰囲気に見える。しかし、ジルライン上王陛下は唸り、ちらと私を見る。あ、あれえ？ 私……………私凄いい見られてる気がするんですけど……………。

「姫はどう思われる？」

来たよっ！ 私に振られたよっ！ 私は町の薬屋さんです。んな国の一大事決められませんか。ブラックが隣で呆れたような溜め息を吐いた。特に緊張する素振りもなく、ブラックは組んでいた足先を揺らして、どこか面倒臭そうにしている。けれど、みんなの視線がこちらに向いたことで口を開いた。

「エミルを推して差し上げればどうですか？ カナイもそういってましたし……………それに、他二人にまだ思い入れはないでしょう？」

ぼつぽつと、多分他には聞こえないくらいでそう告げたブラックを、私は「え？」と見る。

「え、それってどういう意味？ もし選ばれなかったらどうなるの？」

ちょっと声が大きくなってしまった。

慌てて口を塞ぐと、ブラックも私から視線を逸らし、前を見ると上王陛下も視線を逸らした。

……え？ いや、なんでみんな逃げ腰？

ブラック！ と、袖を引けば渋々口を開いてくれた。

「役目は終わります」

「……はい？」

俺の嫌な予感当たる。と、豪語したカナイの台詞が脳裏に過ぎった。

王家って、王族って……最悪。

一瞬眩暈がしそうになり頭を振った。

「え、ちょ、それおかしいよね？ 今、やってることはどうなるの？ キサキだって今軍を束ねてるって……ハスミ様だって王宮内のことを仕切ってるって聞いたし、エミルだって……それをどうするの？」

「後任者に種を飲ませます。王家の素養以外は根付きまますから替わりは直ぐに……」

ブラックは、私を見ることなくぽつぽつと告げる。私はその台詞に金魚みたいにはくぱくと口をパクつかせて、次の言葉が出ない。

「マシロちゃん、もう少し前に……」

そして、勢い余って立ち上がり、問質しそうな私の腕をそっと取ったのはアルファだ。きつとエミルがそうするように促してくれたのだろう。

「ブラックも。マシロちゃんはもう、傍観できないでしょ？ 前に……」

続けたアルファに腕を引かれて、私はよろよると上王陛下の傍まで寄った。もちろんブラックも着いては来てくれている。

第五十六話：決められないんだもん

「姫はどうお考えか？ 美しいときは誰を選び取る？」

上王陛下はズルイ。

自分で決められないからと、私に振っていると思う。

でも、私は今ここでそれだけの発言権を許されたということだ。ちらりと三人を見たけど、みんな普通にしていた。

どうして普通に居られるんだろう。

ここで決まらなければ、自分に明日はないのに……ここにブラックが居る。それはそういうことだ。

私なら……とても、怖い。

その証拠のように、傍に立っている三人の騎士はどこか影を落としている。ぴりぴりとして直ぐにでも抜刀しそうなほど張り詰めても見える。きつと選ばれる一人以外の騎士は、無駄と知りながらもブラックの前に立ちふさがるだろう。そして、より多く命が消え種が転がる。

そんなの、どう考えたっておかしいのに、みんな嫌だっと思ってるのに、誰もそれに異を唱えることをしない。

おかしい。

変だ。

狂っている。

そして、そのことにこの場に居る誰も、この世界に生きる誰も気がつくことはない。私にいわせれば、馬鹿ばかりだ。

「私は……私は誰も選びません」

きっぱりと告げると、周りがざわついた。

大体私を選ぶって話自体おかしいんだから、ざわつく必要もないと思うけど。私は、短く溜息を吐き続ける。

「私、今怒ってます。他人の命はないがしろに出来ないようなことをいって、自分のことをやっぱり軽んじる……」

いってちらとエミルを睨めば、バツが悪そうに視線を逸らされた。

「どうしても一人選ばないといけないなら、じゃんけんでもすればどうですか？ 残った御三方は皆相応しいのでしょうか？」

傍で、ラウ先生が、ぷつと吹き出したのを初老の男性が窘めた。

ブラックも少し下がったところで口元を抑えて笑いを堪えているような気がする。私は、至極、真面目なのに失礼だ。

「上王陛下も、生かしたいのならその道を模索すべきです。ルールに囚われすぎて、貴方も全てを軽んじる気ですか？ 上王陛下は以前、私がマリル教会の一件で犠牲を払ったことを憂いでいらっしやっただじゃないですか。それなのに、どうしておかしいと思わないんです？」

ジルライン上王陛下の瞳が揺れる。ああ、こうしてみれば確かに彼はもう老人らしいかもしれない。

「丁度良いことに、玉座も作り直しているところですし、いっそのこと三つ作っちゃえば良いじゃないですか？」

壊したのは僕らですけどね、とアルファがぼそつと口にしてちょっと笑ったのが見えた。良かった。息苦しいほど張り詰めていたものが、ほんの少しだけほぐれた。

「しかし、それではいつ城内に不和を来たすか分からぬ」

「一枚岩でなければならぬ」

どこからか分からない声がする。

「不和は起こったときに、その都度処理すれば良いと思います。一枚岩というのは一人に従うという意味ではないです」

「しかし、繋がりを保つためには……」

誰がいつているのかも分からないが、私はそのぼやきに、ああ、と頷く。

「それは、次の宰相閣下にしていただければ良いと思います。ラウ先生はとーっても、優秀ですし、暇を嫌うので忙しくて幸せだと思います」

ねっ！ と、ラウ先生を見れば恭しく腰を折った。そして顔をあげると

「白月の姫よりご指名とあれば、私の力及ぶ限り全力を尽くします」

と、いつてくれたけど笑顔が若干引きつっていた。

ブラックは堪えてくれてるけど、尻拭いはやってくれたのだと思うけど、私は地味に怒ってるんだよ？ ラウ先生。しっかり働いてください。

「それに、どうしても駄目ならそのとき……」

そこで私は口を閉じ躊躇った。続きをいうのは物凄く嫌だ。でも……。いい渋った私に、ブラックは一步步を進め告げる。

「私が裁きましょう。このことで芽が増え、育つなら、私がその際全て取り除きます。誰が望む望まないに関わらず」

その声色は、いつも私に掛けてくれるような優しい声ではなく、周りに向けた威圧的なものだった。でもその効果は絶大で、ぼそぼそぶつぶつは納まった。

私は、ほっと胸を撫で下ろし、三人のほうを見た。そして、端に座っていたキサキを見つめる。その瞳に気がついたキサキは、真っ直ぐに私を見つめ返してくれた。

「キサキ」

「何かな？」

「私、まだキサキと一緒にお茶をする約束を果たしてないよ。それはキサキと同じ種を持った人じゃ駄目なの。キサキじゃないと意味がないよ」

そう告げれば「ああ、そうだったな」と笑みを零してくれる。続けてハスミ様のほうを見れば線のはっきりとした男性の強い瞳が私を見つめる。

「ハスミ様」

「ああ」

「私はまだお話しする機会も得られていません」

「ああ、エミルにずっと遮られていたからな？」

にやりとそういつて笑ったハスミ様は、人好きのする感じだった。きつと懐の深い人なのだろう。

「それはハスミが、是非とも妻にとかいうからだよ」
「ははっ。 Emil は独占欲が強いな」

快活の良い感じでいつて笑ったハスミ様は、Emil の肩をバシバシ叩く。背後で「マシロは私のです」とブラツクの囁きも聞こえた。だから、ちらりとブラツクのほうを見れば、ね？ と微笑まれてしまった。ええ、まあ、もう、その辺はそれで良いです。

「Emil も……」

「うん」

「Emil は、私に貴方と同じ思いをさせたいの？ アセアを失った痛み、それ以上を私に味わえというの？」

「……………」

Emil に対しては少しキツイ物言いになってしまった。

でも、Emil は自己犠牲が強いから、そのくらいはいわないと分かってもらえないような気がした。私はどんなに偉そうなおことをいっただとしても、知っている範囲のことしか重要視出来ない。箱庭の中しか護ることの出来ない人間だ。だから余計に強く思う。

私は、Emil を大切に思っている人を沢山知っている。

そのうちの一人はもちろん私だ。

私の言葉にEmil は口を微かに動かしただけで、声は出ていなかったと思っけど、ごめん……って呟いた気がした。

そのあとルールについて、うだうだと口にする外野に私が眉を寄せると、ブラックがそつと耳元に顔を寄せてきて囁く。

……マシロは今ここで白い月の少女であり聖女ですよ。

つまりそれを利用しろってことだね。メネルも以前、私に、迷うな。間違うな。と、いつていた。今、それが必要な局面なのかもしれない。

私が口にすることは、間違いかもしれない、でも、私はこれ以上ブラックの手を無闇に汚させたくはない。

誰も、望んでいない。

だから、私は私の発言に賭ける。

「美しいとき……」

ぽつつと、私がそれを口にすると、室内はしんと静まり返った。ああ、やっぱりここかと得心する。

「この程度のルールへの譲歩も出来ないような世界に、美しいときなんて必要ないと思います。私は世界に必要なですよね？」

はつきりと宣言をしてくれない上王陛下を、私は真つ直ぐに見つめて問い掛ける。ジルライン上王陛下は何をいい出すのかと老いを感じさせる瞳を見開いた。

「私はこの世界を去ります。白い月へと戻ることは叶わないから、ルイン・イシルに頼みます。青い月は私の願いを聞き入れてくれる」

もしも上手くいかなくても、私は、ブラックがエミルたちを手を掛けるのを見なくても済む。それはそれで良いか。なんて馬鹿なこ

とまで普通に考えられてしまった。

私の指名にブラックは、すっと銃を出現させて、慣れた手つきで、ぱちんと安全装置を外す。

場が緊張し、全ての傍聴人が息を飲んだ。

……コツ、コツ

と、私に終わりを告げるために歩み寄る足音が私をより冷静にさせてくれる。妙な話だ。でも、私は本当に落ち着いていて、恐怖も何も感じることはなかった。

「私も直ぐに追います。貴方の居ない世界に意味はない」

「待てっ！ 自害は最大のルール違反だっ！」

脇に居た一人が声を張り上げた。それに続く形で、他の者も堰を切ったように叫ぶ。

「今マリル様を失っては今後得ることは叶わないっ」

「愚行はならんっ」

方々から声が続く。

ブラックの声は、決して張り上げているわけでもないのに、それらの騒音に一切邪魔されることなく、はっきりと耳に届く。

「聖女は、この世界に見切りをつけたのです。普段、多くは語らない彼女に、ここまでいわせたのですから、それだけで現王家は罪深い。そして、その家が納めるこの世界に価値はない」

かちゃっと耳元でブラックがレバーを降ろすとリボルバーが回転する音がした。

微塵も動かないでください。絶対に……ブラックがそつと重ねる。私はそれに頷いた。本当であれ嘘であれ、私はブラックに殺されるなら別に文句はない。

ここへ連れてきてくれたのも彼だ。

一步、二歩……ブラックが私から離れたところで、銃口が私のこめかみに向けられる。いわれるまでもなく、私は一步も動くことなんて出来ない。私はゆっくりと深呼吸して瞑目した。気配で、ブラックの指に力が込められていくのが分かる。

ブラックの緊張が伝わる……それに何故か安堵し、僅かに口角が上がる。

……大丈夫、私は何も怖くないから……

それとほぼ同時に何人かが叫んだ。

はつきりと私の耳に届いたのは、聞き馴染んだ声が聞き馴染んだ名を呼んだことだけ。

「アルファっ！」

その響きが消えてしまう前に、頬に強い風が走る。

え……と、目を開いた私の視界の隅には、キラリとこの世界に来て見慣れてしまった鋼が光った。

幾本かの剣と槍がギリギリを掠めていた。

はらはらつと私の髪の毛が数本散った。つうつと冷や汗がこめかみから流れ落ちる。

……ひい！ 刃物はやめて、なんか痛そうだ。

急に襲ってきた恐怖に、私はくらりと足元が疎かになった。と……っと、バランスを崩した体を受け止められ、見上げればブラックだった。私はほっと胸を撫で下ろし、ブラックはどこか楽しげに口を開いた。

「皆さん乱暴ですよ。銃が木っ端微塵です」

ひらひらっと空いた手を振ったのを見たあと、足元見る。粉々になった金属片が散らかっていた。

第五十七話：ロイヤルなティータイム

「いやー、あの演技には息を呑んだ。素晴らしかったな」

「マシロの演技は分からなくもなかったけど、正直ブラックのは本気に見えた。というか……マシロも途中で台詞に酔ってた気がした」

肝が冷えたよ。と、締め括ってエミルは机に肘をつき頭を擡げた。今、私はどういうわけか、陛下陣とティータイムとなっている。ついこの間まで王子王女だった人たちに囲まれ、アルファ他二名の騎士・メイドさん多数。に、見守られての休息。

なんだか居心地が悪い。それにあのとき、肝が冷えたのは私だ。私の表情が曇ったのが分かったのか、エミルが「大丈夫だよ」と微笑む。

「アルファの腕はマシロだって知ってるよね」

「いっておくがうちの隊長の腕も随一だ」

「二人の騎士は、まだまだ若輩で経験不足だからな、うちのに比べれば……」

うちの子自慢が始まってしまった。

この三人、当然といえば当然だが、近衛隊長に全幅の信頼と自信を持っている。そのせいで、聞いているこっちが恥ずかしくなるくらい、親馬鹿ならぬ、主馬鹿だ。

いわれている当人たちから、居た堪れないという空気が漂ってきてちょっと楽しい。主三方は、臣下の機微に敏感であっても、そういうところは愚鈍らしい。第三者の私は気にならないが、ちらりと後ろを向けば、面識の薄い二人には恥ずかしげに顔をそらされ、ア

ルファには、手で「早く話題変えてっ！」という風に示された。面白すぎる。

でも、これを放っておくと……。

……ガタツ

「そんなにいうんなら」

「模擬試合でも」

「やらせよう」

と、なるので始末が悪い。背後で三人が眉間をぐつと抑えた。

「さ、三人とも落ち着いて、みんな凄いの知ってるよ。うん。私なんて傷一つ付かなかったから。神業だよな！ うんっ」

立ち上がってしまった三人に、どうどう、と、宥めると一番に我に返ったエミルが僅かに頬を朱に染めて、罰が悪そうに、こほんつと咳払いしつつ、椅子に座りなおした。それを追いかける形で二人とも腰を下ろす。そして、こんな状況に至る原因ともいえるのだけど、二つ月の芝居がどう、三人の騎士がどう、とか、そんなことよりも……

「私は、本当にじゃんけんで王位を決めたことのほうが吃驚だよ」

「マシロがそうしろといったではないか？」

キサキが、本気なのか冗談なのか分からない調子で口にした。

いった、いいました。いいましたけど、本当にそうするとは思わないよね？ はぁと嘆息して紅茶を口に付ける。

ふわんつと優しい香りが口内に広がり、病んでいた気持ちもゆつたりとしてくる。

決定権を握るのが三名居たとしても、やはり据えるべきは一人と
いうのが議会の判断となった。

「僕は、じゃんけんに勝つとは思わなかったよ……ハスミがやれば
良かったのに」

エミルは、ますます頂垂れている。

そう、勝ってしまったのはエミルだ。私にとってエミルは面倒見
の良いお兄ちゃん。という感じなのに、この二人に掛かったら可愛
らしい弟に見えるから不思議だ。

熱血漢風にも見えるハスミ様は、そんな弟の沈み具合を毎回笑い
飛ばしてしまう。

キサキは「ふむ。女王というも良いな」と口角を引き上げる。そ
れは物凄く似合いそうです。素敵！ 女王様。

「キサキはいい、なんかマシロの瞳が輝いてるから」

「え。だ、だって、キサキなんだか格好良いじゃない。私、お姉ち
ゃんは居なかったからちよつと憧れる」

「マシロは今のままで十分可愛いよ」

「はは、キサキが二人になるのは怖いな」

二人のあんまりな台詞に、キサキはほうと瞳を細める。なんと
うか、キサキは女王様。調教師といった風格に見える。

こうして見れば三人とも、昔から仲が良かったという風に見える
が、きちんと話をするようになったのはここ数ヶ月のことらしい。

各個人忙しかったのと、近すぎると今度のエミルのように辛くな
るからという理由からだろうと、私は思う。

だって、三人ともとても気が合っていると思うから。

「そうだ、陛下。今、蒼月教徒の戦力が削げている話を知っている

か？ 叩いておくなら今だと」

「却下」

「そういえば、この間の予算。私も目を通したが、魔法具研究にあれほど割く必要はないだろう」

「必要だから回したんだよ」

ただのお茶会の席で会話に上げるようなことではないことが、普通に話題の上る。ハスミ様もキサキも個人的に付き合うには別に問題ないのだけど、ことあるごとに物騒なことをいい出す。

……うん。エミルが王様で良かった。

ほうと一息吐いて、今日も晴れ渡った空を仰ぐ。

そういえば、かなり前ブラックがいつていたことを思い出した。

エミルは見極める目を持っていると。だからきつと彼がじゃんけんに勝ったのは必然だったのだろう。

エミルはソーサーにカップを戻すと、仕方がないなという風に細く長い息を吐ききって、ゆっくりと話し始める。

「何度もいうけどね、ハスミ。蒼月教団と、マリル教会とは争わなという盟約がなってるんだよ？ 少なくとも、二つ月が健在の間は誇示されるべきものだ。そしてそれは騎士塔と、大聖堂にも連なっている。だから、王宮は国の中で争いを起こすことはしない」

「脅威はなるべく少ないほうが良いと思うぞ。民のためだ」

「そう？ 民はそんなに脅威を感じていないと思うけど。蒼月教団自体は宗教団体なわけだし、民にはそれなりに返していると思うよ。まあ……ちよーっと、どうかと思う返し方ではある。もちろん目に余る部分は摘むけどね。でも、今必要なのって、脅威になるかどうか分からないものに警戒するよりも……」

ねえ、マシロ。ってここで私に振るのはやめて欲しいのだけど。

「え、あ、あー……明日の保障かなあ？ 完全に失くすことは無理だとしても、貧困層のことをもう少し。ここからじゃ、とても見えないと思うけど……」

私がせつせと薬を届けていたおじいさんも、結局回復することなくひっそり亡くなった。仕方のないことだけれど、もう少し環境の良いところに居れば、少しは違ったかもしれない。本当はそんなこといい始めたらキリがないのだけど。

「薬の材料に掛かる税金が下がると良いなっ！」

あんまり沈んでも駄目だからと、無茶苦茶個人的な意見を提出。エミルは、にっこりと検討しておくよ。といってくれたけど、しなくても良いよ。私、ブラックからの流れで真面目に納税してないと思うし。

「む。そちらを検討するのなら、私の」

「それは駄目。魔法具は必要だよ。魔法素養のない人たちにも、便利に過ごしてもらいたいし、もう少し改良の余地があるものが多いのだから……」

ぶーぶーっと不貞腐れてしまった二人に私はくすりと笑いを零す。ね、やっぱりエミルが王様で良かった。

それに、私は公の場には出たくないの、上段には参加せずブラツクと一緒に参列者に混じって見ていたのだけれど、戴冠式はとも堂々としていて、有体だけど格好良かったと思う。

それに連なっで行われたパレードでも、民衆の賛辞は凄いものが

あった。これは、ハスミ様とキサキも列席し姿を見せたことが拍車を掛けていたのだと思うけど。その全てを含めて、なるべくしてなったのだと私は実感した。

「あ、僕のこと見直したなら、いつでも大歓迎だよ。お嫁において？」

「あはは……えーと、気持ちだけ。ありがとうございます。へーカ」

エミルは私が陛下という物凄く不貞腐れる。分かって告げる私も大抵意地悪だと思うけど。

「エミルは振られっぱなしだな？ やはり女性は……」

「良いよ。ハスミは愛を振りまき過ぎ」

「私はアレのように見境がないわけではない、華を愛するのは当然だろう？」

因みにハスミ様は既婚者だ。

既に三人の奥さんが居る。

キサキも今のところ、一人の男性と結婚しているというのをエミルから聞いた。キサキ個人がとても個性際立つ人だから、若干影が薄いという話だ。分からなくもない。

「これだから、男どもは面倒臭いことこの上ないな。なあ、マシロ、私のところへ来い。私はいつでもお前の味方だ」

「ありがとう」

キサキは本当に男前だ。それでいて眉目秀麗。見る人みんなが溜息を漏らさずにはいられない。そんなキサキの綺麗な瞳に見つめられ告げられれば、ほんのり頬が朱に染まってしまつのも仕方ない。

「マシロ?」

「え? ああ、うん、何? 大丈夫、キサキにちょっと見惚れてただけ……」

二人に声を掛けられて反射的に答えた内容が悪かった。私は益々赤くなる。何か次の言葉を求めて口をパクつかせると、控えていたアルファがエミルの傍にそっと寄り耳打ちする。

「……分かった」

渋々といった感じで頷いたエミルは、かたんと立ち上がる。

そして、どうしたのかと見上げた私に、にこりと微笑んで続ける。

「先に失礼するよ。そろそろシゼも終わるんじゃない? マシロも行くぞ」

いって手を差し出され、私が素直にその手を取ろうとすると、「マシロは置いていけ」とキサキの声が掛かった。

「ハスミと二人きりで卓を囲んでも面白くもない。シゼはこちらに来るといったのだろうか? それまでここに居て構わないはずだ」

「私もキサキと二人というのは好ましくない、華がないのは酷く寂しいものだ」

「あのねえ、二人とも……」

エミルの頬が僅かに引きつる。

こいつら……と、思っているのだろう。引き止めてもらえるのは嬉しいけど、私もエミルと一緒に退席したいところなんだけどなあ……といっても聞いてもらえないのかな?

小さく嘆息すると、かざりとポケットに手が触れた。

あ、そうだった。

私は、エミルの手を取りかけた手で、キサキの手を握る。キサキのきよとんとした表情がいつもの凜とした表情からは想像つかなくて可愛い。

「またゆっくりお茶しよう。これ、私が作ったんだけど良かったら食べて」

そして、レースの施してある小さな布に包んだお菓子を渡す。

これはなんだ？ とリボンを解いている隙に、ハスミ様にも手渡した。

「ほう、マシロは可愛いな」

「私じゃなくて、お菓子がね？ 今日ほそれだけだけど、気に入ってくれたらまた作ってあげるね」

にこりとそう告げて今度こそ席を離れた。

中身はなんてことはないただの金平糖だ。暇なので作った。うちは閑古鳥のなく薬屋さんだから。

改めてエミルの手を取り部屋を出るとアルファも、もちろんついて出る。背後から

「あれは駄目だな」

「一途というのは悪いことではない」

「仕方ない、私が頑張らねばならぬだろうな」

「無作為に甥と姪を増やすな。覚えきれん」

な。などという会話が聞こえたけれど、私の耳に届いただけなら良い

第五十八話：悪意なき嫌がらせ

「ねえねえ、マシロちゃん。お菓子、僕も欲しいっ」
「え、ああ。良いよ」

部屋を出てしまえば、アルファは元通りだ。
流石に他二人の前でこのハイテンションというわけには行かない
のだろうTPOを弁えてくれて良かった。

背後から私の背に乗りかかりつつ、頂戴と手を出すアルファに、同
じものをちょこんと載せる。

アルファは、わーいっと思いで受け取ってくれる。ここにきて、
やっとアルファから私の作ったものへの警戒心が取れたことへの、
勝った感がある。

「エミルもどうぞ?」

「え、貰っても良いの?」

「うん。それで最後だから、シゼとカナイには内緒ね。数が足りな
くなつたから」

いったあとで子どもにいつてるようだと言わす。

「ということは、最初から僕らのだったんだ?」

「え、うん。そうだよ。来た早々キサキに掴むと思わなかったから」

本当はシゼを掴まえて家に戻るつもりだったんだけど、ずるずる
と引きずられるようにあのお茶の席につかされたのだ。運が良いの
か、途中でエミルに発見してもらえ、ハスミ様も引つ掛けてあの状
態だった。

「アルファ、食べながら歩いちゃ駄目だよ」

こりこりと可愛らしい音を立てていたアルファに注意すると、アルファと同時にエミルからも「ごめん」と聞こえた。

……エミルもかつ？！

「王様が食べてるんだから、良いよね」
「もう」

マシロちゃんにも一つ。と、半ば強引に口の中に放り込まれると、仕方ないな」と苦笑するしかない。

……王様……か。

「もう、慣れた？」

「うん。慣れたよ。夢を見て痛むこともない」

突然振った私の質問に、即答してくれたエミルに、そっかと頷く。じゃんけんにはもうひとつの役目もあった。

それはジルライン上王陛下の種を呑むこと。

老い先長くないのではないかとも思われたから、それまで待って
も良いと思うのに、ジルライン上王陛下は首を縦には振らなかった。
王を退任したあとから、一気に老け込んだ上王陛下は、自らの役
割に終止符を打っていた。

これまでのルールからいえばそれは当然らしく、もう、私一人の
正義で我侪を通すわけにも行かず、私は口出し出来なかった。

「出来れば、あまりマシロに見て欲しいことではないのですが」

雨は上がり、二つ月が煌々と夜を照らし出すとき、蔵かにも感じ
る処刑が儀式的に行われる。

私は見届けたいとお願ひして、本来、上王と新王、そして種屋の
みで密やかに行われてきた場に立ち合わせてもらった。

直っていないのでは、戴冠式もそのあとの引継ぎも出来ない
と、遅れていた復旧作業に結局ブラックも乗り出し、その日のうちに
あっさりことは済んでしまった。

最初から助けてあげれば良いのに。と、零せば勿論「嫌ですよ、
面倒臭い」と返してもらった。ブラックは常にギリギリでないと動
く気にはならないらしい。

場所は直ったばかり 午後には戴冠式が行われた 玉座の間。

広大な広間に使用人も兵士も、寄せ付け
ない。痛いぐらいの静けさだ。

上を見上げれば、どうい
う魔法なのか、それとも私
が気がつかなかっただけ
なのか。

天井は夜空が透けて見えていた。

私の知る限り、この手で命を落とす名君たちは辞世の句などを残
しそうなものだが、上王は静かに玉座に座りそのときを待っただけ
だった。発言をするだけのときがないわけでも、許されていないわけ
でもない。

少し離れていた私をブラックはちらとだけ見て、私から上王の姿
が見えない位置に立つと銃を構えた。

ことは簡単に済んだ。

……ガント

たった一発の銃声が響いただけだ。

私は息を飲んだが、きゅっと目を閉じて改めて開いたときには玉座には誰も居なかった。玉座の背もたれから、黒い煙が一筋上がっているだけだ。

丁度、頭のあつた位置だろう。

ころんと一つ残された種を拾い上げ、ブラックは淡々と仕事をこなしていく。

「待って」

いつものように、こつと種を白化しようとしたブラックは、エミルに声を掛けられその手を止めた。

「それ、やらなかったら記憶も継承出来るの？」

「……出来ますが、貴方に他人の記憶まで背負うことが出来るのですか？」

記憶を継ぐ。ということの辛さはブラックが一番良く知っていた。例え一人分の記憶であったとしても、一つの身体では持て余すものだろう。

エミルは重ねられた問い掛けに、やや逡巡したようだった。でも何かを決めていたのか……

「そのまま」

と、ジルライン上王陛下の種を飲み込んだ。

「今更だけど、父の気持ちが分かって良かったと思ってる」
「……………そっか」

結局、エミルとジルライン上王陛下との蟠りは生きている間にごうにかなることはなかったようだけど、ここに来てそれなりの解決を見たならそれで良いかな？　とも思う。
そう思えるくらい、エミルはすっかりして見えたから。

しみりとした話題に終止符を打つように、私は「ああ、それから」と話題を変えた。

「あのね、もう、何度もいってると思うんだけど……………あれ、外してよ。正面フロアに飾ることないよね？」

嫌がらせ？　と重ねて眉を寄せた私にエミルはにっこりと微笑み「まさか」と首を振る。あれが、嫌がらせでなくてなんだというんだ。私には嫌がらせとしか思えない。私に王宮へはもう来るなどいっているも同然だ。来るけど。今も来てるけどっ！

「だったら、外してよ」

「駄目だよ。だって、あれ、アセアの形見なんだよ」

う。

それをいわれると辛い。辛いけど……………辛いけどあの晒し者感は、エミルたちには絶対分らない。肖像画だよっ！　私のっ！　しかもあんなデカデカと。その上っ、三割くらい増しで美人になっている。私はあんな神秘的な表情は出来ないっ。

アセアは、以前私とハクアをスケッチしてくれていたのを、キチ

ンと起こしてくれていた。そして、一枚の立派なものに仕上げ、舞踏会の前の晩、エミルに贈ったのだそうだ。

「場所を変えてくれても良いよねえ……」

「うーん。僕はあそこが一番良いと思うんだけど、他っていったら……僕の寝室？」

なんかちよつと恥ずかしいよね？ と僅かに頬を朱に染めるエミルに私も脱力。勘弁してください。

「それなら、書斎とかさ」

「駄目だよ。それじゃ、仕事にならない」

仕事してください。陛下。

「僕はあそこで良いと思いますよ？ だって、僕毎朝あそこで爆笑してから仕事はじめますから」

相変わらず人の肩に寄りかかりつつ、器用に歩きながらぱりぱりやっていたアルファが口を開く。きつと、食べ終わったのだろう。

「爆笑つて、酷い」

「え？ ああ、違いますよ？ マシロちゃんの絵を見て笑うんじやなくて、あそこへの参拝を日課にしているお年寄りが何人居たり、使用人が居たりするんですよ。お祈りしたり、膝折ったり、マシロちゃん生き神さま？」

アルファはくつくつと笑いながらそう続ける。私は、ふわわつと頬に熱が集中するのが分かる。エミルっ！ と悲鳴のような声を上げたのに、エミルは「抛り所があるってことは良い事だね」とに

っじり。

う、うつつ。もう、この人に何をいっても無駄だと痛感した。

「陛下遅いですよ」

エミルが執務室に使っているという一室の前ではラウ先生が待ち構えていた。エミルは、楽しい時間はここでお仕舞いという風を軽く竦めると、ごめん。忙しくて、と謝ったけど心は籠っていないだろう。形だけの謝罪に、私も、告げられたラウ先生も苦笑した。

「じゃあ、僕はエミルさんを送り届けたので、次はマシロちゃんを届けますね」

がしつと私の腕を取ってそういうのが早いか、歩き始めるのが早いか、良い勝負だった。私は手を振ってくれるエミルとラウ先生に手を振り返すのがやっとだ。

ずるずる引きずるのはやめてください。

そして、にこやかに見送ってくれる二人の会話は、途切れ途切れで私の耳には届かなかった……。

「やり直しても駄目だったのに、まだ友達ごっこですか？」

「今はもつと悪い。家族ごっこになってるよ」

「^{いたわ}劳しいですね」

「僕さ、ラウの首を刎ねたらどうかかなと思うんだ」

「構いませんけど、私は白月の姫お墨付きの宰相ですよ？」

「悪運も強いよね」

「……………お褒めに預かり光栄です」

第五十九話：どうしてこうなったっ？！（1）

そのあと、私はシゼを捕獲して、お店に戻った。

アルファも遊びに行こうかなー、とか零していたけれど、ちゃんとお仕事に戻った。

「本当に、ロスタは帰ったんですよね？ 居ないんですよね？」

「帰ったよ。ロスタは忙しいんだって。私もシゼに会って帰ればっていったんだけど」

「よっ！ 余計なこといわないでくださいっ。本当……僕、ちょっとトラウマなんですから」

店に向う馬車の中で、そういつてシゼはがっくりと肩を落とす。

昨日、またロスタがふらりとやってきて、シゼにもお土産を置いて帰ったのだ。直接渡しに行けば良い、といったのだけど、王宮には行きたくないというロスタは駄々を捏ねた。

そして私は私で、それを持っていけば良いのに、絶対シゼは引き籠もりだろうからとあえて取りにこさせた。

「プレートがオープンのままになってますよ？ お客さんが居ないにしても無用心じゃないですか？」

客が居ないは余計です。否定はしないけど。

大通りで馬車から降りて通りに入り店の前でシゼが口にする。

「留守番が居るから大丈夫だよ」

「店主殿ですか？」

「ブラックは仕事で種屋に籠ってると思う」

いいながら私は扉を開けて、ただいまーと入る。シゼも後ろに続いて、人を雇う余裕が出来たんですね？ とか、何か感慨深そうに呟いた。うちはそんなに困ってませんよ。全く。

「人っ子一人来てない」

「そっか、ありがとう」

私はそのままカウンターに寄って、カウンターにお腹を預けると裏に掛けてあったエプロンを取る。そして、それを身に付けながら、シゼを振り返れば止まってしまっていた。

「シゼ、折角だからお茶でも」

「……さん」

時間の止まってしまっているシゼに声を掛ければ、ようようというように口を開く。多分、私を呼んだのだろうと首を傾げると、シゼは急に大きな声を出した。

「オカシイですよっ！」

「え、ええ？ 何、シゼ、こ、壊れた？」

「壊れているのは貴方ですよっ！ 前々から壊れているとは思っていません。思っていましたけれど、ここまで壊れているとは思いませんでしたっ！ おかしいでしょ？ オカシイですよね」

ここまで憤慨するシゼは珍しい。

「なんでこの人がここにフツーに居るんですか！」

もう、疑問系でもなかった。

まあ、シゼの反応は間違っていないとも思う。思うけど、まあ、

そういうこともあるよ。

「誰だそれ？」

カウンターの中でシゼに指差し確認された当人は、眉を寄せて怪訝な表情を作る。

初対面ではないはずだけど、覚えていないらしい。そんなんじや、失格だぞ。ブラックなら、ちら見でも確実に相手の顔を覚えてると思うよ？ そう思った私の心を感じ取ったのか「ちよつと待て今思い出す」と考え込んだ。

うーんっ、と、唸る声に合わせて頭頂部の猫耳が舟を漕いでいる。可愛い。和む。見た目だけは癒し系だ。そして、やや思索したあとぼんつと手を打った。

「あつ！ 分かった。お前、店中に火放った奴だ」

「店主を殺しかけた人にいわれたくありませんっ！」

「おれは謝った。問題ない」

……ん？

謝ってもらったかな？ 私は小首を傾げたけど、まあそんな小さなこと良いや。

「えっと、彼は一応蒼月教団所属のルカ。それでこっちがシル・メシア国王陛下付きの薬師シルゼハイト」

「自己紹介なんて必要ありません。どういう経緯があったとしても、僕は納得出来ません！ 何故彼がここで店番をしているんですか！」

シゼがこんなに怒るのは珍しいなー、と、感心していると「私もそう思います」と聞きなれた声が聞こえ、ふわりと私の身体にいつ

も香りが纏わりつく。振り仰げば、もちろんそこにはブラックが居て、はあとわざとらしい溜息を吐く。

ブラックとは、もう何度も話し合ったし、納得してもらったのだから今更なのに、不満は尽きないようだ。

ブラックは、いつものように私の指輪に口付けて、軽く私の唇にもキスを落とす。

「人前だよっ！」

「ルカの前は良いといったでしょう？」

それはっ！ いったようなーいかなかったようなー……。ぶうっと真っ赤になって不貞腐れたが、シゼへの説明がまだだった。

「あのね、シゼ。色々心配してくれるのは良く分かるんだけど、えーとその、ね。色々あって」

「はしらないでください。色々を僕にも分かるようにちゃんと順を追って説明してくださいっ！」

う、わー……シゼが真面目に怒ってる。

「マシロはなんでも拾う癖があるんですよ。もう、一種の病気ですよ。ええ、絶対に病気です。不治の病なんです」

「別におれは落ちていたわけじゃなくて、マシロがっ」

「似たようなもの、ですよね？」

「……まあ、別に」

ブラックに凄まじければ、ルカは「よこよこ」といいつつ視線を泳がせる。子どもを苛めるのは可哀想だ。

「ルカは、まだ十二歳なんだよ？ それなのに籠の鳥だったんだよ？」

「種屋候補生だったのでしょうか？ だったら、蒼月財団が手厚く保護育成していたはずですよ。それを籠と呼ぶのはどうかと思います。在るべき場所。なのでしよう？」

それに、逃げ出すのも自由のように感じましたけど。と、付け加えたシゼの台詞には棘が沢山だ。ざくざくと突き刺さる。

……どういうわけか私に……。

「それはそうなんだけど、そのー、ほら、種屋候補生っていつても、ブラックぴんぴんしてるしさ、ほら、ね？ その、なんというか」「出番がないと腐ってたんですよ」

ガシャンつとカウンターの後ろの棚の瓶がいくつか割れた。商品に手を出すな。ルカ。

「社会勉強といつかなんといつか……その、ね。ほら、子どもが出来たと思えば。うん。あとはー……猫が飼いたい？」

「急にそんな大きな子ども出来ませんっ！ 猫なら既にその大きい人を飼ってるでしょうっ！ 小さいのが良いのなら、カナイさんにも声を掛ければ売るほど連れてきますよ」

「ご立腹ですね？ シゼさん。」

びしりつとブラックを指差し、その大きい人扱いをするとは、シゼが壊れた。指された本人は「その通りですよね」とシゼに賛同している。

「でもレムミラスさんに交渉にいつてくれたのはブラックでしょ？」

そう口にすればブラックはシゼに睨まれていた。普段なら絶対ない。シゼは他人に対して控えめというか、特に感情を露わにするような事はない。本当に壊れた。

「それは、マシロが物凄く可愛らしい顔で『お願い』とするから……仕方なく……大体私はマシロのお願いには弱いんです」
「おれが帰れば良いんだろ？」

いってルカはひょいとカウンターを跳び越した。

私は、慌ててルカを掴まえて引き止める。その腕を無碍に振り払おうとはしないから、ルカ自身ここに居たいと思ってくれているのだと私は信じている。

じつと、私を見つめていたルカは、何かいいたげに唇を噛んだあと、裏に居る。といい放つてすたすと店の奥へと姿を消した。

第六十話：どうしてこうなったっ?! (2)

「本当に大丈夫なんですか？ 危険だと思います」

「私もそう思うんですけど、マシロはいい出したらきかないので…
…それに、エミルは、まだこの事実を知らないと思いますよ、駄目だとはいわないと思いますよ」

ルカを見送ってしまった間に、残った二人は真面目な顔をして話を進めていた。というかこの二人が普通に話しているのは、初めて見た。

「ルカが不在だということで、蒼月教団の戦力は大きく削がれています。誓約という形でのみ保たれている平和をより確かなものになっているんです。エミルは、穏健派であつてもハスミはそうではないでしょう?」

実際、今日もハスミ様は蒼月教徒に仕掛けたほうが良いという話をしていたところだ。

「因みに、彼にも誓約があります。彼の付けていたチョーカーはちよつと特別製ですね。私が作ったものですが……」

「いいえ。それではいざというとき、私の代わりにはならないでしょう? マシロにだけは手を出せないようにしてあります」

につこりと意味深な笑みを浮かべたブラックに、シゼは「貴方の代わり? マシロさんにだけ?」と気になった部分を繰り返し眉を寄せる。

それにブラックは、楽しそうに口元に人差し指を押し当てて内緒

というように微笑んだ。

内緒も何も、あのチョーカーは外れない。
ブラックが外さない限り無理だ。

私も本人も試したけど全然駄目だった。いうなれば、西遊記の悟空がつけられている金鉢と同じようなものだろう。私がある言葉をルカに向けて発すれば反応するものだ。

それがなければただの可愛い首輪、あ、いっちゃった。そう可愛い赤い首輪だ。白猫 未熟さを示すようにまだ成猫ではなかった になってもらったとき、相当嵌りそうだった。ブラックにも首輪を……と考えてしまったほどだ。

私は二人が話をしている間に、ロスタからの土産をカウンター裏から引っ張り出して、まだ全然納得出来ないという風なシゼに「はい」と手渡した。

「おいおい慣れるよ。ルカもきつとそんなに悪い子じゃないと思うよ?」

シゼは来た目的をすっかり忘れていたのか、なんですかこれ?と訝しげに受け取り中を見て、ああ、と納得する。中身は約束通り黒真珠だ。私も勿論貰った。

「乱獲したっばいですね……」

「……ロスタ豪快だからね」

「その辺りは昔から変わりません」

いったシゼは、ほんの少しだけ嬉しそうだ。その流れで冷静に戻ってくれるかと思ったら

「兎に角、あれが居る間はもうここにはきませんっ！」

帰ります。と、私が止めるのも聞かずに、かつんつと踵を鳴らし
て回れ右。さつさと扉に手を掛けてカランカランつと乱暴にウエル
カムベルを鳴らして出て行ってしまった。

「シゼっ！」

「放っておいたらどうですか？」

呆れたように肩を竦めてそういつたブラックに、私は、無理っ！
といい放ってその姿を追いかけた。ブラックの溜息が聞こえたけ
ど仕方ない。走り出したら止まらないのも私の癖だ。

「ちょっと待ってよシゼっ！」

大通りをカツカツと苛立たしげに歩いてきたシゼを掴まえて、無
理矢理振り返らせる。迷惑そうに眉を寄せたシゼは振り返りぶつき
らばうに「なんですか？」と口にした。

「ルカのこと許してあげて、きつと悪かったと思ってるから」

「どうして、僕が許す許さないという話になるんですか！ 死に掛
けたのは貴方でしょう？ その記憶が薄れているとはとても思えま
せん」

深く眉間に皺を寄せてそう口にしたシゼは、私なんかよりずっと
辛そうに見えた。きつと、私がブラックの記憶とルカの記憶を混同
してしまうくらい、深く心に刻んでいることを気にしてくれている
のだと思う。

「貴方にとって、店は安心出来る場所ではないのですか？ そこへ不安要素を入れ込んでどうするんです。それを貴方の我侷だから。と、許す店主殿も店主殿ですが、それに甘えるマシロさんもどうかと思います。そんな貴方だから、僕は嫌いなんですっ！ 振り回されている周りのことを気にもしないで！ 重ねますが、僕は彼を信用出来ません」

確信というか、いわれても当たり前なんだけど、面と向ってぼこぼこいわれると私でも傷付く。

浮かんできそうな涙を飲み込むために、私はきゅっと唇を噛み締める。口を開けば同時に泣きそうさ。いい大人がそれじゃ駄目だ。

すっかりしないと……そう思っても、正直シゼがいつてることの方が正論だからどうしようもない。

暫らく睨み合ったあと、先に目を逸らしたのは私だ。ぶつけられた正論に私は何一つ返す言葉はない。シゼが心配してくれているのも痛いほど分かるから、尚更だ。

そんな私と向き合ったまま、やや黙したあと、シゼは、かつつと踵を鳴らした。踏み出した足で帰るのだと思ったら私の目の前が暗くなった。

……ふわり

「僕が苛めているように見えるので泣かないでください。年上なのだからしっかりしてください」

シゼからは微かに薬草の香りがした。この臭いはなんだっただろう？ とか今考えちゃいけないことが脳裏に過ぎる。

職業病の一種だと思う。

でも……シゼがこんな風に私に触れてくれたのは初めてだ。

私はシゼを怒らせた。許しを請う術もない。
それでもシゼは私に背を向けなかった。

口にはしないけれど、私のことを案じてくれているという気持ち
が強く伝わる。でも、慣れないことをするから、力の入りきらない
腕の中がなんだかくすぐつたい。

少しだけ、驚いて、少しだけ嬉しくなった私に気がつくこともな
くシゼは「それから」と続ける。

「貴方も薬師なのですから、いづかどうするか迷いましたが、マシ
口さんは倒れるまで、自分のことには気が付かない人だというのを
忘れていました。貧血気味なのではないですか。疲れも蓄積されて
いるはずです。薬をちゃんと飲んで、暫らく療養したほうが良い」

色々あったんですから……としんみりと付け加え締め括った。

「……ありがとう」

憎まれ口を叩いても、ちゃんと私のことも診てくれているシゼが
私は好きだ。どんなに嫌われても好きだと思う。とはいっても結構
長いこと、抱き締めてくれてるけど

「私は、良いんだけど、その……」

もごもごと口にすれば通りすがりのおじさんが「若いってのは良
いねー」と通り過ぎた。

うん。ここは大通りだし、シゼは目立つんだよ？

私のいいたいことを代弁してくれたおじさんに心の中だけで頷い
た。慌てて私から距離を取り真っ赤になって私の顔を見ようともし

ないシゼはやっぱり、可愛い。

「と、兎に角、僕は納得できませんっ！ 彼が居続けるなら、店には行きませんかからねっ！」

真っ赤な顔を隠すことも出来ずに、そう吐き捨てたシゼは私が笑いを堪えていることに、益々赤くなる。凄いな。人間あんなに真っ赤になれるんだ。なんてしんみり考える余裕すら出来てしまった。

「~~~~っ！ 絶対行きませんかっ！ 健康管理くらい自分でやっってくださいっ！」

最終的に面白すぎてそれ以上シゼを掴まえておくことが出来なかった。

ぷりぷりまっかつかのシゼの背中を見送ったあと、私が店の扉をくぐると足元に白猫が擦り寄ってきた。

もちろんルカだ。

用事のないときは猫の姿で居ることもブラックが提示した条件の一つだ。腕輪などは全て外してもらい、力の制限は受けない代わりに、でもある。

ルカはルカで「おいで」「良いよ」で、素直についてきたわけでもない。ルカが唯一惹かれたのは「自由」という単語だけだった。私は何かのきっかけになれば良いと、そう思ったのだ。

「和解出来ましたか？」

ルカを抱き上げて中に入れば、ブラックはカウンターに腰を預けて私が作って置いておいた金平糖を食べていた。

私はブラックの傍に寄って首を振ると、平皿に持った金平糖を一

っ掴んだ。それを口に入れようとしたら、その手を掴まえられ「ど
うぞ」と口付けられる。

「……………んっ」

……………甘い。

口移しで口内に転がり込んできたのはもちろん金平糖だ。真っ赤
になってブラックを見上げれば、にこにここと「上手に出来てますよ
と褒められる。

私は抗議する気が逸れて、手に持ったままのものを、とっとカウ
ンターに載ったルカの口に放り込んだ。猫の姿では受け止めにくい
らしい。ころりと落として追いかけていく。

可愛い。いつそ猫形を本体にすれば良いのに。

「みんなが私に甘いから自分みたいなのも必要なんだって。全く。

弟のクセに生意気だよね」

「……………シゼも報われませんね」

私にとっては好都合ですが。と笑いを零したブラックに首を傾げ
る。

第六十一話：何人集まつてるの？

翌日早々みんな来た。

本当にみんな来たんですけど、王宮暇なんですか？

「うわーホントだ。猫が増えてる。流石、獣フェチですねっ！」

マジマジと、二階のダイニングテーブルの上で、毛を逆立てているルカを眺めつつ口にしたアルファに私は肩を落とす。

フェティシズムがどうかという話じゃないからね。というか、違うから、いや、違わないけど……ん？

因みに毛を逆立てているのは、カナイが無謀にも撫でたいと格闘しているからだ。

仔猫相手にテンションマックスだ。

元気だね。

痛みに弱いくせにあの生傷は良いのだろうか？ まあ、幾らでも薬なら出すけどさあ。薬屋さんだし？

「有力候補が蒼月財団から姿を消した。って、いったのは本当だったんだね」

「別にうちで貰ったわけじゃないですけどね。一応、私、預かりということですよ」

「真の敵は内に居るとはいうけれど、自分から招くとは青い月は酔狂だよな」

「弱いものに警戒するほど、月は心狭くありません。アノールと違って」

ゆったりとティータイムに興じていると思われた猫と王様だった

けれど、微妙にぴりぴりを隠せていないような気がするの……きつと私の気のせいだ。そうに違いない。そう思いたい。

因みに“アノール”というのは、エミルが受けた名前の一部だ。前王様の名前を受けて“ドール”の部分がエミルの代で“アノール”となった。

エミルはそれを私が『陛下』と呼ぶのと同じくらい嫌がる。古代語で“太陽”という意味だと、ブラックが教えてくれた。理由を問えば「過ぎた名前だからだよ」とエミルは答えてくれたけど、ブラックは「太陽は永遠に月に届かないからですよ」と笑っていた。そして、それを使ってはどうかと、こっそり進言したのはブラックだと、ラウ先生に聞いた。ブラックの地味な嫌がらせだ。

……はあ。

子ども染みた嫌がらせを思い出し溜息を零してから、私はカナイからルカを救ってあげた。ルカは、私の腕の中に飛び込むところになると胸に擦り寄ってくる。

「可愛い。可愛い過ぎる。」

本当、ずっとこれで居れば良いのに。

真っ白い毛並みにルビーのように赤い瞳。愛くるしさ漂うにゃんこさんが擦り寄ってくる快感。

……カッソッ

「にゃっ……」

私がルカの抱き心地を堪能していると、ルカの狭い額にティースプーンが直撃した。ブラックだと睨みつければあっさりこちらを無視した。

「どこが心広いの？」

「躑けです」

その隙にそろりと手を伸ばしてくるカナイはまたルカに引っかかれた。懲りない奴だ。

「ルカ、ちょっとだけ触らせてあげれば」

一応説得してみるものの、嫌々と首を振って腕に擦り寄ってくる。ごめん、カナイ。私ルカの味方も。

そういえば、基本的にルカは猫の姿のときは話をしない。口から出てくるのは、にゃーとか、にーとか、なうとか愛らしい鳴き声だけだ。

「ちょっとくらい良いだろ。減るもんじゃないんだからさ」

「やめろって！ こいつなんだよっ気色悪いっ！ 分かってんだろ？！ 分かってるんだよなっ！ おれが獣族で猫じゃないって！」

「あ、戻った」

……ヒュッ

再び飛んできたものを叩き落としルカは怒鳴る。

「闇猫っ！ フォークは止めろ！」

うん、危険だよ。刺さったら怖いからね。いや、ここは薬屋さんだから……以下略。

「五月蠅いですね」

「ねえねえ。マシロちゃん。これお代わりないの？」

「え、ああ。台所にあるから好きだけ食べて良いよ」

「猫に戻ったほうが良いって、絶対、かわ……」

「だからっ！ あんたは気色悪いっていつてんだろ！」

なんだか収拾がつかなくなってきた。はあと私が嘆息したところでノックもなしに扉が開く。

「騒がしいですよっ！ いつまで僕に店番をさせておくつもりなんですか！」

あーだこーだいつつ、シゼは今日アルファに担がれてきた。本当に担がれて 一体お城で何があったのか 抵抗する気力すら失っていたシゼがちよっぴり気の毒すぎて、私はそのことに触れられなかった。

ぷりぷりシゼに、エミルがのんびりお茶を勧める。それを丁寧に断ったシゼは、不機嫌そうに私を見た。

「あ！ 私、昨日の臭いで気がついたんだけど」

「何ですか？」

私の台詞にシゼがほんの少し頬を染めて警戒色を強めたのが分かった。

「あの香りって、もしかして“ネロリ”じゃない？」

「ええ、僕が個人的に精製しました」

ネロリといえば、ビターオレンジから水蒸気蒸留にて得られる精油のことで、コロンとか、アロマテラピーなどに使われる柑橘系の香りだ。結構手間がかかるので、あれから作っていなかった。

ふーん。と私が頷けば、シゼは少し呆れたように肩を竦め「お分
けしましょうか？」と振ってくれた。流石シゼ、皆までいわずとも
分かってくれるとは素晴らしい。うんうん。と頷いた私にシゼは苦
笑して続ける。

「そんな、もの欲しそうな顔しないでください」

「してません」

「そうですか？ 身体中から『欲しい』というのが滲み出ました
よ」

「ごめんね、正直で」

にこりと悪びれる風も見せないでいると、シゼは構いませんけど、
と肩を竦める。

「ついでに、ネトルの準備も進めているので、一緒にお持ちします。
毒草関係はご自身で扱わないのでしょう？」

やれやれというように続けたシゼに今度は私が苦笑する。

ネトルはイラクサを乾燥させて出来るものだけど、イラクサ
の棘には毒がありかぶれることがあるから、ブラックが温室や庭で
の栽培を嫌がった。一応私も薬師なのだから、その程度の扱い慣れ
ているというのに過保護な恋人には分かってもらえなかったのだ。

補足として、それを煎じたものは花粉症に効くとうたわれている。

第六十二話：一箇所集中の視察

「それで、陛下はいつまで仕事をサボっている気なんでしょうか？」

私とシゼが戸口で話し込んでいると、その奥から、にゅつとラウ先生が現われた。びくりと肩を跳ね上げた私とシゼを気にすることもなく、少し避けたシゼの間からつかつかと家主の了承もなく入室してくれた。

「視察に出るってどこを視察しているんですか」

「うわぁ……ラウ来たよ。こんなところにまで来たよ」

エミルがうんざりという風に頭を抱えた。そうか、陛下は王都視察の名目で出てきていたのか。

「それにしても、ここ面倒臭いですね……部屋に割り込めませんでした。仕方ないので店から入れば誰も店にいませんでしたよ。いくら閑古鳥が鳴くとはいえ、吃驚です」

入り口から入るのは普通ですから。それを面倒とか、仕方ないとかで済まさないでください。失礼なこともいわないでください。先生……

「あ、私はストレートで良いです」

そしてお茶飲むんですね。なんてマイペースな人なんだ。

私は肩を落としてつつ、分かりました。と、お茶の準備をする。ラウ先生は、にっこりと気を遣わせてすみません。と、微笑むが悪いと思っないならいっそもいわないほうが良いと思う。それを分

かって多分いつてるから、ラウ先生って……怖いんだよねえ。

「そつえば、使用人が何名かカナイを探して廻っていましたよ？」

カナイは結局ルカに触れることを許されず、がつくりと肩を落とし、お茶を飲んでいるところに声を掛けられて「何で？」と首を傾げる。

「猫の出産が近いそうです」

「俺、帰るわ」

間髪居れずに答えたね。というかあの使われていなかった礼拝堂の猫かな？ お腹大きい仔いたもんね。だから昨日シゼが売るほどくれるっていつてたのか。

「カナイ……里親探しなよ」

はあと呆れたように嘆息してエミルが釘を刺すと、カナイは分かっているよ、と答えながら一気に残りを飲み干して、サイドボードの上に乗っける。

「またな」

と、私の肩を叩いて鼻歌でも歌いそうな勢いで、出て行った。

どうぞ、と私がラウ先生にお茶を出すと、先生はにっこりと受け取って「お茶菓子はみんなアルファのお腹の中ですよ」と加えた私に構いませんよ。と、笑みを深める。

ぐるりと部屋の中を見渡すと、またシゼが居なくなっていた。多分、店番に戻ってくれたのだろう。真面目な良い子だ。

「大体、僕、真面目に仕事してるよね？ どうして減らないの？
本当にハスミとキサキにもやってる？」

「もちろんですよ。多分やっつてらっしゃると思いますよ？」

「……多分って」

「私はエミルが好きなんですよ。だから、是非良き王になって欲しいのです」

どうして、ラウ先生の台詞って白々しく聞こえるのだろう？ でも、いつもいってることはいつてるから、きつと本心でもあるのだと思うけど……… なんとか真実味に欠ける損な人だ。

きつと同じことを感じたのだろう、エミルが「そうなんだ、嬉しいな」と棒読みになってしまっていた。

「アルファ、そこにあるの食べたらシンクに置いといてね？ 私、店に戻るから」

キッチンから出てこなくなってしまったアルファにそう告げて、卓を囲んでいた三人にも声を掛けてから私が戸口に立つと「おれも行く」とルカが猫の姿に戻ってするりと抜けていった。

……パタン

と扉を閉めたところで声が漏れる。ルカはさっさと下に降りてしまった。

「まるで子どものようですね」

「あんな大きな子どもいきなり要りませんよ」

「小さい子ならどうなの？」

「……分かりません。ですが、正直いえば困ります」

困るんだ。そっか、そーだよねえ？ 別に結婚しているわけじゃないし……一緒に住んでいるわけでもないし。
そうだよな。と、浮かんでくる疑問を押し込めて納得すると廊下を進んだ。

「マシロさん。ルカが降りてきたんですけど」

「うん。シゼ、上に居て良いよ。お茶でも飲んで休んで？ 私降りるから」

「え、あ、はい……」

シゼと廊下で擦れ違って私は階段に足を掛けた。掛けた、つもりで……落ちた。ガタガタガタンっ！ と派手な音を立てて。

「っ！」

声にならない悲鳴を上げ綺麗に一番上から下まで落ちた。

「マシロっ！ 大丈夫ですか？」

もちろん一番に駆けつけてくれたのは階上に居たシゼでも、落ちた先に居たルカでもなくブラックだ。

「い、ごめん。ぼーっとしてて、平気」

立ち上がるうとしたら、ブラックに押し留められ、頭とか身体をぺたぺた触られる。まだ頭の中がすーっと冷える感じがする。身体を流れている血液が冷水に変わってしまったような、妙な感覚だ。

「少し打ち身が残るくらいですね……このくらいなら直ぐに治りま

すよ」

いいながらそっと抱き上げてくれる。

足元が地面から離れても不安を感じないのは、きつとブラックが抱き上げてくれたからだと思う。いつだって、ここは居心地が良い、私の特等席だ。

「貧血ですよ。薬も飲んでいようだったので黙っていたのですが、もっと気をつけるべきでした。すみません」

「へーき」

直ぐに謝罪してくれるブラックに、別に何も悪くないのになと思いつつ、ブラックの首に腕を絡めて肩口に顔を寄せてしがみ付く。大丈夫？ と、エミルたちが声を掛けてくれるのにも答えられなかった。

「ルカは店番。皆さんは仕事に戻っては如何ですか？ 邪魔です」

きつぱりとブラックにいい捨てられて、みんなそれぞれに散っていくのが分かった。またね？ と声を重ねてくれたエミルに「うん」と頷くのがやっとだ。明らかに私の甘えだけど、きつとこんな失礼な態度であったとしても、次に会うとき、エミルはまたにっこりしてくれると確信している。私はちよつとズルイ。

そんな私をブラックは、全員が散ったのを確認してからかどうかは分からないけれど、二階の寝室に運びそつと寝かしつけてくれる。

「少し眠ってください、マシロ。疲れが蓄積されてしまっているんですよ」

ぼんやりとした意識の中で、私はブラックを見詰めていた。ブラ

ツクはその視線に口角を引き上げて「どうかしましたか？」と柔らかく添えてくれる。みんなと話しているときと、こうして二人きりで話をしてくれるときのブラックは全然違う。とても柔らかくて、とても優しく、何より甘い。

「ブラック……」

「はい？」

「好きだよ。そこにいて……帰らないで……」

上掛けから手を出してブラックの手を掴む。ブラックは少しだけ驚いたような顔をしたけれど、もちろん構いませんよ。と微笑む。断られないと分かっているから、口に出る我儂だ。

「大丈夫、ちゃんと居ますから、目を閉じてください」

「……………うん」

本当は、どうしても閉じたくはなかったけど、それ以上心配してくれているブラックに我儂をいうことも出来ず、私は大人しく瞼を落とした。静かに、優しく頬を撫で髪を梳いていく指先が心地良い。

こんなに好きなのにその証は望まれないんだな。

ちよつと……哀しい？ 寂しい？ 苦しい？

そのどれも違う曖昧で、でも良い気持ちではない変な気持ち。

「マシロ。マシロ」

寝ろといたり起こしてみたり……ブラックも忙しい。

頭の中が朦朧としていて、目を開けるのがだるくなっていた。それでも瞼を持ち上げれば、ブラックが凄く不安そうな顔をして顔を

覗き込んでいる。

「泣いています。どうして泣いているのですか？」

「気のせいだよ……別に哀しくないから」

「では辛いのですか？ 痛いのですか？」

重ねつつ身を乗り出してペロりと目じりを拭う。くすぐったくて笑いを零すとブラックは困ったような顔をしていた。やはり、哀しいのでしょうか？ と重ねられ、私の頭に疑問符が浮かぶ。

「哀しいときの涙はしょっぱいんですよ？」

「え、そう、なの？」

「はい」

いい切った。

第六十三話：正しい家族計画

いい切ったブラックに観念して、私は反対の腕を額に押し当てた。その仕草にあわせるように、ブラックはベッドの脇に腰を降ろす。私は顔を半分隠したまま、ぽつりと零した。

「さっき、ちょっと聞きちゃったから」

「……………何をですか？」

「だから、その……………子どもが来ると困ると……………」

じわじわじわーっと頬が熱持つのが分かる。

いやもう、自分でも恥ずかしいことを口に行っているのも自覚しているから尚更だ。というか、これじゃ、私が今、物凄く子どもが欲しいといっているようだ。

そうじゃないんだけど、そうじゃない……………うん、違うんだよ。

って、これじゃ益々ブラックの顔が見れないよっ！

恥ずかし過ぎて、ごろっとブラックに背を向けてしまう。それなのに

「ああ、あれも話途中でしたね？」

普通だ。というか私が聞いてたの分かってたっばい。私が聞いているのを知っていて、話を進めていたにしては配慮が足りないと思う。思っけど……………

「マシロは子どもが欲しいのですか？」

ブラックは時々こういう風にデリカシーに欠けることを、さらっと口にするタイプだった。

「い、いや、そーいう話じゃ……」

思わずどもる。というか、そういう話じゃないんだよ。

では、作るところから頑張らないといけませんね。って、セクハラ発言しないでっ！……って？ あれ？

予想外のブラックの反応に、上半身を片腕で支えて起き上がり「困らないの？」と問い直した。ブラックは私が思った以上にきょとんとしている。

なんかいつものことだけど、微妙に話がかみ合わない感じがしてきた。

「困るといえば、んー、まあ、困るんですけど……なんというか、もう、自分のときのことは記憶に薄いので思い出そうとも思わないのですが、ルカを見ているとふと思うのです」

何を？ と、首を傾げれば、ブラックは、ふうと息を吐いて私から視線を逸らす。窓から覗くまだ明るい空を見上げてぼつぼつと話してくれた。

「私はマシロが好きです。大切です。傷つけたくはないのです……」

「……う、うん」

「ですから、少し怖いです……」

「怖い？」

「ええ、怖いです。とても」

私には、ブラックが何を怖がるのか分からない。そんな私の気持ちを察してか、そっとブラックの長い指が私の頬を撫でる。

「正直、ルカが私の後釜になることはないです。そう努めます。マシロと一緒に少しでも長く居たいので……」

「そ、それはもちろん！ そうして貰わないと嫌だ。困るよっ」

馬鹿なことをいうなとばかりに眉を寄せれば、ブラックの表情はより柔らかくなる。それだけのことが、私にとって凄く嬉しい。

「そうになると……なんとなく嫌な予感がするんです。もし、私たちに子どもが出来たとすれば、その子が“種屋”の素養を持つのではないかと」

そういつてブラックは改めて私の顔を見る。そして私の頬を片手で包むと瞳を細めて続ける。

「私は、もしそうなくても大して傷付かないと思います。最悪、何も感じないかもしれません。ですが……」

マシロは違うでしょうか？ と問い掛けつつ、顔を近づけて、軽く唇に触れてから私の顔を覗き込む。

確証もない話だ。

でも、ブラックの嫌な予感も、的中率としてはかなり高いような気がする。その高いような確率の中で……。私の、私たちの子どもが種屋を継ぐようなことになれば……物心つくまでに蒼月財団に連れて行かれるかもしれない、それはブラックにお願いすれば、防げるかもしれないけど、でも……。

もしも、が、あれば、終わりを告げるのはその子になる。告げられるのはブラックで……その子にとって普通に生活出来る最後になる……

「貴方はきつと傷付く」

私は、傷付くだろうか？

「血で血を洗うような真似きつと望まない」

うん……望まない。見たくない。そんなの、我慢出来ない。

僅かに熱を帯びてきていた身体が、また冷えていくような気がする。すうっと冷たいものが身体の中を通り抜ける。

「でも、私たちはそう運命付けられればそれに従うしかないのです。世界は種屋を失くすことを許さない」

辛そうにそこまで告げるブラックの苦しみは、私のためだ。ブラックの言葉通り、それがまだ見ぬ子を思ってではないことは分かる。ブラックは私しか見ていない。私の痛みと苦しみにしか心を動かさない。

何もいえなくなってしまった私を、ブラックはやんわりと抱き締めた。自分が語ったことは、大した事ではなく、ただ……体調を崩してしまっている私を気遣うように、とても優しく。

でも、そんな風に偏ってしまっているものだったとしても、極自然に、当たり前前というように、深く私に愛情を注いでくれるブラックに、私はなんとも応えてあげられなかった。私も同じだけの気持ちで応えていると思いたい。背中に回した腕にきゅっと力を込めて、言葉に変えられない思いが伝わればと思いい抱き締める。

耳元に擦り寄せられた唇が、耳朶を甘噛みしたあと、ふうと長く息を吐いて続ける。

「別に私は、自分の終わりがどうということについて何も感じません。時間は放っておいても勝手に流れていく。流れていけばそれは近づく。当然の事ではない」

ブラックはどうして、どうしてこうも自分の事に無関心なんだろう。自分で自分を大切に出来ないブラックが切なくて、私はいつも苦しくなる。苦しくなって……だから、私がブラックを大切にしないでとは心に誓う。何度も……何度も……。

「……ただ、マシロがいなくなるのは辛い。マシロと、心も身体も離れてしまったとき、マシロがもう一度、私を選ばなければ、私は本気で種に還るつもりでした」

「……」
「そしてまた、あるとき、マシロと共に終わりを告げられるなら、本気で引き金を引いても良いと思いました。貴方と一緒に居られないくらいなら、ルール上最大の禁忌でも私には関係ない」

そう口にしたブラックは、少しだけ震えているような気がした。それを悟られなくなかったのか、ぎゅっとブラックの腕に力が入る。

「愛しています。貴方だけを……」

「私だって大好きだよ。大切に想ってる。ブラックが居なくちゃ、私にとってこの世界は意味がない」

……意味がない。

口の中で繰り返し返せば、正にその通りだと納得しブラックの背に回した腕に改めて力を込める。

「私は貴方の特別でさえあれば良い。こうして望めば触れ合える距離に置いてもらえるなら、私は何も望みません。だから、マシロは自由であって構いません」

言葉の意味が分からなくて、私は無理矢理顔を上げブラックの瞳を覗き込む。

「私とマシロの大きな違いだと思います。私はマシロのことしか思いやれません」

うん……知ってる。

「ですが、マシロは多くを思いやる。他人の痛みを自分のことのように受け入れてしまう」

そんなこと、ないよ。私だって、ブラックのことしか考えてない。ただ、ブラックが私に余裕をくれるから。だから、みんなへも目を向けることが出来るだけで……私はブラックが思うほど優しい子じゃない

「だから、貴方はこの世界での特別に愛される。素養が強ければ強いほどその役目に縛り付けられ周りなど見えない」

ちゅつと額に口付けが降る。

「こうして触れ合っているとき、貴方を思うとき、貴方が私を一番に思い、胸を痛め悲しんでくれるとき……今みたいに、私のために泣きそうな顔をしてくれているとき、私はとても満たされます」

降りてきた口付けに応えながら「泣かれると嬉しいの？」と曖昧

な笑いを零しつつ問い直す。それに釣られるようにブラックも微妙に笑みを浮かべて、そうです。と答えた。

「私のために、マシロが泣いたり悲しんだりしているのだと思うと、嬉しくてぞくぞくします」

そういったブラックは本当に幸せそうだった。

ブラックの感覚はちょっと独特だと思う。

「他の方のためにだとしたら、元凶を絶ちたいと思いますけど」

極端だしね。

でも、やっぱり私は私のことしか頭がない、そんなブラックが好きだ。とかいったら私も十分に毒されてるよね？ けどもう、そういう重いところがとても好き、私を絶対に裏切らない、裏切れないから好き、もう初恋の痛手を繰り返すことはないと分かるから好き 大好き ……

「だからって、絶つちゃ駄目だよ」

「善処しています」

思わず顔を見合わせて笑ってしまった。

傷つけたくないのに傷付いているのを見ると、愛されると実感してほつとする……気持ち的に矛盾しているのは分かってる。

きっと、ブラックの中でどうしようもない部分なのだろう。そんなところも愛しいと思うのだから私だって本当にどっぷりと浸かっている。

もう一度視線が絡めば自然と距離が縮まり、唇が触れ合う。角度を変え啄ばむように口付けて薄く開いた口内への侵入を許そうとし

たら

「まだ明るいですけどー、何してるんですかー」

声が掛かった。

もんの凄くバツが悪い。

がっくりと私の肩にブラックの額がのっかる。耳が頬を掠めて少しくすぐったかった。

「……………これだから子どもは嫌いです」

やっぱり消したほうが良くないですか？ と、にこりと微笑んだブラックに、駄目だよと注意する。でも、これが重なるとブラックは、にべもなく消しそいでちよつと怖い。今度ちゃんと注意しておこう。あ、でもなんて？ ま、良いや。それで……………

「どうしたの？」

「薬の置き場所が分からない。どっかのジーさんが来てるけど、なんか……………」

珍しい 自分でいうと物凄い哀しい お客さんが来ていたのか。私は、もぞりとベッドから抜け出して対応しようとしたらブラツクに押しとどめられた。

「マシロは寝ていてください。私が見ます」

「え、でも」

大抵お年寄りの方は種屋と顔を会わせたことがある。ブラックはここで会いたがらないはずだ。無理を推させるような気がして、引

きとめようとした私に、ブラックは大丈夫ですよと重ねて、ふっと猫の姿を取る。

その瞬間ルカの尻尾がぴんつと立った。あ、あれ？

「いっておきますが、私は貴方と違ってこの姿でもある程度力は使えますよ。瞬殺されたくなければ黙ってついてきなさい」

びしりと口にしたブラックに、ルカは「べ、別にそんなこと考えてない」といいつつも頭頂部の耳は左右に垂れ、尻尾は見る見るうちに下にさがってゆらゆらと揺れる。

うわー……この二人滅茶苦茶可愛い。

いったら全否定されるだろうからいわないけど。

「マシロはちゃんと寝てくださいね」

私の含み笑いに気がついたのか、そう念を押してからブラックはすたすたと部屋を後にし、それに続いたルカは扉を閉める瞬間ちらとだけ私を見て、でも何もいわずに扉を閉めた。

本当に、可愛いやつだ。

私はきつと、こちらにきて個性強すぎな人に囲まれすぎて、物凄く器が広くなったのだろう。そんなことをしみじみと実感する。そして、二人の気遣いに感謝しつつベッドの中に、ぱふつと戻って上掛けを引き上げて瞼を落とした。

まだ、見ることのない、出会うことのない子どものことは分からないけれど、深く愛されているという確信がある今、私はとても幸せで満たされていた。

第六十四話：続・私の平凡なる毎日

今日もいつもと同じ時間にオープンのプレートを返す。雨季はすっかり終わりを告げて朝から良く晴れた日がまた戻ってきた。

店沿いに並べたプランターに水を上げていると膝に突然衝撃が走る。

「うわつと!」

「マシロー」

そんな低い位置から攻撃出来るのは私の知る限り一人だけだ。

「ナルシル。いらっしやい……今日は一人……?」

振り返りしゃがみ込めば、最近ようやく話し始めたナルシルが「はい!」と力強く頷く。そんなはずは……と思っていると、視界に靴先が入り「そんなわけないですよ」ところころと楽しそうな声が降ってくる。

「レニさん」

当然の付き添い人の姿を見上げ、私はナルシルを抱き上げて立ち上がった。

「随分ご無沙汰に感じます。王宮から連絡があっただけだったので心配していたのですよ?」

「あ、えっと、すみませんでした」

反射的に謝罪すると木漏れ日のように穏やかな笑顔で、構いませんよ、と口にしてくれる。

「雨も続いていましたからね。雨季はそれだけで気持ち沈みます。全て明けましたか？」

やんわりと問い掛けられ私は「全て……」と口内で繰り返したあと

「はい。いつも通りです」

と、笑顔で頷いた。いつも通り。何の変哲もない毎日。改めて考えると、とても久しぶりのような気がする。そう実感すると、ふんわりと心の中があつたかくなつた。

そんな私にレニさんは瞳を細めて微笑むと「それは良かった」と、頷いてくれる。本当に心配を掛けてしまっていたようだ。連絡なくて申し訳なかつたなど、少し影が差したがそれが表情に出るまでにレニさんは続けた。

「私のほうもマシロさんにとっては朗報ですよ」

にこにこ口にしたレニさんに、なんですか？ と首を傾げる。

「私への監視が解かれました」

「そうなんですか？ 良かったじゃないですか！ というか、なんで私にとっての朗報？」

「私としては体よく使える人だったので居てもらっても問題なかったのです」

この人も人使いが荒い系だった。

「それに伴って、ハクアの件でご相談に上がったのですが……」
「え、ああ、でしたら本人の希望で、私のところに戻りたければ」

いいかけてちょっと止まる。うちには猫が増えた。毎日ではないとはいえ大きな猫も居るし……ハクアにはシラハが居る……部屋あるかな？ その心境を悟ったのかレニさんはにこりと微笑んで提案する。

「もし、宜しければ現状どおりマリル教会のほうに居ていただけると助かります。子どもたちも懐いていますから」

「レニさんさえ良ければ」

会話の意味が分かったのか腕の中で大人しくしてくれていたナルシルが「わんわん、かーいっ！」と声を上げて笑った。犬ではないとか真顔で答えているハクアの姿が思い浮かんで思わず微笑ましくなる。

「とりあえず、中に入りませんか？ お茶でもどうぞ」

いって方向転換しようとしたところで私は新たな衝撃に襲われる。
ぐえっ

「マシロ助けて、匿って」

「エ、エミル……くるし……」

突然ナルシルごと抱き締められて声を潰した私にエミルは慌ててその腕を緩める　でも離さないんだね？　とふと腕の中へ目を落とす。

「ごめん、あ、こんにちは、ナルシル。ねえ、マシロ。とりあえず、中に入れて？」

「こんにちは、王子、いえ、陛下」

「あ、レニ司祭もいたんですね？」

気がついてたよね？ レニさんそんなに存在感薄くないよね？

それより匿うって……エミル、ここしか逃げるところないからバレバレだと思うけど。私の考えを読んだのか「気にしない気にしない」と背中を押す。

私は少し呆れたような笑みを浮かべてから、からころと可愛らしいベルを鳴らして扉を開く。どうしてこの店は健康な人の来店が多いんだろう。

みんな忘れてるかもしれないけど薬屋さんなんだけど。
小さく溜息。

ナルシルも降ろして中へ促す。レニさんが入ったところで扉を閉めようとしたら、しなっとアルファとカナイが続いていた。

……まあ、もう、これもいつものことだろう。

ふふつと零れる笑みをそのままに、もう誰も来ないことを確認して私は店の扉を閉めた。

私の目に映る世界は今日も変わることなく色鮮やかだ……

第六十四話：続・私の平凡なる毎日（後書き）

長い間お付き合いありがとうございました。

一応、ここで一区切りです。次回、更新日にはエピローグ（終章）を予定していますがR15くらいの指定内容になる部分がありますので、全年齢（それでもR12くらいかもしれませんが）対象はここまでです。

まだ人気投票からの、番外編などもありますし、ちまちまと更新していくとは思いますが、節目のご挨拶とさせていただきます。

終章は

裏無し（R15）は、そのままこちらこちらをご覧ください。

裏アリ（R18）は、ちょこちょこ入るので、一々頁切り替えは面倒だと思いますので、終章のみ切り離してアリの組み合わせもものをアップします。

4月30日（時間未定）にこちらからどうぞ。

[http://www11.plala.or.jp/sshap
py/been/02.html](http://www11.plala.or.jp/sshap/py/been/02.html)

はパスワードに置き換えてくださいね。

1 (前書き)

R15くらいに相当する部分も、散りばめられているので、苦手な方など不適切と思われる場合はブラウザバックをお願いします。

後日談ですので、この前のお話で終わったと思っていただけでも問題ありません^^

裏無し(R15)はこのままこちらでどうぞ。

裏アリの場合は、こちらからどうぞ^^

```
http://www11.plala.or.jp/ssh  
appy/been/02.html
```

() の部分はパスに置き換えてください。パス請求はちょっと広場(拍手お礼ブログ)記事を参考にしてください)

今日も穏やかな陽気に恵まれた王都。

私は切れていた食材とか、生活雑貨を買って帰り道をのんびりと歩いていた。

今年の初め、あのアリシアが結婚をした。

王都より少し離れた土地の領主家の末子が相手で、アリシアの家に婿入りした。その理由は簡単で、領主としての素養がなかったからだ。アリシアの家は元々大家族ではあったが、アリシアのお陰で傾きかけていたハーブ園は持ち直し今ではあの頃の生活苦は感じさせない。

結婚式でのアリシアはとても幸せそうだった。

私の前以外では、いつもどこか作っていたアリシアの本当の笑顔を見た気がして、相手の人はとても好い人なのだろうとしみじみと感じた。

「……あ」

私はふとショーウィンドウの前で足を止めた。

………婚礼衣装だ。

この国では、特に花嫁さんが白いドレスを着るというわけでもない。

ただ、純白は、そのまま白い月を連想させ『美しいとき』を人々の心に映すから、多いといえば多いのだけど……その店に飾られて

いるものは、淡い緑色だった。アリシアは優しい水色のドレスを着ていた。彼女の紅い髪と瞳に映えてとても綺麗だった。

まあ、アリシアは元々美人なだけだね。

暫らくぼんやりとそれを眺めていたが、自分には縁のないものだと、きゅつと向きを変えたら

「ひっ！」

目の前にルカの顔があった。

今どきの子どもの成長は早いのか、私とあまり変わらない。きつとこのあと数年でもっとぐっと伸びるだろう。

「……ひっ！　はないだろ。おせーよ。遅すぎっ！」

「ごめん、ちよつと色々見てたら遅くなっちゃって」

私の手の中から荷物を取り上げてくれつつ「色々って」といいながら、ちらつと店の中へと目を走らせる。

「何？　あんたこんな着たいの？」

「ち、違うよ。そうじゃないけど、綺麗だなーと思って」

私は、なんとなく居た堪れないし、自分の台詞に嘘はないつもりなのに、取り繕った感が拭えなくて「早く帰ろう」とルカの背を押して、足を進めた。

ルカは、ふーんっと口を尖らせて「女って面倒臭いよな」と子どもらしいのからしくないのか分からないようなことを口にする。

「そういえば、あんたたちって結婚とかしてるわけじゃないんだよな？」

「うん。しないよ」

もうとても前に思えるけど、そう、二人で決めたから。

踏み出す足先を見つめていた顔を上げて、私はルカににこりと微笑んで、そうきっぱりといい切った。ルカは小首を傾げて「なんで？」と問い掛けている。

「あんな売れない薬屋なんて、やってても意味ないだろ？ 王都に住みたいなら、種屋持ってくれば良いんだよ。ブラックさんなら、そのくらいのアんたの我侭ききそうだろう？ 大体、ブラックさんになる前は、種屋は王都にあっただから、さ」

「売れないは酷い」

「じゃあ、流行らない」

……どっちも一緒だよ。

私はワザとらしく眉を寄せたけど、ルカは微塵も気にしないようだ。

「兎に角、別に私も結婚とか拘らないし、したからって何も変わらない。私は種屋に住む気はないし……ブラックも王都に種屋を持つてくる気は毛頭ないと思うし……」

「ふーん。あの人よっぽどあんたを野放しにしときたいんだな」

野放しって……。ルカの遠慮のない台詞に私は真面目に眉をひそめる。

「だって、そうだろ？ 結局、形式的なものがないから、いつまでたっても周りは浮き足立ってるし、種屋じゃなくてあんたの隣を取って代わるうって奴が多い。おれには、こんなちんちくりんのごとが良いのかわかんねーけど」

「ち、ちんちくりん、って……」

子どものいうことだ。堪える私。

そのあと、私はそれ以上の話はしなかった。特に会話らしい会話をすることもなく、ルカは店の扉に手を掛けて、カランと扉を少し開いて後ろに続いていた私を振り返る。

「あんたさ……」

紡ぎ出された台詞に、私は続きを促すように首を傾げた。

「覚悟、あるんだろ？」

「え？」

「あの人と、死ぬ覚悟」

ルカの硝子玉のような真っ赤な瞳は、射抜くように私を見つめる。意図せず、初めて会ったとき首を絞められたのを思い出してしまうほど真摯な瞳だ。

「あの人は、あんたがもし死ぬようなことがあったら、迷わない。ここに居れば分かる」

私は喉がごくりと鳴った。

「でも、あの人は、死ぬようなことがあってもあんたを殺せない。絶対に……そして、周りもあんたを殺さない。絶対に……禁呪を使ってもあんたを生かす」

微かに自分の唇が震えるのが分かった。

「ま、おれがここに居る限りあんたは死なないけどな」

そのために置かれてるんだろうし、とぶつぶつ零しながらルカは店の扉を開ききつて扉が安定してから、店の中へと入っていった。私もとぼとぼとその後ろを着いて入る。心臓の裏側辺りが、ぎゅつと苦しくなつたまま私はカウンターに入った。

カウンターの影にしまつてある椅子を引っ張り出して腰掛ければ、ルカは「飯の支度してくるー」と二階に上がってしまった。

……覚悟は、ある。

襟元をぎゅつと握り締める。

ちゃんと今日もある。

私は服の奥で、今日もそこにある小さなカプセルがついたネックレスの位置を確認する。中身は猛毒だ。王宮の件がひと段落してから暫らくして、持ち始めたものだ。中身も酸化して使い物にならなくなる度に入れ替えている。

だから、私はいつでも終わりを決められる。

ブラックが私を殺せないのは良く分かってる。

自らの命は気にも掛けないだろうけれど……私のことは殺せない。それが、改めて良く分かった。

ブラックは王宮の一件で、自分が望む形でなくても、私を生かそうとした。殺してくれても構わなかったのに。

私が思っているよりも、ずっと、ずっと……ブラックは私に優しく、甘い。自分の痛みを私にぶつけたりはしない。きっと、ずっと。

だからって……

「野放しはないよねえ……」

「何が野放しなんですか？」

びくうっ!!

私の肩は綺麗に跳ね上がったと思う。自信がある。

突然掛けられた声に、私は組んでいた足を跳ね上げてカウンターの裏を蹴ってしまい、ひっくり返るところだった。

「大丈夫ですか？」

それを、しなっと支えて元の位置に戻すと、ふらりと現われたブラックは私の顔を覗き込んでにっこりと微笑んだ。

「ど、どうしたの？ 今日早いね」

声裏返った。

「はい、暇だったのよ」

「……嘘」

「嘘ですけど、マシロに会いたくなっただんです」

これは本当。と微笑んでこめかみに、ちゅっと口付ける。もちろん、取った手にも口付けた。

「まだ店は閉められないよ？」

「構いません、傍に居ます」

ブラックはそういって、ふっと獣型を取ると私の膝の上に飛び乗

って丸くなった。

そ……つと、私が頭から背に掛けて撫で付ければ、ふにゃんつと耳が後ろに流れる。尻尾の先っぽだけがぱたんっぽたんつと動き私の膝を叩くのはなんだかくすぐつたい。

夕食時、ブラックは居なかった。

屋敷の様子を見てきたら戻るといつてたから、私が嫌がるような
仕事内容じゃないんだろう。

「私が嫌がるような……か」

はぁ、と溜息を漏らすと「独り言」と、私の右隣に腰を降ろして、
食事を口に運んでいたルカが零す。苦々しくそう口にされて、思っ
たことが声に出ていたことに気がついた。

一人暮らしが長くなるとなんだか独り言が増えたような気がする。
苦笑して、ごめん。と返せば、別に良いけど、と口を尖らせる。

ルカの小さなクセだと思う。子どもらしい可愛いクセだなど、一緒
に居る時間が長くなつたせいもあって愛着を感じる。

「私さ、別にもうそんなに抵抗ないんだ」

「んー？」

ぼつりと呟いた私に、ルカはお行儀悪くフォークを銜えたまま小
首を傾げる。

「仕方ないんだよ……」

「……あっそ」

意味の分からないだろう私の台詞に、ルカは特に質問を重ねるよ

うなこともなく、適当に相槌を打つ。別にそれで構わない。

直ぐに、元の静かな食事に戻る。かちやかちやとフォークがお皿に当たる微かな音が、聞こえるくらいに今日は静かだ。

ややしてルカは食事を終えると、さつさと一人片付けるためにお皿を重ねる。いつもの私なら、私が終わるまで待てとぶーたれるところだけれど、今日はなんとなく止める気にならなかった。私はそれをぼんやりと目で追いながら、お皿の隅っこにあったラディッシュをフォークで刺して口に運ぶでもなく苛めていた。

「今夜ブラックさん、戻るんだろ？ おれ今日はあっちいつてるから。どうせあの陰険オヤジにもご報告とかしなきゃなんないし」

「え？ 明日の朝にすれば良いよ」

「嫌だよ。朝飯当番あんたじゃん。おれ一食でも解放されたい」

このガキ。

私は、引きつる頬を押さえてフォークに刺さったままのラディッシュをぱくりと口に運んで、お行儀悪く「お好きにどうぞ」と口にした。確かに、ルカの作る料理は美味しい、私のものでは不服だろう。でも、そんなルカの料理だってブラックほどじゃないの！と思うとなんだかブラックが恋しくなった。

私は夜の帳が降りた頃、お風呂に入って普段ならぼんやりと本でも読みながらブラックが来るのを待っているのだけど、今日はなんとなく飲みたくなってワインを引っ張り出してきた。

寝室のサイドボードの上にグラスを二つ。

一つだけに注いで軽く揺らす。

いつもは白いほうが好きなのだけど、今日は赤。ちょこつと口を付ける。少しなのに、その存在感を熱くアピールしてくる濃い香りを良いと思えるくらいには、私も大人になった。

ベッドの脇に腰掛けて、ヘッドに腕を預け顎を擡げれば、二つ月が夜の闇を明るく照らしているのが見える。

結婚といえば、メネルの結婚話は驚いた。

エミルが王位に就いてから、暫らくしてメネルは大聖堂を卒業した。

そして直ぐに「私結婚することにしたのよ」とあっさり……。一度一緒にお茶をしていたときで、エミルが珍しくあたふたしていたのを思い出すと笑いが零れる。

と、いつてもメネルは今、元の世界でいうところのバツイチだ。

結婚して一年も経たないうち、そう、数ヶ月で離縁した。「星を詠み間違えたみたい」とメネルはなんでもないことのように微笑んでいたけれど……私も、エミルも分かっていた。

メネルは、ナルシルを引き取りたかったのだ。

結婚して直ぐ、メネルはナルシルを養子として迎えた。今は二人で王宮に入っている。

「星詠み系の素養を持つと、逆に自由人なのかなあ……」

しみじみとそういつていたエミルに笑ってしまった。

……確かにラウ先生は自由人以外の何者でもないし、今のレニさんも、ある意味自由人だ。

未来が分かるということは、それに囚われることをやめたあとははっちゃけるしかないのかも知れない。なんて思うと一人で、ふふ

つと笑いを零してしまった。

「楽しそうですね？」

「……遅かったね」

ぼんやりしてはいたけれど、それほど不意をつかれたわけではなかったから、私の手の中からグラスを抜き取って中身を飲み干したブラックを微笑んで見上げた。

「ええ、予定外の来客があったので……」

そう告げながら、それはそうと……と続けたブラックは、ことごとサイドボードに空になったグラスを置き「寂しかったですか？」と加えた。私は、そのグラスの行方を追い掛けながら、その問い掛けに少しだけ酔っているのか、すらすらと「寂しいよ」と口にした。

どうして？ という風に顔を覗き込んでくるブラックに私は唇を重ねて、ぐいっと腕を引くとブラックをベッドに押し倒した。理由など問うまでもなく、ブラックが居なかったからに決まっている。直ぐに、そう行きつかないことが、身勝手だと思いつつも、面白くなかった。

少し乱暴だったかなと思ったものの、そのまま口付ければ、覆い被さった私の背と後頭部に腕を回して深く応えてくれる。

互いの口内に残るワインの味が濃く行き渡り、香りが全身に纏わりつく。

「んっ……は、あ……マシ、口……？」

唇の端から零れる言葉尻に「どうかしたのか？」という問いを感じ

じて、私は少しだけ離れた。本当に、少しだけ……。どうしても、離す気にはなれなかった。

「可愛いから、急に襲いたくなつたの。……駄目？」

良いか悪いかなんて答えを紡ぐ前に、私は再びその唇を塞いだ。

私の中で燦る熱は、アルコールのせいなのか情事を思つてなのか分からない。

可愛い、なんて言葉をブラックが喜ばないのを知っている。知っているから使うなんて、嗜虐的な気もする。

するとブラックのタイを解き。ボタンを外していくと、その間に手を滑り込ませる。首筋に吸い付き、舌を滑らせると、平常時の体温が少し低めのブラックの肌が薄っすらと赤らんでくる。

それが自分のせいだと思うと、悦に入り、もつとと強く吸つてしまい、白い肌に薄っすらと痕を残してしまった。

そして、じわりと体温が上がってくるのを感じながら、そつと膨らみのない胸を撫でるとブラックが声を殺したのが分かる。私には声を殺すなというのに、自分にそれを当てはめないのはちよつとズルイ。でも、それと同時に、小さな突起がつんつと起つのがなんだかやっぱり愛らしいから、許してあげる。

肌蹴た胸に、頬を滑らせ手で触れていないほうの胸へ舌を這わせ、絡みつかせた。僅かに身を引かれても離してあげない。引かれたと同じだけ、いや、それ以上に擦り寄って胸元からブラックの顔を見上げる。

少し困つたように眉を寄せ、頬を上気させている、いつものブラックの言葉を借りるなら「誘っているようにしか見えない」という恍惚とした表情だと思つ。

女の私から見ても、妖艶で綺麗だ。

そんな風を感じてしまうと、胸の奥がじりじりと焼けるような熱

さを生み出し、お腹の奥が切なく疼く。見つめていた視線を外し、再び、つつと肌を舐めると、長い指が私の髪を掻き混ぜ、そのまま掻き抱かれる。内太ももに触れる部分が、服の上からでも硬くなっているのが分かると、感じてくれているのだと嬉しくなる。
好きが溢れてくる。

「……………痛くないから……………」

そつと触れた私に、ブラックが刹那息を詰め、ふつと息を吐くと同時に掠れたような声で「はい」と頷いた。

2 (後書き)

この続きは大丈夫な方だけ、裏にあります。

http://www1.plala.or.jp/ssha
ppy/been/ 4.html

私、アルコールに弱いのかな。それとも体力がないのかな……？
ゆっくりと乱れた髪を梳かれ、頬や唇、顔に降ってくる甘い口付
けにぼんやりとそんなことを考える。

……最初は私が優勢な気がしたのに、気がついたらいつも
組み敷かれてる……

「皺が寄ってますよ？ どこか痛い？」

眉間に唇を寄せてそう問い掛けてきたブラックに、ううん。と、
首を振って擦り寄る。まあ、そんなことどうでも良いんだけど……
そう、そんなことと思えるくらいに、こうして素肌が触れ合うのは
とても気持ち良い。

幸福感と安堵感に包まれるし、満たされている。

我侬なんていいでしたら際限ない。この満たされたときを失いた
くない。そう思い至ってブラックの鎖骨を軽く食み、つうと舐める。

「くすぐりたいです」

「駄目？」

問い掛けつつ続ければ

「……まさか」

ブラックが艶っぽい息を漏らすから、軽くたてるだけの歯に力が籠ってしまった。じわりと、僅かに血が滲む。

「あ……ごめん……」

短く謝罪して、ペろりと血液を舐め取った。同じ赤い血だ、普通に血液特有の鉄っぽい味がして当然なのに、どこか甘い気がした。本当は傷口舐めたりしちや駄目なんだけど、傷に入らないくらいの小さなものだから良いよね。

「ブラックって初めてじゃないよね」

ぼつと口にした台詞にブラックが虚を突かれた風なのが分かる。

「今更それを聞くんですか？」

「……ん、なんとなく……私はブラックしか知らない」

別に他を知りたいわけじゃない。なんとなく零れた愚痴みたいなものだ。ブラックがそれを分からないわけもなく、苦笑したのが分かる。

「残念ですが、私の目の黒いうちは……」

ブラックは、くっ付いていた身体を引き離して覆い被さると瞳を細めて私を真っ直ぐに見つめる。そして、私以外の前で貴方のすべてを晒すことは許しません。と口にして、強い口調とは裏腹に、そのままふわりと降ってきて、私をぎゅっと抱き締める。

「……ねえ……マシロ……」

「う、うん」

「提案があるんです。とても素敵な」

キラキラとしたブラックの台詞に釣られてか、腕の力はどんどん強くなってくる。

ブラックはキラキラ。

私は死線を彷徨いそうだ。

「く、苦し……っ」

予想以上に強い抱擁に私が息を詰めると「あ、あれ？」と驚いたような声がして僅かに腕の力が緩む。そして、キラキラ猫は話を続けた。

「マシロ、結婚しましょう」

「え」

「私の聞いたところによると、裏切っても良いときというのがあらしくて」

……なんか、またブラックが突拍子もないことをいい出しそうな気がして、私は身構えた。

きつと私の疑問に答えることもなく、自分のいいたいことをいい終わるまで、私の話なんか聞きもしないだろう、ブラックに私は諦めも込めて、続きを促すように見つめた。

ブラックは少し落ち着きをなくしたように、慌てて話を始める。

「ええと、確か一つ目は、生まれるときの素養。二つ目は、友人と愛する人が同じになったとき、まあ、私に友人は居ないのでこれはなしとして、三つ目は、共に死のうという約束。らしいのです」

「なるほどー……ブラックはその三番目を最初から裏切るつもりだ

「たわけだ」

分かってたけどね。

分かってたけど、ちよっぴり意地悪くそう口にすると、ブラックの耳がへによんとさがり、ぴたんぴたんとお布団の中で私の太ももを打っていた尻尾が止まる。

ああ、もう、堪らない。可愛すぎる。

それにその入れ知恵はきつと今は亡きジルライン上王陛下だろう。あの人は、ブラックにろくなことを教えていない。

「私が居なくなっても、生きて欲しかったんです。もしかしたら、子どもも残すかもしれないじゃないですか、そうならきつとマシロは……だから、形で縛るのは駄目だと、思ったんです。でも、嫌です。やっぱり嫌」

嫌々と子どものように繰り返し、そして擦り寄ってくるブラックはやっぱり可愛い。

「これは私の我侷です。全部ください。貴方を全部。心も身体も命も……微塵も余すところなく私にください」

ぎゅうぎゅうと圧死させられるんじゃないかというほど、抱き締めてくるブラックがとても愛しい……そんなこと、わざわざ口にしなくても

……もう、とっくにブラックのものだよ……

まあ、確かにしないって決めたのもブラックなのに、次はしたい

といいだすのは、我侂といえは我侂だし、勝手だと思わないこともないけれど、そんなことを物凄く長い時間悩んでいたのだろうと思うと、なんだって、許せてしまう。

「ねえ、マシロ、お願い。断らないでください」

はい、といっってください。と縋るように腕に力を込めたブラックに答えるように私も回した腕に力を込め、顔を埋めた肩口に唇を寄せた。

「もちろん、はい。だよ」

「……………」

「あげるよ、全部」

私の簡単な返事に、ブラックはこの世の春を体現するように、ぱあつと明るくなる。

もし、私に子どもでも出来たら、酷い親決定だ。

でも、私はもう、この人が居ないと生きられない。愛してるからというだけでは、免罪符にもならないだろうけど……………きつと変えられない……………。

そこからあとは驚くほど早かった。

特に盛大に式をやることはもちろんなく、私たちらしく両手に納まる程度の知人だけを招待して、マリル教会を借りた。どこから話を聞きつけたのか、ヴァジルさんは大聖堂でと騒いだけれど、私もマリル教会が妥当だと思う。

「ねえ、マシロ。本当の本当に、僕が立会人なんてやらないと駄目？」

「往生際が悪いわ、お兄様。私は出戻りだけど喜んでやるわ」

私は別に必要ないんじゃないかと思ったけど、ブラックが是非にというのだ。確実にエミルに対しての嫌がらせだと思うけど、でも私もエミルが立会人になってくれるとしたらとても嬉しい。

「出来れば、お願いしたいけど、無理はしないで。ただの私の我侭だから」

そう告げれば、エミルは物凄く唸ってから、長い長い溜息を吐く。

「分かったよ」

エミルがそういつてくれるだろうというのは分かってた。分かってて口にした私はやっぱり悪い子だとも思う。

「ねえ、マシロ。このまま僕のところにおいでよ。綺麗だよ、とて

も」

エミルはそういって、そつとグローブの上から口付ける。曖昧に微笑んだ私が答えるより先にメネルが「お兄様っ」とエミルを小突いた。エミルは「メネルには、僕の気持ちなんて分からないよ」と不貞腐れて叩かれた部分を擦る。そんなエミルをあつさり無視してメネルは私に向き直る。

「でも、本当に綺麗。本当に御伽噺の白い月の少女みたいね」

「ありがとう、でも、少女って年齢じゃないよ」

「それをいうなら、種屋さんだってそうでしょう?」

にこりと笑ってそう告げるメネルに私も、確かにと笑って頷いた。そうしている間に、控え室の扉を叩く音がして、アリシアが顔を覗かせる。

「こつち準備出来たけど、ああ、マシロ可愛いわ。やはり貴方には白が似合うわね」

アリシアは呼びに来た理由も忘れて、中へ入ってくるとまっすぐに私に歩み寄って、ぎゅっと抱き締めた。いつもの華やかな花の香りが私を包む。

「本当に心配していたのよ。あんなに愛している人が居るのに、ずっと一人で居るといふのだから……それも、貴方が選ぶなら否定はしないつもりで居ただけど、本当に、本当に心配してたの」

幸せそうで良かった、と溜息混じりに告げたアリシアに思わず泣きそうになった。それを察したのかアリシアは、もう一度だけ腕に力を込めたあと、すつと離れて「泣いちゃ駄目よ。お化粧が崩れち

やうわ」と笑った。

そして、そこでやっと気がついたのかエミルにも恭しく腰を折った。

まあ、図書館に居たところとあまり変わらないメンバーでいれば、それが王様という実感はないだろう。エミル自身そんな瑣末なことを鼻にかけるようなことはしない。

「それより、花嫁を呼びに来たんじゃなかったの？」

くすくすと笑ったエミルに、アリシアはそうよ！ と手を打った。

扉の前では、陽だまりの園の子どもたちが、扉を開くために待ち構えていた。にこにこ嬉しそうに迎えてくれる。

「一人でも平気だよ？」

「大丈夫ちゃんと送り届けるよ」

私はここに親は居ないし、身元引受人である人はブラックだから、一人で入るつもりだったけど、なんだかんだといいつつもエミルが介添え人も引き受けてくれた。

厳かにパイプオルガンが鳴り響き、扉が開けば私は緊張に息を呑む。

隣に居るエミルが「大丈夫だよ」と囁いて、そつと手を取ると自分の腕に掛けてくれた。私よりも深く長く深呼吸して、エミルは「行こう」と切り出した。

こつつと踏み出した一步に合わせて私も礼拝堂に足を踏み入れる。

私はここで初めて、本当のマリル教会の姿を見た気がした。

私たちが選んだ時間は夜。

二つ月が真上に来る時間帯だ。

聖堂の最奥を飾るステンドグラスの天井からは、ちょうど二つ月の場所だけが開いていて、本物が姿を映し、聖堂内に月明かりを注いでいる。

それ以外の明かりは全て取り払われ、ステンドグラスから降り注ぐ光は星が降るようだ。とても美しく幻想的で、元の世界であったなら、決して見ることに出来ないものだった。

中央を進みながら、ふと、つまらないから行かない、といっていたルカと目が合う。ルカは私と目が合うと、直ぐに逸らしてしまうが、頭頂部の耳が所在無さ気に、びるびる動いていた。

それがとても微笑ましく、やっぱり来てくれていたと思うと、ちよつと嬉しい。それに、ルカは何もいわないけど、きっとブラックの背を押したのはルカだと思う。

エミルの手を離れ、終始不機嫌そうなレニ司祭の前に立つ。私の隣にはもちろん、ブラックが居るけれど、ふと天井を仰いで「綺麗」と漏らしてしまった。

その声に釣られるように、レニ司祭も一度だけ天井を振り仰ぐ。背にした大きな十字架の両端にある宝石がきらりと光る。

「マシロのほつが綺麗ですよ？」

忘れないでというように掛かった声に私は苦笑して、隣を見上げた。

「……………ブラックは、月明かりが良く似合うね」

溶け込んでしまうのではないかと不安になるほど、本当に夜の闇が良く似合う。

月明かりにその姿は映える。

本当に、消えてしまいそうな恐怖が湧いてきて、思わず伸ばした手を、ブラックはそっと取ってくれた。ちゃんと繋いだ手は温かい。私の目の前に居るブラックは、本当にそこに実在する。夢や幻ではないと実感できて、私はとても嬉しくなった。

「マシロさんのために受けただけですから」

「ええ、問題ないですよ。見せ付けたかっただけなので」

司祭と新郎の、にこやかで寒々しい会話に私は溜息を落とす。

良いんだよ。

こんなもんだ。

緊張してしまったのが馬鹿みたい。

ちらと、パイプオルガンのほうを見れば、ユイナちゃんたちとほか数人が弾いていてくれた。弾き終わり椅子から、とんと降りたところで小さく手を振れば、無条件に駆け寄ってきて抱きつかれる。うわっと……と下がりそうになれば、ブラックが支えてくれる。

「ユイナ、駄目ですよ」

「えー、どうしてー、まだ、おめでとういつてないのにー」

レニさんの注意に、むーっと眉を寄せたユイナちゃんのお陰でちよっと場が和んだ。

「マシロさん、今なら止めても良いと思いますよ」

この期に及んで、なお付け加えたレニさんに苦笑して、私は首を振った。レニさんはその様子に大きな溜息を一つ。そして、仕切りなおしたように立ち居を正す。

「では、誓いを……」
「必要ありません」

……え？

「私は別に白い月も青い月も」

ちらと後ろも見て「太陽も」と付け加え続ける。眉をひそめたのはエミルだ。

「崇め奉っていませんから、あんなものに誓うのはごめんです。誓いならマシロ本人にのみ、立てます」

折角、宣誓をしようとしたレニさんの声を遮って、そういったブラックに私も戸惑う。そして、ブラックに同意を求められ、頭に山のように疑問符を浮かべながらも答える。

「え、あ、まあ、私はこの世界の人間じゃないから……月にどうのというのではないけれど……」
「では問題ないですね」

「だったら、私の必要はなかったのではないですか」
「だから、先程もいったじゃないですか、マシロは私のものだと、見せ付けたかったんです」

につこりとそう告げたブラックに、目の前のレニさん含め背後が固まった。

分かってたけど、分かってたけど、自らの拳式に水を差すとは思わなかった。私は真っ赤になってしまふ顔を隠すと同時に、がっく

りと肩を落とす。

「私こんなに殺気だった結婚式は始めてよ」

「マシロが可哀想だわ」

素直に同情してくれるメネルとアリシアの二人に泣きつきたい気持ちになる。

はあ、と溜息を重ねれば視界の隅で、キラリと何かが光った。

最早、聞きなれてしまったといっても過言ではない。アレが空を切る音に私は身体を縮める。まさか、こんなところでと、恐る恐る反射的に閉じた目を開けば、目の前にはブラックと大人しくしていたハクアの背があった。

ブラックは持ち出していた杖をくるりと回して、不要と判断したのだろう、すっと消した。

「ちょ、もう、司祭出てくるところ違うー。危ないじゃないですか」

そして、響くのは場にそぐわないアルファの妙に明るい声。
ちびっ子たちの「先生カツコイイ」が重なった。

事態の把握をしたくて、二人の間から前を覗けば、アルファが剣を引いたところだった。

「もう、僕じゃなかったら司祭二枚におろされてましたよー」
「貴方でなければこのようなところで抜刀する人は居ません」

アルファも苛々したのは肌で分かってたけど、何もここで抜刀しなくても、そして、みんな普通に落ち着きすぎだよ。

カナイとエミルなら止められたはずなのに……止めてはくれなか

った。ちらりと、カナイたちの方を睨み見れば、目を合わせてはく
れなかった。確実に、ワザとだ。

分かっていることだけれど、望まれない。認められない。という
のはとても悲しい。益々私の気分は下降していく。

レニさんは、アルファの剣をブラックの変わりに受け、少し切れ
目の入ってしまった経典を、パンパンと叩いて持ち直すと続ける。

「ここはマリル教会です。武器一切の持ち込みは禁止されています。
貴方が、エミリオ陛下の護衛についている関係上、帯刀を許してい
るということをお忘れなくください」

「……………」

「重ねます。ここはマリル教会です。美しいときを紡ぐ場です。聖
女の御前での愚行お控えください」

きっぱりとそう続けたレニさんは、聖域にあった白い木のように
悠然としていて、司教の風格を持っていたと思う。そんなことを考
えながら、ぼんやりしていた私にブラックがそつと囁く。

「もうここは心配要らなさそうですね？」

「え。あ……………」

ふわりとなんだか心の中が暖かくなった気がした。

私がここを気にしていたことも、気がついてくれてたんだと思う
とちょっと嬉しい。吹っ掛けかたは、正直、極端すぎると思うけど
……………。

「全く、度々中断される式ですね。ハクアも下がってください」

こつつと教壇に戻ったレニさんは壇上に経典を乗せ掛けて、ふと

やめた。

「要らないんでしたね。どうぞ、誓いたいことがあれば自由に」

人前式といってしまったので良いのかどうか、どこまでも形式のない流れだ。崩したのはこちらだけだね。そんな複雑な思いの湧いた私の手を、そっととって、ブラックは中央に戻る。

「怒ってます?」

向かい合って、そう訪ねてきたブラックに私は首を振る。

怒っても良いところだと思っし、退席したって許されそうなくらい、ぐだぐだだと思うけど、でも、それもやっぱりらしいのかもしれないし……何より……

「ブラックが嬉しそうだから良いよ」

今日一番、ここで浮き足立っているのはブラックだと思う。

私以上に浮かれているといっても過言じゃない。

私の台詞にブラックの頬が僅かに朱に染まったことは、きっと私にしか分からないだろう。ブラックは、私にとってそのくらい素直で可愛い。そして、私の両手を軽く取って一つ深呼吸。目が合うとにっこりと微笑んで誓いを宣言した。

「でも、良かったの？」

ひと騒動終えて、種屋に戻った私はグローブを取り、寢室の鏡台の前でベールを落とし髪を解きほぐした。本当は着替えて帰りたかったのに、ごたごたに乗じて攫われたようなものだ。ところでブラックに掴り抱き上げられる。

「何がですか？」

ふわりとそのままベッドの上に降ろされて、タイを解きながらブラックはキスをして問い直して来る。

「だって、名前……」

「ごによごによと続けた私にブラックは、そんなこと、と笑う。

……私、ルインシル＝ミアは……

と、ブラックが前置いたとき、みんなが息を呑むのが分かったし緊張が走っていた。

確かに私も信用をされていて、信頼をおいている人しかあの場には居なかったから、問題はないのかもしれない。でも、私みたいに迂闊ものが、うっかり口にしたわけじゃない。

ブラックは、いろんな意味でのリスクを分かった上で名を告げたのだ。

この世界での名前のリスク。きっと私が想像するよりずっと高い。高々一般市民の私ですら、呪われちゃうくらいだ。世界の重職を担うものとしては、やはり気をつけなければならぬことの一つであるはずだ。

下手をしなくても命に関わる。

ブラックは常に命がけで私と向き合ってくれ。その覚悟を持って、告げられる誓いに私は困惑しつつも、嬉しくもあった。

『マシロを愛し、妻とし、己の半身として種に還るそのときも、決して別つことなく共にあることを誓います』

私は見つめてくるブラックの瞳に映る自分を見ながら、同じように自然と口にしていった。

この人が、この先きつと私を殺してくれるのだらうという狂気染みた安堵。

普通では考えられない誓い。

でも、この世界は最初から私にとって有り得ないことばかりだった。

どくんっと心臓が強く脈打って私は全て囚われた。

「っちよ、ブラック、衣装が皺になっちゃう」

物思いに耽ってしまえば、そこから無理矢理引き上げるように口付けられ、身体を撫でられる。それだけでぞくぞくと戦慄が走り、肌は熱を増し晒されることを望んでいるようだ。

「気に入ったのなら、また作らせます。でも、婚礼衣装なんて、もう必要ないでしょう?」

くすりと笑いを含めてそう告げると、深く口付けられ思わず引ッ込めかけた舌を絡めとられる。

「……………んう……………う」

強く吸われ、上顎をなぞられるとそれだけでくらくらする。

「っあ、だ、め。……………もう」

怒っても何の効果も成さないことくらい自覚ある。

ブラックは、窮屈そうにベッドと背中間に腕を滑り込ませ、ドレスのファスナーを降ろす。さらりとしたシーツの感触が背中に触れると、くすぐったさと同時に、身体の奥がじりじりと焼けてくるような気がする。

口の端から熱い吐息が漏れるのを堪えて、なんとかブラックの胸を押しした。

「マシ口の隅々にまで誓いたいのに、どうして、駄目なんですか？」

やめる気なんて毛頭ないブラックは、肩甲骨下辺りからのビスチエのホックを器用に外しながら「女性は大変ですね」などと軽口まで叩く。コルセットほどの締め上げ感はないけれど、確かに普段よりは、かなり体型補正してもらっていると思わなくもない。

それにしても……………もう、その誓いの口付けが長すぎて、ごたごたになったのを忘れてしまったのだろうか。私は次にみんなに会うのが申し訳なくて仕方ない。

「みんなに合わせる顔がないよ」

私より舞い上がってる人がここに居た。呆れそうなほど、馬鹿馬鹿しいけど、私の眼鏡にはもう

……凄く、可愛い。

としか、映らない。可愛くて、愛しくて……そつと、腕を伸ばして髪の間指を滑り込ませ頭を撫でる。本当に心地良さ気に耳を垂れ、尻尾がふわりと内腿に触れる。皇かな短毛が素肌に触れるとくすぐったくて、私の頬まで緩んでしまう。

引き寄せて頬を撫でれば、幸せそうに瞳を細める姿にぞくぞくする。私、かなりの愛猫家になれる。……あ、あれ？ まあ、間違いでもない。本人は最近否定気味だけど……。

距離が詰まれば、ぎゅっと抱き留められ耳元でそつと囁く。

「もうマシロの全てが私のものです。貴方の覚悟を受け入れると、迷いを断ち切って手に入れたら、マシロが堪らなく愛しい」

耳朶を甘く食んだあと、つうと首筋から顎へ舌を這わせて上がってくる、唇を辿って誘い込まれるように口腔へと滑り込んでくる。深く味わうように口内を犯されると目の奥が熱く、じわりと涙が浮かんでくる。その行為にも応えたくて必死なのに、私はいつまでもブラツクに追いつけない。

それがなんだか、私の気持ちも追いついていないようで悔しい。私だって、好きなのに、どこまで上があって、どこまで好きになれば良いのか分からないくらい、好きなのに……息だけが上がり、目の前が白く霞む。

哀しくもないのに、つうつと目尻に涙が伝った。

ようやく唇を解放されると、名残のように引いた糸に羞恥心が攢

られる。

ぼやんつとしてしまった私の目尻を拭い、きつく、きつく抱き締められる。身体が壊れてしまうのではないかというほど、強く抱きしめられ苦しい息が口の端から漏れる。

「……き、です。好き……愛しています」

掠れた声で紡がれると、とても切羽詰って聞こえる。

追い詰めているつもりは全くない、それなのに、苦しげに聞こえる。

私もといたいののに、抱かれる腕の力が強すぎて声が出ない。

いつもなら、離れると身動きするのだけど、今夜はそんな気にはなれない。このままブラックの腕の中なら息が切れても良いとさえ思う。

私の命さえも彼の手の中だ。

それをとても幸せに感じる。

ぎゅうぎゅうと抱きついて擦り寄ってくる猫を、拒絶することなくされるままになっていると、ようやく気がついたのか慌てたように腕が解かれた。焦ったように私の頬を撫で、安否を確かめる。

ええ、死にそうでした。

でも、解放されるとほんの少し寂しくて肌寒い。

薄っすらと瞼を持ち上げると、目の前にあつた綺麗な造形の顔。

瞳に涙のベールが掛かっている気がする。泣いていたのか生理的なものなのか……多分、目元が微かに赤らんでいるから、生理的なものだと思う。でも、私はブラックしか知らないからそれが本当なの

かは分からない。

過去にまで物申すことは出来ない。

でも、私以外の誰かが、この腕の中に居たことがあるのではないかと考えるだけで、胸が焼ける。今、居もしない誰かに嫉妬するなんて馬鹿馬鹿しい。分かってはいる。けど、この世界でブラックに触れられるだけの人物なのだから、相当の麗人だろう。普通の私にいわせればブラックの容姿は劣等感を十分に煽る存在だ。傍に居て平気なのは、ブラックが壊れているからだ。

ブラックは壊れている。

それは私のせい。私がブラックを壊している。完全無敵な人に弱点を与えている。何も持たない……この世界ではどんな命だって持っているはずの『種』すら持たない私に。

それだけが、私に優越感を与えて、何の確証もないことへの嫉妬心を鎮めてくれる。

「マシロ？ すみません、平気ですか？ どこか痛めましたか？」

ブラックを見つめたまま、ぼんやりとしてしまった私に不安そうな声が降ってくる。私に何かあることが不安なんだ。私が何を考えて何を思っているのか、とても気にしてくれている。同じだけとても不安に感じてくれている。

私のために表情を曇らせる……凄く嬉しい……。

「ううん、平気。そんな簡単に壊れないよ。それに壊されても良いよ」

気にしないで、と腕を伸ばし髪の上に指を忍び込ませ、引き寄せると目元に口付けた。睫毛を食むとふるりと震え、唇から漏れるブ

ラックの吐息も熱い。

「可愛い……」

ブラックはそういわれるのは、面白くはないのだからけど、世界の脅威でもある彼をそんな風にいうのはこの世界で私だけだろうと思うと、私はそれを面映く感じるとともに愁眉を開く。

今、ブラックに触れられるのは私だけ。

私だけが彼に愛を囁き、口付けて、心も身体も奪つ。
そこに愉悦を感じないわけがない。

指の間をすり抜けていく細くさらさらの髪がくすぐったくて気持ち良い。

ああ、幸せ……ああ、もっと、欲しい。

「ブラック、欲しいよ……」

いつて引き寄せて口付ける。

僅かにしか触れない素肌がもどかしくて背を微かに反らすと、ぐいっと抱き寄せられる。どくんどくんと上がった心音が触れた部分から伝わりそうだ。

「可愛いのは……マシロですよ……本当に、素直で、可愛い……」

重なる唇の端から漏れる台詞に、益々鼓動が早くなる。

このままどうしようもなく熱く早くなって息が止まってしまっんじゃないかと錯覚する。綺麗な指先が私の身体の上を滑る。確実にわざと焦らしているようなブラックの指先に身体の芯が、きゅっきゅと締め付けられて、私は直ぐに音を上げる。

6 (後書き)

この続きは大丈夫な方だけ下記をどうぞ。

<http://www11.plala.or.jp/sshap/py/been/5.html>

はパスに置き換えてください。請求方法などはブログちよこつと広場内記事参照のうえメールください。サイトにはメールフォームなども用意してあります。気軽にどうぞ。

「そついえば、マシロが気にしていたようなので……」
「んう……何？」

ブラックの腕の中で微睡していた私が気だるげに答えれば、ブラックは少しだけ迷って、やっぱり話を続けた。

「私は、マシロしか抱きたいと思ったことはありませんし、抱いたこともありませんよ？」

なんでもないことのように零された台詞を、私はふーんと流しそうになったが我に返った。

「……え」

「ですから、私もマシロしか知りません。知りたくないです、気持ち悪い」

「え、え、え……でも」

ブラックの鎖骨辺りに擦り付けていた額を離して見上げれば、ブラックと視線が絡んでにこりと微笑まれた。私は一気にぽおっと頬が熱くなる。

「まあ、確かにそついうことも教えようとは、されますけどね……嫌悪の対象にしかならなくて追い出しました」

ぱくぱくと次の言葉が出ない私にブラックは楽しそうに笑う。

「歴代の種屋は色々とやってくれているので、情報には困らないんですよ?」

え、ええと、それはつまり。私の頭はあまり追いつかない。

「でも、それも情報としてはかなり偏っているので、どうすればマシロが壊れなくて済むのか、最初はとても加減が難しく、触れるのが怖かったです。皆さん壊れれば取り替えれば良いと思っっているでしょう? マシロも壊されても良いといいますが、私は嫌です。マシロに替えはきかない……」

そうでしょうか? と笑みを零して、きよどつている私の額に軽く口付ける。そして、相変わらず楽しそうに、ブラックは続けた。

「今はギリギリが分かるようになったのと、マシロが感じてくれるところが分かったので……っ」

私は両手を伸ばしてブラックの口を塞いだ。ちょっと遅すぎたくらいだ。

「そ、それ以上いうな。いわないで、恥ずかしい!」

ぎゅむつと押さえた手を、ブラックは片手で簡単に引き離して、茹蛸みたいですね。と、くすくすと笑う。良い茹で加減にしたのは誰だっ!

「可愛いですね。本当に、可愛いです。愛してます、大好きです。どんなに告げても足りないくらい好きです」

指を絡め取ってそう告げるとキスの雨を降らせる。

くすぐったいけど気持ち良い。

じゃれるようにこんな風にしてくるブラックのほうが余程可愛い。

可愛いブラックも、私だけ。

私だけしか知らなくて、私にしか触れない。勝手に居ない誰かに焦れていた自分が滑稽だ。そうだ、ブラックは変なところで潔癖だ。そのブラックが他人を傍においている図は想像出来ない。それまで何に対して快樂を求めていたか、考えると怖いような気がするので飲み込んだ。ブラックの趣味は種収集……え、園芸みたいなものだ。そのことは、褒められたものではないと思うけれど、そう思うのも私の感覚からだ。この世界では、容認されてしまっていることだ。特に種屋を縛るものはない。

誰にも縛られることも、制限されることもないのに、他人を許したのは私だけ。私だけが触れることを許された……。

嬉しい。

私も、かなり壊れてる。でも、嬉しい……。

「マシロ」

「ん？」

ふわふわと、常春気分になってしまっていた私を呼び戻したブラックの声に反射的に答える。

「もう、これ必要ないですよね」

問い掛けられているような雰囲気だけど、断定的だ。私が、きよとんとブラックを見上げると、こっちです。と、何かが頬を掠める。

「…………あ」

私の目の前で揺れるもの。見忘れるはずない。私がある種のお守りのように持ち歩いてきたものだ。

反射的に何もぶら下がっていなくて当たり前の胸元に、手が伸びて拳を作った。

「こんな危険なもの持ち歩いてはいけませんよ」

「どうして？ 私これ…………」

ブラックが来る日にはサイドボードの中にしまっておいたし、ここ数日はばたばたしてたからしまいっぱなしになっていたのに…………。

「一応、気にはしていたんですけどね…………私は毒の臭いに敏感なんですよ？ 無味無臭、無色なんて慣れれば幾らでも見分けることが出来るんです」

つい、さつきまで尻尾振っていたようなブラックの声に、急に影が落ちたような気がする。そして、当然かもしれないけれど、責められているような気になる。

「マシロがこんなもの何に使おうとしているかくらい、察しがつきます。だから余計に、覚悟が持てない私は何もいえなかった」

眉間に皺を寄せて、溢れそうな激情を押さえ込むように暫し双眸を伏せたブラックは、一つ深呼吸したあと、私を見つめたときにはいつもの彼に戻っていた。

「兎に角、もう私は迷いません。だから、マシロのこの覚悟は必要

ないです。マシロの命も私のものなんですから……」

「……って私の目の前から私の“覚悟”を消してしまった。そして気づかないうちに涙が溢れてしまっていた私の目元を拭って、ぎゅっと抱き締められる。

とくんとくんと規則正しい穏やかな鼓動がお互いの肌から伝わる。

「私の弱さが、マシロにあんなものを精製つくらせてしまった。マシロの覚悟から逃げていて、本当にすみませんでした」

告げて回した腕に力を尚込める。

「このところ、ブラックに圧死させられそうになること数え切れないな。でも、言葉だけでは伝えきれないものを、なんとか伝えてくれようとする気持ちが際限なく嬉しい。

それに、ブラックは私を甘やかさすぎだ……。

「ブラック……」

「……はい」

「私を殺してくれる？」

「……はい、必ず。貴方の全ては私のものです。もう二度と、髪の毛一本、爪一枚貴方の自由にはなりませんよ」

私は今、完全にある種の呪いを掛けられた。もう、とっくに掛かっていたけれど、そこに制限はなかった。私の自由があった。でも、もうその自由すら奪われた。

……ああ、凄く幸せ……。

シル・メシアに落ちなければ、ブラックが迎えに来てくれなければ

ば、私はこんなに満たされることはなかった。

「ブラック……」

「……はい」

「私を好きになってくれてありがとう……」

「……はい」

優しくそっと頷かれ、ふわりと唇が重ねられる。触れるだけの口付けは、じわりと互いの熱を分け合って、全身が暖かくなる。誓いも、呪いのように刻み込まれ私は捕らえる。

私はブラックのお陰で満たされたまま、いつか迎えるだろう最後のときさえも、幸せに感じる事が出来るだろう。

少なくとも、彼が傷付き消える瞬間を、種屋が業を引き継ぐその瞬間を見ることはない……。願わくば、次の種屋が美しいときの存在に気がついてくれますように……

「……ねえ、マシロ」

額から瞼・鼻・頬・唇とふわふわと降りてきた口付けは唇の上で名を紡ぐ。妖しい雰囲気を纏ったその声色に、私は警戒色を示す。

「もう一回」

……無理っ！ 無理ですからっ！ 私の体力底なしじゃないですからっ！

「う……う……」

心の猛烈な叫びを他所に、潤んだ瞳に見つめられ私は結局頷いていた。

白い月 青い月 二つ月

地上に 降りた 二つ月

白い月の少女は世界を愛し慈しむ

青い月の少年は力しか持たない、羨むことしか出来なかった

何の見返りも求めずに、人々に美しいときを分け与える白い月の少女に

美しいときを欲していただけの青い月の少年は 自らを戒め見守り続けるそんな少女にいつしか恋をした

叶うことのない 届くことのない 恋物語

たった一つの世界を見守る二つ月

世界がひとりひとりの美しいときで満たされることを夢に見る

二つで 一つの 二つ月

地上に 根付く 二つ月……

*** あとがき

種シリーズ第三弾：白蒼月種想譚〜二つ月の望む世界。
これにて完結です。

種シリーズ自体も納まる場所に納まったということ、本編完結となります。

ほら、このまま続けると、第二世代第三世代……って、話になるでしょう？ そして、ン百年後とかになって、シル・メシア人も種を有するものとそうでないものがでてくるかもしれない。

マシロちゃんたちの終わりはきつと、ともに白髪になるまでとはいえないとも、思うのです。

早々に消えることはないだろうけれど、長くもないと思う。

そのくらい儂い。

そして、陛下の指示で彼らのことは受け継がれ、世界に刻まれる。エミルをはじめ、マシロが出会った人々は、彼女たちのことを伝える語りべとして、残ることになるだろうし……。

二つ月の新たな童話として後世に伝えられる。

って、んなこと書いてると……続けたくなくなっちゃうじゃないですか
ーっ>><

とりあえずは、もう少し紅譚から改稿したいのです。少しいじくりたいのです。なので、一応、終わり。メルマガの方は、普通に続けさせてください。^^

その関係上、小話とか番外編とか、がんがんでてくると思うので、種シリーズと本当の意味で切れるのはまだまだ先。

なので、良かったらそちらの方でもお付き合いいただけると嬉しいです。

みんなそれぞれに重い暗い部分を抱えながらも、前を向いている。前を向き続けるために、きっとマシロちゃん（何も知らないままさらな存在）は必要不可欠だったのだと思います。

彼らのこれから、シル・メシアのこれからがほんの少しずつでも明るくなるだろうことを願って締めくくらせていただきたいと思います。

かなり長編となってしまった種シリーズ。

彼らとともにお付き合いくださった読者様。本当にありがとうございました。ございました。

まだまだ、書き手の一人として、やりたいことがありますので、もし、お時間等許すようならばお付き合いいただけると嬉しいです。

汐井サラサ拝。

*** あとがき(後書き)

……終わる終わる詐欺。

キャラ人気投票番外編。を後日アップする予定です。

時間軸の関係上、どこか後ろにつけるかまだ分かりませんが、多分、白銀狼譚のところにくつつけるんじゃないかなーと思います。

もし、お時間が許すようでしたら、お付き合いいただけると嬉しいです。

1 (前書き)

ルカ視点になります

朝から店番を任されている。

客は一人も居ない。相変わらず閑古鳥が鳴いている。その理由はいくつかあって、そのどれもそう簡単には改善されるようなものではない。

まず一つ目は、主が女だということだ。

薬師の免許を持っているのは、間違いないが、女がその階級を取ることが珍しい。そして、そんな身の上で店を構えているのなんて、この店長だけだ。

都の人間からの信用が薄い。それでも、僅かな噂を聞きつけて、常連となってしまうような稀有な連中も居るから、結婚したあとも店を畳むことはしない。

そして、二つ目は……

……カランカラン。

ドアに掛かったベルが鳴る。

「あれ？ ルカが店番？」

こいつだ。

頭からすっぽりと被っていたフードを降ろしながら、カウンターに歩み寄ってくる優男は、今現在の国王陛下だ。

「マシロ、戻らないの？」

「戻るんじゃないっすか？ おれ知らないです」

面白くない。

こいつが頻繁にこの店に出入りするものだから、その眷属も頻繁に出入りする。顔を隠す必要のあるような連中が、そんな頻繁に……って、妖しいだろう。どう考えても。

この店は、本当に薬剤店なのか？ と、思われているに違いない。明らかに客足に影響している。

王宮の馬車がこんなところに止まったりするのだって、普通に考えられないことだし……まあ、この人は一応、気を使って と、マシロならいっしょ 徒歩で来ただろうけど、結局、職務から、こそーりと逃げ出してきた口だと思う。

「そっか、残念」

「そのうち帰ると思いますよ」

目もあわせずに、カウンターに肘を突き顎を寄せたまま答える。

「じゃあ、上で待たせてもらおうかな？ 上、良い？」

「いいっすよ、どーぞ。どうせ、店長がそう伝えるっていつてましたからー……」

マシロもこんな連中追い返せば良いのに。誰でも彼でもウェルカムだ。

「そっ？ ありがとう」

国王陛下殿にこんな態度普通取らない。

おれが子どもだという点を除いても非礼過ぎるだろう。と、マシ

口が居たらいう。確実にお説教モードに入る。

それなのに、王陛下は穏やかに答えて、気分を害したようなことは微塵も見せない。大人の余裕？ だったら、癩に障る。

なかなか立ち去らない王陛下を無視していると、くすりと笑い声が聞こえた。むっとして顔を上げれば「ごめん」とお上品に口元を押さえて笑っていた。

「なんすか？」

「い、いや……お姉ちゃんっ子ってこんな感じかなーと思って。大好きなお姉ちゃんの男友達って面白くない？ 盗られちゃうみたい？」

「はあ?!」

がたんつと立ち上がったても、まだまだこの人には見下ろされる。

「ごめんごめん。だから、悪気はないんだよ。可愛いなあと思ってね」

「かわ……っ！」

かあつと顔が紅潮するのが自分でも分かる。闇猫には、いつでも平常心は大切だと冷やかすように口にされる。だから、保てるように努めているのに直ぐに崩れる。

「ルカは可愛いよ」

良い子良い子。と頭を撫でられる。

「触るなよっ！」

ぱんつと手を弾いても、ごめん、ごめんと、王陛下はにこにこを

崩さない。

苛々する。

誰も居ない今のうちに、消してしまおうと思ったならマシロの気配が近づいてきた。本当に悪運の強い奴だ。

……カランコロン

「あ、エミル。いらっしやい。今日はどうしたの？ ちゃんと仕事してきた？ あとから半べそかいたカナイが迎えに来て知らないよ？」

おれの察した通り戻ってきたマシロは、カウンターに歩み寄りながら口にする。

「え、あ、あー、もちろんっ。大丈夫だよ。カナイは泣かない」

程度、には……と、小さく添えられた台詞までは、マシロは拾えなかっただろう。それなら良いんだけど、と微笑んで、おれに店番中の確認を取る。

「閑古鳥しかこねーよ」

嫌味つたらしく口にしてもマシロはにこりと微笑み「そう？」と答えるだけだ。

「もう少しだけ、店番してて、エミルにお茶を出したら降りてくるから」

「いーよ、別に誰もこねーし」

「ルカ、何度もいうけど」

「薬屋は繁盛しないほうが良いんだろ？」

「分かってれば宜しい」

ぴんつと人の額を人差し指で弾いて「じゃ。どうぞ」と、いつもと全く変わらない調子で、王陛下を階上へと案内していった。去り際に「お姉ちゃん借りるね」とこそりと口にしたエミルに本気で殺意が湧いた。

あれでいて『賢王』と呼ばれているのだから有り得ない。

一般国民は、王陛下の実態を知らない。

世の安寧も一人の女のためにやっているだけであって、ほぼ確実に国民のためにかと思って居ないと思う。

いや、絶対思っていない。

マシロが交戦的な女だったら、国は乱れていた。確実に。

王宮、大聖堂、図書館。その間を縫うように存在する、蒼月教団にマリル教会。それらの争いを一切禁止し、抑止力を引き、それらを現実としたシル・メシア始まって以来の『平和』をもたらした王。大きな勢力の息の掛かった領土の力も均一化させ、安定させた。それに一枚も二枚もかってでたのは闇猫だ。

今の種屋は誰にも従わない。どこかの勢力にも属していない。だから、表立っては動かないが、均一化に必要な種のは殆どは、ほぼ無償に近い形で提供したのだと、教団のおっさんに聞いた。

それだって、全て“マシロ”のためだ。

……全く、あの女がなんだっていうんだ。ただの非力な人間だ。

開いた手のひらを、じっと見る。

あんなヤツこの片手で直ぐに殺せてしまふ。実際、そうしようとしたことがあった。あつたのに、そんなヤツを受け入れようという馬鹿はアレぐらいだと思う。

ぎゅっと開いた手を握り、自嘲的な笑いを零す。そして、首に掛かったチョーカーをこつんと弾く。こんなもの……。

もし、おれがもう一度マシロの首に手を掛けたとしても、マシロはおれの首を絞めないだろう。そんなことくらい、闇猫だって分かっているはずなのに……。

どうも、マシロの馬鹿は伝染するらしい。

きつと、おれにも伝染している。特に、あのときのことがあったから……

そう、あの日も、店番を頼まれていて誰も来ない店で暇を持て余していた。

「遅いな……」

壁に掛かっている、振り子時計をちらりと見て溜息。別に帰って

くるのが待ち遠しいわけじゃない。そういうわけじゃなくて……。

「くだらねえ」

自分自身にいい繕っていることに気がつき、馬鹿馬鹿しいとやめにした。でも、この日はとても嫌な予感がした。

それから、十分程我慢して、店のプレートをクリックに返す。どうせ客なんて来ない。問題ないだろう。それよりもあの馬鹿はどこをほっつき歩いているんだ。

気配を探っても、近くにはいないのかさっぱりだ。

普段から、闇猫には耳にたこが出来そうなほど、注意するようにいわれている。その上でこれでは、知れたら何をされるか分からない。闇猫の意地の悪さを思い出し、背筋が寒くなった。

……。

おれは意識を集中して、マシロが残している気配を辿る。気配を感じる程度しか出来ない奴なら、こんな雑多な場所で、たった一つの気配の軌跡なんて到底無理だろうけど、おれには問題ない。

それがなくても、今日の配達はたった二件だ。

行き先も分かっているし、時間帯から考えて、マシロが選びそうなルートも大体想像つく。

そう思いながら、恐らく数刻前にマシロが歩いただろう道を辿る。

「あれ？」

その途中で、ぷつりと気配が消えている。

マシロが気配を消すような芸当出来るはずがない。気配というのは意識に追随する。ということは、何かに巻き込まれて……意識を

手放してしまった。と、考えるのが妥当だ。
面倒なことになったなと思い、溜息。

とんつとんつと塀に飛び上がり、屋根の上まで出た。
もう少し高いところに行けば王都が見渡せる。

要の場所に監禁とか有り得ないだろうから、最初から場所も、あの程度絞ることも出来る。

「何してんの？ こんなところで、これ、何プレイ」

「プレイとかいっちゃ駄目だよ、ルカ」

そして、やっと絞りだして見つけたと思ったら、これはなんだ？
状態だった。

スラム街の一角にあるボロイ屋敷の一室で、マシロは悪漢風の男に捕まっている。数は、ざっと数えて六人。予想通り、面倒臭いことになっている感じだ。

それなのに、マシロの返答は緊張感が一切ない。
いや、だからといって、泣き叫んでいるマシロ……想像できないからパスだ。

「こんな所に獣族わのガキが何の用だ！」

マシロに一番近い場所に居た、リーダー格かと思われる男が声を張る。

馬鹿だ。

子ども相手にあんなに大声を出したら、虚勢を張っていることがバレバレだ。見たところ多少、武術素養が立っているが、おれの比じゃない。小物も良いところだ。

「別に、そこにぐるぐる巻きにされてるのを、引き取りに来ただけ」
指差して告げれば「人を指差すもんじゃないわ」と聞こえる。だから、緊張感持て。

「じゃあ、お前もお姉ちゃんと一緒に、仲良く捕まっとけよ。いつとくが、ここは魔術防壁がしてある。獣族のチビちゃんに、どんなことが出来るか知らないがここでは無効だ」

知ってるよ。おれがどうしてここに辿り着いたかも分からないのか。

馬鹿だ。

こいつ本当に馬鹿だ。

「先行投資ってヤツだよ」

重ねて気分の悪い笑いを溢すが、それは投資先を間違っている。

「あんたさ、こんなところで魔術防壁とか掛けてたら、ここに隠れてますーっていつてるようなもんだぜ？ 頭悪いだろう？ 建物にこんなもん施すくらいなら、ばれないように個別に防壁は張るもんだ」

「っ！ ガキがっ！」

絵に描いたような悪役。
有り得ない。

こいつらが悪なら、正義はおれになるのか？
それこそ有り得ない。

寒くなる。
勘弁してくれ。

そんなとき、マシロがこそこそと何かしているのが、視界に入った。手足は縛られている芋虫状態で、頑張って肩口に顎を寄せている。何やってるんだ？　そして、気がついた。

「……い、」

「あ？」

「おい、あんたら、そいつ殴ったのか？」

「は？」

「そいつに、怪我させたのかって聞いているんだよ！」

身体の奥から、かつ！　と熱が湧いてきた。自分でもわけの分からない感情が、力を暴走させる。

ぱんつと屋敷全体の窓が割れた音がした。

おれの前で、町で手に入るような魔法具による防壁が役に立つわけではない。

ずっと、屋敷が歪み、それに恐れを感じた馬鹿な男が、マシロを引っ張り上げ、抱え込んだ。

同時に、周りに居たやつらが、襲い掛かってくる。

馬鹿だ。

馬鹿だこいつら。

クズ。害虫以下だ。

熱くなった身体が、すうっと冷える。そして、心が薄っぺらになりこんな奴ら死ねば良いと思った。

「駄目っ！ ルカっ！ やめなさいっ！」

無造作に振り下ろされる、剣戟を避けて手の届く範囲に入り込んだ男を、一人、二人と弾き飛ばした。男たちは悲鳴を上げる隙もない。

そんなもの、必要ない。

……死ねば良い……

「やめなさいっ！ やめるのよっ！ ルカっ！！！」

マシロの悲鳴のような声に、顔を上げる。突然暴れたマシロを押しさえ切れなかったのか、男は持っていた短剣の柄でマシロの頭を殴って床に弾いた。

どさつと床に転がったマシロは動かない。じわりと、血が流れる。マシロが死ぬ。

頭から冷水をかけられたような気がした。

死ぬのはこいつらだっ！

……ガッ!!

かっとなつて次の瞬間には男の顔面を殴りつけていた。
一発目でちよつと鈍い音がした。

簡単に倒れた男の上に馬乗りになつて、がんがんで殴りつける。何度目かには、顔の造形が良く分からなくなった。

「やめなさいっ!!」

どんっ! と、脇から襲つてきた衝撃に苛立たしく顔を向ける。

「やめなさい、って、いつてるの! 聞こえないの? ルカ……ルカ!」

はらはらと、マシロが泣いていた……。

口の端に血が滲むほど、殴られていたのに。

前髪の間からちらりと見える額は赤黒くなっているのに。

それでも、泣いたり叫んだりすることなく余裕を見せていたマシロが泣いている。急に頭の中がクリアになった。

「な、何、泣いてるんだよ。もう、誰も手は出さねーよ。こいつら、もう動けないし」

「そうだよ、動けないよ。だから、それ以上の必要はない。それ以上やったら死んじゃう。あとは、もう、王都警備の人たちに任せれば良い。ルカは私のロープを解くと良いの。もう、殴らなくて良い」

こんな奴ら、死んじまえば良いのに。
生きる価値なんてない。

こいつら、白月に手を出したんだ。
生きている価値なんてない。

ここに居たのがおれじゃなくて、闇猫なら確実に瞬殺している。
おれは、まだ、どこかに迷いがあって……だから……。

きゅっと唇を噛み締めたおれに、マシロは、ほらほらと手首を押し付けてくる。さっきまで、目の前で、ぼっこぼこに男を殴りつけていたやつを恐がりもしないで遠慮のないヤツ。

呆れるのと同時に、どこかほっとしていた自分を知りたくはなかった。

「まったく、あんたのことだから、口が災いして殴られたんだろ」

「ひ、酷いなそんなわけないじゃん」

目が泳いだ。そうなんだな。

「大人しくしとけよ……大体、こんな状況にまで順応するな」

おれが、はらりと腕を解くと、自分で足のロープに手を掛けたが、硬いらしい。こっちも！ と足を投げ出してきた。

もうちょっと可愛らしく“お願い”しろと思ったが、その様子を想像したら耐えられなかった。

気持ち悪い。

やっと自由になった手首の動きを確認するように、軽く回してい

る。薄暗い中でも分かる程度に、手足ともにしっかりと縄の跡がついてしまっていた。

きつと、マシロが特別な何かを持っているかもしれないと、どこか恐怖を感じていたんだろう。町民は馬鹿ばかりだ。無力な奴らはおれらのようなのをしらな過ぎる。こいつらが思うほど、おれたちはこいつらに興味ない。

「だって。別に何も心配してなかったから。ルカ、結構心配性だもんね。来るだろうなって思ってたよ？」

にこりと、笑う。

笑うと目尻に溜まっていた涙が、はらりと頬を伝った。

ぎゅつと胸が苦しくなった。

何かの呪いを掛けられたときのように、毒を盛られたときのように……とても、苦しくなった。

おれのための、涙だ……。

何も考えずに、おれはマシロの頬を拭った。

「小さな手」

くすりと笑ったマシロに眉を寄せる。ほつとけ。そのうち直ぐに大きくなる。今だって、マシロには、いっほど負けてないはずだ。

「傷……痛そうだ」

あのと看思わす、傷口を舐めた。
血液、特有の苦い味がした。

戸惑いがちに「え？」と零れた唇に、ぞくりと背筋が震えた。
迂闊にも、触れてみたいと思つてしまった。でも、その瞬間、闇
猫を思い出した。

闇猫も、こいつも、お互いにしか分からないものを持つている。
そこに、おれは踏み込めない。

闇猫なんて、死ねば良いのに。
そうしたら、そしたら……

「何を百面そうしているんですか？」

がつつ！ と、頭をつかまれてカウンターに押し付けられた。全
然気がつかなかった……。目の前に立ち、頭に触れられるまで一切
分からなかった。

「あんたが死ねば良いと思つてたんだよ！」

情けなくカウンターと仲良くしつつ、腕の間から睨み上げる。
その先に居るのはもちろん、闇猫だ。闇猫は、ふーん……と交戦
的な笑みを浮かべて「それはそれは」と嘲笑する。

「頑張ってくださいねー。精々、自分が返り討ちにあつて消えない
ように」

苦い思いで睨みあげていると、階段のほうから怒声が響いた。

「ちょっと！ ブラックっ！ 何で、ルカ苛めてるの！」
「苛めていませんよ。可愛がっていたんです」

いって、ぐりぐりぐりぐりおれの顔をカウンターに擦り付ける。
く、くそお、な、なんて馬鹿力なんだよ。う、ごげ、ないっ！

「それを、やめろっていつてるの！」

バキッ！ とマシロのぐうは上手いこと闇猫の腹に入った。闇猫はワザとらしく、うっとおれから手を離れたけれど、その手を直ぐにマシロに掛けて引き寄せる。

そして、まだ怒ったままのマシロの額と頬に口付けた。

いつものことなのに、胸の奥がぎゅっとする。見ていられなくて、顔を逸らした。

「エミルが来ているのではないですか？」

「うん、来てるけど、お昼寝中」

「城ですれば良いのに」

不本意にも闇猫とかぶった。

「城じゃ何かと気が休まらないんじゃない？ 良いじゃない、近くにあるんだから」

店番ご苦労様とおれに笑いかけて、闇猫とは正反対の力加減でふわふわと撫でていく。ぶすつとカウンターに顎を寄せたままだったおれが、店番でも飽きたと思ったのだろう。

「いーよ、おれ店番してる」

まったく、その可愛いものを見る目でおれを見んな！ ふんつと顔を逸らしたおれに「そう？」と答えて、じゃあ、夕飯の買い物にでも……と、再び外へ出る。

その後姿を見送って、ちらりと闇猫を見た。カウンターに体重を預けて、出て行ったマシロを見送っている。暇なら、大抵ついで行ってしまうのに、珍しい。

「永遠に貴方は可愛い弟ですよ？ 誰かと同じように、ね？」

「弟じゃねーよ。それに、何、警戒してんの？ おれがあんなちんくしゃに興味もつと思ってるの？ 馬鹿じゃねー」

「思ってますよ。思っています。貴方が、わざわざマシロを“店長”なんて呼び始めたときから……そして、私に敵意ではなく、殺意を向けるようになってきたときから」

ゆるゆるとそう告げて、ちらりとおれを見下ろし口角を引き上げる。

本当に、嫌な奴だ。

むすつとして、それ以上の話をするでもなく、顔を逸らしたおれを闇猫は音もなく笑い、ふらりと二階へとあがっていく。なんだ、王陛下に用事だったのか……。

結局、マシロは知らないだろうけど、あいつらは王宮に着くまでにさっさと始末された。

白月を傷つけたことを、太陽も青月も許しはしない。

絶対に。

まあ、あいつらがどっちに用事があったのか知らないけど、闇猫にわざわざ喧嘩売るようなヤツ居ないだろうから、王宮のほうだろうなあ……。

そんなことを考えつつ、カウンターに頬を寄せる。冷たくてちょっと気持ちが良い。ゆるりと細めた瞳をそっと閉じ、ふうと嘆息する。

おれは、絶対にあのとき湧いてきた感情に名前なんて付けない。知らないままが良い、きつと、絶対に。

おれは選択肢を誤ったかもしれない。
そう思わなかった日はない。

現在進行形で思っている。種屋は、白月の姫に骨抜きになっ
てい。なっているのに、やっぱり、最強だから始末が悪い。

「いったい！ 痛いつ！ つか、重っ！」
「至らなさ過ぎです。全く、私は貴方の遊び相手をしにきているわ
けではないのですよ？」

ああ。面倒臭い。と、人の背中に足を乗つけたまま嘆息する。物
凄く不愉快だ。なんで、こんな飄々としたヤツが闇猫なんて呼ばれ
るんだ。苦々しい思いに歯噛みする。

……「じすっ

「ちょっと、ブラック。邪魔。扉が開かないでしょう？ そんなと
ころで何やってるの？」

「痛い！ 痛いですマシロっ！ 今、私の後頭部に扉がクリーンヒ
ットしました」

どう考えたってワザとだろ？ おれにだって階下からマシロが上
がってくるのは分かった。

「ああ、そう？ 扉ちょっと支えてて、私、荷物があって……」

ワザとらしく後頭部を押さえて闇猫は振り返ったのに、マシロはあっさり切り捨てる。それを微塵も気にすることなく、おれの上から脚を退けると、戻ってきたマシロを迎えた。

おれはマシロが室内に足を踏み入れる前に、猫の姿を取る。

入ってきたマシロが腕に抱えていた荷物を甲斐甲斐しく「持ちますよ」と闇猫は取り上げて、マシロは手が空くとおれを抱き上げた。

「ルカ。また喧嘩？ ……なんかやつれてない？ もしかして、ねずみでも追いかけてた？」

だから、おれは猫じゃないっ！ なんでネズミなんて追うんだよ。こいつは馬鹿なのか、ことあることにおれをそこいらの猫と同じ扱いをする。

「にゃーとしかいえないうちはただの猫ですよ」

人の心を見透かしたようにそう告げた闇猫に、苦い思いが浮かんでくる。

なんでだ！ いや、実際化けるといふ観点からして、喋るところまで発展させるのは間違っている。おれは間違っていない。

悔しいので、すりすりマシロに擦り寄ってみた。

それにあわせて、ふわふわと頭を撫でられると気持ち良い。その上、闇猫が心底嫌そうな顔をするから良い気味だ。

「今夜はもしかして、パスタですか？」

「うん、そう。ベーコンとほうれん草ときのこのクリームパスタ」

「クリームパスタ？ きのこの、ですか？」

あれ？ 今なんか闇猫の片方の肩が引きつったような気がする。
パスタ料理は、マシロが唯一食べられる味に仕上げることが出来る
ということ、こいつが当番の時は頻繁に食卓に上がるメニュー
だ。

「うん、きのこもね、市場でオジさんに勧められちゃって。確かに
綺麗だったから、買ったよ」

「干したものではありませんね？」

「そうだよ。直ぐ、準備するから、ブラックはルカと遊んでて」

はいつ、と抱いていたおれを、闇猫に突き出してしまふ。暴れた
けれど、落としては大変っ！ という考えからか、離してはもらえ
ない。

爪を立てて逃げ出そうと考えたら、その瞬間後頭部に冷視線が刺
さった。

ゆっくり振り仰げば、悟られてる。

睨まれてるっ！

がつっ！ とおれの頭頂部を掴まえて、あっさりぱいっつと捨てら
れた。

「ちょっと！ ブラック、なんてことっ！」

「私はマシロに会いに来たんですよ。あんなのと遊びません。マシ
ロと遊びたいです」

「子どもみたいなこといわないで、ほら、実は仲良しさんの知っ
てるんだからね。ほらほら」

くるりと、闇猫を反転させてその背をこちらに向けて押す。

着地すると同時に人型に戻っていたおれと闇猫は同時に、かなり不本意だという顔をしたが、多分、そういうのに気がつかない設定にでもなっているんだろう。マシロにはスルーされる。

「夕食の準備手伝います」

「良いよ。だって、ブラックこの間もそういって、殆どやっちゃったじゃない。私の順番なんだから私が作る」

機嫌良くそういって台所へ消えていく。

「素直に食べられるものが食いたいっていえば良いじゃん」

「今夜は、別に食べるのに支障が出るようなものではないと思えますよ」

待て、その口調だと、食べるのに支障があるものが出たことがあるといつてるっ！

あいつ、何作っただよ。

おれが苦々しく、台所のほうを睨んでいる間に、闇猫は「マシロが相手にしてくれないと詰まらない」などと溢しながら、書斎へと消えていった。

おれに着いて来ても来なくても良い、という意味で少しだけ扉が開いている。こういうおれが居るということを、許容しているところが気に入らない。

余裕があるのが気に入らない。

そつと扉に寄り、書斎を覗けばカウチソファに腰掛けて、本を読んでいる。

おれは、よしっと気配を完全に消して、闇猫までの短い距離を詰めるために、その場からふっと姿を消し、闇猫の背後に足を降ろし

……

……ガッ!

「いってえっ!」

すつと闇猫が立ち上がると同時に、横つ面を殴られた。その反動で、カウチソファの肘掛け部分に額をぶつけた。痛い。

「つまだ何もしてないだろっ!」

「するつもりだったのでしょうか? それに、もっと分からないようにやりなさい」

「分からないようにやっただろっ!」

怒鳴ったおれに闇猫はやれやれと肩を竦める。

「ええ、完璧に気配を消してましたよね? 上手ですよ、偉い偉い」

完全に馬鹿にされている。

「完璧すぎるんですよ。完璧すぎるんです。気配というのはあつて当たり前のもんです。そういうのは、起点には残しておいたほうが良い。そこに居ると思わせるためにもね。それまで消してしまつては、より深く探られますよ。どこに出てくるのかと……」

ぱすつと持っていた本を閉じて、闇猫はそういうとおれに本を押し付けて「お勉強はお仕舞い」と、微笑んだ。

「馬鹿にすんなよ」

「していませんよ。それに、それが嫌なら、もっと経験を積みなさ

い……カナイヤアルファに遊んでもらえば良いでしょう。個々の能力・経験ともに貴方より上です」

不思議な香りがしてきたので、やはり様子を見てきます……と、踵を返した闇猫を見送る。

おれは手の中に残された本の表紙に目を落とす。

……最近、マシロが珍しく買って帰った恋愛小説だ……マシロは感動したとその内容を切々とおれに語っていたような気がする。興味なくてあまり聞いてない。寒い内容なのは確かだ。闇猫、なんでこんなもの読んでるんだ……。

あいつの思考ってやっぱりよく分からない。

「……なんか、ルカ。更にぼろくなってない？」
「うるせーよ。このちんく、うおっ！」

着いた食卓で、マシロに抗議しようとしたら、手の甲にフォークが刺さりかけた。テーブルが犠牲になっている。

「なにすんだよ！　闇猫っ！」
「ルカっ！」

今度はマシロにぴしゃりと名前を呼ばれ、恐る恐る見れば睨まれている。

「私は別に構いませんよ？」
「私は構うの！　ルカいい直して」
「べ、別に呼び方なんていいだろ。……別に、さ……」

景気良くテーブルに突き刺さったフォークを引っこ抜いたおれは、ちらりとマシロを見る。闇猫は、何事もなかったように食事を続けているが、マシロの手は止まっている。おれがいい直さないと再開しないだろう。仕方がないから、大仰に嘆息して、苦々しく口を開く。

「……………ブラック、さん」

「なんですか？」

「察しろっ！ 用事なんてあるわけないだろっ！」

「用もないのに呼ばないでくださいよ」

苛々する。

おれはやっぱり闇猫が大嫌いだ。

勢いでかしゃんつと食器を鳴らしてしまったおれに「行儀が悪いですよ？ ルカ」と微笑む。ほんつとーに、おれの神経を逆なでするために存在しているようなヤツだ。

マシロはいつもそんなおれたちを見て、くすくすと楽しそうに笑う。

「やっぱり仲良いよね。良いなあ、男の子同士は」

「お前の目は節穴かよっ！ 仲良くないし、ブラックさんについては“子”でもないだろっ！」

「貴方は“子”ですよね」

「……………」

ああいえば、こついう……………おれは続く言葉を失くして、苛立たしげに目の前の（多分）パスタを頬張った。

絶対おれは選択を間違えたと、そう、強く思う……………

4 (後書き)

お久しぶりです。

「ご愛読ありがとうございました。」

マシロちゃん愉快事件……もとい、誘拐事件はマシロちゃん視点からもお楽しみください^^

最後の配達　　といつても二件だけど　　を終えて、今日のお昼はなんにしようかなー？　　とか、かなり平和なことを考えつつ、私は家路を急いでいた。

もう、住み慣れた王都だ。

細い道の到着先だって大抵把握出来ている。私は店までの近道を選択し、昼間でも薄暗い路地を急いだ。

「すみませーん」

「はい？」

呼び止められて振り返る。

見たことない人だけど、こちら辺の人かな。それとも、迷子。

首を傾げつつも、無視をするつもりもない。

「この先の薬剤店の女店主ってあんた？」

「え？　ああ、はい。そうですよ。店までもう直ぐですから、お客様なら一緒に戻りましょうか？」

にこりと板についた営業スマイル。

目の前の人が高健康そうには見えなかったけれど、見ただけでは分からないし、それに家の人が高病気なのかもしれない。お遣いというヤツだ。

「俺がお客じゃなくて、あんたがゲストになるんだけどな？」

「はい？」

意味が分からない。

意味が分からなくて、首を傾げたと同時に、背後から口元を布で覆われた。この臭いはクロロホルムとかそういった類と同じような効果のある薬液だ。ということは吸っちゃいけないと思ったけど、とき既に遅し。

くらりと、目の前が揺らぎ、私は閉じよつとする瞼に逆らえず、ずるりと地面に膝をついた。

「……は、ちゃんと張つとけよ？ 面倒なのが来たら拙いかな」

ぼんやりと意識が戻ってくると、私は床の上に転がされていた。身体を起こそうとしたら、身動きが取れなかった。手首と足首を縛られてる。しかも、最低……かなりキツイ。女の子相手にここまでする必要ないと思う。

「お、お姫様のお目覚めですか？」

「……えーつと、誘拐？」

「ん、まあ、そんなと」

リアルに頭がついていかなから、あっけらかんと口にしてしまった。問い掛けた相手もあっけらかんと答える。

「あの、凄く、申し訳ないんだけど……うちの店あんまり流行ってないから、お金はないんだけど」

経営に困らない程度しか私にお金はない。

ブラックが何でも用意してしまうから、ありがたいことに、実質あまり現金というものが足りないのだ。

「いや。あなたになくても、王宮にはたんまりあるだろ？ アノール神ならいくらでも出すさ」

アノール神、か…… エミルのことを面白く思わない人たちが、裏で揶揄して使う呼称だ。人を簡単に神格化させて軽視して呼ぶなんて、気分の悪いことこの上ない。

この人たちがどんな境遇の元にいるのか知らないけれど、器が知れるというものだ。まあ、誘拐なんて考える時点で器なんて壊れる。

「どうして、王宮が私のためなんか大枚叩くのよ。馬鹿じゃないの」

パンッ

いった……。目の前に、光が散った気がした。

「馬鹿じゃねーよ。あなたにはそれだけの価値があるんだろう？」

やることが汚いだけじゃなくて、礼儀もなっていない。ちょっと反発した程度で手を挙げるなんて、気が短い。常に苛々している。こういう人は薬湯などを長期間服用してゆっくり改善していったほうが良い。

それに、いわれて怒るということは、ある程度自覚症状があるということだ。

「ないよ。あるわけない」

口ではそういつつも、あるだろうなあ……エミルだったらいくらでも出しそうだ。いやそれよりも……

「正直、貴方たちの身の安全の方が心配だけど」

「は？」

「いや、うん……」

本当に、心配です。

死ななきゃ良いけど……ブラック辺りが一番に見つけてくれたら、きつと瞬殺だろうな。

私が止める暇ない気がする。

王宮になんて連絡したら……カナイとアルファが喜んで駆けつけそうだな。

私なんて盾にもならないだろうこと、この人たち、知らないだろうな。そのくらい、この人たちと彼らの格、というか実力が違う。

ルカあたりが見つけてくれれば、もう少しマシな気がするけど。

はあ、と溜息を吐いただけで、またも馬鹿にされたと思ったのか、私はもう一度打たれた。

本当に、苛々しすぎだ。

口の中が切れて、じわりと血、特有の味が口内に広がる。嫌な感じだ。じんじんと頬も痛む。ただでさえ、ビジュアルには悲観的になりたいのに、さらに酷くなったらどう責任を取ってくれるんだっ。はあ……と、溜息を落としたのを、何か勘違いしたのか男は癪に

障る笑い方をして続ける。

「泣いてても構わないぜ？」

「ぶたないでー、殺さないでー、助けてー、つてな？」

周りに居た連中までやんやと囃し立てる。あほ臭い。どこのチンピラだろう？ 同情の余地がないような気がしてきた。

「あんたところに、アノール神が出入りしてるのは知ってんだけどさ、あんたの何が良いんだろうなあ？」

ぐいっと私の顎を持ち上げてマジマジと見つめてくる。好奇心だけでじろじろと見られて物凄く不快だ。友人宅を訪ねるのに、そんなに大層な理由なんて必要ないと思う。

「床上手なんじゃないんですかー？」

「そりゃ良いや」

馬鹿な連中には馬鹿しか集まらない。

「ふーん……まあ、王宮が応えなかったら、相手してもらおうか」

自惚れでもなんでもないけど、間違いなく話があがったら、動くと思うよ。

万が一動かなくても、あんまり遅かったらルカが迎えに来てくれると思うし。この人たちがどこまで知っているか知らないけど、本当に自惚れでもなく、私を探してくれる人は多い。そして、それはこの人たちの身の危険に他ならない……んだけど、なあ……。

鼻先を寄せられて、気分が悪い。

警告してあげようかという気も失せる。

それにしても、お金、かぁ……。

全体的に、王都に住まう民衆の格差は少しずつ埋まっているはずなのだけど、そういうのが目に見える形で伝わるには時間がかかる。

特に自分たちの境遇を憂いで、目の前に暗闇が落ちてしまっている人たち、国全体が潤うことの意味が分からない人たちには尚のことだ。

如何に現在エミルが『賢王』などと呼ばれていたとしても、そんな人たちも含め、全ての国民に理解してもらおうのはとても難しい。

ふてぶてしい態度を改めない私を、ぺいっと放ったところで周りがざわついた。

彼らが向けた視線と同じほうを見れば、何の警戒もなく、ふらりと入ってきただけに見える獣族……。もちろん

「何してんの？　こんなところで、これ、何プレイ」

「プレイとかいっちゃ駄目だよ、ルカ」

早いのか遅いのか。微妙なところだけれど、ルカの登場に胸を撫で下ろす。ブラックじゃなくて良かった。カナイじゃなくて良かった。こういうとき、きつとアルファよりカナイが物騒だ。好機とばかりに大きな術式を発動しそうだ。

そんなことを考え胸を撫で下ろしている間に、ルカが悪漢たちを炊き付ける。

適当に助けられれば良いのに……。って、話の流れから魔術が使えないのか……。ちよっときついのかな？　私はルカの実力をあまり知らない。

見ることもないから。

でも、ブラックが自分の代わりにと私の傍につけているんだから、弱いわけではない。そして、未熟であることも知ってる。

はたと、気がついて私は口元を拭った。

痛かったけれど、この際この人たちの身の安全の方が大切だろう。ぐりぐりと肩口に頬を寄せると、ずきりと痛む。声を殺したけれどルカには気がつかれてしまった。

好戦的に揺れていた尻尾がぴんつと逆立つ。
怒ってる。

屋敷の窓ガラスが、割れキラキラと細かい破片が降ってくる。
ルカの放出した力に恐怖した男は、私の胸倉を掴み上げて抱え込んだ。この人、とても怯えている。手にしている短剣が小刻みに震えている。

やはり、こんな暴挙に出るまでには理由があったのだろう。

視線の先にいるルカは、掛かってくる男たちを、容赦なく弾き飛ばしてしまう。年季の入った屋敷だからか、それとも魔力的な何か……屋敷全体が微動しているように感じる。

ルカが、暴走してる。止めなくちゃ。

それにはこの腕が邪魔だと思って、がぶりと噛み付いた。

「いつてえ!!」

男の低い悲鳴が聞こえたあとは、がつつ！ と、頭に鈍い痛みが走り目の前が一瞬真っ暗になった。

そんなに長い時間気を失っていたわけじゃないと思う。

私は鈍い音が響くのに頭を上げた。

こめかみが、ずきりと痛む。

もじつと身体をねじって身体を持ち上げると、ルカが男に馬乗りになって執拗に殴りつけている。もう、相手はびっくりとも動かない。死んでしまっているのではないかと思い、一気に全身が冷えた。

私は反射的に起き上がり勢いをつけてルカにタックルする。

倒れたのはルカではなく私だったけど、それでもルカはその手を止めてくれた。

「やめなさい、って、いつてるの！ 聞こえないの？ ルカ……ルカ！」

ルカが私のせいで人を殺めてしまう。

そう思ったら涙が止まらなかった。それをなんとか首を振って払うと、落ち着いてきたルカが軽口を叩いて縄を解いてくれる。

手が自由になったところで、足首の縄を解こうと手を掛けたら、かなりキツイ。駄目だ。と、思っただけで早々にルカに突きつける。

ルカはぶつぶついいながらも、縄を解いてくれた。

やっと自由になって、へらへらと笑ったら、まだ残っていた涙が頬を伝ってしまった。

ルカがたどたどしく、拭ってくれるのがとてもくすぐったい。

「え」

そして、そのまま唇の傷口を舐められて私は少し固くなった。

無意識だったのだろう。

根はとても優しい子だから……。

はたと自分のしたことに気がついたのか、ルカは真っ赤になって私から離れる。

あー、とか、うー、とかいつてるルカを放置して、私は後ろで伸びている男の人にじり寄った。

「生きてるかな……？」

肩を軽く揺すってみる。

う……っと唸り声が返ってきた。生きては、いる。でも頬骨とか陥没してるだろうな……鼻の骨とかも多分折れてる。よっぽど良いお医者様に掛からないと、命に関わりそうだ。

「シゼにお願いできないかな……」

「は？ ほっとけよ、そこまで面倒見ることないだろ」

「駄目だよ、駄目。死んじゃう」

「死ねば良いんだよ」

「ルカっ！」

私がぴしゃりと声を上げたらルカは黙る。

そして、ルカはちらりとだけ、彼と私を見て「一応、連絡する……」と床に転がっていたガラス片を、七色の小鳥に変えて外へと放った。

そのあと、ひとところに伸びてしまった彼らを集める。私は出入り口に背中を預けて、それを眺めていた。まだ、頭はくらくらしているし、そうでなくても男の人を何人も担いで運ぶことなんて出来ない。

ルカは見た目に反して力持ちさんだった。

「……………くそっ……………」

苦々しく履き捨てた男にルカは冷えた視線を落とす。子どももの顔じゃない。

「理由は興味ないけど、あんたにはもう永遠に“美しいとき”は見えねーよ……………」

「そんなもの、あるわけない、あるわけ……………」

ルカと何事かぼそぼそ話していた男は、ちらりとこちらを見た。私は良く分からなくて首を傾げる。

「あの方が……、まさか聖女様は白銀狼の使いを残して月に帰ったと……」

「どうせ、得られないんだ。あいつがなんであろうと、そんなこと、どうでもいんじゃないの？」

バイバイ。と彼らに片手を振ったルカは、私のところまで小走りで寄ってくると、ほらと腕を取って肩に掴らせてくれた。ありがとう、と口にすれば、別に、と顔を背ける。

「これで、あとは城の連中がなんとかするだろ？」

「そうだね」

扉を閉める瞬間、中の男の一人と目が合った。泣いていたような気がした。

「本当にごめんね？ 本当にごめん」

もう何度目の謝罪だろう。

その日のうちに、うちへやってきたエミルはずっと私に謝り続けている。

私の傷は、ルカが丁寧に治療してくれたし、痕に残るようなものはなかった。だから、そんなに気にしなくても良いのに。

「大丈夫だよ。なんてことないし、私別に怖い思いしてないし」「心臓に毛が生えてるからな？」

揶揄したルカを睨んだけど、ルカは軽く肩を竦めたただけだ。可愛くないなーもう。

そう思っただけを寄せたけれど、次の瞬間には、猫の姿になって、私の膝にぴよんと飛び乗った。可愛いなーもう。

単純だ。

「全く、あいつらも、もうちょっと早く王宮に来てれば、僕がマシ口ちゃんを助けに行っただのにー」
「俺も行くぞ？」

ねー、なー、とカナイとアルファが仲良しさんだ。こいつら、人の誘拐事件を愉快事件と勘違いしている。楽しそう過ぎる。

「そういえば、私の身代金っていくらだったの？」

興味本位で問えば、エミルは気まずそうに顔を逸らし、カナイとアルファは顔を見合わせて噴出した。失礼過ぎる。

「金貨百枚だったんですよ」

「え？」

「そうそう、それで、今みたいに、え？ って聞いたら八十枚にまけてくれました」

アルファがお腹を抱えて笑う。

そーかー……私は、値引き交渉にまで応じてもらえる程度なのか……しかも金貨八十枚って……

「もう一回、え？ って聞き返したら七十まで下がったぞ？」

カナイまで口元を押さえて肩を揺らす。酷い、酷すぎる……。私の適当な脳内換算だけど、円にしたら、六百万か七百万だろう。王宮に出せといいにくい額じゃないと思う。

「身代金の額イコールマシロの価値じゃないから、ね？ うん……僕なら国家予算くらい出すよ」

がつくりと肩を落とした私をエミルは慰めようとしたのだから、けれど、墓穴を掘っている気がする。

でも、逆にいえば、彼らの生活水準がそのくらいだったというこ

とだ。誘拐をしてお金を出させようとするのだから、彼らにとっての大金。なんだと思う。そう思うとちよっと涙ぐましい。

「それで、あの人たち大丈夫なの？」

「え、あ、ああ。大丈夫というか一応拘留中。話を聞いたら無期限で留まってもらうつもりだよ」

にこりと口にするけどそれって、無期懲役ってこと、だよな？

実害は私と使われなくなっていた屋敷だけなのだから、それはやりすぎなのでは？ と思ったけれど、この国のルールは未だに良く分からない。分からないことに意見するにはまだ、情報が足りなさ過ぎる。

「えーっと出来るだけ早く解放してあげてね？」

「相変わらず、マシロは優しいね」

エミルはにっこりと、そういつて是も非もはっきりとさせなかった。

なんだか、それが彼らに道はないといっているようで、私は少しだけ背中が寒くなった。

そんな、私にエミルは「ところで」と切り出す。

「さつきから、物凄く睨まれてるんだけど……」

睨んでいる相手を見ないようにしてそういったエミルに、私は「ああ」と頷いた。

「ブラックは、何か不穏なことを口走ったら駄目だから、あそこでステイしてもらってるの」

ステイって、犬かよ……と、カナイの呆れたような声が聞こえただが気にしない。

何もいわなくても既に目で射殺しそうなほど睨んでる。

もう、終わったことだから、うだうだいわないって約束したのに、どうしても納得できないようだ。私を心配してのことだということには分かっているから、あまり私も強くは出ないのだけど。

でも、ルカにまでぶつぶつというのは間違ってる。

圧倒的に経験値が少ないのは仕方ないんだよ。それでも、ルカはちゃんと助けに来てくれたと力説しても、私が怪我を負ってしまった時点でブラックは納得しない。

優先順位を履き違えていると怒るのだ。

あのブラックが、優先順位って……。

それを聞いたときは嬉しいやら笑いが零れそうになるやら。本人はいたって真面目に口になっているのが、また可笑的い。

本当、ブラックは私のこととなると大人気ない。

はあ、と、自然に溜息が漏れる。

そんな私に苦笑して、エミルは席を立った。

「まだ、やることが残っているから……マシロに大事無くて本当に良かったよ」

同じように立ち上がった私にそういつて微笑む。エミルは責任感じすぎ。

「今度攫われたら是非とも一番に教えてくださいね」
「俺にも知らせて」

こっちは軽すぎ。
そんなに度々攫われては堪らないっ。

私は眉を寄せたけど二人は一切そんなこと気にしない。気にするほど短い付き合いじゃないから。

どうでも良いことをいいながら、戸口に立つ。玄関 店の出入り口になるけど まで送るといったのだけど、遠慮された。

最後にリビングから廊下に出たエミルが、ふわりと私を包み込み「本当に大したことなくて良かった」と腕に力を込めた。

「シゼを寄越さなくても平気？」

「ん。大丈夫だよ。直ぐに治るから」

「本当にごめん」

「気にしないで」

もう何度目だ。

苦笑して告げれば、うん、と弱々しい声で頷く。そして、そっと頬にキスを落として、離れた。

離れたはずなのに、私の身体の拘束は緩まない。その原因はもちろんステイを守れないブラックで、私を背後から掴まえてしまっていた。

「あまり気安く触れないでください」

不機嫌そうにそう告げて、私の髪に頬を寄せる。

気持ちは良いけど、くすぐつたい。

ほわりと頬が熱を持つのが隠せたか自信はない。その様子にエミルは、軽く肩を竦めて苦笑する。

「心が狭いな。親愛のキスくらいするよ」

「まあ……構いませんけど」

あれ？ 良いんだ？

私たちは結婚してからもあまり変わらない。変わらないのだけど、エミルは前よりも遠慮なくさつきみたいなキスをするようになった。そして、ブラックはそれに過剰な反応はしなくなった。一応、文句はつけるけれど、以前のようにいきなり発砲したり、その辺破壊したりはしない。ほんの少し寛容になった。

「それから……」

「分かってる。分かってるよ」

ブラックが何かいいかけて、エミルはそれを遮った。

私はその瞬間、分からなければ良いことを分かってしまった。彼らの処遇。私は知らないほうが良いだろう。

階下から「へーかー、まだですかー？」というアルファの声が聞こえる。今行く、と答えたエミルは、じゃあ、と廊下を歩き出す。

それを見送れば珍しくブラックが直ぐに私を解放して、新しくお茶を淹れましょう。と切り出した。それに促されるように扉に手を掛けたら、階段を降りたエミルが、ばたばたとあがってくる。

私は、何か忘れ物？ と手を止めた。

「えっと、聞き忘れがあったから」

「うん、何？」

「次はもつと気をつけるから、また、ここへ来ても良い？」

なんでもない質問に、エミルの瞳は不安そうに揺れている。変なの。私は笑いが零れそうなのを堪えて「もちろん」と頷いた。

……パタン

「エミル、なんだったんですか？」

「ううん。大したことじゃないよ、また明日って」

「明日も来るんですか？ 王陛下って暇なんですね」

ブラックが柔らかな香りを点てているのを眺めつつ、私はもう一度椅子に座って、ルカを膝に抱いた。

良かったと、心底ほっとしたように微笑んだエミルの顔が暫らく瞳に焼き付いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6671p/>

白蒼月種想譚～二つ月の望む世界（種シリーズ?）

2011年9月12日02時59分発行